

第百九十三回国
参議院法務委員会會議録第八号

平成二十九年四月二十日(木曜日)

午前十時開会

委員の異動

四月十九日

辞任

小川 敏夫君
山添 拓君

補欠選任

羽田雄一郎君
仁比 聡平君

出席者は左のとおり。

委員長
理事

秋野 公造君

委員

西田 昌司君
山下 雄平君
真山 勇一君
佐々木さやか君

猪口 邦子君
中泉 松司君
古川 俊治君
牧野たかお君

丸山 和也君
元榮太一郎君
柳本 卓治君
有田 芳生君

羽田雄一郎君
仁比 聡平君
東 徹君
糸数 慶子君

山口 和之君
金田 勝年君
盛山 正仁君

国務大臣
法務大臣
副大臣
法務副大臣
大臣政務官

法務大臣 金田 勝年君
法務副大臣 盛山 正仁君

法務大臣政務官
最高裁判所長官代理者
最高裁判所事務
総局総務局長
最高裁判所事務
総局人事局長
最高裁判所事務
総局刑事局長

井野 俊郎君

政府参考人

中村 慎君

内閣官房内閣参
事官

堀田 眞哉君

内閣府大臣官房
審議官

平木 正洋君

警察庁長官官房
審議官

青木 勢津子君

警察庁長官官房
審議官

鳥井 陽一君

法務大臣官房審
議官

緒方 俊則君

法務省民事局長

高木 勇人君

法務省刑事局長

白川 靖浩君

法務省矯正局長

高嶋 智光君

法務省人権擁護
局長

小川 秀樹君

法務省訟務局長

林 眞琴君

法務省入国管理
局長

富山 聡君

公安調査庁次長

萩本 修君

外務大臣官房参
事官

定塚 誠君

外務大臣官房参
事官

和田 雅樹君

文部科学大臣官
房審議官

杉山 治樹君

農林水産省農村
振興局整備部長

飯島 俊郎君

農林水産省農村
振興局整備部長

浅田 和伸君

本日の會議に付した案件
○政府参考人の出席要求に関する件
○法務及び司法行政等に関する調査
(法務省作成のヘイトスピーチ解消に向けた啓
発冊子に関する件)
(捜査手法としての会話傍受の導入可能性に關
する件)
(刑務所における高齢受刑者の処遇に関する件)
(外務省ホームページにおける慰安婦問題につ
いての主張掲載に関する件)
(取調べの可視化についての現状及び今後の取
組に関する件)
(防犯カメラの設置及び撮影に関する件)
(諫早湾干拓関係訴訟に関する件)
○民法の一部を改正する法律案(第百八十九回国
会内閣提出、第百九十三回国会衆議院送付)
○民法の一部を改正する法律の施行に伴う関係法
律の整備等に関する法律案(第百八十九回国会
内閣提出、第百九十三回国会衆議院送付)

○委員長(秋野公造君) ただいまから法務委員会
を開会いたします。

委員の異動について御報告いたします。

昨日、山添拓君及び小川敏夫君が委員を辞任さ
れ、その補欠として仁比聡平君及び羽田雄一郎君
が選任されました。

○委員長(秋野公造君) 政府参考人の出席要求に
関する件についてお諮りいたします。

法務及び司法行政等に関する調査のため、本日
の委員会に、理事会協議のとおり、内閣官房内閣
参事官鳥井陽一君外十五名を政府参考人として出
席を求め、その説明を聴取することに御異議ござ
いませんか。

〔異議なし〕と呼ぶ者あり〕

○委員長(秋野公造君) 御異議ないと認め、さよ
う決定いたします。

○委員長(秋野公造君) 法務及び司法行政等に關
する調査を議題とし、質疑を行います。

質疑のある方は順次御発言願います。

○有田芳生君 おはようございます。民進党・新
緑風会の有田芳生です。

ヘイトスピーチというのは、この委員会でも何
度も何度も皆さんとともに議論をしてまいりまし
た。ヘイトスピーチをほつておけば、ヘイトクラ
イム、犯罪に結び付きます。さらには、それがエ
スカレートをしてジェノサイド、皆殺しに進んで
いくというのは、世界史の中でもナチズムあるい
はルワンダの虐殺などでも明らかですが、同時
に、この日本でも、関東大震災のときに、騒擾に
絡めて朝鮮人が井戸に毒を入れたなどという
ことが流布をされて、朝鮮人、中国人など、ある
いは東北弁を語る日本人までもが虐殺されたとい
う悲惨な歴史を私たちは抱えております。

その朝鮮人虐殺について、内閣府のホームペー
ジ、江戸時代以降の災害の教訓を将来に伝えるた
めに政府の中央防災会議の専門調査会がまとめた
報告書が掲載をされておりました。ところが、そ
の関東大震災の朝鮮人虐殺についての記述なども
含まれていたんですが、昨日の朝日新聞の記事に
よりますと、内閣府の担当者は、内容的に批判の
声が多く、掲載から七年もたつたので載せない決定
をしたと説明、さらには、内閣府によると、なぜ
こんな内容が載っているんだとの苦情が多く、四
月以降のホームページの改修に合わせて削除をす
る、全ての報告書の掲載を取りやめることにした
という、担当部局内での判断だという記事が出て
おりますが、内閣府としてはそういう認識でよろ
しいのでしょうか。

○政府参考人(緒方俊則君) お答えいたします。

平成十五年度から平成二十二年度にかけまして、中央防災会議災害教訓の継承に関する専門調査会を開催いたしまして、過去の二十四災害につきまして報告書を作成いたしました。御指摘の報道されました記述の箇所につきましては、その報告書の中の一部でございます。

現在、内閣府の防災情報ホームページを刷新中でございまして、技術的な理由から様々なコンテンツが閲覧できなくなっております。このことはホームページ上でも告知をいたしております。決して意図的に削除いたしましたものではございません。

現在、ホームページの刷新作業が進行中でございまして、当該調査会の報告書につきましても、本日中に御指摘の記述も含めまして閲覧できるようになっていく見込みでございます。

○有田芳生君 ということは、昨日の朝日新聞のこの記事内容については、私、この新聞関係者にも話を聞きましたけれども、担当者がそのような、先ほどのような発言をしたというのは、何らかの誤解があったという理解でよろしいですか。

○政府参考人(緒方俊則君) 誤解かどうかは分かりませんが、そういったような発言はやっていないということでございます。発言はやっていないということでございます。

○有田芳生君 発言はしているんですが、水掛け論になりますからやめておきます。とにかく、もう一度掲載されるという方向だということを確認したいというふうに思います。

しかし、リニューアルだということだったなら、例えばホームページ上に、指定されたページ又はファイルは存在しません、こういう表示になっていたんですよ。リニューアルだったらそういう表示をしておくべきだったと思いますが、そう思われませんか。

○政府参考人(緒方俊則君) 表現上分かりやすい表現という観点があるかと思えます。御指摘を踏まえまして今後検討していきたいと思えます。

○有田芳生君 一刻も早くこういう歴史的な資料については再び国民が見ることができるよう、是非ともお願いをいたします。

次に、ヘイトスピーチと拉致問題についてお聞きをしたいというふうに思います。

今日の日曜日、全国一斉に拉致被害者全員奪還という行動が行われる予定になっております。京都、東京の新宿あるいは広島などで準備をされておりますけれども、昨年の四月十七日も岡山で当時の在特会会長が拉致問題を解決するというところで公園で集会をやり、デモを行いました。横田めぐみさんの写真が掲げられておりました。私はそれに抗議に行つて、横田滋さん、早紀江さんは、あのようなヘイトスピーチがまき散らされるようなデモの中でめぐみさんの写真を使わないでほしいと、そういうことを何度も何度も彼らに伝えたところ、デモの途中でその写真を掲げることをやめました。

まず、こういった拉致問題解決という形でヘイトスピーチが行われる右派系市民グループのデモ、これについて、公安調査庁、どのように現状を把握して、その中身について認識されておりますでしょうか、お願いします。

○政府参考人(杉山治樹君) お答えいたします。

昨年の四月十七日、御指摘のように岡山でデモが行われまして、その際、排外主義的な主張を掲げて活動しているグループが差別的言動として問題視されるような言動を行っていたと承知しております。

本年四月二十三日にもそのような催しが計画されているというところは承知しております。公安調査庁として関心を持って見ているところでございます。

○有田芳生君 国民が反対できない拉致問題の解決というテーマを持って、実際にはひどいヘイトスピーチが今でも繰り返して行われ、今日の日曜日も行われようとしているのが今の日本の現実なんですよ。

京都のデモについては、主催当事者がこの数日

間でデモを中止いたしました。これは、京都府警との交渉の中で、京都府警が、三条河原町をデモ行進をするときに、やはり商店街などから批判が出る、ああいうところでやるべきでないということとをちゃんと指導をしてくださつて、結果的には、主催者側がマイクを一台使う予定だったんだけれども、それ以上使わせてくれということに対して京都府警は駄目だという交渉をする中で、その主催者は諦めました。この主催者というのは、二〇〇九年から三度にわたつて行われた京都朝鮮第一初級学校襲撃事件で実刑判決を受けた人物ですけれども、その彼が再び出てきて、相変わらずヘイトスピーチをやろうとしていた。

警察庁にお尋ねをいたしますけれども、右派系市民グループが、拉致問題であつても、そういうデモをやろうとしたときに、交渉の中でどんな注意事項を主催者側に伝えているんでしょうか、お答えください。

○政府参考人(白川靖浩君) お答え申し上げます。

警察におきましては、デモ等の許可申請がなされた場合、いわゆる公安条例であれば公共の安全の保持、道路交通法であれば交通の安全と円滑を図る観点から当該申請内容を確認しており、また、必要に応じて主催者等に対し指導を行っているところでございます。

一般論ではございますけれども、警察におきましては、いわゆるヘイトスピーチ解消法の趣旨を踏まえまして、デモ等の許可申請がなされた際には、必要に応じて同法の趣旨等について説明するとともに、参加者に対して周知するよう促す、あるいは違法行為の防止、関係者の安全確保、交通の円滑の確保等について事前に指導を行うよう努めているところでございます。

○有田芳生君 ヘイトスピーチいわゆる解消法ができる前は、京都の祇園の辺りから四条河原町、一番通行人も多く、観光客も多く、外国人もいっぱいいらつたところとんでもないデモが行われて、多くの人たちが反対行動に参加をしまし

た。

今回、同じようなことをやろうとしたこの常習ヘイトスピーチ発言者が諦めざるを得なかったよな、そういう京都府警の対応をしてくださつたというのは大きな解消法以降の前進だろうというふうに思っておりますので、そういった対応をこれからも全国に広げていっていただきたいというふうに思います。

とにかく、拉致ということを口にすれば誰も止めることはできないだろうということなんです。横田滋さん、早紀江さんは、「めぐみへの遺言」という本の中でも、そういうことはやめてほしいと。私にも何度も何度も、例えば滋さんは、在特会、あれは駄目ですよというように、おっしゃつていたように、拉致問題を利用してヘイトスピーチがまき散らされるようなことについては厳しい対応を取っていただきたいということを強調しておきたいというふうに思います。

次に、時間も限られておりますので、人権擁護局長にお聞きをいたします。

前回時間がなくて質問することができませんでしたけれども、今でも行われているヘイトスピーチのデモについて、これは解消法ができる前から法務省が作った「ヘイトスピーチ、許さない」というポスターを改ざんをしている。資料をお配りしましたけれども、「ヘイトスピーチ、許さない」というスローガンに対して、「日本人へのヘイトスピーチ、許さない」。例えば、四月九日、中野でこれが使われ、あるいはその中野の後で新宿でも、デモの中でこのプラカードは使われておりまして、これでも、擁護局長、こういう改ざんについてどういう対応を取られているんでしょうか。

○政府参考人(萩本修君) 委員から御指摘がありましたとおり、法務省作成の「ヘイトスピーチ、許さない」というポスターの文言を「日本人へのヘイトスピーチ、許さない」と改変するなど、そのポスターを改変したものがインターネット上などに散見されることは認識しております。

て、大変遺憾であると考えております。

人権擁護局におきましては、法務省ウェブサイ
トなどで掲載しているそのポスターにつきまして
は、従前から一切改変せずに使用していただくよ
うにお願いしているところでございます。今後と
も、改変することがないように発信していくこと
も、改変されたことを認知した場合には事案に
応じて適切に対処していきたいと考えておりま
す。

○有田芳生君 事案に応じて適切に対処してい
くというのは、具体的にどう対処されるんですか。

もう時間も限られているので、お願いなんです
けれども、土日にヘイトスピーチの集会、デモが
行われることが多いんですが、この間も川崎で多
くの反対する人たちが集いましたけれども、やは
りこれは、「日本人へのヘイトスピーチ、許さな
い。」というようなポスターが掲げられる可能性
があるというのは大体事前に察知できるんです
よ。だから、土日だから大変なんですよ。けど、
そういうところに法務局の職員の方が出向いて
いったいて、そういうものを見付けたら、
駄目ですよ、そういう具体的な行動を取らない
と、やはり常習的な人たちというのは変わらない
と思うんですが、いかがでしょうか。

○政府参考人(萩本修君) 例えばですが、比較的
最近、法務省からそのポスターの内容につきまし
て使用改変について許可を受け公認されたと称し
て、ツイッター上にその改変したポスターを配布
するという事案が発生しました。その事案におき
ましては、その事実を把握した直後に、法務省と
してポスターの改変を許可したこともなければ公
認したこともない旨、人権擁護局の公式ツイッ
ターにおいて情報発信を行い、その結果、その改
変したポスターの画像は削除されたことを確認し
ております。

そのように、事案に応じて今後とも適切に対処
してまいりたいと考えております。

○有田芳生君 ネット上でそういうことが、成果
があったというのは前進だと思いますが、デモの

中で使われているときにこれはどうしようもない
ですよ。だから、現場に足を運ぶという行動が
必要だと思っております。

前任の人権擁護局長などは土曜日、日曜日を
使ってやはり現場に行かれていた。だから、局長
に行ってくれというんじゃないけれども、やはり
代わりばんこでもいいから法務局の方々が現場に
行って、例えば京都でそういうことが行われるよ
うなときに、掲げたらそこで注意をするという、
そういう果敢な行動というのは必要じゃないで
しょうか。

○政府参考人(萩本修君) 改変の防止につきまし
ては、その時々状況に応じて最も効果的と考え
られる方法により対応していきたいと考えており
ます。

○有田芳生君 駄目なんです、彼らは。前も言
いましたけれども、勧告を受けたって、インター
ネット上で映像で、こんなの来ましたよと、桜井
誠前在特会会長なんかは、にやにやとして、びり
びりと破いて、皆さんが勧告したものを破いたり
するわけでしょう。そういう人たちなんですよ。
勧告の権威なくなるじゃないですか。

だから、もつとこういう現実を踏まえて前向き
に取り組むべきだというふうに思いますが、一
言、いかがでしょうか。

○政府参考人(萩本修君) 相手方が誰かにもより
ますけれども、事案に応じて適切に対処してい
たいと考えております。

○有田芳生君 適切に対処できていないから言っ
ているんです。時間がありませんから次に行きま
す。

前回、局長に解消法以降どういう成果がありま
したか具体的にお示しくださいと言いました。と
ころが、私とその質問をした後になって、法務省
の方が「私たちの身近にあるヘイトスピーチ」と
いうパンフレットを作っていたら、知らなかった
ことを知ってびっくりした、知らなかった。恐らく
皆さん方も知らなかったと思います。

今、資料に添付をしましたけれども、非常にか

わいらしい、分かりやすいかなというような、こ
ういうパンフレットができました。だけど、積極
的に評価をしたいんですが、やはり問題点を幾つ
か指摘をしなければいけないというふうに思いま
す。

例えば、この立派なパンフレットの中で、人種
差別撤廃条約あるいはそういった言葉が全く出
てこない、あるいは、被害者の思いも出てこない。
あるいは、QアンドAで「ヘイトスピーチって
何」とありますけれども、「ヘイトスピーチに明
確な定義はありません」と、「ヘイトスピーチ
に当たると言われています」と。何か人ごとの
ように聞かせるQアンドAになっているんです
が。

私たちは、皆さんと一緒にヘイトスピーチ解消
法を作ったじゃないですか。そのとき、ヘイトス
ピーチ解消法の第二条には明確な定義置いてあり
ますよね。どうしてそういうものがこのパンフ
レットにはないんだろーかと思えます。あるいは、
このパンフレットの中には、法務省のやつた
被害実態調査の内容もありません。あるいは、ク
エスチョン3の「ヘイトスピーチをなくすため
に、私たちにできることは」というところでも、
ヘイトスピーチ解消法の三条の半分しか説明され
ておらず、肝腎な差別的言動のない社会の実現に
寄与するように努めなければならぬという後半
部分が、意図的なのかどうか分からないけれど
も、削られている。これでは、本当に国民に解消
法の精神というのは伝わるんでしょうか。

このパンフレットが作られた経過、どのぐらい
の準備で、あるいは専門家の相談を受けたのか、
予算は幾らだったのか、部数はどれだけだった
のか、是非ともお答えください。

○政府参考人(萩本修君) 法務省におきまして
は、昨年のヘイトスピーチの解消に向けた法律の
成立、施行を受けて、様々な啓発活動を検討
し、実際に実施してきたところでございます。

その一環として、ヘイトスピーチの解消に
向けて国民の理解を深めることを目的とした一般

向けの分かりやすいパンフレットを作成すること
が適当であろうと考えてまして、昨年のその法律の
施行後、比較的早い段階からその作成に着手した
ところでございます。

そのことは、これまで、ヘイトスピーチの解消
に向けた取組についてというタイトルでこれまで
に実施した取組、それから今後実施する取組とい
う一枚紙のペーパーを作りまして、議員各位に御
説明に上がったことがあろうかと思いますが、そ
の中にも早い段階から掲げていたものでございま
す。

この御紹介いただきましたリーフレットですけ
れども、そのような検討を済まして今年の三月に
完成しましたので、四月に公表すると同時に法務
省のウェブサイト上でも公開したものでございま
す。また、これまでに五万五千部作成し、既に全
国の法務局、地方法務局に配付しております。費
用としては、約百五十万ほど掛かったもので
ございます。今後、法務省の人権擁護機関が行う
啓発活動の中で使用していきたいとして、ヘイトス
ピーチの解消に向けた国民の理解を深めることに
役立てていきたいと考えております。

内容につきましては、この冊子に限りませんけ
れども、啓発資料を作成するに当たりましては、
その対象者あるいはその目的等に照らしてその都
度内容を検討しております。この冊子につきまし
ては、何よりも多くの方に手に取ってもらうこと
を主眼として、そのようなコンセプトの下
で、漫画という親しみやすい表現を採用すること
も、文字数などは極力減らし、分かりやすい内
容とすることを優先させたものでございます。

○有田芳生君 今後とも、こういうものを作っ
ていただきたいというふうに思います。

ただ、やはり監修などを専門家から受けるとい
うことも必要だと思いますが、そういうことを含
めて、第二弾、第三弾というものをお作りにな
っていく御予定はありますでしょうか。

○政府参考人(萩本修君) 法務省におきまして
は、こうした啓発冊子の作成、配布以外にも様々

ではできないと考えております。

○真山勇一君　じゃ、時間がないので先へ行きたいんですけれども、いわゆる先ほど私がお話した盗聴器などですね、そうしたものの機器を室内に、屋内に設置して、そして会話を傍受するとい

うケースはいかがですか。

○政府参考人(林眞琴君) さらに、今の御指摘、盗聴器などを屋内に設置するというのは、これが恐らく法制審議会の中でも一番議論の対象となつたような態様の会話傍受だと思いますけど、これ自体、法制審議会においても、これは強制処分であるということで、強制処分の根拠規定がなければいけないという前提で議論がなされておりました。それを今後、法制度をどうするのかということが法制審議会でも議論されて、それについては両論あり、今後の課題であると、こういうふうに整理されたという理解しております。

○真山勇一君 非常に丁寧に説明していただいて有り難いんですけども、あと二つほど伺いたいです。

次に、他人のスマホあるいはパソコン、これを遠隔操作、いわゆるハッキングということだと思ふんですが、そのようなハッキングして会話を傍受するということがいまいかがでしょうか。

○政府参考人(林眞琴君) これについても、現在、そのような捜査を許容する法的な根拠になるものはないと考えております。

○真山勇一君 そして、もう一つ伺いたいんです。潜入による録音などでの会話傍受ということもできると思ふんですね。例えば、集会に紛れて、小型の高性能の録音機をポケットに入れて、そして会話をしている近くに行つて会話を録音、傍受するということですね。それから、あるいは、やっぱりサラリーマンの私たち、普通のサラリーマンですと飲み屋さんへ行きますね。飲み屋さんで話をしているその席で、すぐ隣の席へ座つて会話を傍聴する。あるいは、公の場所ですね、例えば公園のベンチ、座っている人の横に座つてその会話を傍受、盗聴するというようなケース、これはいかがでしょうか。

○政府参考人(林眞琴君) 今委員、潜入による録音などでの会話傍受ということで様々なケースを挙げられましたが、これなかなかその具体的な態様において一概にお答えできない部分があると思

います。会話といひましても、オープンスペースでほかの人にも聞こえるような形で会話、これを録音した場合はどうなのか、あるいは、幾らオープンスペースだとしてもほかの人には聞こえないような形で会話だつたらどうかとか、そういう形で具体的な態様によつてなかなか判断、一概にお答えすることは困難であらうかと思ひます。

○真山勇一君 今局長からお答えいただいたのは捜査上の方の観点からお答えいただいたと思うんですが、先ほど冒頭で、最初の方で説明ありましたように、そうじゃなくて、捜査じゃなくて、民間の人がやっぱり最近こういう傍受、会話の傍受あるいは通信傍受みたいなのがやるケースがあるんですが、そういう場合は違法なんですか、それとも違法ではないんですか。

○政府参考人(林眞琴君) 刑事の場合として、私人のそのような行為がどのような犯罪に当たるのかということでは考えれば、例えばその盗聴器を設置するために住居に侵入するとか、そういったことが犯罪に当たる、そういう形でその行為が違法とされるといふことはあるかと思ひます。

○真山勇一君 ちょっと様々なケースがあるのでやっぱりそれは難しい面もあると思ふんですけども、やはり今の社会においては非常にいわゆるハードの部分の機材がもう日進月歩でどんどん進んでいる。今まで不可能かなと思つていたことができるような、そういう高性能の例えばマイクとか録音機とか、そういうのができるので、捜査上もこういうものを使おうと思へば使えるかもしれないけれども、素人でもそういうものを手に入れて使うことができるということなので、この辺の辺りというのはやはり法制審議会ですら審議もしておられるようで、通信傍受の方は大分現状に合つたものに少しずつ変えられた部分もあるというふうにも思ふんですけども、こうした部分がちよつとまだ非常に曖昧な部分もあるんではないか。逆に言うと、曖昧だからこそどういふふうに使われるのかなという不安というのがあると思ふ

んです。お互いに、先ほどありましたように、やっぱりプライバシーの問題とか、聞かれてほしくないことは聞かれないようにするかもしれないけど、うっかり聞かえてしまふということもあるわけで、そうしたことから、プライバシーの侵害とか人権問題とか、そういうことが起きるんじゃないかと思ふんですが。

ただ、そうはいっても、法制審議会ですらやつて一回会話の傍受ということが取り上げられたというところは、どうなんですか、捜査の面から見ますと、今お話、局長から伺いましたが、会話の傍受というのは捜査上の一つの捜査手法としては、もし認められるようなことになれば、これは有効なものなんではないですか。

○政府参考人(高木勇人君) 先ほどの法務省の御答弁と若干重複するところがございますけれども、法制審議会におきまして、会話傍受につきましては、振り込め詐欺や暴力団犯罪の捜査あるいはコントロールドリバリリーの手法による薬物・銃器犯罪の捜査の際に、共謀状況や犯意に関する証拠を収集する上で、こういったものに限つて導入することは検討の余地があるのではないかとといった議論がなされた一方で、通信傍受以上に個人のプライバシーを侵害する危険が大いなどとして制度化自体に反対する意見があり、結果として法整備を行うべき要綱への盛り込みは見送られたものというふうな承知をしております。

○真山勇一君 法制審にそういうふうなテーマとしてかけられているということは、やはり捜査をする上で有効というか、有力な一つの手法になるのかなという、そうしたことがあると思ひます。でこうした法制審にもかけられて議論をしているんじゃないかというふうな思ふわけですね。やっぱり気になるのは、今のところ法律がないということ、それから、ある意味効果の有効なものであるというふうなことではないですか。捜査上、それから捜査の手段としては今後まだまだ検討するということなわけですね。

罰法、いわゆる共謀罪審議が始まつておりますけれども、やはりそういう中で、例えばLINEもその捜査の対象になる、監視の対象になるということも言われているわけですね。今こうやって取り締まる直接法律がないとすると、やっぱりこうした会話傍受もいわゆる共謀罪の中に捜査の一つの手法として導入されるのではないかと、そういう懸念、心配も当然考えられるわけなんです。その辺り、導入するということ、通信傍受はもうこれ共謀罪の捜査上使うというふうにおつしやっているわけですから、この会話傍受の方についてはどうなのか、その辺りはちよつと金田大臣からお伺いしたいと思ひます。

○国務大臣(金田勝年君) ただいま真山委員から御質問がございました点にお答えいたしますが、テロ等準備罪の新設を含むテロ等準備罪処罰法案が成立した後にというお話なんだろうと思ひますが、そういう場合に会話傍受を導入することは予定しているのかという質問だろうというふうな受け止めました。その場合に会話傍受を導入することは予定しておりません。

○真山勇一君 成立した後、会話傍受ということでは、導入することは予定していない、いないということですね。ただ、そういうふうにはつきりおつしやつていただけるのは分かるんですが、一つ、この国際的な組織犯罪の防止に関する国際連合条約、いわゆるTOC条約、この中の第二十条、第二十条に特別な捜査方法というのがあるんですね。これ、措置をやつてほしいというふうな、多分承認する国には求めているんだと思ひます。

四行ほどなのでちよつと読ませていただきたいんですが、第二十条、特別な捜査方法。一、締約国は、自国の国内法制の基本原則によつて認められる場合には、組織犯罪と有効的に戦うために、自国の権限のある当局による自国の領域内における監視付移転の適当な利用及び適当と認める場合には電子的その他の形態の監視、潜入して行う捜査などの特別な捜査方法の利用ができるように、

可能な範囲内で、かつ、自国の国内法により定められる条件の下で、必要な措置をとると書いてあるんですね。

法律が成立しても室内傍受は取らないというふうな今大臣はつきりおっしゃいましたけれども、この条約の中には、その措置をとれ、とれというふうな命令はしていないですけど、そういう特別な捜査方法を明記しているわけですね。これは、こういうふうになつていてもやらないというふうな確約をしていた、だからですね。大臣にお願いしたいと思います。

○国務大臣(金田勝年君) ただいまのT O C条約、これについては外務省の方が所管だとは思いますが、T O C条約第二十條は、会話傍受の導入を義務付けるものではないと、このように受け止めております。

○真山勇一君 義務付けているものではなくても、やっぱり、よく言われているように、時間がなくて手短かにまとめますが、この条約でテロのことが求められていないにもかかわらず、今回のこちらの法整備はテロだというふうにおっしゃっているわけですから、求められていなくても、こういうふうに書いてあれば、もしかしたらこういうことも成立後は採用されることがあるんじゃないかという懸念があります。時間がなくなりまして、懸念があります、また機会を見てこの後の話はやりたいと思います。

ありがとうございます。

○佐々木さやか君 公明党の佐々木さやかです。よろしく願いいたします。

今日は、再犯防止と刑務所における高齢化などの問題について取り上げたいと思います。

比べるのと無職の方が再犯率が相当程度高いというデータもございます。また、住居の確保についても同様でございます。やはり帰住先がきちんと確保された上で刑務所から出所をするというところが再犯の防止にとって重要であるというふうに思っております。

再犯防止推進法が成立をいたしまして、政府の方でこの推進計画を定めるといことになつていと思ひます。これについてもいろいろと議論をしていただいていると思ひますけれども、この就労と住居の確保に関してはどのように取り組んでいくのか、議論の状況について伺いたいと思ひます。

○政府参考人(高嶋智光君) お答えいたします。御指摘のとおり、昨年の十二月、再犯の防止等の推進に関する法律が施行されましたが、この法律では、法務大臣が再犯防止推進計画の案を作成しまして、閣議の決定を得ることになつております。

計画案の作成に向けた検討を行うために、今年二月に法務省内に、法務副大臣を議長とし、関係行政機関や有識者の方々をメンバーとする再犯防止推進計画等検討会を設置いたしました。この検討会におきまして、既に二回ほど会議を行つておりますが、検討会を行つておりますが、就労、住居の確保、保健医療、福祉サービスの利用促進、就学支援、民間ボランティアの活動の促進、地方公共団体における推進体制の整備といったテーマを設けまして、そのテーマ別に再犯防止を取り巻く様々な課題につきまして幅広く活発に議論し、検討を進めているところでございます。

御質問の就労、住居の確保という点でございますが、これにつきましては、今年三月に開催された第二回検討会において議論が行われ、職業訓練の充実、就職後の職場定着等のための息の長い支援が必要であること、こういったことや、協力雇用主や更生保護施設等の民間協力者の活動を一層支援していくことが重要であるといった意見が出されたところであります。

再犯防止推進法が施行されてから一年になりました。今年十二月中には推進計画が取りまとめられるよう、鋭意検討を進めてまいりたいと考えております。

○佐々木さやか君 この就労と住居の確保、先ほども申し上げたように非常に重要であります。検討していただいているということでありまして、けれども、例えば更生保護施設なども今、施設にもよるとは思うんですが、なかなかその施設を出た先の継続的な、更生保護施設というのは一時的な入所でありまして、その先の住むところがなかなか決まらなくて施設を出なくて、次の人を受け入れたくても受け入れられないとか、そういった課題もありませんし、たくさん課題があると思ひます。

この再犯防止については、受刑者の高齢化という問題も非常に密接に絡んでまいります。医療とか、また介護という問題も出てきておりまして、それについて、まず矯正医官の確保状況を伺いたいと思ひますけれども、この矯正医官の確保という点についても、平成二十七年の八月に矯正医官の兼業及び勤務時間の特例等に関する法律、これも成立をしているところであります。その後の確保状況等について教えていただきたいと思ひます。

○政府参考人(富山聡君) お答えいたします。お尋ねの矯正医官の特例法、平成二十七年十二月一日で施行されておりますが、その十二月一日現在では矯正医官が二百五十三名在籍をしておりまして、本年の四月一日現在につきましては、矯正医官が二百七十五名ということで二十二名増となっております。

この医官特例法を作つていただきましたことで、医師の減少傾向に歯止めが掛かり増加に転じましたし、また長年医師が不在であった施設に常勤の医師が採用されるなど、改善の兆しが見えてきているというふうには考えております。やはり、この法律によりまして、兼業が広く認められ

るようになったこと、またフレックスタイム制によつて柔軟な勤務時間を設定することが可能となつたこと、こういった点が大きく寄与しているのではないかと考えております。

しかしながら、今申し上げました二百七十五人という四月一日現在の医師の現在員ですが、定員三百二十八名から見ますと充足率は八四％ということで、依然として医師の継続的、安定的な確保は私どもの喫緊の課題となつていいるところには変わりはないと思ひます。

当局におきましては、広報用のビデオ、ホームページを制作するなど広報啓発活動を積極的に実施しているところでございます。そのほか、日本医師会を始めとする医療関係団体への説明、陳情、関係省庁や関係団体への説明、陳情なども行つておりますし、また、全国で開催されます各種の医学会や医師募集の説明会などにブースを設置して矯正医療についての説明をする、また矯正管区長とあるいは現場に勤務する医師が大学の医学部に出向きまして矯正医療に関する講演や講義を行うと、様々な形でこの広報啓発を行つていいるところでございます。

今後とも、引き続き、医師確保のために必要な取組を鋭意進めていききたいと、このように考えております。

○佐々木さやか君 この矯正医官の確保、引き続き取り組んでいただくとともに、現状不足しているということもあるわけですので、矯正医官がない場合でも、どうやって医療の体制を確保するかというところもいろいろと知恵を絞つて、引き続き体制の整備に取り組んでいただきたいと思ひます。

この医療の問題というの、やはり受刑者の高齢化ということも関係をして、一五年末の段階で受刑者の六割以上に何らかの疾患があるというふうなデータもあるところであります。

この高齢化に伴つて、医療に加えて介護という問題も出てきております。そこで、刑務所の現在の高齢化率の状況ですとか、それから身体が不自

由になった受刑者に対する処遇における課題、また取組、こういったところをお聞きしたいと思います。

○政府参考人(富山聡君) お答えいたします。

高齢受刑者は、私どもの統計では六十歳以上ということで取らせていただいておりますが、平成十七年の年末、この六十歳以上の高齢受刑者が全受刑者に占める割合というのは一・六%でございました。それが平成二十七年の年末には一八・五%となっております、この十年間でこの数字は毎年確実に上昇をしているということになっております。

やはりこの高齢の受刑者に対する処遇をどのようにしていくかというのが大変重要な課題となっておりまして、この高齢受刑者の処遇を行う上で配慮している事項といたしましては、例えば高血圧や糖尿病などの生活習慣病への罹患など身体的な問題を抱えている者も多いため、必要に応じて刑務作業の時間を通常の受刑者と比べて若干短くするといったような配慮をしたり、作業の内容を比較的軽度のものにするというような配慮をしたり、また食事につきましても柔らかく調理したものを給与する、あるいはいわゆる刻み食といったものを給与するといったような配慮を行っております。

また、高齢受刑者が社会復帰に向けての必要な支援、指導を在所中から行っていくことが大変重要でございますので、福祉関係機関の御協力を得ながら、健康管理の重要性あるいは社会福祉に関する制度などを理解させるための指導を行っておりますほか、さらに認知症に罹患している者、あるいは認知能力の低下がうかがわれる者に対しては、この認知症の進行をできるだけ遅らせるために、可能な限り他の受刑者と集団で作業を行う機会を設けた上で、身体機能の維持のために軽い運動を行わせたり、また認知機能の維持のために簡単な計算問題を行わせるなどの高齢受刑者に特化した処遇なども行っているところでございます。

また、加えて、日常生活に介助が必要であり、

そもそも作業を実施すること自体が困難な受刑者もおります。こうした受刑者につきましては、病気の者を収容する居室棟に収容したり、あるいは病状によつては医療刑務所に収容して医療措置を講じるといったような対応もしております。

今後こうした取組をいたしまして、高齢受刑者に対して適切な処遇を充実させ、再犯防止や社会復帰支援により一層努めてまいりたいと考えております。

○佐々木さやか君 今御説明していただきましたように、刑務所での処遇、具体的に今いろんな工夫をしていただいているところであります。刑務官の皆さんも、やはりそういう高齢受刑者に対する介助、だつたりとか、いろいろな配慮ということも刑務官の皆さんが担っていただいている、これまでもとはまた違う仕事とかスキルとかも身に付けていた、だかきやいけないう状況にあると思います。

そうした形で今まではやっていた、だいていけるわけですけれども、やはり限界もあるということ、刑務所への介護専門スタッフ、これを配置するための予算を今年度の予算で確保しているというふう聞いております。そこで、その介護専門スタッフの配置、どのように行っていくのか、お聞きしたいと思います。

○政府参考人(富山聡君) お答えいたします。

先ほども御説明いたしましたとおり、刑事施設においては認知能力や身体機能が低下している高齢受刑者が相当数おりまして、これらの者に対しては従来から必要に応じて職員などが食事や入浴等の日常生活の介助を行うなどしていたところなんです。このような対応は刑務官の日常の業務負担を増加させる要因となっている、また専門的な介護の知識を必ずしも持っていない刑務官にこうした業務を行わせるということも決して好ましい状況とは言えないというふうにご覧いただいております。

こうした事情を踏まえまして、高齢受刑者の介護の体制の充実強化を図るために、本年度の予算

におきまして、高齢受刑者の占める割合が高い刑事施設を中心に介護専門スタッフを配置することといたしました。具体的には、医療刑務所四庁、又は医療刑務所に準ずる施設として、医療機器や医療関係職員を重点的に配置している医療重点施設と呼んでいる施設が全国に八庁ございます、この八庁、さらに、これに加えて、高齢の受刑者が収容人員の二割以上で、なおかつ百名以上の施設、これが二十庁ございまして、合計三十二庁に介護専門スタッフを配置することとしております。

引き続き、このスタッフの力も活用しながら適切な処遇に努めてまいりたいと考えております。

○佐々木さやか君 介護スタッフ、どういう資格を持っている方をお願いするかというのもありまされども、ただでさえ介護の現場で働く人材が不足しているという中で、刑務所で働いていただく方を確保するというのもなかなか難しいところもあるかもしれませんけれども、取組をお願いしたいと思っております。

ですから、高齢化が今後も恐らくどんどん進んでいくと思われる中で、刑務所がまるで介護施設とか福祉施設のようになってしまうのではないかと、そういう声もあるわけでありまして、適切な処遇を行うことは必要なのであります。適切な処遇を行うことは必要なのであります。適切な処遇を行うことは必要なのであります。適切な処遇を行うことは必要なのであります。

最後に大臣に伺いたいと思いますが、今申し上げたような高齢化の問題ですとか、それから、今日ちよつと時間がないので詳しくは取り上げませんけれども、女性犯罪者という点でいいますと、女性の場合、刑務所に入所する者の高齢化率を見ても男性に比べて高かったりとか、それから、犯罪に至るまでの背景に、性的、身体的な虐待です

とか、そういう経験があったりとか、また社会復帰をするに当たっても、就労をするのに一般的に男性に比べて女性の方が年齢を重ねるにつれて仕事を獲得ということも難しくなってくるとか、そういう様々な特徴もございまして、それも含めたいろいろな課題があるわけですが、今後の再犯防止推進計画策定に向けて、大臣の御決意を最後に伺いたいと思っております。

○国務大臣(金田勝年君) ただいま佐々木委員から御指摘がございましたように、特に女性犯罪者の中には、何らかの被害経験といえますが、被害体験を有する者が存在しております。再犯防止ということ考えた場合には、例えばそうした被害体験を有するような女性犯罪者の指導、支援に当たりますと弁護士会等の協力を得るなど、犯罪をした者の特性に応じた指導、支援を実施することが必要であるかというふうにご認識をされているわけでありまして、いろんな再犯防止に向けての課題があるんだらうと、このように考えております。そのほかにも、再犯防止対策には、就労、住居の確保、保健医療、福祉サービスの利用の促進、就学支援の充実といったいろんな課題がある、このように認識しております。

先日の十八日に開催されました犯罪対策閣僚会議における安倍内閣総理大臣からの指示がございました。国だけではなく自治体においても息の長い取組が必要であることから、全国の自治体において再犯防止対策が推進されるように、地域の強みを生かす新たな施策の実施も含めて一層強力に取り組むようにとの御指示がありました。

あるいは、再犯防止推進計画等検討会における議論というものもございまして、厚生労働省を始めとします関係省庁の理解と協力を得ながら、再犯防止を取り巻くいろいろな課題に対する有効な計画案、これを作成できるように、委員も御指摘のとおり、しっかりと取り組んでまいりたいと、このように考えております。

○佐々木さやか君 よろしく申し上げます。ありがとうございます。

○糸数慶子君 沖縄の風、糸数慶子です。

質問に入る前に、一言申し上げておきます。
自民党選対委員長の古屋圭司議員が、十六日、フェイスブックで、沖縄県うるま市長選挙の対立候補の公約を市民への詐欺行為にも等しい沖縄特有のいつもの戦術と批判したことは、沖縄県民への侮辱であり強く抗議いたします。古屋議員は、指摘されてもお記者団に対し客観的事実を申し上げたと説明し、蔑視発言に当たるという認識がないことが分かりました。

沖縄県民がどのように受け止めているかなど意に介さないという態度は、まさに県民が反対する基地負担の押し付けにも通じるということを強く申し上げ、質問に入りたいと思います。

アメリカ軍基地への抗議運動をめぐり起訴された沖縄平和運動センターの山城博治議長長の第三回公判が、四月十七日、那覇地裁で行われました。検察側証人として沖縄防衛局職員が出廷した際に、証人と傍聴席の間に遮蔽板が置かれました。

そこで、最高裁に一般論として伺いますが、証人尋問に際して、証人の遮蔽の措置がとられるのはどのような場合でしょうか。

○最高裁判所長官代理者(平木正洋君) お答え申し上げます。

傍聴人と証人との間での遮蔽の措置は、刑事訴訟法百五十七条の三第二項におきまして、裁判所が、犯罪の性質、証人の年齢、心身の状態、名誉に対する影響その他の事情を考慮し、相当と認めるときに、検察官及び被告人又は弁護人の意見を聴いた上で行うものとされております。

具体的にどのような場合に遮蔽の措置をとるかは個別の事件における各裁判体の判断事項でございますが、各裁判体におきましては、具体的な事件ごとに、先ほど申し上げました法律上の要素を考慮し、遮蔽の措置をとるかどうかを判断しているものと承知しております。

○糸数慶子君 犯罪の性質、証人の年齢、心身の状態、名誉に対する影響など、この遮蔽が認められていることなんです、この証人は権力に守ら

れた公務員であり、公務で知った情報を開かれた法廷で証言するのになぜ遮蔽板が必要だったのでしょうか。木谷明元高裁判事は、裁判は公開の法廷で手続を堂々と行う場所、こそこそ手続をする場所ではないと、今回のこのような場合は遮蔽の対象に当たらないというふうに指摘されています。

裁判公開の原則に影響を及ぼすだけでなく、証人席と傍聴席を遮蔽することは、基地建設に反対する沖縄の人たちがまるで暴力集団であるかのような印象を与え、断じて容認できません。

次に、慰安婦問題について伺います。
国立公文書館が、慰安婦連行を示す公文書十九件百八十二点の内閣官房に提出していたと報道されていますが、これは事実でしょうか。

○政府参考人(鳥井陽一君) お答え申し上げます。

御指摘の報道に関しましては、国立公文書館が、平成十一年に法務省から移管されました文書十九件百八十二点につきまして、平成八年の内閣官房内閣外務審議室長に基づき慰安婦関連文書として本年二月三日に内閣官房に報告を行ったところでございます。

以上でございます。

○糸数慶子君 慰安婦問題については、河野談話を否定するような主張が与党内で行われてきました。

自民党の日本の名誉と信頼を回復するための特命委員会で、二〇一五年七月、安倍総理に行った慰安婦問題に関する提言では、吉田証言を虚偽と指摘し、国際機関などへの広報活動の強化策を求めています。当時の稲田朋美政調会長からは、強制連行、性奴隷二十万人などと言われることについて政府として反論するように求められたと承知をしております。

昨年二月にジュネーブで行われました女性差別撤廃条約の第七回、第八回日本政府報告審査において、政府代表を務めた当時の杉山外務審議官は、特命委員会の主張に沿った発言を行い、多く

の委員から厳しい指摘をされました。私もその場で傍聴しておりましたが、当時は怒りというより情けない思いをいたしました。しかも、外務省は批判された杉山審議官の発言をウェブサイトで公表しています。

また、米国カリフォルニア州のグレンデール市に設置された慰安婦像に対し在米日本人らが撤去を求めていた訴訟で、日本政府は原告側の要請により、今年二月、像の設置はアメリカ政府も支持する日韓合意の精神に反するなどと主張し、上訴を認めて審理を行うよう求めた意見書を連邦最高裁判所に提出いたしました。この意見書もウェブサイトで公表しています。

これは、外交関係上のその影響を考えると、少なくともこのウェブでの主張は改めるべきではないでしょうか、外務省にお伺いいたします。

○政府参考人(四方敬之君) お答え申し上げます。

委員御指摘のとおり、外務省は、昨年二月十六日、スミス・ジュネーブで行われました女子差別撤廃条約第七回及び第八回政府報告審査における杉山外務審議官、当時でございますけれども、の発言、並びに米国カリフォルニア州グレンデール市に設置された慰安婦像に関する訴訟が米国連邦最高裁判所に上告されたことを受けて本年二月二十二日に我が国政府が同裁判所に提出しました意見書につきまして、外務省のホームページにそれぞれ掲載しております。

我が国政府といたしましては、これまでも様々な関係者に対し、慰安婦問題を含む幅広い分野に関する我が国政府の基本的立場や取組について適切に説明し、正確な理解を求めてきておるところでございます。委員御指摘の杉山外務審議官の発言及び意見書のホームページへの掲載も、この一環として行っているものでございます。

○糸数慶子君 この意見書の提出が適切だったのかというのは、これは改めて検証が必要だと思えますが、これはまた後日改めて聞きたいと思えます。私の意見としては、これも早く削除すべきだ

ということをお願いしたいと思います。
次に、四月十七日の衆議院決算行政監視委員会、安倍総理が日本への避難民流入に關し、上陸手続、収容施設の設置、運営、難民資格認定作業など、一連の対応を想定していると答弁したことに批判が高まっています。

韓国外務省の報道官は十八日の記者会見で、安倍総理の国会答弁について、自制する必要があると不快感を示し、仮想的な状況を前提とした発言は誤解を招くおそれがあり、朝鮮半島の平和や安全に否定的な影響を及ぼしかねないと指摘をしています。大統領選の各陣営も相次ぎ批判しています。

外務省はこうした指摘についてどのように受け止めているのでしょうか、お伺いいたします。

○政府参考人(飯島俊郎君) お答え申し上げます。

委員御指摘の答弁は、一般論として我が国に避難民が流入した場合の対応について述べたものと承知しております。

我が国に避難民が流入した場合の対応を含め、いかなる事態にも対応できるよう万全な体制を取るとともに、様々な状況を想定して必要な準備、検討を行っていくことは政府として重要な責務であると認識しております。

また、国民に適時適切な情報提供を行い、国民の安心、安全の確保に努めていくことも必要と考えております。

○糸数慶子君 四月十三日の参議院外交防衛委員会でも、安倍総理は北朝鮮に対する抑止力の必要性を強調し、サリンを弾頭に付けて着弾させる能力を既に保有している可能性があるなどと述べていらつやいます。韓国や中国は日本が危機をとおつていると反発しています。このような批判を受けることのないよう、外務省として近隣諸国と緊密に意思疎通を行うべきだと考えますが、外務省の見解を伺います。

○政府参考人(四方敬之君) お答え申し上げます。

委員御指摘の答弁につきましては、シリアにおける状況に言及しつつ、北朝鮮は弾頭に化学兵器を搭載し得る可能性も否定できないという一つの見方を示したものと承知しております。核兵器や化学兵器を含む大量破壊兵器の拡散と使用の脅威はシリアだけの問題ではなく、北朝鮮など東アジアにおいても存在し得るものと考えております。我が国といたしましては、このような厳しい現実を踏まえまして適切に対応する必要がある、危険をおおっているとの批判は当たらないと考えております。

その上で申し上げれば、北朝鮮問題の対処に当たり、外交努力を通じて平和を守ることが重要であることは言うまでもございません。我が国といたしましては、引き続き、国連の場を含め、米国及び韓国、中国等の関係国と緊密に連携しながら、北朝鮮に対して更なる挑発行動の自制や安保理決議の遵守を強く求めてまいりたいと思っております。

このような我が国の立場につきましては、累次中国を含む関係国に説明してきておりまして、引き続き関係国と緊密に意思疎通を図ってまいりたいと思っております。

○糸数慶子君 昨日の新聞で、中央防災会議の専門調査会がまとめた報告書、これに関して内閣府がホームページから削除していたと報じられています。この件については先ほど有田委員からも質問がございました。この中には関東大震災時の朝鮮人虐殺についての記述が含まれていたということですが、これに関しましては、このホームページの削除ではなくリニューアルによって一時的に見られないというだけで、近くウェブサイトに掲載されるということを確認いたしましたので、質問ではありませんが、この中で、削除ではないかと心配をする声が上がるのは、やはりこれは歴史を修正しようとする政治家や著名人の言動が影響している、そのようなことがあるというふうに言わざるを得ません。

昨年四月の熊本地震の発生直後にも、ツイッ

ターなどで動物園からライオンが逃亡したとか朝鮮人が井戸に毒を投げ込んだなど悪質なデマが投稿され、これが瞬時に拡散しています。投稿を見た在日の女性はこのデマで多くの朝鮮人が殺された関東大震災が頭に浮かび、恐ろしかったというふうに話されています。

そういうことから考えていきますと、やはりこの投稿を見たこの在日の女性の声など、多くの人たちの声を聞いていきますと、この日本軍の慰安婦の問題も、そして関東大震災における朝鮮人虐殺のことも、これは消すことができない歴史の事実だということを申し上げたいと思っております。

なぜかといいますと、冒頭にも御質問いたしましたけれども、この慰安婦問題についての記述、これに関しては国立公文書館が、慰安婦を運行する公文書十九件、そして百八十二点の資料が内閣官房に提出された、このように報道されているわけですが、後々になってこういう歴史の事実と

いうのが出てくるわけでありまして、そういうことを考えていきますと、やはりそのときそのときによつて、私は、歴史を変えていく、そういうことがないように、この日本軍慰安婦の問題も、関東大震災によるこの朝鮮人虐殺も、消すことのできない歴史の事実だということを改めて申し上げておきたいと思っております。

ここで私の質問は終わりたいと思っております。ありがとうございます。

○東徹君 日本維新の会の東徹でございます。

今日は、一般質問ということでありますので、様々なちよつと通告をしておりますが、まず最初に、衆議院の方でもテロ等準備罪、審議が入っております。日本維新の会としては、そのテロ等準備罪、国民に安心をしてもらうために取調べの可視化を入れるべきということ言わせていただいております。

その取調べの可視化について、まずお伺いをさせていただきますかと思っております。

裁判員裁判の対象事件とか、それから検察の独自捜査事件を含めて、被疑者が逮捕された事件で

は全体でどの程度あるのか、まずお伺いをしたいと思っております。

○政府参考人(林眞琴君) 平成二十七年一月一日から同年十二月三十一日までの間で警察当局が逮捕して検察当局において身柄送致を受けた被疑者の人員、これが十一万八千二百五十九人。そして、検察当局が逮捕した被疑者の人員、これが百九十四人。合計しますと、十一万八千四百五十三人となります。なお、これについては、自動車による過失致死傷と、あるいは道路交通法等違反事件、これについては除いております。

○東徹君 全体で十一万八千四百五十三件ということでありましても、それでは、そのうちのどの程度の事件において被疑者取調べの可視化が行われたのか、また、それが被疑者が逮捕された件数のうちのどの程度の割合なのか、お示しをいただきたいと思っております。

○政府参考人(林眞琴君) 検察当局における被疑者の取調べの録音、録画の実施件数についてお答えいたします。

まず、検察におきましては、平成二十六年十月までは四つの類型の事件について録音、録画を行い、さらに平成二十六年十月からはそれ以外の類型についても録音、録画を行うようになっております。

まず、二十六年十月までは裁判員裁判対象事件というものが一つ対象として録音、録画されましたが、この件数でいきますと、これやはり平成二十七年の一月一日から同年十二月三十一日までの実施件数でいきますと、裁判員裁判対象事件として三千二百七十四件、それから独自捜査事件については百三十五件、それから知的障害によりコミュニケーション能力に問題がある被疑者等に係る事件、これにつきましては千三百三件、さらに精神の障害等により責任能力の減退、喪失が疑われる被疑者に係る事件、二千六百三十八件ございました。さらに、先ほど申し上げました平成二十六年十月以降はこういった類型に当たらないものにつきましても録音、録画を行っているわけござ

います。その件数でいきますと、四万四千五百件でございます。これらの合計でいきますと、五万五千五百五十五件についてこの一年間で録音、録画を行っております。

先ほど全体の身柄事件の件数を十一万八千四百五十三人と言いました、そして、この五万一千五百五十五件について録音、録画を行ったということ、これを単純で比較しますと、その割合は約四割の身柄事件について録音、録画を行っているということになります。

なお、付言いたしますと、裁判員裁判対象事件と独自捜査事件だけについて見ますと、これを合計しますと三千四百九件となりますので、これに限って見ますと、その全体の中に占める割合は二・八%ということになります。

○東徹君 ということは、確かに知的障害者とか精神障害者、こういったのを除いて裁判員裁判の対象事件、それから検察独自の捜査事件、そういったものの逮捕の件数が占める割合は約二・八%ということで、非常に少ないわけですね。

そうしたら、この裁判員裁判の対象事件とか検察の独自捜査事件においては、これかなりの高い、恐らく一〇〇%近い割合で取調べの可視化が行われていると思うんですが、その点はそういうことで間違いないんですかね。

○政府参考人(林眞琴君) 御指摘のとおりでございます。まして、裁判員裁判対象事件については約九九%において録音、録画が行われております。その他、先ほど申し上げました独自捜査事件でありますとか、知的障害あるいは精神障害、こういった類型での事件については一〇〇%の録音、録画をしております。

○東徹君 ただ、全体の逮捕件数、全体で考える三%程度にとどまっているということでありまして、今後、更にその可視化というものをやっばり進めていくというのが大切だと思っておりますけれども、どの程度、これは目標としてどのような対策を考えているのか、検察、警察それぞれについてお伺いしたいと思います。

○政府参考人(林眞琴君) 検察当局におきましては、先ほど裁判員裁判対象事件等については一〇〇％行っていることとございまして、これはこのまま推移していくものと考えます。その他の事件でいきますと、さらにその四類型以外の事件でいきますと、先ほどこれを足すと全体で四割という、かなり多くの数の録音、録画を行っておるわけですが、これらは事件に応じて必要な場合に録音、録画を行うという類型でございまして、これについては事件に応じて今後も積極的にこの録音、録画を実施していくものと考えております。

○東徹君 今後ともどうか、事件に応じてということで、具体的な方向性というのは余り見えないように思うんですけども。

続きまして、可視化の内容についてお伺いしたいと思いますが、裁判員裁判の対象事件など、これ、裁判員裁判対象事件とそれから同一被疑者の犯罪でそれに併合審理されている事件、こういったものを合わせると、警察における取調べに関して取調べの全過程が可視化されたのはどの程度あるのか、お伺いしたいと思えます。

○政府参考人(高木勇人君) 警察におけます平成二十七年年度の裁判員裁判対象事件等の検挙件数は三千二百七十七件でありまして、取調べの録音、録画を実施した件数は二千九百三十六件であります。そのうち、お尋ねの取調べの全過程の録音、録画を実施した件数は千五百六十五件であり、全体の約五割となっております。

○東徹君 約全体の五割ということでありまして、けれども、取調べの全過程の可視化に関して、裁判員裁判事件については約半数でこれまで実施されているわけですが、一定程度進んでいるというふうには思いますが、それ以外の事件を含めた取調べの全過程の可視化について警察庁はどのように考えているのか、お伺いしたいと思います。

○政府参考人(高木勇人君) 警察といたしましては、平成三十一年六月までの録音・録画制度の施行に向けまして、録音・録画機材の整備や現場捜査員に対する指導教養の徹底と、いまだ取り組むべき課題が多く、まずは制度の対象となる取調べについて録音、録画が確実に実施されるよう準備を進めてまいりたいと考えております。

○東徹君 早急にこういった取調べの可視化というのはやっぱりどんどん進めていくべきというふうには考えておられて、これ、大阪では自白強要の何かかなりひどい取調べが行われたと、そういったこともありまして、是非進めていくべきと考えます。

では、続きまして、ちよつと時間がありませんが、北朝鮮有事の際の避難民対策についてお伺いをしたいと思います。

今月に入りまして、北朝鮮をめぐる状況、大変これ緊迫しておるわけですが、有事を想定した対応も検討していく必要があるというふうには思っています。万が一北朝鮮が有事となった場合、北朝鮮はもとより韓国からも多くの避難民が我が国にやってくるのではないかとこのように考えられますが、この中には、きちんと保護すべき方もいるれば、戦闘員が我が国でのテロ目的で紛れ込んでくる、そういった可能性も考えられます。迅速かつ慎重な対応が必要であると考えます。

四月十七日の衆議院の決算行政監視委員会、安倍総理は、避難民の保護に続いて、上陸手続、収容施設の設定及び運営、我が国が加護すべき者に当たるか否かのスクリーニングといった対応を想定しているという答弁がありましたけれども、法務省としてどのように考えているのか、お伺いしたいと思います。

○国務大臣(金田勝年君) 東委員の御質問にお答えをいたします。

我が国に避難民が流入するような場合には、その対応につきましては、避難民の保護に続きまして、上陸手続、収容施設の設定及び運営、我が国が庇護すべき者に当たるか否かのスクリーニングといった一連の対応が想定されるわけでありまして、これらの対応につきましては政府全体で検討し

ているものでありまして、具体的な対応策の検討状況については事案の性質上お答えは差し控えていたいただきますが、法務省としてもその上陸手続等の対応を行うことが想定されますので、関係機関とも緊密に連携をしながら適切に対処をしていきたいと、このように考えておる次第であります。

○東徹君 ただ、収容施設となると、これはあるのかなというふうには思うんですが、収容施設については具体的にどのような想定をしているのか、お伺いしたいと思います。

○政府参考人(和田雅樹君) お答えいたします。先ほど大臣から答弁ございましたように、我が国に避難民が到着した場合には、その避難民の身柄を確保した上で、上陸手続でありますとか、先ほど先生から御指摘ございました収容施設を設ける、あるいはその運営を行う、我が国において庇護すべき者に当たるのかどうかといったスクリーニングを行うなど、一連の対応を行うことが想定されているところでございまして、これらの一連の対応を含めまして政府全体として大量避難民が来たときの対応について検討しているところでございまして、今お尋ねのございました避難民の収容施設の設定等に関する具体的な想定につきましては、事案の性質上お答えを差し控えていたございました。ただ、いずれにいたしましても、法務省におきましては、関係機関と緊密な連携を図り適切に対処していくという所存でございまして、

○東徹君 そうしたら、北朝鮮有事の際の避難民に対するスクリーニング、これはどうやって行うんですかね。

○政府参考人(和田雅樹君) スクリーニングの具体的な方法につきましては事案の性質上お答えを差し控えていただきますが、いずれにいたしましても、関係省庁と緊密な連携を図りながら適切に対応してまいりたいと考えております。

○東徹君 ちよつと時間がないので次の質問をさせていただきます。今日は文科省の方からも来て

いただいていると思えますので、質問をさせていただきます。

毎年、法科大学院、これ、この間の際に質問しようと思つた内容だったんですけども、国からの財政支援が行われていたんですけども、制度がつけられた平成十六年度以降、財政支援、どれくらいの額が行われているのか。そして、これは九百六十六億円だと思つていただいても使われていると思うんですが、法科大学院、司法試験の合格率の低迷とか授業料の高さ、入学者、これは減ってきているわけですが、今後、法科大学院の在り方どのように考えているのか、改革が必要であれば何を改革していくかとしていくのか、お伺いしたいと思います。

○政府参考人(浅田和伸君) 平成十六年度から十八年度までの法科大学院への国の財政支援について、一定の考え方に基づいて試算を行いますと九百六十四億円となります。なお、法科大学院に対する国の財政支援は、平成十六年度は八十九億円であったところ、入学定員の削減などに伴い二十八年度は四十四億円となつていくところでございます。

法科大学院につきましては、これまで、法学既修者コース修了者については累積で約七割の者が司法試験に合格しており、法廷実務を始め民間企業、公務部門といった様々な分野に修了者を送り出すなど一定の成果を上げてきた一方で、法科大学院全体の司法試験合格率が制度創設当初に期待された状況と異なっているなどの課題が指摘をされております。

このため、平成三十年度までを法科大学院集中改革期間と位置付け、公的支援見直し強化・加算プログラムなどを通じた法科大学院の組織見直しの促進、教育の質の向上、経済的負担、時間的負担の軽減などに取り組んでいるところでございまして、

また、中央教育審議会の法科大学院等特別委員会でも、法学部と法科大学院との連携強化の方策、法学未修者に対する教育の充実などについて

の審議を行っております。

今後とも、法科大学院教育の充実を図りつつ、法科大学院に要する時間的、経済的負担の軽減などを通じて法科大学院志願者の確保に最大限努力してまいります。

○東徹君 もう時間が来ましたので、終わらせていただきます。ありがとうございます。

○山口和之君 無所属の山口和之でございます。

今日は防犯カメラについて伺いたいんですが、防犯カメラと言うのが監視カメラと言うのか、言い方によってちよつとイメージが随分変わるんですが、防犯カメラということでは、

証に有効であったり、事件の関係者の足取りの確認であったり、あるいは画像を公開して追跡調査等、警察捜査の様々な場面で活用されていると思います。今やなくてはならないものなのかなというふうにも思います。一方で、デジタル画像は個人識別可能な精度であったり、プライバシー権の保障の観点から看過できないという言葉も聞かれます。

そういったところで質問させていただきたいんですが、まずは防犯カメラの設置、撮影について伺いたいと思います。

最高裁の判例では、個人の私生活の自由の一つとして、何人も承諾なしにみだりに容貌、姿態を撮影されない自由を有し云々、警察官が正当な理由なく個人の容貌等を撮影することは許されないということ昭和四十四年の大法廷判決でございました。

警察のまとめでは、警察が設置した防犯カメラは年々増えており、昨年三月現在で千五百三十台とのことだそうです。防犯カメラを用いて警察が個人の容貌等を撮影することに問題はないのかを伺いたいと思います。

○政府参考人(林眞琴君) 防犯カメラの設置自体は警察の活動内容に関する事柄でございますが、法務当局の立場で、特に犯罪捜査との関係についてお答えいたしますと、捜査機関が被撮影者の同意なくビデオカメラなどを用いて個人の容貌等を撮影する捜査、これが任意捜査として行うことが適法か否かにつきましては、具体的な事案における目的の相当性、必要性、方法の相当性など、諸事情を考慮して個別に判断されるべき事柄であると考えております。

なお、この点にしまして、公道上及びパチンコ店内にいる者のビデオ撮影にしまして、捜査目的を達成するため必要な範囲において相当な方法によつて行われたとして、それが適法な捜査活動であると認定した最高裁の判例があるものと承知しております。

○山口和之君 では、民間が設置している防犯カメラが百万台以上とも言われています。犯罪捜査においては、警察が民間の防犯カメラ映像を利用することも多いと思いますが、

個人の容貌等を撮影することに問題はないのかという点、また私人が任意に防犯カメラ映像を警察に提供することには何か問題がないのかを伺いたいと思います。

○政府参考人(林眞琴君) 今の点について、二つの点のお尋ねでございますが、まず私人が被撮影者の同意なく防犯カメラを用いて個人の容貌等を撮影することに問題があるかどうか、この点につきましては、これは一概に申し上げることは困難でございます。法務当局としてお答えすることは困難であるかと思ひます。

他方で、私人が任意に防犯カメラ映像を警察に提供するなど、そういった私人が撮影した防犯カメラ映像等の証拠収集の適法性、これにつきましては、これは個別事件における具体的事情に応じて判断されるものでありますけれども、一般論でいえば、私人から任意に防犯カメラの映像の提供を受けること自体、これが違法というものではないと考えております。

なお、この点にしまして、民事の裁判例ではございますが、コンビニエンスストアにおける防犯カメラによる店内の撮影、録画には、目的の相当性、必要性、方法の相当性が認められるとした

上で、警察に対する防犯カメラ映像を提供したことにしても、捜査機関の適法な任意捜査に対する私人の協力行為として公益目的を有するものであり、他方、提供した映像の内容は商品の購入している姿などにすぎないものであることを考慮すると、違法性は認められないという判断をした裁判例があるものと承知しております。

○山口和之君 私人が個人の容貌等を撮影することには問題はないのかということについては、まあ言い難いということですね。

それで、東京メトロと都営地下鉄の全車両に防犯カメラが設置されるという報道がなされておりますが、前者の株主は政府と東京都であり、後者は東京都が運営しています。警察以外の公権力又はそれと同視し得る主体が個人の容貌等を撮影することには問題ないのか。また、それが任意に防犯カメラ映像を警察に提供することには何か問題がないのか。

そもそも、平成二十三年三月に警察庁が発表した電車内の痴漢撲滅に向けた取組みに関する報告書では、電車内の防犯カメラはプライバシー侵害となるかとの意識調査で、そう思うと答えた割合が約半数、四七・六％だったとあります。電車内の個人の容貌等を撮影すること自体に何か問題はないのか、教えていただきたいと思ひます。

○政府参考人(林眞琴君) 委員が言われました警察以外の公権力又はそれと同視し得る主体というものがあるかどうかを指すのかというものについて必ずしも明らかではございませんけれども、先ほど、私人によるこういった防犯カメラの設置、撮影又は警察への任意の提供というものと基本的には同じお答えになりますけれども、まず、そういった防犯カメラを設置すること、撮影すること、これについてはまた法務当局としてはお答えする立場にはないと思ひます。

一方で、その証拠収集の適法性という観点でいえば、やはり先ほど申し上げたように、任意にそうした防犯カメラの映像の提供を警察等が受けること、これ自体が違法というものではないと思ひます。

ております。

○山口和之君 それでは、EU諸国等では防犯カメラに対して法規制がなされているということだそうです。日本では防犯カメラの設置や撮影等に関して法規制はあるのかを伺いたいと思ひます。

○政府参考人(林眞琴君) 防犯カメラの設置等に関する法規制、これ自体は法務当局としてお答えすべき立場にはないわけですが、少なくとも私どもが把握する限りにおいて、日本においてそういった防犯カメラに関する一般的な法規制があるものとは承知しておりません。

○山口和之君 町じゅうあらゆるところにいろいろな防犯カメラ、監視カメラがございまして、その活用の仕方によってはいろいろプライバシーの侵害になつてくる可能性もあるということだと思ひます。

日本とアメリカを除くほとんどの先進国においては、防犯カメラ設置等に関与し、情報主体のプライバシー権や自己情報コントロール権を保護する第三者機関が設置されているとのことでもあります。日本でも、第三者機関の設置を含め、防犯カメラについての法制化を行う必要があると考えますが、法務大臣の見解を伺いたいと思ひます。

○国務大臣(金田勝年君) 一般的に、防犯カメラに関する法規制を行う必要があるかにつきましては、法務大臣としてはお答えすべき立場にはないと。

なお、犯罪捜査において防犯カメラ映像を使用することにつきましては、あくまで一般論として申し上げますと、捜査機関におきましては、個別具体的な事案に応じまして、法令や判例等の趣旨を踏まえて適切に対処しているものと承知をいたしております。

○山口和之君 最高裁によれば、みだりに容貌等を撮影されない自由は憲法上保障されるものであつて、防犯カメラについての法制化が遅れると、GPS捜査のように、後日、強制処分法定主義や令状主義に違反するとの判決が出て、捜査に深刻な支障が出るおそれも懸念されます。是非積

極的に法制化を検討していただきたいと思ひます。

次に、防犯カメラ映像の公表について伺ひたいと思ひます。

先ほども出てきましたけれども、万引きの被害に遭つた小売店などが防犯カメラの映像を公表し、ニュースになることがあります。そもそもどのような問題があるのか、公表は適法であるとの見解もあるが、違法となるための要件は何かを教えてくださいたいと思ひます。

○政府参考人(林眞琴君) 万引きの被害に遭ひました小売店等がその防犯カメラ映像を公表することに伴う問題、これにつきましては、もちろんその公表の目的でありますとか、その公表の仕方等様々でございます。一概に申し上げるのは困難でございます。法務当局としてその点についてお答えすることは差し控えてさせていただきます。

他方で、例えばこの公表という行為が犯罪を構成するかどうかということ、例えば名誉毀損等に当たるのか当たらないかということについての観点でいえば、その点については、やはり個別事案に応じてその証拠に基づいて判断される事柄であらうかと考えております。

○山口和之君 小売店による公表とは違い、報道機関が防犯カメラの映像を公表することは余り問題となつていないんですが、小売店等と報道機関ではどのような違いがあるんでしょうか。

○政府参考人(林眞琴君) この防犯カメラ映像を公表することに伴う問題に関しまして、そうした小売店が公表する場合と報道機関が公表する場合、どのような違いがあるかにつきましては、私も法務当局としてはなかなかお答えすべき立場にはないと考えております。

○山口和之君 防犯カメラの映像の公表については慎重が必要であるというふうに思ひます。防犯カメラの設置、撮影の在り方とともに公表の在り方についても検討が必要と考えますが、法務大臣の見解を伺ひたいと思ひます。

○国務大臣(金田勝年君) 山口委員の御質問にお

答えます。

一般的に、防犯カメラに関する法規制の要否につきましては、法務大臣としてお答えすべき立場にはありません。また、万引き被害に遭つた店舗などの一般の方が防犯カメラ映像を公表することの可否等につきましては、一概に申し上げることは困難でありまして、お答えすることは差し控えたいと、このように考えます。

しかし、少なくとも犯罪捜査において防犯カメラ映像を使用する場合、先ほども述べましたとおり、捜査機関は個別具体的な事案に応じまして、法令や判例等の趣旨を踏まえ、適切に対処しているものと承知をいたしております。

いずれにしても、一般論として申し上げますと、個人のプライバシー等が不当に侵害されないことが極めて重要であると認識をいたしております。

○山口和之君 個人のプライバシーが侵害されないことが極めて重要であるというお話をいただきました。個人識別可能であったり、もう監視が続けられるであったり、どういふふうに使われるかであったり、やはりルールを決める必要があるのではないかと思ひますので、是非検討していただきたいと思ひます。

以上で終わります。

○仁比聡平君 日本共産党の仁比聡平でございます。今日は、有明海問題について、長崎地裁が四月十七日に開門差止め、つまり国敗訴の判決を出したことを踏まえ、政府の問題解決の責任について大臣にお尋ねしたいと思ひます。

まず、小川民事局長にお尋ねをしますが、仮に国が控訴をせず確定をしたとすれば、既に福岡高裁で確定している国の開門義務、これは消えるんでしょうか。

○政府参考人(小川秀樹君) あくまで一般論としての制度の説明として申し上げますと思ひますが、民事訴訟におけます確定判決の効力が及ぶものの範囲につきましては、原則としてその当事者

や口頭弁論終結後の承継人等に対して及びますため、先行する訴訟と後行する訴訟の当事者が異なるれば、一方の訴訟における判決の効力は、当然に他方の訴訟の当事者に及ぶものではございません。

○仁比聡平君 そういふことなんですね。つまり、国がこれまで相反するといふふうになつていた義務、これは全く変わらない、これは確認をいたしました。

この判決になぜ急転したのか、それは和解協議が壊されたからです。その焦点が、開門に代わる漁業環境の改善措置として政府が押し付けようとした基金案であり、その基金案を漁業団体に押し付ける手段として農水省が隠れて行つたのが想定問答なんですね。資料を、新聞記事をお配りしてありますが、二枚目、三枚目、これ山下議員も取り上げられましたし、私が資料を要求しました。

この新聞、一面トップに、「開門派説得 農水省が指南」とあるとおりです。その中身は、二枚目御覧いただきますと分かりますが、基金案に懐疑的な漁業者の二十の質問に団体幹部が答えるという想定問答として、例えば、組合員の総会に諮るべきだという声に対しては、組合長に一任、あるいは、よみがえれ有明訴訟弁護団の馬奈木昭雄弁護団長を名指しして、目指しているものが同じかどうかは分からないなどと、つまり、開門判決の勝訴漁民、開門を求める漁民を、こともあろうか開門義務を負う国が漁協幹部の口を通じて孤立させよう、分断させようという、不誠実を通り越して卑劣極まるものなんです。

そこで、農村振興局に伺ひますが、私の提出要求に対して、三月九日ですけども、理事会協議が行われました。農地資源課長が説明に来られました。つまり、この想定問答、農地資源課が作つたと、そういうことです。

○政府参考人(奥田透君) お答え申し上げます。十七日、開門差止め訴訟におきまして長崎地裁から判決が示されたところでございますが、本件は複数の訴訟が提起されており、争訟中であるこ

とには変わりございません。このような状況におきまして、和解協議の下での交渉に係る内容を申し上げることは、交渉又は争訟に係る事務に関し、国の当事者としての地位を不当に害するおそれがあり、そうした文書が存在しているか否かも含めてお答えすることはできない状況であることを御理解いただきたいと思ひます。

○仁比聡平君 その答弁をオウムのように繰り返す、さっぱり意味が分からない。今も整備部長おっしゃいましたが、国の地位を不当に害するおそれがあると言ふんですけれども、不当に害されるおそれがある国の地位というのは、これは一体何なんですか。

○政府参考人(奥田透君) お答え申し上げます。訴訟当事者である国といたしまして、和解協議の下での漁業団体の交渉に係る内容を申し上げれば、本件をめぐる問題解決にマイナスを生じさせることがあり得るものと考えてございます。

○仁比聡平君 何が問題解決にマイナスを生じさせるおそれがあるんだ。全く逆でしょう。結局、悪事がばれて認めるわけにはいかないうちから隠し通そうというのがこの想定問答を提出せよというのを拒否する理由ですよ。

我が党衆議院議員へのこの問題でのレクの際に、農地資源課は、写メくらいしか朝日は持つていないのではないかなどと述べています。現物があるから写メがあるわけですよ。朝日の報道が現物を写した写メに基づくものだ、農水省、そういう認識ですね。

○政府参考人(奥田透君) お答え申し上げます。和解協議の下での漁業団体の交渉に係る内容を申し上げれば、本件をめぐる問題解決にマイナスを生じさせることがあり得るものと考えております。

○仁比聡平君 問題解決を妨げているのはあなた方だと、農水省だと私は申し上げている。どう言い逃れようとも、あるものはあるんですよ。そこで、訟務局長にお尋ねをいたしますが、私は理事会協議の際に、訟務局は知つていたのかと

繰り返し尋ねました。驚くべきことに、法務省幹部、当然座つておりましたけれども、委員長からも促されながら、一言も発言をされませんでした。訟務局あるいは担当訟務検事は農水省が関係漁協と想定問答を作るやり取りをしていることを知っていたんですか。

○政府参考人(定塚誠君) お答え申し上げます。

御質問の点につきましては、これは農林水産省において漁業団体と交渉されていたことに関わる事項であるため、法務当局としては答弁を差し控えたと思っております。

そもそも、農林水産省と漁業団体のやり取り、これを法務省が明らかにするということは、今後の訴訟当事者としての国あるいは法務省、代理人としての法務省の交渉又は争訟に係る事務に關して、その地位を不当に害して適正な事務の遂行に、法務省として、これを害するおそれがあるというふうに考えております。

○仁比聡平君 知らぬ存ぜぬでこまかせるような話ではないんです。干拓事業開始から二十年、重大な社会的紛争、政治課題なんですよ。その解決の責任の最前線にいるんだという自覚があるのかということですよ。

知つていたとするなら、これは卑劣な被害者としての共犯でしょう。事件当事者と代理人弁護士との関係で例えば照らしてみますと、強姦事件の被害者が被害を償えと求めている裁判で、加害者が法廷の外で被害者に圧力をかけている、それを知りながら、あるいは掛けさせておいて、加害者の代理人弁護士が知らぬ存ぜぬと言いつつて裁判を遂行する、そんな類いの話ですよ。

これ、局長、立場は違つても、法曹の倫理、クリンハンドに反する不当な態度ではありませんか。

○政府参考人(定塚誠君) お答え申し上げます。

一般論としてもそうですが、和解の過程で各省庁がどのようなことをされて、そして訟務局と一緒に和解をしていくのかと、その過程について法務省の方から、あんなことをした、こんなことを

したということが出るということになれば、その原庁である省庁が今後法務省に言うことはやめようということが出てきかねない、そういうことがありますので、国の訴訟事務というものを円滑に適正に進めていくためには、私どもの方から、どういことが和解の過程で行われているのかと、今後率直にいろいろ我々にも話をしたい、国との訴訟当事者としての地位を全うしたいと、こういう見地からこれは法務省としてはお答えすることができないと、こういうことでございます。

○仁比聡平君 原局が、大臣、大臣、原局が訟務に正直に物を言わなくなるかもしれないということとを懸念しなきゃいけないようなことが国の訴訟の現実かということですよ。

大臣、三月七日の所信表明で、法の支配の実現という見地から、指揮権限をより適切かつ効果的に行使すると述べられました。大臣がおっしゃった指揮権限というのは、これは何ですか。

○国務大臣(金田勝年君) お尋ねの指揮権限とは、国の利害に關係のある訴訟につきましての法務大臣の権限等に関する法律、すなわち法務大臣権限法二条第二項、第六条第一項に基づくものであり、国を当事者等とする民事訴訟及び行政訴訟の遂行に当たり、法務大臣が当該訴訟に係る所管行政庁又はその職員に対して指示、命令等を発する権限であると、このように申し上げます。

○仁比聡平君 大臣、条文だけ紹介してどうするんですか。つまり、あなたが指揮権限を持つているわけでしょう。農水省もその指揮権限に服して裁判に当たつていくわけです。その下で卑劣な被害者演じが行われた、その根本にあるのは何かと。

私、この間も申し上げましたけれども、相反する義務に板挟みになつていくということではなくて、干拓ありき、開門は絶対にさせないという本音、農水省の言わば正体がこれは現れているわけです。そうした下で、事業開始から二十年たちました。けれども、干拓地はやつていけなくて、リース料が払えなくて、九件の事業者が撤退する

など費用対効果は〇・八一、そういう事態ですよ。

訟務局長に一点聞きたいと思うんですが、そのようにして政府は開門に背を向け続けて、一方で平成十七年から二十六年度までの間に四百三十三億円の事業費を費やして、これ資料の後ろ三枚目にちよつと参考を出していますが、有明海漁業の再生事業を行つてきたわけです。ところが、政府が環境改善のメルクマールだとする二枚目の回復も全くなされていらないどころか、逆に深刻な状態になつていく。それは水産庁も認めるようなんです。

訟務局あるいは訟務担当検事は、これまでの再生事業の費用対効果、これ裁判ですつと、さざつばら問題になり続けてきたわけです。どうすれば農漁共存で有明海をよみがえらせることができるのかというのが、これが最大の問題なんですよ。どんな認識で裁判や和解やつているんですか。

○政府参考人(定塚誠君) お答え申し上げます。

裁判におきましては、訴訟物、訴訟の対象となるものに向けて最も良い主張、立証を行つていくということが我々の任務だというふうに思つております。ただ、委員御指摘のとおり、和解につきましては、それは原庁とよく相談しながら、最もいい、最も適切な解決ができるようにということで行つていくところでございます。

○仁比聡平君 時間がなくなりましたから、大臣、最後、認識を問うことができないのが残念ですけれども、今申し上げた有明海漁業の再生事業について、昨年十一月、沿岸四県漁協の、長崎も含めてですよ、が、農水大臣と、そして自民党のプロジェクトチームに要請をしています。そこでは、この間、漁業者が実感できるような効果は確認できませんでしたが述べている。基金案が幻となるかもしれない懸念の下で、国がこれまでの再生事業と基金案を絡ませながら協議を進める姿勢に大きな不安を持たざるを得ません。基金案の動向と関係なく、従来予算の拡充に努めることとい

うのが漁業団体の強い要求なんですね。

控訴せずに開門差止めの判決を確定させるなど、私は到底あり得ない。わざと負けるなんというのは正義に反すると思います。この農漁共存、その事業をしつかり進める。営業者は、私が生まれる前の昭和干拓の時代から国策で入植されて以来、水の確保、排水不良に苦勞し続けてこられました。それを解決する道というのはあるんですよ。そこをしつかりと指揮するということ自身が大臣の、そして安倍内閣の大変重大な責任だということ強く申し上げて、今日は質問終わります。

○委員長(秋野公造君) 本日の調査はこの程度にとどめます。

○委員長(秋野公造君) 民法の一部を改正する法律案及び民法の一部を改正する法律の施行に伴う関係法律の整備等に関する法律案の両案を一括して議題といたします。

両案について、政府から趣旨説明及び衆議院における修正部分の説明を聴取いたします。金田法務大臣。

○国務大臣(金田勝年君) 民法の一部を改正する法律案につきまして、その趣旨を御説明をいたします。

この法律案は、制定以来、約百二十年間の社会経済の変化への対応を図り、国民一般に分かりやすいものとする観点から、民法の一部を改正しようとするものであります。

その要点は、次のとおりであります。

第一に、消滅時効について、医師の診療に関する債権は三年、飲食店の飲食料に係る債権は一年などとして定めている短期消滅時効の特例をいづれも廃止をして消滅時効の期間の統一を図るなど、時効に関する規定の整備を行うこととしております。

第二に、法定利率について、現行の年五%から年三%に引き下げた上で、市中の金利動向に合わせて変動する制度を導入することとしております。

第一編第二章第五節を同章第六節とする。
第一編第二章第四節の節名中「失踪」を「失踪」に改め、同節を同章第五節とし、同章第三節を同章第四節とする。

第十三条第一項に次の一号を加える。

十 前各号に掲げる行為を制限行為能力者（未成年者、成年被後見人、被保佐人及び第十七条第一項の審判を受けた被補助人をいう。以下同じ。）を削る。

第二十条第一項中「未成年者、成年被後見人、被保佐人及び第十七条第一項の審判を受けた被補助人をいう。以下同じ。」を削る。

第一編第二章第二節を第三節とし、第一節の次に次の一節を加える。

第二節 意思能力

第三条の二 法律行為の当事者が意思表示をした時に意思能力を有しなかったときは、その法律行為は、無効とする。

第八十六条第三項を削る。

第九十条中「事項を目的とする」を削る。

第九十三条ただし書中「表意者の真意を」とその意思表示が表意者の真意ではないことに改め、同条に次の一項を加える。

2 前項ただし書の規定による意思表示の無効は、善意の第三者に対抗することができない。
第九十五条を次のように改める。

（錯誤）

第九十五条 意思表示は、次に掲げる錯誤に基づくものであつて、その錯誤が法律行為の目的及び取引上の社会通念に照らして重要なものであるときは、取り消すことができる。

一 意思表示に対応する意思を欠く錯誤

二 表意者が法律行為の基礎とした事情についてのその認識が真実に反する錯誤

2 前項第二号の規定による意思表示の取消しは、その事情が法律行為の基礎とされていることが表示されていたときに限り、することができる。

3 錯誤が表意者の重大な過失によるものであつ

た場合には、次に掲げる場合を除き、第一項の規定による意思表示の取消しをすることができない。

一 相手方が表意者に錯誤があることを知り、又は重大な過失によつて知らなかったとき。

二 相手方が表意者と同一の錯誤に陥つていたとき。

4 第一項の規定による意思表示の取消しは、善意でかつ過失がない第三者に対抗することができない。

第九十六条第二項中「知つていたを」知り、又は知ることができたに改め、同条第三項中「善意の」を「善意でかつ過失がない」に改める。

第九十七条の見出しを「意思表示の効力発生時期等」に改め、同条第一項中「隔地者に対する」を削り、同条第二項中「隔地者に対する」を削り、「死亡し」の下に「意思能力を喪失し」を加え、「を喪失したを」の制限を受けたに改め、同項を同条第三項とし、同条第一項の次に次の一項を加える。

2 相手方が正当な理由なく意思表示の通知が到達することを妨げたときは、その通知は、通常到達すべきであつた時に到達したものとみなす。

第九十八条の二中「未成年者又は」を「意思能力を有しなかったとき又は未成年者若しくは」に改め、同条ただし書中「その法定代理人」を「次に掲げる者」に改め、同条に次の各号を加える。

一 相手方の法定代理人

二 意思能力を回復し、又は行為能力者となつた相手方

第一百一条第一項中「意思表示」を「代理人が相手方に対してした意思表示」に改め、「不存在」の下に「錯誤」を加え、同条第二項中「場合において」及び「本人の指図に従つて」を削り、同項を同条第三項とし、同条第一項の次に次の一項を加える。

2 相手方が代理人に対してした意思表示の効力が意思表示を受けた者がある事情を知つていた

こと又は知らなかったことにつき過失があつたことによつて影響を受けるべき場合には、その事実の有無は、代理人について決するものとする。

第二百二条を次のように改める。

（代理人の行為能力）

第二百二条 制限行為能力者が代理人としてした行為は、行為能力の制限によつては取り消すことができない。ただし、制限行為能力者が他の制限行為能力者の法定代理人としてした行為については、この限りでない。

第二百五条を削る。

第二百六条中「前条第一項を」を「本人に対してその選任及び監督について」に改め、同条を第二百五条とする。

第二百七条第二項中「対して」の下に「その権限の範囲内において」を加え、同条を第二百六条とし、同条の次に次の一条を加える。

（代理権の濫用）

第二百七条 代理人が自己又は第三者の利益を図る目的で代理権の範囲内の行為をした場合において、相手方がその目的を知り、又は知ることができたときは、その行為は、代理権を有しない者がした行為とみなす。

第二百八条の見出しを「（自己契約及び双方代理等）」に改め、同条中「法律行為については」を「法律行為について」に、「となり」を「として」に、「となることができない」を「としてした行為は、代理権を有しない者がした行為とみなす」に改め、同条に次の一項を加える。

2 前項本文に規定するもののほか、代理人と本人との利益が相反する行為については、代理権を有しない者がした行為とみなす。ただし、本人があらかじめ許諾した行為については、この限りでない。

第二百九条の見出しを「（代理権授与の表示による表見代理等）」に改め、同条に次の一項を加える。
2 第三者に対して他人に代理権を与えた旨を表示した者は、その代理権の範囲内においてその

他人が第三者との間で行為をしたとすれば前項の規定によりその責任を負うべき場合において、その他人が第三者との間でその代理権の範囲外の行為をしたときは、第三者がその行為についてその他人の代理権があると信すべき正当な理由があるときに限り、その行為についての責任を負う。

第一百十條中「前条本文を」を「前条第一項本文」に改める。

第一百十二条を次のように改める。

（代理権消滅後の表見代理等）

第一百十二条 他人に代理権を与えた者は、代理権の消滅後にその代理権の範囲内においてその他人が第三者との間でした行為について、代理権の消滅の事実を知らなかった第三者に対してその責任を負う。ただし、第三者が過失によつてその事実を知らなかったときは、この限りでない。

2 他人に代理権を与えた者は、代理権の消滅後に、その代理権の範囲内においてその他人が第三者との間で行為をしたとすれば前項の規定によりその責任を負うべき場合において、その他人が第三者との間でその代理権の範囲外の行為をしたときは、第三者がその行為についてその他人の代理権があると信すべき正当な理由があるときに限り、その行為についての責任を負う。

第一百七条第一項中「証明することができず、かつ、本人の追認を得ることができなかったときは」を「証明したとき、又は本人の追認を得たときを除き」に改め、同条第二項を次のように改める。

2 前項の規定は、次に掲げる場合には、適用しない。
一 他人の代理人として契約をした者が代理権を有しないことを相手方が知つていたとき。
二 他人の代理人として契約をした者が代理権を有しないことを相手方が過失によつて知らなかったとき。ただし、他人の代理人として

契約をした者が自己に代理権がないことを知っていたときは、この限りでない。

三 他人の代理人として契約をした者が行為能力の制限を受けていたとき。

第二百二十条第一項中「制限行為能力者」の下に「(他の制限行為能力者の法定代理人としてした行為にあつては、当該他の制限行為能力者を含む。)」を加え、同条第二項中「詐欺」を「錯誤、詐欺」に改める。

第二百二十一条ただし書を削り、同条の次に次の一条を加える。

(原状回復の義務)

第二百二十一条の二 無効な行為に基づく債務の履行として給付を受けた者は、相手方を原状に復させる義務を負う。

2 前項の規定にかかわらず、無効な無償行為に基づく債務の履行として給付を受けた者は、給付を受けた後、前条の規定により初めから無効であつたものとみなされた行為があつては、給付を受けた当時その行為が取り消すことができるものであることを知らなかつたときは、その行為によつて現に利益を受けている限度において、返還の義務を負う。

3 第一項の規定にかかわらず、行為の時に意思能力を有しなかつた者は、その行為によつて現に利益を受けている限度において、返還の義務を負う。行為の時に制限行為能力者であつた者についても、同様とする。

第二百二十二条ただし書を削る。

第二百二十四条第一項中「追認」を「取り消すことができる行為の追認」に、「消滅した」を「消滅し、かつ、取消権を有することを知つた」に改め、同条第二項を次のように改める。

2 次に掲げる場合には、前項の追認は、取消しの原因となつていた状況が消滅した後にすることを要しない。

一 法定代理人又は制限行為能力者の保佐人若しくは補助人が追認をするとき。

二 制限行為能力者(成年被後見人を除く)が法定代理人、保佐人又は補助人の同意を得て追認をするとき。

第二百二十四条第三項を削る。

第二百二十五条中「前条の規定により」を削る。

第二百三十条の見出しを「(条件の成就の妨害等)」に改め、同条に次の一項を加える。

2 条件が成就することによつて利益を受ける当事者が不正にその条件を成就させたときは、相手方は、その条件が成就しなかつたものとみなすことができる。

第二百四十五条中「当事者」の下に「(消滅時効にあつては、保証人、物上保証人、第三取得者その他権利の消滅について正当な利益を有する者を含む。)」を加える。

第二百四十七条から第二百五十七条までを次のように改める。

(裁判上の請求等による時効の完成猶予及び更新)

第二百四十七条 次に掲げる事由がある場合には、その事由が終了する(確定判決又は確定判決と同一の効力を有するものによつて権利が確定することなくその事由が終了した場合にあつては、その終了の時から六箇月を経過する)までの間は、時効は、完成しない。

一 裁判上の請求

二 支払督促

三 民事訴訟法第二百七十五条第一項の和解又は民事調停法(昭和二十六年法律第二百二十二号)若しくは家事事件手続法(平成二十三年法律第五十二号)による調停

四 破産手続参加、再生手続参加又は更生手続参加

2 前項の場合において、確定判決又は確定判決と同一の効力を有するものによつて権利が確定したときは、時効は、同項各号に掲げる事由が終了した時から新たにその進行を始める。

(強制執行等による時効の完成猶予及び更新)

その事由が終了する(申立ての取下げ又は法律の規定に従わないことによる取消しによつてその事由が終了した場合にあつては、その終了の時から六箇月を経過する)までの間は、時効は、完成しない。

一 強制執行

二 担保権の実行

三 民事執行法(昭和五十四年法律第四号)第九十五条に規定する担保権の実行としての競売の例による競売

四 民事執行法第九十六条に規定する財産開示手続

2 前項の場合には、時効は、同項各号に掲げる事由が終了した時から新たにその進行を始める。ただし、申立ての取下げ又は法律の規定に従わないことによる取消しによつてその事由が終了した場合は、この限りでない。

(仮差押え等による時効の完成猶予)

第二百四十九条 次に掲げる事由がある場合には、その事由が終了した時から六箇月を経過するまでの間は、時効は、完成しない。

一 仮差押え

二 仮処分

(催告による時効の完成猶予)

第二百五十条 催告があつたときは、その時から六箇月を経過するまでの間は、時効は、完成しない。

2 催告によつて時効の完成が猶予されている間にされた再度の催告は、前項の規定による時効の完成猶予の効力を有しない。

行を拒絶する旨の通知が書面でされたときは、その通知の時から六箇月を経過した時

2 前項の規定により時効の完成が猶予されている間にされた再度の同項の合意は、同項の規定による時効の完成猶予の効力を有する。ただし、その効力は、時効の完成が猶予されなかつたとすれば時効が完成すべき時から通じて五年を超えることができない。

3 催告によつて時効の完成が猶予されている間にされた第一項の合意は、同項の規定による時効の完成猶予の効力を有しない。同項の規定により時効の完成が猶予されている間にされた催告についても、同様とする。

4 第一項の合意がその内容を記録した電磁的記録(電子的方式、磁気的方式その他の知覚によつては認識することができない方式で作られる記録であつて、電子計算機による情報処理の用に供されるものをいう。以下同じ。)によつてされたときは、その合意は、書面によつてされたものとみなして、前三項の規定を適用する。

5 前項の規定は、第一項第三号の通知について準用する。

(承認による時効の更新)

第二百五十二条 時効は、権利の承認があつたときは、その時から新たにその進行を始める。

2 前項の承認をするには、相手方の権利についての処分につき行為能力の制限を受けていないこと又は権限があることを要しない。

(時効の完成猶予又は更新の効力が及ぶ者の範囲)

第二百五十三条 第二百四十七条又は第二百四十八条の規定による時効の完成猶予又は更新は、完成猶予又は更新の事由が生じた当事者及びその承継人の間においてのみ、その効力を有する。

2 第二百四十九条から第二百五十一条までの規定による時効の完成猶予は、完成猶予の事由が生じた当事者及びその承継人の間においてのみ、その効力を有する。

3 前条の規定による時効の更新は、更新の事由

が生じた当事者及びその承継人の間においてのみ、その効力を有する。

第百五十四條 第百四十八條第一項各号又は第百四十九條各号に掲げる事由に係る手続は、時効の利益を受ける者に対してしないときは、その者に通知をした後でなければ、第百四十八條又は第百四十九條の規定による時効の完成猶予又は更新の効力を生じない。

第百五十五條から第百五十七條まで 削除
第百五十八條の見出し、第百五十九條の見出し及び第百六十條の見出し中「停止」を「完成猶予」に改める。

第百六十一條の見出し中「停止」を「完成猶予」に改め、同条中「時効を中断する」を「第百四十七條第一項各号又は第百四十八條第一項各号に掲げる事由に係る手続を行う」に、「二週間」を「三箇月」に改める。

第百六十六條の見出しを「(債権等の消滅時効)」に改め、同条第一項を次のように改める。

債権は、次に掲げる場合には、時効によつて消滅する。

一 債権者が権利を行使することができることを知った時から五年間行使しないとき。

二 権利を行使することができる時から十年間行使しないとき。

第百六十六條第二項中「前項」を「前二項」に改め、同項ただし書中「中断する」を「更新する」に改め、同項を同条第三項とし、同条第一項の次に次の一項を加える。

2 債権又は所有権以外の財産権は、権利を行使することができる時から二十年間行使しないときは、時効によつて消滅する。

第百六十七條を次のように改める。

(人の生命又は身体への侵害による損害賠償請求権の消滅時効)

第百六十七條 人の生命又は身体への侵害による損害賠償請求権の消滅時効については、前条第一項第二号の規定の適用については、同号中「十年間」とあるのは、「二十年間」とする。

第百六十八條第一項を次のように改める。
定期金の債権は、次に掲げる場合には、時効によつて消滅する。

一 債権者が定期金の債権から生ずる金銭その他の物の給付を目的とする各債権を行使することができることを知った時から十年間行使しないとき。

二 前号に規定する各債権を行使することができる時から二十年間行使しないとき。

第百六十八條第二項中「中断」を「更新」に改める。

第百六十九條を次のように改める。
(判決で確定した権利の消滅時効)
第百六十九條 確定判決又は確定判決と同一の効力を有するものによつて確定した権利については、十年より短い時効期間の定めがあるものであつても、その時効期間は、十年とする。

2 前項の規定は、確定の時に弁済期の到来してない債権については、適用しない。

第百七十條の前の見出しを削り、同条から第百七十四條までを次のように改める。

第百七十條から第百七十四條まで 削除
第百七十四條の二を削る。

第百七十四條第二項中「中断」を「更新」に改め、同条第三項中「停止の原因」を「完成猶予の事由」に改める。

第百九十一條中「第百六十七條第二項」を「第百六十六條第二項」に改める。

第百九十二條中「中断又は停止」を「完成猶予又は更新」に改める。

第百九十六條中「賃貸人は、」の下に「第百二十二條の二第一項に規定する」を加える。

第百九十九條中「(昭和五十四年法律第四号)」を削る。

第百六十三條を次のように改める。

第百六十三條 削除
第百六十四條の見出し中「指名債権」を「債権」に改め、同条中「指名債権を質権の目的としたとき」を「債権を目的とする質権の設定(現に発生し

ていない債権を目的とするものを含む。)」に改め、「第三債務者に」の下に「その」を加える。

第百六十五條を次のように改める。

第百六十五條 削除
第百七十條ただし書中「第四百二十四條の規定により債権者が債務者の行為を取り消す」を「債務者の行為について第四百二十四條第三項に規定する詐害行為取消請求をする」に改める。

第百九十八條の二第三項中「債権又は」を「債権、」に改め、「請求権」の下に「又は電子記録債権(電子記録債権法(平成十九年法律第百二二号)第二條第一項に規定する電子記録債権をいう。次条第二項において同じ。)」を加える。

第百九十八條の三第二項中「手形上又は」を「手形上若しくは」に改め、「請求権」の下に「又は電子記録債権」を加える。

第百九十八條の七第三項中「又は債務者」を削り、「ときは、その当事者は、第五百十八條」を「場合における更改前の債権者は、第五百十八條第一項」に改め、同項に後段として次のように加える。

元本の確定前に債務者の交替による更改があつた場合における債権者も、同様とする。

第百九十八條の七第三項を第四項とし、第二項の次に次の一項を加える。

3 元本の確定前に免責的債務引受があつた場合における債権者は、第四百七十二條の四第一項の規定にかかわらず、根抵当権を引受人が負担する債務に移すことができない。

第四百四條中「するまで」の下に「契約その他の債権の発生原因及び取引上の社会通念に照らして定まる」を加える。

第四百四條中「年五分とする」を「その利息が生じた最初の時点における法定利率による」に改め、同条に次の四項を加える。

2 法定利率は、年三パーセントとする。

3 前項の規定にかかわらず、法定利率は、法務省令で定めるところにより、三年を一期とし、一期ごとに、次項の規定により変動するものと

する。

4 各期における法定利率は、この項の規定により法定利率に変動があつた期のうち直近のもの(以下この項において「直近変動期」という。)における基準割合と当期における基準割合との差に相当する割合(その割合にパーセント未満の端数があるときは、これを切り捨てる。)を直近変動期における法定利率に加算し、又は減算した割合とする。

5 前項に規定する「基準割合」とは、法務省令で定めるところにより、各期の初日の属する年の六年前の年の一月から前々年の十二月までの各月における短期貸付けの平均利率(当該各月において銀行が新たに行つた貸付け(貸付期間が一年未満のものに限る。)に係る利率の平均をいう。)(の合計を六十で除して計算した割合(その割合に〇・一パーセント未満の端数があるときは、これを切り捨てる。))として法務大臣が告示するものをいう。

第四百十條第一項中「初めから不能であるもの又は後に至つて不能となつたものがある」を「不能のものがある場合において、その不能が選択権を有する者の過失によるものである」に改め、同条第二項を削る。

第四百十二條第二項中「債務者は、」の下に「その期限の到来した後に履行の請求を受けた時又は」を、「知つた時」の下に「のいずれか早い時」を加え、同条の次に次の一項を加える。

(履行不能)

第四百十二條の二 債務の履行が契約その他の債権の発生原因及び取引上の社会通念に照らして不能であるときは、債権者は、その債務の履行を請求することができない。

2 契約に基づく債務の履行がその契約の成立の時に不能であつたことは、第四百十五條の規定によりその履行の不能によつて生じた損害の賠償を請求することを妨げない。

第四百十三條を次のように改める。

(受領遅滞)

第四百十三條 債権者が債務の履行を受けることを拒み、又は受けることができない場合において、その債務の目的が特定物の引渡しであるときは、債務者は、履行の提供をした時からその引渡しをするまで、自己の財産に対するのと同様の注意をもって、その物を保存すれば足りる。

2 債権者が債務の履行を受けることを拒み、又は受けることができないことによつて、その履行の費用が増加したときは、その増加額は、債権者の負担とする。

第四百十三條の次に次の一条を加える。

（履行遅滞中又は受領遅滞中の履行不能と帰責事由）

第四百十三條の二 債務者がその債務について遅滞の責任を負つてゐる間に当事者双方の責めに帰することができない事由によつてその債務の履行が不能となつたときは、その履行の不能は、債務者の責めに帰すべき事由によるものとみなす。

2 債権者が債務の履行を受けることを拒み、又は受けることができない場合において、履行の提供があつた時以後に当事者双方の責めに帰することができない事由によつてその債務の履行が不能となつたときは、その履行の不能は、債権者の責めに帰すべき事由によるものとみなす。

第四百十四條第一項中「その強制履行を」民事執行法その他強制執行の手續に関する法令の規定に従ひ、直接強制、代替執行、間接強制その他の方法による履行の強制に改め、同条第二項及び第三項を削り、同条第四項中「前三項を」前項に改め、同項を同条第二項とする。

第四百十五條を次のように改める。

（債務不履行による損害賠償）

第四百十五條 債務者がその債務の本旨に従つた履行をしないとき又は債務の履行が不能であるときは、債権者は、これによつて生じた損害の賠償を請求することができる。ただし、その債

務の不履行が契約その他の債務の発生原因及び取引上の社会通念に照らして債務者の責めに帰することができない事由によるものであるときは、この限りでない。

2 前項の規定により損害賠償の請求をすることができる場合において、債権者は、次に掲げるときは、債務の履行に代わる損害賠償の請求をすることができる。

一 債務の履行が不能であるとき。

二 債務者がその債務の履行を拒絶する意思を明確に表示したとき。

三 債務が契約によつて生じたものである場合において、その契約が解除され、又は債務の不履行による契約の解除権が発生したとき。

第四百十六條第二項中「予見し、又は予見することができた」を「予見すべきであつた」に改める。

第四百十七條の次に次の一条を加える。

（中間利息の控除）

第四百十七條の二 将来において取得すべき利益についての損害賠償の額を定める場合において、その利益を取得すべき時までの利息相当額を控除するときは、その損害賠償の請求権が生じた時点における法定利率により、これを算する。

2 将来において負担すべき費用についての損害賠償の額を定める場合において、その費用を負担すべき時までの利息相当額を控除するときは、前項と同様とする。

第四百十八條中「不履行」の下に「又はこれによる損害の発生若しくは拡大」を加える。

第四百十九條第一項中「額は、」の下に「債務者が遅滞の責任を負つた最初の時点における」を加える。

第四百二十條第一項後段を削る。

第三編第一章第二節第一款中第四百二十二條の次に次の一条を加える。

（代償請求権）

第四百二十二條の二 債務者が、その債務の履行

が不能となつたのと同じ原因により債務の目的物の代償である権利又は利益を取得したときは、債権者は、その受けた損害の額の限度において、債務者に対し、その権利の移転又はその利益の償還を請求することができる。

第三編第一章第二節第二款の款名を次のように改める。

第二款 債権者代位権

第四百二十三條の見出しを「（債権者代位権の要件）」に改め、同条第一項中「保全するため」の下に「必要があるときは」を、「に属する権利」の下に「以下「被代位権利」という。」を加え、同項ただし書中「権利」の下に「及び差押えを禁じられた権利」を加え、同条第二項中「裁判上の代位によらなければ、前項の権利」を「被代位権利」に改め、同条に次の一項を加える。

3 債権者は、その債権が強制執行により実現することのできないものであるときは、被代位権利を行使することができない。

第四百二十三條の次に次の六條、款名及び目名を加える。

（代位行使の範囲）

第四百二十三條の二 債権者は、被代位権利を行使する場合において、被代位権利の目的が可分であるときは、自己の債権の額の限度においてのみ、被代位権利を行使することができる。

（債権者への支払又は引渡し）

第四百二十三條の三 債権者は、被代位権利を行使する場合において、被代位権利が金銭の支払又は動産の引渡しを目的とするものであるときは、相手方に対し、その支払又は引渡しを自己に対してすることを求めることができる。この場合において、相手方が債権者に対してその支払又は引渡しをしたときは、被代位権利は、これによつて消滅する。

（相手方の抗弁）

第四百二十三條の四 債権者が被代位権利を行使したときは、相手方は、債務者に対して主張することができる抗弁をもつて、債権者に対抗す

ることができる。

（債務者の取立てその他の処分の権限等）

第四百二十三條の五 債権者が被代位権利を行使した場合であっても、債務者は、被代位権利について、自ら取立てその他の処分をすることを妨げられない。この場合においては、相手方も、被代位権利について、債務者に対して履行をすることを妨げられない。

（被代位権利の行使に係る訴えを提起した場合の訴訟告知）

第四百二十三條の六 債権者は、被代位権利の行使に係る訴えを提起したときは、遅滞なく、債務者に対し、訴訟告知をしなければならない。（登記又は登録の請求権を保全するための債権者代位権）

第四百二十三條の七 登記又は登録をしなければ権利の得喪及び変更を第三者に対抗することができない財産を譲り受けた者は、その譲渡人が第三者に対して有する登記手続又は登録手続をすべきことを請求する権利を行使しないときは、その権利を行使することができない。この場合においては、前三條の規定を準用する。

第三款 詐害行為取消権

第一目 詐害行為取消権の要件

第四百二十四條の見出しを「（詐害行為取消請求）」に改め、同条第一項中「法律行為を」行為に改め、同項ただし書中「又は転得者がその行為又は転得」を「（以下この款において「受益者」という。）がその行為に、」を「害すべき事実」を「害すること」に改め、同条第二項中「法律行為を」行為に改め、同条に次の二項を加える。

3 債権者は、その債権が第一項に規定する行為の前の原因に基づいて生じたものである場合に限り、同項の規定による請求（以下「詐害行為取消請求」という。）をすることができる。

4 債権者は、その債権が強制執行により実現することのできないものであるときは、詐害行為取消請求をすることができる。

第四百二十四條の次に次の四條、一目及び目名

を加える。

(相当の対価を得てした財産の処分行為の特則)
第四百二十四条の二 債務者が、その有する財産を処分する行為をした場合において、受益者から相当の対価を取得しているときは、債権者は、次に掲げる要件のいずれにも該当する場合に限り、その行為について、詐害行為取消請求をすることができる。

一 その行為が、不動産の金銭への換価その他の当該処分による財産の種類の変更に限り、債権者において隠匿、無償の供与その他の債権者を害することとなる処分(以下この条において「隠匿等の処分」という。)をするおそれを現に生じさせるものであること。

二 債務者が、その行為の当時、対価として取得した金銭その他の財産について、隠匿等の処分をする意思を有していたこと。

三 受益者が、その行為の当時、債務者が隠匿等の処分をする意思を有していたことを知っていたこと。

(特定の債権者に対する担保の供与等の特則)

第四百二十四条の三 債務者がした既存の債務についての担保の供与又は債務の消滅に関する行為について、債権者は、次に掲げる要件のいずれにも該当する場合に限り、詐害行為取消請求をすることができる。

一 その行為が、債務者が支払不能(債務者が、支払能力を欠くために、その債務のうち弁済期にあるものにつき、一般的かつ継続的に弁済することができない状態をいう。次項第一号において同じ。)の時に行われたものであること。

二 その行為が、債務者と受益者とは通謀して他の債権者を害する意图をもつて行われたものであること。

2 前項に規定する行為が、債務者の義務に属せず、又はその時期が債務者の義務に属しないものである場合において、次に掲げる要件のいずれにも該当するときは、債権者は、同項の規定

にかかわらず、その行為について、詐害行為取消請求をすることができる。

一 その行為が、債務者が支払不能になる前三十日以内に行われたものであること。

二 その行為が、債務者と受益者とは通謀して他の債権者を害する意图をもつて行われたものであること。

(過大な代物弁済等の特則)

第四百二十四条の四 債務者がした債務の消滅に関する行為であつて、受益者の受けた給付の価額がその行為によつて消滅した債務の額より過大であるものについて、第四百二十四条に規定する要件に該当するときは、債権者は、前条第一項の規定にかかわらず、その消滅した債務の額に相当する部分以外の部分については、詐害行為取消請求をすることができる。

(転得者に対する詐害行為取消請求)

第四百二十四条の五 債権者は、受益者に対して詐害行為取消請求をすることができる場合において、受益者に移転した財産を転得した者があるときは、次の各号に掲げる区分に応じ、それぞれ当該各号に定める場合に限り、その転得者に対して、詐害行為取消請求をすることができる。

一 その転得者が受益者から転得した者である場合、その転得者が、転得の当時、債務者がした行為が債権者を害することを知っていたとき。

二 その転得者が他の転得者から転得した者である場合、その転得者及びその前に転得した全ての転得者が、それぞれの転得の当時、債務者がした行為が債権者を害することを知っていたとき。

第二目 詐害行為取消権の行使の方法等

(財産の返還又は価額の償還の請求)

第四百二十四条の六 債権者は、受益者に対する詐害行為取消請求において、債務者がした行為の取消しとともに、その行為によつて受益者に

移転した財産の返還を請求することができる。受益者がその財産の返還をすることが困難であるときは、債権者は、その価額の償還を請求することができる。

2 債権者は、転得者に対する詐害行為取消請求において、債務者がした行為の取消しとともに、転得者が転得した財産の返還を請求することができる。転得者がその財産の返還をすることが困難であるときは、債権者は、その価額の償還を請求することができる。

(被告及び訴訟告知)

第四百二十四条の七 詐害行為取消請求に係る訴えについては、次の各号に掲げる区分に応じ、それぞれ当該各号に定める者を被告とする。

一 受益者に対する詐害行為取消請求に係る訴え 受益者

二 転得者に対する詐害行為取消請求に係る訴え 転得者

2 債権者は、詐害行為取消請求に係る訴えを提起したときは、遅滞なく、債務者に対し、訴訟告知をしなければならない。

(詐害行為の取消しの範囲)

第四百二十四条の八 債権者は、詐害行為取消請求をする場合において、債務者がした行為の目的が可分であるときは、自己の債権の額の限度においてのみ、その行為の取消しを請求することができる。

2 債権者が第四百二十四条の六第一項後段又は第二項後段の規定により価額の償還を請求する場合についても、前項と同様とする。

(債権者への支払又は引渡し)

第四百二十四条の九 債権者は、第四百二十四条の六第一項前段又は第二項前段の規定により受益者又は転得者に対して財産の返還を請求する場合において、その返還の請求が金銭の支払又は財産の引渡しを求めるものであるときは、受益者に対してその支払又は引渡しを、転得者に対してその引渡しを、自己に対してすることを

求めることができる。この場合において、受益者又は転得者は、債権者に対してその支払又は引渡しをしたときは、債務者に対してその支払又は引渡しをすることを要しない。

2 債権者が第四百二十四条の六第一項後段又は第二項後段の規定により受益者又は転得者に対して価額の償還を請求する場合についても、前項と同様とする。

第三目 詐害行為取消権の行使の効果

第四百二十五条を次のように改める。

(認容判決の効力が及ぶ者の範囲)

第四百二十五条 詐害行為取消請求を認容する確定判決は、債務者及びその全ての債権者に対してもその効力を有する。

第四百二十五条の次に次の三条及び目名を加える。

(債務者の受けた反対給付に関する受益者の権利)

第四百二十五条の二 債務者がした財産の処分に関する行為(債務の消滅に関する行為を除く。)が取り消されたときは、受益者は、債務者に対し、その財産を取得するためにした反対給付の返還を請求することができる。債務者がその反対給付の返還をすることが困難であるときは、受益者は、その価額の償還を請求することができる。

(受益者の債権の回復)

第四百二十五条の三 債務者がした債務の消滅に関する行為が取り消された場合(第四百二十四条の四の規定により取り消された場合を除く。)において、受益者が債務者から受けた給付を返還し、又はその価額を償還したときは、受益者の債務者に対する債権は、これによつて原状に復する。

(詐害行為取消請求を受けた転得者の権利)

第四百二十五条の四 債務者がした行為が転得者に対する詐害行為取消請求によつて取り消されたときは、その転得者は、次の各号に掲げる区

分に応じ、それぞれ当該各号に定める権利を行使することができる。ただし、その転得者がその前者から財産を取得するためにした反対給付又はその前者から財産を取得することによって消滅した債権の価額を限度とする。

一 第四百二十五条の二に規定する行為が取り消された場合 その行為が受益者に対する詐害行為取消請求によって取り消されたこととすれば同条の規定により生ずべき受益者の債務者に対する反対給付の返還請求権又はその価額の償還請求権

二 前条に規定する行為が取り消された場合（第四百二十四条の四の規定により取り消された場合を除く。）その行為が受益者に対する詐害行為取消請求によって取り消されたこととすれば前条の規定により回復すべき受益者の債務者に対する債権

第四目 詐害行為取消権の期間の制限

第四百二十六条を次のように改める。
第四百二十六条 詐害行為取消請求に係る訴えは、債務者が債権者を害することを知って行為をしたことを債権者が知った時から二年を経過したときは、提起することができない。行為の時から十年を経過したときも、同様とする。
第四百二十八条を次のように改める。
（不可分債権）

第四百二十八条 次款（連帯債権）の規定（第四百三十三条及び第四百三十五条の規定を除く。）は、債権の目的がその性質上不可分である場合において、数人の債権者があるときについて準用する。
第四百二十九条の見出しを「（不可分債権者の一人との間の更改又は免除）」に改め、同条第一項中「分与される」を「分与されるべき」に改め、同条第二項を削る。

第四百三十条を次のように改める。
（不可分債務）
第四百三十条 第四款（連帯債務）の規定（第四百

四十条の規定を除く。）は、債務の目的がその性質上不可分である場合において、数人の債務者があるときについて準用する。
第四百四十六条第三項中「（電子的方式、磁気的方式その他の人の知覚によつては認識することができない方式で作られる記録であつて、電子計算機による情報処理の用に供されるものをいう。）」を削る。

第四百四十八条の見出しを「（保証人の負担と主たる債務の目的又は態様）」に改め、同条に次の一項を加える。
2 主たる債務の目的又は態様が保証契約の締結後に加重されたときであっても、保証人の負担は加重されない。
第四百五十七条第一項中「中断」を「完成猶予及び更新」に改め、同条第二項中「の債権による相殺」を「が主張することができる抗弁」に改め、同条に次の一項を加える。

3 主たる債務者が債権者に対して相殺権、取消権又は解除権を有するときは、これらの権利の行使によつて主たる債務者がその債務を免れるべき限度において、保証人は、債権者に対して債務の履行を拒むことができる。
第四百五十八条を次のように改める。
（連帯保証人について生じた事由の効力）
第四百五十八条 第四百三十八条、第四百三十九条第一項、第四百四十条及び第四百四十一条の規定は、主たる債務者と連帯して債務を負担する保証人について生じた事由について準用する。

第四百五十八条の次に次の二条を加える。
（主たる債務の履行状況に関する情報の提供義務）
第四百五十八條の二 保証人が主たる債務者の委託を受けて保証をした場合において、保証人の請求があつたときは、債権者は、保証人に対し、遅滞なく、主たる債務の元本及び主たる債務に関する利息、違約金、損害賠償その他の債務に從たる全てのものについての不履行の有

無並びにこれらの残額及びそのうち弁済期が到来しているものの額に関する情報を提供しなければならない。
（主たる債務者が期限の利益を喪失した場合における情報の提供義務）
第四百五十八條の三 主たる債務者が期限の利益を有する場合において、その利益を喪失したときは、債権者は、保証人に対し、その利益の喪失を知つた時から二箇月以内に、その旨を通知しなければならない。

2 前項の期間内に同項の通知をしなかつたときは、債権者は、保証人に対し、主たる債務者が期限の利益を喪失した時から同項の通知を現にするまでに生じた遅延損害金（期限の利益を喪失しなかつたとしても生ずべきものを除く。）に係る保証債務の履行を請求することができる。

3 前二項の規定は、保証人が法人である場合には、適用しない。
第四百五十九條第一項中「過失なく債権者に弁済をすべき旨の裁判の言渡しを受け、又は」及び「を」とを削り、「消滅させるべき行為を」「消滅させる行為以下」「債務の消滅行為」という。）に、「対して」を「対し、そのために支出した財産の額（その財産の額がその債務の消滅行為によつて消滅した主たる債務の額を超える場合にあつては、その消滅した額）」に改め、同条の次に次の一条を加える。
（委託を受けた保証人が弁済期前に弁済等をした場合の求償権）
第四百五十九條の二 保証人が主たる債務者の委託を受けて保証をした場合において、主たる債務の弁済期前に債務の消滅行為をしたときは、その保証人は、主たる債務者に対し、主たる債務者がその当時利益を受けた限度において求償権を有する。この場合において、主たる債務者が債務の消滅行為の日以前に相殺の原因を有していたことを主張するときは、保証人は、債権者に対し、その相殺によつて消滅すべきであつ

た債務の履行を請求することができる。
2 前項の規定による求償は、主たる債務の弁済期以後の法定利息及びその弁済期以後に債務の消滅行為をしたとしても避けることができなかった費用その他の損害の賠償を包含する。

3 第一項の求償権は、主たる債務の弁済期以後でなければ、これを行使することができない。
第四百六十条第三号を次のように改める。
三 保証人が過失なく債権者に弁済をすべき旨の裁判の言渡しを受けたとき。
第四百六十一条第一項中「前二条」を「前条」に改める。

第四百六十二条第一項を次のように改める。
第四百五十九條の二第二項の規定は、主たる債務者の委託を受けた人で保証をした者が債務の消滅行為をした場合について準用する。
第四百六十二条に次の一項を加える。

3 第四百五十九條の二第三項の規定は、前二項に規定する保証人が主たる債務の弁済期前に債務の消滅行為をした場合における求償権の行使について準用する。
第四百六十三条を次のように改める。
（通知を怠つた保証人の求償の制限等）
第四百六十三条 保証人が主たる債務者の委託を受けて保証をした場合において、主たる債務者にあらかじめ通知しないで債務の消滅行為をしたときは、主たる債務者は、債権者に対抗することができた事由をもつてその保証人に対抗することができない。この場合において、相殺をもつてその保証人に対抗したときは、その保証人は、債権者に対し、相殺によつて消滅すべきであつた債務の履行を請求することができる。

2 保証人が主たる債務者の委託を受けて保証をした場合において、主たる債務者が債務の消滅行為をしたことを保証人に通知することを怠つたため、その保証人が善意で債務の消滅行為をしたときは、その保証人は、その債務の消滅行為を有効であつたものとみなすことができる。
3 保証人が債務の消滅行為をした後に主たる債

た債務の履行を請求することができる。
2 前項の規定による求償は、主たる債務の弁済期以後の法定利息及びその弁済期以後に債務の消滅行為をしたとしても避けることができなかった費用その他の損害の賠償を包含する。

3 第一項の求償権は、主たる債務の弁済期以後でなければ、これを行使することができない。
第四百六十条第三号を次のように改める。
三 保証人が過失なく債権者に弁済をすべき旨の裁判の言渡しを受けたとき。
第四百六十一条第一項中「前二条」を「前条」に改める。
第四百六十二条第一項を次のように改める。
第四百五十九條の二第二項の規定は、主たる債務者の委託を受けた人で保証をした者が債務の消滅行為をした場合について準用する。
第四百六十二条に次の一項を加える。

務者が債務の消滅行為をした場合においては、保証人が主たる債務者の意思に反して保証をしたときのほか、保証人が債務の消滅行為をしたことを主たる債務者に通知することを怠つたため、主たる債務者が善意で債務の消滅行為をしたときも、主たる債務者は、その債務の消滅行為を有効であつたものとみなすことができる。

第三編第一章第三節第四款第二目の目名を次のように改める。

第二目 個人根保証契約

第四百六十五条の二の見出しを「個人根保証契約の保証人の責任等」に改め、同条第一項中「その債務の範囲に金銭の貸渡し又は手形の割引を受けることによって負担する債務（以下「貸金等債務」という。）が含まれるもの（保証人が法人であるものを除く。以下「貸金等根保証契約」を「保証人が法人でないもの（以下「個人根保証契約」に、「すべて」を「全て」に改め、同条第二項及び第三項中「貸金等根保証契約」を「個人根保証契約」に改める。

第四百六十五条の三の見出しを「個人貸金等根保証契約の元本確定期日」に改め、同条第一項中「貸金等根保証契約」を「個人根保証契約」であつてその主たる債務の範囲に金銭の貸渡し又は手形の割引を受けることによって負担する債務（以下「貸金等債務」という。）が含まれるもの（以下「個人貸金等根保証契約」という。）に、「貸金等根保証契約」を「個人貸金等根保証契約」に改め、同条第二項から第四項までの規定中「貸金等根保証契約」を「個人貸金等根保証契約」に改める。

第四百六十五条の四の見出しを「個人根保証契約の元本の確定事由」に改め、同条中「貸金等根保証契約」を「個人根保証契約」に改め、同条に次のただし書を加える。

ただし、第一号に掲げる場合にあつては、強制執行又は担保権の実行の開始があつたときに限る。

第四百六十五条の四第一号中「主たる債務者又は」を削り、ただし書を削り、同条第二号中「主た

る債務者又は」を削り、同条に次の一項を加える。

2 前項に規定する場合のほか、個人貸金等根保証契約における主たる債務の元本は、次に掲げる場合にも確定する。ただし、第一号に掲げる場合にあつては、強制執行又は担保権の実行の手続の開始があつたときに限る。

一 債権者が、主たる債務者の財産について、金銭の支払を目的とする債権についての強制執行又は担保権の実行を申し立てたとき。

二 主たる債務者が破産手続開始の決定を受けたとき。

第四百六十五条の五を次のように改める。
（保証人が法人である根保証契約の求償権）
第四百六十五条の五 保証人が法人である根保証契約において、第四百六十五条の二第一項に規定する極度額の定めがないときは、その根保証契約の保証人の主たる債務者に対する求償権に係る債務を主たる債務とする保証契約は、その効力を生じない。

2 保証人が法人である根保証契約であつてその主たる債務の範囲に貸金等債務が含まれるものにおいて、元本確定期日の定めがないとき、又は元本確定期日の定め若しくはその変更が第四百六十五条の三第一項若しくは第三項の規定を適用するとすればその効力を生じないものであるときは、その根保証契約の保証人の主たる債務者に対する求償権に係る債務を主たる債務とする保証契約は、その効力を生じない。主たる債務の範囲にその求償権に係る債務が含まれる根保証契約も、同様とする。

3 前二項の規定は、求償権に係る債務を主たる債務とする保証契約又は主たる債務の範囲に求償権に係る債務が含まれる根保証契約の保証人が法人である場合には、適用しない。

第三編第一章第三節第四款に次の一目を加える。

第三目 事業に係る債務についての保証契約の特則

（公正証書の作成と保証の効力）
第四百六十五条の六 事業のために負担した貸金等債務を主たる債務とする保証契約又は主たる債務の範囲に事業のために負担する貸金等債務が含まれる根保証契約は、その契約の締結に先立ち、その締結の日前一箇月以内に作成された公正証書で保証人にならうとする者が保証債務を履行する意思表示をしていなければ、その効力を生じない。

2 前項の公正証書を作成するには、次に掲げる方式に従わなければならない。

一 保証人にならうとする者が、次のイ又はロに掲げる契約の区分に応じ、それぞれ当該イ又はロに定める事項を公証人に口授すること。

イ 保証契約（ロに掲げるものを除く。）主たる債務の債権者及び債務者、主たる債務の元本、主たる債務に関する利息、違約金、損害賠償その他その債務に從たる全てのものの定め有無及びその内容並びに主たる債務者がその債務を履行しないときに、その債務の全額について履行する意思（保証人にならうとする者が主たる債務者と連帯して債務を負担しようとするもの）と連帯して債務を負担しようとするものである場合には、債権者が主たる債務者に対して催告をしたかどうか、又は他に保証人があるかどうかにかかわらず、その全額について履行する意思を有していること。

ロ 根保証契約 主たる債務の債権者及び債務者、主たる債務の範囲、根保証契約における極度額、元本確定期日の定め有無及びその内容並びに主たる債務者がその債務を履行しないときには、極度額の限度において元本確定期日又は第四百六十五条の四第一項各号若しくは第二項各号に掲げる事由その他の元本を確定すべき事由が生ずる時までに生ずべき主たる債務の元本及び主

たる債務に関する利息、違約金、損害賠償その他その債務に從たる全ての全額について履行する意思（保証人にならうとする者が主たる債務者と連帯して債務を負担しようとするものである場合には、債権者が主たる債務者に対して催告をしたかどうか、又は他に保証人があるかどうかにかかわらず、その全額について履行する意思）を有していること。

口 根保証契約 主たる債務の債権者及び債務者、主たる債務の範囲、根保証契約における極度額、元本確定期日の定め有無及びその内容並びに主たる債務者がその債務を履行しないときには、極度額の限度において元本確定期日又は第四百六十五条の四第一項各号若しくは第二項各号に掲げる事由その他の元本を確定すべき事由が生ずる時までに生ずべき主たる債務の元本及び主

たる債務に関する利息、違約金、損害賠償その他その債務に從たる全てのものの全額について履行する意思（保証人にならうとする者が主たる債務者と連帯して債務を負担しようとするものである場合には、債権者が主たる債務者に対して催告をしたかどうか、又は他に保証人があるかどうかにかかわらず、その全額について履行する意思）を有していること。

二 公証人が、保証人にならうとする者の口述を筆記し、これを保証人にならうとする者に読み聞かせ、又は閲覧させること。

三 保証人にならうとする者が、筆記の正確なことを承認した後、署名し、印を押すこと。ただし、保証人にならうとする者が署名することができない場合は、公証人がその事由を付記して、署名に代えることができる。

四 公証人が、その証書は前三号に掲げる方式に從つて作つたものである旨を付記して、これに署名し、印を押すこと。

3 前二項の規定は、保証人にならうとする者が法人である場合には、適用しない。
（保証に係る公正証書の方式の特則）
第四百六十五条の七 前条第一項の保証契約又は根保証契約の保証人にならうとする者が口がきけない者である場合には、公証人の前で、同条第二項第一号イ又はロに掲げる契約の区分に応じ、それぞれ当該イ又はロに定める事項を通訳人の通訳により申述し、又は自書して、同号の口授に代えなければならない。この場合における同項第二号の規定の適用については、同号中「口述」とあるのは、「通訳人の通訳による申述又は自書」とする。

2 前条第一項の保証契約又は根保証契約の保証人にならうとする者が耳が聞こえない者である場合には、公証人は、同条第二項第二号に規定する筆記した内容を通訳人の通訳により保証人にならうとする者に伝えて、同号の読み聞かせ

に代えることができる。

3 公証人は、前二項に定める方式に従つて公正証書を作つたときは、その旨をその証書に付記しなければならない。

(公正証書の作成と求償権についての保証の効力)

第四百六十五条の八 第四百六十五条の六第一項及び第二項並びに前条の規定は、事業のために負担した貸金等債務を主たる債務とする保証契約又は主たる債務の範囲に事業のために負担する貸金等債務が含まれる根保証契約の保証人の主たる債務者に対する求償権に係る債務を主たる債務とする保証契約について準用する。主たる債務の範囲にその求償権に係る債務が含まれる根保証契約も、同様とする。

2 前項の規定は、保証人にならうとする者が法人である場合には、適用しない。

(公正証書の作成と保証の効力に関する規定の適用除外)

第四百六十五条の九 前三条の規定は、保証人にならうとする者が次に掲げる者である保証契約については、適用しない。

一 主たる債務者が法人である場合のその理事、取締役、執行役又はこれらに準ずる者

二 主たる債務者が法人である場合の次に掲げる者

イ 主たる債務者の総株主の議決権(株主総会において決議をすることができ、事項の全部につき議決権を行使することができない株式についての議決権を除く。以下この号において同じ。)の過半数を有する者

ロ 主たる債務者の総株主の議決権の過半数を他の株式会社がある場合における当該他の株式会社の総株主の議決権の過半数を有する者

ハ 主たる債務者の総株主の議決権の過半数を他の株式会社及び当該他の株式会社の総株主の議決権の過半数を有する者が有する場合における当該他の株式会社の総株主の

議決権の過半数を有する者

二 株式会社以外の法人が主たる債務者である場合におけるイ、ロ又はハに掲げる者に準ずる者

三 主たる債務者(法人であるものを除く。以下この号において同じ。)と共同して事業を行う者又は主たる債務者が行う事業に現に従事している主たる債務者の配偶者

(契約締結時の情報の提供義務)

第四百六十五条の十 主たる債務者は、事業のために負担する債務を主たる債務とする保証又は主たる債務の範囲に事業のために負担する債務が含まれる根保証の委託をするときは、委託を受ける者に對し、次に掲げる事項に関する情報を提供しなければならない。

一 財産及び収支の状況

二 主たる債務以外に負担している債務の有無並びにその額及び履行状況

三 主たる債務の担保として他に提供し、又は提供しようとするものがあるときは、その旨及びその内容

2 主たる債務者が前項各号に掲げる事項に関して情報を提供せず、又は事実と異なる情報を提供したために委託を受けた者がその事項について誤認をし、それによつて保証契約の申込み又はその承諾の意思表示をした場合において、主たる債務者がその事項に関して情報を提供せず又は事実と異なる情報を提供したことを債権者が知り又は知ることができたときは、保証人は、保証契約を取り消すことができる。

3 前二項の規定は、保証をする者が法人である場合には、適用しない。

第三編第一章第三節第四款を同節第五款とする。

第四百四十一条を削る。

第四百四十条中「第四百三十四条から前条まで」を「第四百三十八条、第四百三十九条第一項及び前条」に改め、同条に次のただし書を加える。
ただし、債権者及び他の連帯債務者の一人が

別段の意思を表示したときは、当該他の連帯債務者に対する効力は、その意思に従う。

第四百四十条を第四百四十一条とし、第四百三十九条を削り、第四百三十八条を第四百四十条とし、第四百三十七条を削る。

第四百三十六条第一項中「すべて」を「全て」に改め、同条第二項中「についてのみ他の連帯債務者が相殺を援用する」を「の限度において、他の連帯債務者は、債権者に対して債務の履行を拒む」に改め、同条を第四百三十九条とする。

第四百三十五条中「すべて」を「全て」に改め、同条を第四百三十八条とし、第四百三十四条を削り、第四百三十三条を第四百三十七条とする。

第四百三十二条の見出しを「連帯債務者に対する履行の請求」に改め、同条中「数人が連帯債務」を「債務の目的がその性質上可分である場合において、法令の規定又は当事者の意思表示によつて数人が連帯して債務」に、「すべて」を「全て」に改め、同条を第四百三十六条とする。

第四百四十二条第一項中「連帯債務者はの下に」その免責を得た額が自己の負担部分を超えるかどうかにかかわらず」を加え、「各自の負担部分について」を「その免責を得るために支出した財産の額」その財産の額が共同の免責を得た額を超える場合にあつては、その免責を得た額」のうち各自の負担部分に応じた額の」に改める。

第四百四十三条第一項中「連帯債務者の一人が債権者から履行の請求を受けたを」他の連帯債務者があることを知りながら、連帯債務者の一人が共同の免責を得るに、「過失のある」を「その」に改め、同条第二項中「連帯債務者の一人がを削り、「共同の免責を得た」の下に「連帯債務者が、他の連帯債務者があることを知りながらその免責を得た」を加え、「弁済をし、その他有償の行為をもつて免責を得た」を「弁済その他自己の財産をもつて免責を得るための行為をした」に、「その免責を得た」を「当該他の」に、「自己の弁済その他免責のためにした」を「その免責を得るための」に改める。

第四百四十四条ただし書を削り、同条に次の二項を加える。

2 前項に規定する場合において、求償者及び他の資力のある者がいずれも負担部分を有しない者であるときは、その償還をすることができない部分は、求償者及び他の資力のある者の間で、等しい割合で分割して負担する。

3 前二項の規定にかかわらず、償還を受けることができないことについて求償者に過失があるときは、他の連帯債務者に対して分担を請求することができない。

第四百四十五条を次のように改める。

(連帯債務者の一人との間の免除等と求償権)

第四百四十五条 連帯債務者の一人に対して債務の免除がされ、又は連帯債務者の一人のために時効が完成した場合においても、他の連帯債務者は、その一人の連帯債務者に対し、第四百四十二条第一項の求償権を行使することができる。

第三編第一章第三節第三款を第四款とし、第二款の次に次の一款を加える。

第三款 連帯債権

(連帯債権者による履行の請求等)

第四百三十二条 債権の目的がその性質上可分である場合において、法令の規定又は当事者の意思表示によつて数人が連帯して債権を有するときは、各債権者は、全ての債権者のために全部又は一部の履行を請求することができる。債務者は、全ての債権者のために各債権者に対して履行をすることができる。

(連帯債権者の一人との間の更改又は免除)

第四百三十三条 連帯債権者の一人と債務者との間に更改又は免除があつたときは、その連帯債権者がその権利を失わなければ分与されるべき利益に係る部分については、他の連帯債権者は、履行を請求することができない。

(連帯債権者の一人との間の相殺)

第四百三十四条 債務者が連帯債権者の一人に対して債権を有する場合において、その債務者が

相殺を援用したときは、その相殺は、他の連帯債権者に対しても、その効力を生ずる。

(連帯債権者の一人との間の混同)

第四百三十五条 連帯債権者の一人と債務者との間に混同があったときは、債務者は、弁済をしたものとみなす。

(相対的効力の原則)

第四百三十五条の二 第四百三十二条から前条までに規定する場合を除き、連帯債権者の一人の行為又は一人について生じた事由は、他の連帯債権者に対してその効力を生じない。ただし、他の連帯債権者の一人及び債務者が別段の意思を表示したときは、当該他の連帯債権者に対する効力は、その意思に従う。

第四百六十六条第二項を次のように改める。

2 当事者が債権の譲渡を禁止し、又は制限する旨の意思表示(以下「譲渡制限の意思表示」という。)をしたときであつても、債権の譲渡は、その効力を妨げられない。

第四百六十六条に次の二項を加える。

3 前項に規定する場合には、譲渡制限の意思表示がされたことを知り、又は重大な過失によつて知らなかつた譲受人その他の第三者に対しては、債務者は、その債務の履行を拒むことができ、かつ、譲渡人に対する弁済その他の債務を消滅させる事由をもつてその第三者に対抗することができ。

4 前項の規定は、債務者が債務を履行しない場合において、同項に規定する第三者が相当の期間を定めて譲渡人への履行の催告をし、その期間内に履行がないときは、その債務者については、適用しない。

第四百六十六条の次に次の見出し及び五条を加える。

(譲渡制限の意思表示がされた債権に係る債務者の供託)

第四百六十六条の二 債務者は、譲渡制限の意思表示がされた金銭の給付を目的とする債権が譲渡されたときは、その債権の全額に相当する金

銭を債務の履行地(債務の履行地が債権者の現在の住所により定まる場合にあつては、譲渡人の現在の住所を含む。次条において同じ。)の供託所に供託することができる。

2 前項の規定により供託をした債務者は、遅滞なく、譲渡人及び譲受人に供託の通知をしななければならない。

3 第一項の規定により供託をした金銭は、譲受人に限り、還付を請求することができる。

第四百六十六条の三 前条第一項に規定する場合において、譲渡人について破産手続開始の決定があつたときは、譲受人(同項の債権の全額を譲り受けた者であつて、その債権の譲渡を債務者その他の第三者に対抗することができないものに限る。)は、譲渡制限の意思表示がされたことを知り、又は重大な過失によつて知らなかつたときであつても、債務者にその債権の全額に相当する金銭を債務の履行地の供託所に供託させることができる。この場合においては、同条第二項及び第三項の規定を準用する。

(譲渡制限の意思表示がされた債権の差押え)

第四百六十六条の四 第四百六十六条第三項の規定は、譲渡制限の意思表示がされた債権に対する強制執行をした差押債権者に対しては、適用しない。

2 前項の規定にかかわらず、譲受人その他の第三者が譲渡制限の意思表示がされたことを知り、又は重大な過失によつて知らなかつた場合において、その債権者が同項の債権に対する強制執行をしたときは、債務者は、その債務の履行を拒むことができ、かつ、譲渡人に対する弁済その他の債務を消滅させる事由をもつて差押債権者に対抗することができる。

(預金債権又は貯金債権に係る譲渡制限の意思表示の効力)

第四百六十六条の五 預金口座又は貯金口座に係る預金又は貯金に係る債権(以下「預貯金債権」という。)について当事者がした譲渡制限の意思表示は、第四百六十六条第二項の規定にかかわ

らず、その譲渡制限の意思表示がされたことを知り、又は重大な過失によつて知らなかつた譲受人その他の第三者に対抗することができる。

2 前項の規定は、譲渡制限の意思表示がされた預貯金債権に対する強制執行をした差押債権者に対しては、適用しない。

(将来債権の譲渡性)

第四百六十六条の六 債権の譲渡は、その意思表示の時に債権が現に発生していることを要しない。

2 債権が譲渡された場合において、その意思表示の時に債権が現に発生していないときは、譲受人は、発生した債権を当然に取得する。

3 前項に規定する場合において、譲渡人が次条の規定による承諾をした時(以下「対抗要件具備時」という。)までに譲渡制限の意思表示がされたときは、譲受人その他の第三者がそのことを知つていたものとみなして、第四百六十六条第三項(譲渡制限の意思表示がされた債権が預貯金債権の場合にあつては、前条第一項)の規定を適用する。

第四百六十七条の見出し中「指名債権」を「債権」に改め、同条第一項中「指名債権の譲渡」を「債権の譲渡(現に発生していない債権の譲渡を含む。)」に改める。

第四百六十八条及び第四百六十九条を次のように改める。

(債権の譲渡における債務者の抗弁)

第四百六十八条 債務者は、対抗要件具備時まで譲渡人に対して生じた事由をもつて譲受人に對抗することができる。

ら供託の請求を受けた時とする。

(債権の譲渡における相殺権)

第四百六十九条 債務者は、対抗要件具備時より前に取得した譲渡人に対する債権による相殺をもつて譲受人に対抗することができる。

2 債務者が対抗要件具備時より後に取得した譲渡人に対する債権であつても、その債権が次に掲げるものであるときは、前項と同様とする。

ただし、債務者が対抗要件具備時より後に他人の債権を取得したときは、この限りでない。

一 対抗要件具備時より前の原因に基づいて生じた債権

二 前号に掲げるもののほか、譲受人の取得した債権の発生原因である契約に基づいて生じた債権

3 第四百六十六条第四項の場合における前二項の規定の適用については、これらの規定中「対抗要件具備時」とあるのは、「第四百六十六条第四項の相当の期間を経過した時」とし、第四百六十六条の三の場合におけるこれらの規定の適用については、これらの規定中「対抗要件具備時」とあるのは、「第四百六十六条の三の規定により同条の譲受人から供託の請求を受けた時」とする。

第四百七十条から第四百七十三条までを削る。

第四百七十四条第一項ただし書を削り、同条第二項中「利害関係を有する者でない」に改め、同項に次のただし書を加える。

ただし、債務者の意思に反することを債権者が知らなかつたときは、この限りでない。

第四百七十四条に次の二項を加える。

3 前項に規定する第三者は、債権者の意思に反して弁済をすることができない。ただし、その第三者が債務者の委託を受けて弁済をする場合において、そのことを債権者が知つていたときは、この限りでない。

4 前三項の規定は、その債務の性質が第三者の弁済を許さないとき、又は当事者が第三者の弁

済を禁止し、若しくは制限する旨の意思表示をしたときは、適用しない。

第三編第一章第五節第一款第一目中第四百七十四条の前に次の一条を加える。

(弁済)

第四百七十三条 債務者が債権者に対して債務の弁済をしたときは、その債権は、消滅する。

第四百七十五条の前の見出しを削り、同条に見出しとして「(弁済として引き渡した物の取戻し)」を付する。

第四百七十六条を削る。

第四百七十七条中「前二条」を「前条」に改め、同条を第四百七十六条とし、同条の次に次の一条を加える。

(預金又は貯金の口座に対する払込みによる弁済)

第四百七十七條 債権者の預金又は貯金の口座に対する払込みによつてする弁済は、債権者がその預金又は貯金に係る債権の債務者に対してその払込みに係る金額の払戻しを請求する権利を取得した時に、その効力を生ずる。

第四百七十八條の見出しを「受領権者としての外観を有する者に対する弁済」に改め、同条中「債権の準占有者」を「受領権者(債権者及び法令の規定又は当事者の意思表示によつて弁済を受領する権限を付与された第三者をいう。以下同じ。)」以外の者であつて取引上の社会通念に照らして受領権者としての外観を有するもの」に改める。

第四百七十九條の見出しを「受領権者以外の者に対する弁済」に改め、同条中「弁済を受領する権限を有しない者」を「受領権者以外の者」に改める。

第四百八十條を次のように改める。

第四百八十條 削除

第四百八十一條の見出しを「差押えを受けた債権の第三債務者の弁済」に改め、同条第一項中「支払の差止めを受けた」を「差押えを受けた債権の」に改める。

第四百八十二條中「債務者が、債権者の承諾を

得て、その「を」を「弁済をすることが出来る者(以下「弁済者」という。))が、債権者との間で、債務者の「に」改め、「給付を」の下に「することにより債務を消滅させる旨の契約をした場合において、その弁済者が当該他の給付を」を加える。

第四百八十三條中「である」の下に「場合において、契約その他の債権の発生原因及び取引上の社会通念に照らしてその引渡しをすべき時の品質を定めることができない」を加える。

第四百八十四條の見出しを「(弁済の場所及び時間)」に改め、同条に次の一項を加える。

2 法令又は慣習により取引時間の定めがあるときは、その取引時間内に限り、弁済をし、又は弁済の請求をすることが出来る。

第四百八十六條中「した者は」を「する者は、弁済と引換えに」に、「受領した」を「受領する」に改める。

第四百八十八條の見出しを「(同種の給付を目的とする数個の債務がある場合の充当)」に改め、同条第一項中「すべて」を「全て」に改め、「とき」の下に「(次条第一項に規定する場合を除く。)」を加え、同条に次の一項を加える。

4 弁済をする者及び弁済を受領する者がいづれも第一項又は第二項の規定による指定をしないときは、次の各号の定めるところに従い、その弁済を充当する。

一 債務の中に弁済期にあるものと弁済期にないものとがあるときは、弁済期にあるものに先に充当する。

二 全ての債務が弁済期にあるとき、又は弁済期にないときは、債務者のために弁済の利益が多いものに先に充当する。

三 債務者のために弁済の利益が相等しいときは、弁済期が先に到来したもの又は先に到来すべきものに先に充当する。

四 前二号に掲げる事項が相等しい債務の弁済は、各債務の額に応じて充当する。

第四百八十九條を次のように改める。

(元本、利息及び費用を支払うべき場合の充当)

第四百八十九條 債務者が一個又は数個の債務について元本のほか利息及び費用を支払うべき場合(債務者が数個の債務を負担する場合にあつては、同一の債権者に対して同種の給付を目的とする数個の債務を負担するときに限る。))において、弁済をする者がその債務の全部を消滅させるのに足りない給付をしたときは、これを順次に費用、利息及び元本に充当しなければならぬ。

2 前条の規定は、前項の場合において、費用、利息又は元本のいずれかの全てを消滅させるのに足りない給付をしたときについて準用する。

第四百九十一條を削る。

第四百九十二條中「前二条」を「前三条」に改め、同条を第四百九十一條とし、第四百八十九條の次に次の一条を加える。

(合意による弁済の充当)

第四百九十條 前二条の規定にかかわらず、弁済をする者と弁済を受領する者との間に弁済の充当の順序に関する合意があるときは、その順序に従い、その弁済を充当する。

第四百九十二條中「の不履行」を「を履行しないこと」に改め、「一切の」を削る。

第四百九十四條を次のように改める。

(供託)

第四百九十四條 弁済者は、次に掲げる場合には、債権者のために弁済の目的物を供託することが出来る。この場合においては、弁済者が供託をした時に、その債権は、消滅する。

一 弁済の提供をした場合において、債権者がその受領を拒んだとき。

二 債権者が弁済を受領することができないとき。

2 弁済者が債権者を確知することができないときも、前項と同様とする。ただし、弁済者に過失があるときは、この限りでない。

第四百九十七條を次のように改める。

(供託に適しない物等)

第四百九十七條 弁済者は、次に掲げる場合に

は、裁判所の許可を得て、弁済の目的物を競売に付し、その代金を供託することが出来る。

一 その物が供託に適しないとき。

二 その物について滅失、損傷その他の事由による価格の低落のおそれがあるとき。

三 その物の保存について過分の費用を要するとき。

四 前三号に掲げる場合のほか、その物を供託することが困難な事情があるとき。

第四百九十八條の見出しを「(供託物の還付請求等)」に改め、同条を同条第二項とし、同条に第一項として次の一項を加える。

弁済の目的物又は前条の代金が供託された場合には、債権者は、供託物の還付を請求することが出来る。

第四百九十九條の見出しを削り、同条の前に見出しとして「(弁済による代位の要件)」を付し、同条第一項中「その弁済と同時に債権者の承諾を得て」及び「ことが出来る」を削り、同条第二項を削る。

第五百條を次のように改める。

第五百條 第四百六十七條の規定は、前条の場合(弁済をするについて正当な利益を有する者が債権者に代位する場合を除く。))について準用する。

第五百一條中「自己の権利に基づいて求償をすることが出来る範囲内において」を削り、後段及び各号を削り、同条に次の二項を加える。

2 前項の規定による権利の行使は、債権者に代位した者が自己の権利に基づいて債務者に対して求償をすることが出来る範囲内(保証人の一人が他の保証人に対して債権者に代位する場合に、自己の権利に基づいて当該他の保証人に対して求償をすることが出来る範囲内)に限り、することが出来る。

3 第一項の場合には、前項の規定によるほか、次に掲げる場合には、

一 第三取得者(債務者から担保の目的となつている財産を譲り受けた者をいう。以下この

項において同じ。は、保証人及び物上保証人に対して債権者に代位しない。

二 第三取得者の一人は、各財産の価額に応じて、他の第三取得者に対して債権者に代位する。

三 前号の規定は、物上保証人の一人が他の物上保証人に対して債権者に代位する場合について準用する。

四 保証人と物上保証人との間においては、その数に応じて、債権者に代位する。ただし、物上保証人が数人あるときは、保証人の負担部分を除いた残額について、各財産の価額に応じて、債権者に代位する。

五 第三取得者から担保の目的となつている財産を譲り受けた者は、第三取得者とみなして第一号及び第二号の規定を適用し、物上保証人から担保の目的となつている財産を譲り受けた者は、物上保証人とみなして第一号、第三号及び前号の規定を適用する。

第五百二条第一項中「代位者は」の下に、「債権者の同意を得て」を、「行使する」の下に「ことができる」を加え、同条第二項中「前項」を「第一項」に改め、同項を同条第四項とし、同条第一項の次に次の二項を加える。

2 前項の場合であっても、債権者は、単独でその権利を行使することができる。

3 前二項の場合に債権者が行使する権利は、その債権の担保の目的となつている財産の売却代金その他の当該権利の行使によつて得られる金銭について、代位者が行使する権利に優先する。

第五百四条中「第五百条の規定により代位をすることができる者」を「弁済をするについて正当な利益を有する者（以下この項において「代位権者」という。）に、「その代位をすることができる者は、その」を「その代位権者は、代位をするに当たつて担保の」に、「できなくなつた」を「できなくなる」に改め、同条に後段として次のように加える。

その代位権者が物上保証人である場合において、その代位権者から担保の目的となつている財産を譲り受けた第三者及びその特定承継人についても、同様とする。

第五百四条に次の一項を加える。

2 前項の規定は、債権者が担保を喪失し、又は減少させたことについて取引上の社会通念に照らして合理的な理由があると認められるときは、適用しない。

第五百五条第二項を次のように改める。

2 前項の規定にかかわらず、当事者が相殺を禁止し、又は制限する旨の意思表示をした場合には、その意思表示は、第三者がこれを知り、又は重大な過失によつて知らなかつたときに限り、その第三者に対抗することができる。

第五百九条を次のように改める。

（不法行為等により生じた債権を受働債権とする相殺の禁止）

第五百九条 次に掲げる債務の債務者は、相殺をもつて債権者に対抗することができない。ただし、その債権者がその債務に係る債権を他人から譲り受けたときは、この限りでない。

一 悪意による不法行為に基づく損害賠償の債務

二 人の生命又は身体への侵害による損害賠償の債務（前号に掲げるものを除く。）

第五百十一条の見出し中「支払の差止め」を「差押え」に改め、同条中「支払の差止めを受けた」を「差押えを受けた債権の」に、「その」を「差押え」に、「ができない」を「できないが、差押え前に取得した債権による相殺をもつて対抗することができる」に改め、同条に次の一項を加える。

2 前項の規定にかかわらず、差押え後に取得した債権が差押え前の原因に基づいて生じたものであるときは、その第三債務者は、その債権による相殺をもつて差押債権者に対抗することができる。ただし、第三債務者が差押え後に他人の債権を取得したときは、この限りでない。

しとして「（相殺の充当）」を付し、同条を次のように改める。

第五百十二条 債権者が債務者に対して有する一個又は数個の債権と、債権者が債務者に対して負担する一個又は数個の債務について、債権者が相殺の意思表示をした場合において、当事者が別段の合意をしなかつたときは、債権者の有する債権とその負担する債務は、相殺に適するようになつた時期の順序に従つて、その対当額について相殺によつて消滅する。

2 前項の場合において、相殺をする債権者の有する債権がその負担する債務の全部を消滅させるのに足りないときであつて、当事者が別段の合意をしなかつたときは、次に掲げるところによる。

一 債権者が数個の債務を負担するとき（次号に規定する場合を除く。）は、第四百八十八条第四項第二号から第四号までの規定を準用する。

二 債権者が負担する一個又は数個の債務について元本のほかに利息及び費用を支払うべきときは、第四百八十九条の規定を準用する。この場合において、同条第二項中「前条」とあるのは、「前条第四項第二号から第四号まで」と読み替へるものとする。

3 第一項の場合において、相殺をする債権者の負担する債務がその有する債権の全部を消滅させるのに足りないときは、前項の規定を準用する。

第三編第一章第五節第二款中第五百十二条の次に次の一条を加える。

第五百十二条の二 債権者が債務者に対して有する債権に、一個の債権の弁済として数個の給付をすべきものがある場合における相殺については、前条の規定を準用する。債権者が債務者に対して負担する債務に、一個の債務の弁済として数個の給付をすべきものがある場合における相殺についても、同様とする。

を「従前の債務に代えて、新たな債務であつて次に掲げるものを発生させる」に、「その」を「従前の」に改め、同項に次の各号を加える。

一 従前の給付の内容について重要な変更をするもの

二 従前の債務者が第三者と交替するもの

三 従前の債権者が第三者と交替するもの

第五百十三條第二項を削る。

第五百十四條ただし書を削り、同条に後段として次のように加える。

この場合において、更改は、債権者が更改前の債務者に対してその契約をした旨を通知した時に、その効力を生ずる。

第五百十四條に次の一項を加える。

2 債務者の交替による更改後の債務者は、更改前の債務者に対して求償権を取得しない。

第五百十五條の前の見出しを削り、同条に見出しとして「（債権者の交替による更改）」を付し、同条を同条第二項とし、同条に第一項として次の一項を加える。

債権者の交替による更改は、更改前の債権者、更改後に債権者となる者及び債務者の契約によつてすることができる。

第五百十六條及び第五百十七條を次のように改める。

第五百十六條及び第五百十七條 削除

第五百十八條中「更改の当事者」を「債権者（債権者の交替による更改にあつては、更改前の債権者）」に改め、同条に次の一項を加える。

2 前項の質権又は抵当権の移転は、あらかじめ又は同時に更改の相手方（債権者の交替による更改にあつては、債務者）に対してする意思表示によつてしなければならない。

第三編第一章中第五節を第六節とし、第四節の次に次の一節を加える。

第五節 債務の引受け

第一款 併存的債務引受け

（併存的債務引受けの要件及び効果）

第四百七十條 併存的債務引受けの引受人は、債務

者と連帯して、債務者が債権者に対して負担する債務と同一の内容の債務を負担する。

2 併存的債務引受は、債権者と引受人となる者との契約によつてすることができる。

3 併存的債務引受は、債務者と引受人となる者との契約によつてもすることができる。この場合において、併存的債務引受は、債権者が引受人となる者に対して承諾をした時に、その効力を生ずる。

4 前項の規定によつてする併存的債務引受は、第三者のためにする契約に関する規定に従う。

(併存的債務引受における引受人の抗弁等)
第四百七十一条 引受人は、併存的債務引受により負担した自己の債務について、その効力が生じた時に債務者が主張することができた抗弁をもつて債権者に対抗することができる。

2 債務者が債権者に対して取消権又は解除権を有するときは、引受人は、これらの権利の行使によつて債務者がその債務を免れるべき限度において、債権者に対して債務の履行を拒むことができる。

第二款 免責的債務引受

(免責的債務引受の要件及び効果)
第四百七十二条 免責的債務引受の引受人は債務者が債権者に対して負担する債務と同一の内容の債務を負担し、債務者は自己の債務を免れる。

2 免責的債務引受は、債権者と引受人となる者との契約によつてすることができる。この場合において、免責的債務引受は、債権者が債務者に対してその契約をした旨を通知した時に、その効力を生ずる。

3 免責的債務引受は、債務者と引受人となる者が契約をし、債権者が引受人となる者に対して承諾をすることによつてもすることができる。

(免責的債務引受における引受人の抗弁等)
第四百七十二条の二 引受人は、免責的債務引受により負担した自己の債務について、その効力が生じた時に債務者が主張することができた抗

弁をもつて債権者に対抗することができる。

2 債務者が債権者に対して取消権又は解除権を有するときは、引受人は、免責的債務引受がなければこれらの権利の行使によつて債務者がその債務を免れることができた限度において、債権者に対して債務の履行を拒むことができる。

(免責的債務引受における引受人の求償権)
第四百七十二条の三 免責的債務引受の引受人は、債務者に対して求償権を取得しない。

(免責的債務引受による担保の移転)
第四百七十二条の四 債権者は、第四百七十二条

第一項の規定により債務者が免れる債務の担保として設定された担保権を引受人が負担する債務に移すことができる。ただし、引受人以外の者がこれを設定した場合には、その承諾を得なければならぬ。

2 前項の規定による担保権の移転は、あらかじめ又は同時に引受人に対してする意思表示によつてしなければならない。

3 前二項の規定は、第四百七十二条第一項の規定により債務者が免れる債務の保証をした者があるときについて準用する。

4 前項の場合において、同項において準用する第一項の承諾は、書面で行なければ、その効力を生じない。

5 前項の承諾がその内容を記録した電磁的記録によつてされたときは、その承諾は、書面によつてされたものとみなして、同項の規定を適用する。

第三編第一章に次の一節を加える。

第七節 有価証券

第一款 指図証券

(指図証券の譲渡)
第五百二十条の二 指図証券の譲渡は、その証券に譲渡の裏書をして譲受人に交付しなければ、その効力を生じない。

(指図証券の裏書的方式)
第五百二十条の三 指図証券の譲渡については、その指図証券の性質に応じ、手形法(昭和七年

法律第二十号)中裏書的方式に関する規定を準用する。

(指図証券の所持人の権利の推定)
第五百二十条の四 指図証券の所持人が裏書の連続によりその権利を証明するときは、その所持人は、証券上の権利を適法に有するものと推定する。

(指図証券の善意取得)
第五百二十条の五 何らかの事由により指図証券の占有を失った者がある場合において、その所持人が前条の規定によりその権利を証明するときは、その所持人は、その証券を返還する義務を負わぬ。ただし、その所持人が善意又は重大な過失によりその証券を取得したときは、この限りでない。

(指図証券の譲渡における債務者の抗弁の制限)
第五百二十条の六 指図証券の債務者は、その証券に記載した事項及びその証券の性質から当然に生ずる結果を除き、その証券の譲渡前の債権者に対抗することができた事由をもつて善意の譲受人に対抗することができない。

(指図証券の質入れ)
第五百二十条の七 第五百二十条の二から前条までの規定は、指図証券を目的とする質権の設定について準用する。

(指図証券の弁済の場所)
第五百二十条の八 指図証券の弁済は、債務者の現在の住所においてしなければならない。

(指図証券の提示と履行遅滞)
第五百二十条の九 指図証券の債務者は、その債務の履行について期限の定めがあるときであっても、その期限が到来した後に所持人がその証券を提示してその履行の請求をした時から遅滞の責任を負う。

(指図証券の債務者の調査の権利等)
第五百二十条の十 指図証券の債務者は、その証券の所持人並びにその署名及び押印の真偽を調査する権利を有するが、その義務を負わぬ。ただし、債務者に善意又は重大な過失があると

きは、その弁済は、無効とする。

(指図証券の喪失)
第五百二十条の十一 指図証券は、非訟事件手続法(平成二十三年法律第五十一号)第百条に規定する公示催告手続によつて無効とすることができる。

(指図証券喪失の場合の権利行使方法)
第五百二十条の十二 金銭その他の物又は有価証券の給付を目的とする指図証券の所持人がその指図証券を喪失した場合において、非訟事件手続法第百十四条に規定する公示催告の申立てをしたときは、その債務者に、その債務の目的物を供託させ、又は相当の担保を供してその指図証券の趣旨に従い履行をさせることができる。

第二款 記名式所持人証証券
(記名式所持人証証券の譲渡)
第五百二十条の十三 記名式所持人証証券(債権者を指名する記載がされている証券であつて、その所持人に弁済をすべき旨が付記されているものをいう。以下同じ)の譲渡は、その証券を交付しなければ、その効力を生じない。

(記名式所持人証証券の所持人の権利の推定)
第五百二十条の十四 記名式所持人証証券の所持人は、証券上の権利を適法に有するものと推定する。

(記名式所持人証証券の善意取得)
第五百二十条の十五 何らかの事由により記名式所持人証証券の占有を失った者がある場合において、その所持人が前条の規定によりその権利を証明するときは、その所持人は、その証券を返還する義務を負わぬ。ただし、その所持人が善意又は重大な過失によりその証券を取得したときは、この限りでない。

(記名式所持人証証券の譲渡における債務者の抗弁の制限)
第五百二十条の十六 記名式所持人証証券の債務者は、その証券に記載した事項及びその証券の性質から当然に生ずる結果を除き、その証券の譲渡前の債権者に対抗することができた事由を

を主張することができた抗

もつて善意の譲受人に対抗することができない。

(記名式所持人払証券の買入れ)

第五百二十条の十七 第五百二十条の十三から前条までの規定は、記名式所持人払証券を目的とする質権の設定について準用する。

(指図証券の規定の準用)

第五百二十条の十八 第五百二十条の八から第五百二十条の十二までの規定は、記名式所持人払証券について準用する。

第三款 その他の記名証券

第五百二十条の十九 債権者を指名する記載がされている証券であつて指図証券及び記名式所持人払証券以外のものは、債権の譲渡又はこれを目的とする質権の設定に関する方式に従い、かつ、その効力をもつてのみ、譲渡し、又は質権の目的とすることが出来る。

2 第五百二十条の十一及び第五百二十条の十二の規定は、前項の証券について準用する。

第四款 無記名証券

第五百二十条の二十 第二款(記名式所持人払証券)の規定は、無記名証券について準用する。

第五百二十五条を削る。

第五百二十四条中「隔地者に対して」を削り、同条に次のただし書を加える。

ただし、申込者が撤回をする権利を留保したときは、この限りでない。

第五百二十四条に次の二項を加える。

2 対話者に対してした前項の申込みは、同項の規定にかかわらず、その対話が継続している間は、いつでも撤回することができる。

3 対話者に対してした第一項の申込みに対して対話が継続している間に申込者が承諾の通知を受けなかつたときは、その申込みは、その効力を失う。ただし、申込者が対話の終了後もその申込みが効力を失わない旨を表示したときは、この限りでない。

第五百二十四条を第五百二十五条とし、第五百二十三条を第五百二十四条とし、第五百二十二条

を削る。

第五百二十一条第一項中「契約の」を削り、同項に次のただし書を加える。

ただし、申込者が撤回をする権利を留保したときは、この限りでない。

第五百二十一条を第五百二十三条とし、第三編第二章第一節第一款中同条の前に次の二条を加える。

(契約の締結及び内容の自由)
第五百二十一条 何人も、法令に特別の定めがある場合を除き、契約をすることが自由である。

2 契約の当事者は、法令の制限内において、契約の内容を自由に決定することができる。

(契約の成立と方式)
第五百二十二条 契約は、契約の内容を示してその締結を申し入れる意思表示(以下「申込み」という。)に対して相手方が承諾をしたときに成立する。

2 契約の成立には、法令に特別の定めがある場合を除き、書面の作成その他の方式を具備することを要しない。
第五百二十六条及び第五百二十七条を次のように改める。

(申込者の死亡等)
第五百二十六条 申込者が申込みの通知を発した後に死亡し、意思能力を有しない常況にある者となり、又は行為能力の制限を受けた場合において、申込者がその事実が生じたこととすればその申込みは効力を有しない旨の意思表示をしてい

たとき、又はその相手方が承諾の通知を発するまでにその事実が生じたことを知ったときは、その申込みは、その効力を有しない。
(承諾の通知を必要としない場合における契約の成立時期)
第五百二十七条 申込者の意思表示又は取引上の慣習により承諾の通知を必要としない場合には、契約は、承諾の意思表示と認めるべき事実があつた時に成立する。

第五百二十九条中「この款において」を削り、「その行為をした者の下に」がその広告を知つていたかどうかにかかわらず、その者を加え、同条の次に次の二条を加える。

(指定した行為をする期間の定めのある懸賞広告)
第五百二十九条の二 懸賞広告者は、その指定した行為をする期間を定めてした広告を撤回することができない。ただし、その広告において撤回をする権利を留保したときは、この限りでない。

2 前項の広告は、その期間内に指定した行為を完了する者がないときは、その効力を失う。
(指定した行為をする期間の定めのない懸賞広告)
第五百二十九条の三 懸賞広告者は、その指定した行為を完了する者がない間は、その指定した行為をする期間を定めな

ないでした広告を撤回することが出来る。ただし、その広告中に撤回をしない旨を表示したときは、この限りでない。
第五百三十条を次のように改める。

(懸賞広告の撤回の方法)
第五百三十条 前の広告と同一の方法による広告の撤回は、これを知らない者に対しても、その効力を有する。
2 広告の撤回は、前の広告と異なる方法によつても、することが出来る。ただし、その撤回は、これを知つた者に対してのみ、その効力を有する。

第五百三十三条中「その債務の履行」の下に「債務の履行に代わる損害賠償の債務の履行を含む。」を加える。
第五百三十四条及び第五百三十五条を次のように改める。

第五百三十四条及び第五百三十五条 削除
第五百三十六条第一項中「前二条に規定する場合を除き、」を削り、「債務者」を「債権者」に、「を受ける権利を有しない」を「の履行を拒むことが出来る」に改め、同条第二項中「債務者」を「債権者」

に、「を受ける権利を失わない」を「の履行を拒むことができない」に改め、「において」の下に「債務者は」を加える。

第五百三十七条第二項中「前項」を「第一項」に改め、同項を同条第三項とし、同条第一項の次に次の一項を加える。

2 前項の契約は、その成立の時に第三者が現に存しない場合又は第三者が特定していない場合であつても、そのためにその効力を妨げられない。

第五百三十八条に次の一項を加える。

2 前条の規定により第三者の権利が発生した後、債務者がその第三者に対する債務を履行しない場合には、同条第一項の契約の相手方は、その第三者の承諾を得なければ、契約を解除することが出来ない。

第五百四十一条の見出しを「催告による解除」に改め、同条に次のただし書を加える。

ただし、その期間を経過した時における債務の不履行がその契約及び取引上の社会通念に照らして軽微であるときは、この限りでない。

第五百四十二条及び第五百四十三条を次のように改める。

(催告によらない解除)
第五百四十二条 次に掲げる場合には、債権者は、前条の催告をすることなく、直ちに契約の解除をすることが出来る。

一 債務の全部の履行が不能であるとき。
二 債務者がその債務の全部の履行を拒絶する意思を明確に表示したとき。

三 債務の一部の履行が不能である場合又は債務者がその債務の一部の履行を拒絶する意思を明確に表示した場合において、残存する部分のみでは契約をした目的を達することができないとき。

四 契約の性質又は当事者の意思表示により、特定の日時又は一定の期間内に履行をしなければ契約をした目的を達することができない場合において、債務者が履行をしないのでその

時期を経過したとき。

五 前各号に掲げる場合のほか、債務者がその債務の履行をせず、債権者が前条の催告をしなくても契約をした目的を達するに足りる履行がされる見込みがないことが明らかであるとき。

2 次に掲げる場合には、債権者は、前条の催告をすることなく、直ちに契約の一部の解除をすることができ、

一 債務の一部の履行が不能であるとき。
二 債務者がその債務の一部の履行を拒絶する意思を明確に表示したとき。

(債権者の責めに帰すべき事由による場合)

第五百四十三条 債務の不履行が債権者の責めに帰すべき事由によるものであるときは、債権者は、前二条の規定による契約の解除をすることができない。

第五百四十五条中第三項を第四項とし、第二項の次に次の一項を加える。

3 第一項本文の場合において、金銭以外の物を返還するときは、その受領の時以後に生じた果実をも返還しなければならない。

第五百四十八条の見出し中「行為等」を「故意による目的物の損傷等」に改め、同条第一項中「自己の行為」を「故意」に改め、同項に次のただし書を加える。

ただし、解除権を有する者がその解除権を有することを知らなかったときは、この限りでない。

第五百四十八条第二項を削る。

第三編第二章第一節第三款を第四款とし、第二款の次に次の一款を加える。

第三款 契約上の地位の移転

第五百三十九条の二 契約の当事者の一方が第三者との間で契約上の地位を譲渡する旨の合意をした場合において、その契約の相手方がその譲渡を承諾したときは、契約上の地位は、その第三者に移転する。

第三編第二章第一節に次の一款を加える。

第五款 定型約款

(定型約款の合意)

第五百四十八条の二 定型取引(ある特定の者が不特定多数の者を相手方として行う取引であつて、その内容の全部又は一部が画一的であることがその双方にとって合理的なものをいう。以下同じ。)を行うことの合意(次条において「定型取引合意」という。)をした者は、次に掲げる場合には、定型約款(定型取引において、契約の内容とすることを目的としてその特定の者により準備された条項の総体をいう。以下同じ。)の個別の条項についても合意をしたものとみなす。

一 定型約款を契約の内容とする旨の合意をしたとき。
二 定型約款を準備した者(以下「定型約款準備者」という。)があらかじめその定型約款を契約の内容とする旨を相手方に表示していたとき。

2 前項の規定にかかわらず、同項の条項のうち、相手方の権利を制限し、又は相手方の義務を加重する条項であつて、その定型取引の態様及びその実情並びに取引上の社会通念に照らして第一条第二項に規定する基本原則に反して相手方の利益を一方的に害すると認められるものについては、合意をしなかったものとみなす。

(定型約款の内容の表示)
第五百四十八条の三 定型取引を行い、又は行うとする定型約款準備者は、定型取引合意の前又は定型取引合意の後相当の期間内に相手方から請求があつた場合には、遅滞なく、相当な方法でその定型約款の内容を示さなければならない。ただし、定型約款準備者が既に相手方に対して定型約款を記載した書面を交付し、又はこれを記録した電磁的記録を提供していたときは、この限りでない。

2 定型約款準備者が定型取引合意の前において前項の請求を拒んだときは、前条の規定は、適用しない。ただし、一時的な通信障害が発生した場合その他正当な事由がある場合は、この限りでない。

(定型約款の変更)
第五百四十八条の四 定型約款準備者は、次に掲げる場合には、定型約款の変更をすることにより、変更後の定型約款の条項について合意があつたものとみなし、個別に相手方と合意をすることなく契約の内容を変更することができる。

一 定型約款の変更が、相手方の一般の利益に適合するとき。
二 定型約款の変更が、契約をした目的に反せず、かつ、変更の必要性、変更後の内容の相当性、この条の規定により定型約款の変更をすることがある旨の定めの有無及びその内容その他の変更に係る事情に照らして合理的なものであるとき。

2 定型約款準備者は、前項の規定による定型約款の変更をするときは、その効力発生時期を定め、かつ、定型約款を変更する旨及び変更後の定型約款の内容並びにその効力発生時期をインターネットの利用その他の適切な方法により周知しなければならない。

3 第一項第二号の規定による定型約款の変更は、前項の効力発生時期が到来するまでに同項の規定による周知をしなければ、その効力を生じない。

4 第五百四十八条の二第二項の規定は、第一項の規定による定型約款の変更については、適用しない。

第五百四十九条中「自己の」を「ある」に改める。
第五百五十条の見出し中「撤回」を「解除」に改め、同条中「撤回する」を「解除をする」に改める。
第五百五十一条の見出しを「贈与者の引渡義務等」に改め、同条第一項を次のように改める。
贈与者は、贈与の目的である物又は権利を、贈与の目的として特定した時の状態で引き渡し、又は移転することを約したものと推定する。

第五百五十七条第一項中「当事者の一方が契約の履行に着手するまでは、買主はその手付を放棄し、売主はその倍額を償還して」を「買主はその手付を放棄し、売主はその倍額を現実に提供して」に改め、同項に次のただし書を加える。
ただし、その相手方が契約の履行に着手した後は、この限りでない。

第五百五十七条第二項中「第五百四十五条第三項」を「第五百四十五条第四項」に改める。
第五百六十条から第五百六十二条までを次のように改める。

(権利移転の對抗要件に係る売主の義務)
第五百六十条 売主は、買主に対し、登記、登録その他の売買の目的である権利の移転についての對抗要件を備えさせる義務を負う。

(他人の権利の売買における売主の義務)
第五百六十一条 他人の権利(権利の一部が他人に属する場合におけるその権利の一部を含む。)を売買の目的としたときは、売主は、その権利を取得して買主に移転する義務を負う。

(買主の追完請求権)
第五百六十二条 引き渡された目的物が種類、品質又は数量に関して契約の内容に適合しないものであるときは、買主は、売主に対し、目的物の修補、代替物の引渡し又は不足分の引渡しによる履行の追完を請求することができる。ただし、売主は、買主に不相当な負担を課するものでないときは、買主が請求した方法と異なる方法による履行の追完をすることができる。

2 前項の不適合が買主の責めに帰すべき事由によるものであるときは、買主は、同項の規定による履行の追完の請求をすることができない。
第五百六十三条の前の見出しを削り、同条から第五百六十七条までを次のように改める。
(買主の代金減額請求権)
第五百六十三条 前条第一項本文に規定する場合において、買主が相当の期間を定めて履行の追完の催告をし、その期間内に履行の追完がないときは、買主は、その不適合の程度に応じて代

金の減額を請求することができる。

2 前項の規定にかかわらず、次に掲げる場合には、買主は、同項の催告をすることなく、直ちに代金の減額を請求することができる。

一 履行の追完が不能であるとき。

二 売主が履行の追完を拒絶する意思を明確に表示したとき。

三 契約の性質又は当事者の意思表示により、特定の日時又は一定の期間内に履行をしなければ契約をした目的を達することができない場合において、売主が履行の追完をしないのでその時期を経過したとき。

四 前三号に掲げる場合のほか、買主が前項の催告をしても履行の追完を受ける見込みがないことが明らかであるとき。

3 第一項の不適合が買主の責めに帰すべき事由によるものであるときは、買主は、前二項の規定による代金の減額の請求をすることができない。

(買主の損害賠償請求及び解除権の行使)

第五百六十四条 前二条の規定は、第四百五十五条の規定による損害賠償の請求並びに第五百四十一条及び第五百四十二条の規定による解除権の行使を妨げない。

(移転した権利が契約の内容に適合しない場合における売主の担保責任)

第五百六十五条 前三条の規定は、売主が買主に移転した権利が契約の内容に適合しないものである場合(権利の一部が他人に属する場合においてその権利の一部を移転しないときを含む。)について準用する。

(目的物の種類又は品質に関する担保責任の期間の制限)

第五百六十六条 売主が種類又は品質に関して契約の内容に適合しない目的物を買主に引き渡した場合において、買主がその不適合を知った時から一年以内にその旨を売主に通知しないときは、買主は、その不適合を理由として、履行の追完の請求、代金の減額の請求、損害賠償の請

求及び契約の解除をすることができない。ただし、売主が引渡しの際にその不適合を知り、又は重大な過失によつて知らなかったときは、この限りでない。

(目的物の滅失等についての危険の移転)

第五百六十七条 売主が買主に目的物売買の目的として特定したものに限る。以下この条において同じ。を引き渡した場合において、その引渡しがあった時以後にその目的物が当事者双方の責めに帰することができない事由によつて滅失し、又は損傷したときは、買主は、その滅失又は損傷を理由として、履行の追完の請求、代金の減額の請求、損害賠償の請求及び契約の解除をすることができない。この場合において、買主は、代金の支払を拒むことができない。

2 売主が契約の内容に適合する目的物をもつて、その引渡しの債務の履行を提供したにもかかわらず、買主がその履行を受けることを拒み、又は受けることができない場合において、その履行の提供があつた時以後に当事者双方の責めに帰することができない事由によつてその目的物が滅失し、又は損傷したときも、前項と同様とする。

第五百六十八条の見出しを「競売における担保責任等」に改め、同条第一項中「強制競売を」民事執行法その他の法律の規定に基づく競売(以下この条において単に「競売」という。)[に、第五百六十一条から前条までを「第五百四十一条及び第五百四十二条の規定並びに第五百六十三条(第五百六十五条において準用する場合を含む。)[に改め、同条に次の一項を加える。

4 前三項の規定は、競売の目的物の種類又は品質に関する不適合については、適用しない。

第五百七十条 買主が買主による費用の償還(抵当権等がある場合の買主による費用の償還請求)

第五百七十条 買主が買主による費用の償還(抵当権等がある場合の買主による費用の償還請求)

存していた場合において、買主が費用を支出してその不動産の所有権を保存したときは、買主は、売主に対し、その費用の償還を請求することができる。

第五百七十一条 削除

第五百七十二條中「第五百六十条から前条までの規定による」を「第五百六十二条第一項本文又は第五百六十五条に規定する場合における」に改める。

第五百七十六条の見出し中「失う」を「取得することができない等の」に改め、同条中「ために」を「ことその他の事由により、」に、「又は一部を」を「若しくは一部を取得することができず、又は」に、「限度」を「程度」に改める。

第五百七十七条中「不動産について」の下に「契約の内容に適合しない」を加える。

第五百七十九條中「支払った代金」の下に「(別段の合意をした場合にあつては、その合意により定めた金額。第五百八十三条第一項において同じ。)」を加える。

第五百八十一条第一項中「対しても、その効力を生ずる」を「対抗することができ」に改め、同条第二項中「登記をした」を「前項の登記がされた後に第六百五十五条の二第一項に規定する対抗要件を備えた」に改める。

第五百八十七条の次に次の一項を加える。

(書面による消費貸借等)

第五百八十七条の二 前条の規定にかかわらず、書面による消費貸借は、当事者の一方が金銭その他の物を引き渡すことを約し、相手方がその受け取った物と種類、品質及び数量の同じ物をもつて返還することを約することによつて、その効力を生ずる。

2 書面による消費貸借の借主は、貸主から金銭その他の物を受け取るまで、契約の解除をすることができない。この場合において、貸主は、その契約の解除によつて損害を受けたときは、借主に対し、その賠償を請求することができる。

3 書面による消費貸借は、借主が貸主から金銭

その他の物を受け取る前に当事者の一方が破産手続開始の決定を受けたときは、その効力を失う。

4 消費貸借がその内容を記録した電磁的記録によつてされたときは、その消費貸借は、書面によつてされたものとみなして、前三項の規定を適用する。

第五百八十八条中「消費貸借によらないで」を削除。

第五百八十九条及び第五百九十条を次のように改める。

(利息)

第五百八十九条 貸主は、特約がなければ、借主に対して利息を請求することができない。

2 前項の特約があるときは、貸主は、借主が金銭その他の物を受け取った日以後の利息を請求することができる。

(貸主の引渡義務等)

第五百九十条 第五百五十一条の規定は、前条第一項の特約のない消費貸借について準用する。

2 前条第一項の特約の有無にかかわらず、貸主から引き渡された物が種類又は品質に関して契約の内容に適合しないものであるときは、借主は、その物の価額を返還することができる。

第五百九十一条第二項中「借主は」の下に「返還の時期の定めのある無にかかわらず」を加え、同条に次の一項を加える。

3 当事者が返還の時期を定めた場合において、貸主は、借主がその時期の前に返還をしたことによつて損害を受けたときは、借主に対し、その賠償を請求することができる。

第五百九十三条中「一方」の下に「ある物を引き渡すことを約し、相手方がその受け取った物について」を加え、「した後に返還をすることを約して相手方からある物を受け取る」を「して契約が終了したときに返還をすることを約する」に改め、同条の次に次の一項を加える。

(借用物受取り前の貸主による使用貸借の解除)

け取るまで、契約の解除をすることができる。ただし、書面による使用貸借については、この限りでない。

第五百九十六条の見出しを「(貸主の引渡義務等)」に改める。

第五百九十七条から第五百九十九条までを次のように改める。

(期間満了等による使用貸借の終了)

第五百九十七条 当事者が使用貸借の期間を定めたときは、使用貸借は、その期間が満了することによって終了する。

2 当事者が使用貸借の期間を定めなかった場合において、使用及び収益の目的を定めたときは、使用貸借は、借主がその目的に従い使用及び収益を終えることによって終了する。

3 使用貸借は、借主の死亡によって終了する。

(使用貸借の解除)

第五百九十八条 貸主は、前条第二項に規定する場合において、同項の目的に従い借主が使用及び収益をするのに足りる期間を経過したときは、契約の解除をすることができる。

2 当事者が使用貸借の期間並びに使用及び収益の目的を定めなかったときは、貸主は、いつでも契約の解除をすることができる。

3 借主は、いつでも契約の解除をすることができる。

(借主による収去等)

第五百九十九条 借主は、借用物を受け取った後にこれに附属させた物がある場合において、使用貸借が終了したときは、その附属させた物を収去する義務を負う。ただし、借用物から分離することができない物又は分離するのに過分の費用を要する物については、この限りでない。

2 借主は、借用物を受け取った後にこれに附属させた物を収去することができる。

3 借主は、借用物を受け取った後にこれに生じた損傷がある場合において、使用貸借が終了したときは、その損傷を原状に復する義務を負う。ただし、その損傷が借主の責めに帰するこ

とができない事由によるものであるときは、この限りでない。

第六百条に次の一項を加える。

2 前項の損害賠償の請求権については、貸主が返還を受けた時から一年を経過するまでの間は、時効は、完成しない。

第六百一条中「支払うこと」の下に「及び引渡しを受けた物を契約が終了したときに返還すること」を加える。

第六百二条中「処分につき行為能力の制限を受けた者又は」を削り、同条に後段として次のように加える。

契約でこれより長い期間を定めたときであっても、その期間は、当該各号に定める期間とする。

第六百四条中「二十年」を「五十年」に改める。

第六百五条中「その後」を削り、「」に対して、その効力を生ずる」を「その他の第三者に対抗することができる」に改め、同条の次に次の三条を加える。

(不動産の賃貸人たる地位の移転)

第六百五条の二 前条、借地借家法(平成三年法律第九十号)第十条又は第三十一条その他の法令の規定による賃貸借の対抗要件を備えた場合において、その不動産が譲渡されたときは、その不動産の賃貸人たる地位は、その譲受人に移転する。

2 前項の規定にかかわらず、不動産の譲渡人及び譲受人が、賃貸人たる地位を譲渡人に留保する旨及びその不動産を譲受人が譲渡人に賃貸する旨の合意をしたときは、賃貸人たる地位は、譲受人に移転しない。この場合において、譲渡人と譲受人又はその承継人との間の賃貸借が終了したときは、譲渡人に留保されていた賃貸人たる地位は、譲受人又はその承継人に移転する。

3 第一項又は前項後段の規定による賃貸人たる地位の移転は、賃貸物である不動産について所有権の移転の登記をしなければ、賃借人に対抗

することができない。

4 第一項又は第二項後段の規定により賃貸人たる地位が譲受人又はその承継人に移転したときは、第六百八条の規定による費用の償還に係る債務及び第六百二十二条の二第一項の規定による同項に規定する敷金の返還に係る債務は、譲受人又はその承継人が承継する。

(合意による不動産の賃貸人たる地位の移転)

第六百五条の三 不動産の譲渡人が賃貸人であるときは、その賃貸人たる地位は、賃借人の承諾を要しないで、譲渡人と譲受人との合意により、譲受人に移転させることができる。この場合においては、前条第三項及び第四項の規定を準用する。

(不動産の賃借人による妨害の停止の請求等)

第六百五条の四 不動産の賃借人は、第六百五条の二第一項に規定する対抗要件を備えた場合において、次の各号に掲げるときは、それぞれ当該各号に定める請求をすることができる。

一 その不動産の占有を第三者が妨害しているとき

二 その不動産を第三者が占有しているとき

三 その第三者に対する妨害の停止の請求

その第三者に対する返還の請求

第六百六条の見出しを「(賃貸人による修繕等)」に改め、同条第一項に次のただし書を加える。

ただし、賃借人の責めに帰すべき事由によつてその修繕が必要となつたときは、この限りでない。

第六百七条の次に次の一条を加える。

(賃借人による修繕)

第六百七条の二 賃借物の修繕が必要である場合において、次に掲げるときは、賃借人は、その修繕をすることができる。

一 賃借人が賃貸人に修繕が必要である旨を通知し、又は賃貸人がその旨を知つたにもかかわらず、賃貸人が相当の期間内に必要な修繕をしないとき。

二 急迫の事情があるとき。

第六百九条中「収益を目的」を「耕作又は牧畜を目的」に改め、ただし書を削る。

第六百十一条の見出しを「(賃借物の一部滅失等による賃料の減額等)」に改め、同条第一項を次のように改める。

賃借物の一部が滅失その他の事由により使用及び収益をすることができなくなった場合において、それが賃借人の責めに帰することができない事由によるものであるときは、賃料は、その使用及び収益をすることができなくなった部分の割合に応じて、減額される。

第六百十一条第二項中「前項」を「賃借物の一部が滅失その他の事由により使用及び収益をすることができなくなった」に改める。

第六百十三条第一項中「」に対して直接に」を「と賃借人との間の賃貸借に基づく賃借人の債務の範囲を限度として、賃貸人に対して転貸借に基づく債務を直接履行する」に改め、同条に次の一項を加える。

3 賃借人が適法に賃借物を転貸した場合に、賃借人は、賃借人との間の賃貸借を合意により解除したことをもつて転賃借人に対抗することができる。ただし、その解除の当時、賃借人が賃借人の債務不履行による解除権を有していたときは、この限りでない。

第六百十六条の見出しを「(賃借人による使用及び収益)」に改め、同条中「第五百九十七条第一項及び第五百九十八条」を削る。

第三編第二章第七節第三款中第六百七条の前に次の一条を加える。

(賃借物の全部滅失等による賃貸借の終了)

第六百十六条の二 賃借物の全部が滅失その他の事由により使用及び収益をすることができなくなった場合には、賃貸借は、これによつて終了する。

第六百十九条第二項ただし書中「ただし」の下に「第六百二十二条の二第一項に規定する」を加える。

第六百二十条中「において、当事者の一方に過失があつたときは、その者に対する」を「においては、」

に改める。

第六百二十一条及び第六百二十二条を次のように改める。

(賃借人の原状回復義務)

第六百二十一条 賃借人は、賃借物を受け取った後にこれに生じた損傷(通常の使用及び収益によつて生じた賃借物の損耗並びに賃借物の経年変化を除く。以下この条において同じ。)がある場合において、賃貸借が終了したときは、その損傷を原状に復する義務を負う。ただし、その損傷が賃借人の責めに帰することができない事由によるものであるときは、この限りでない。

(使用賃借の規定の準用)

第六百二十二条 第五百九十七条第一項、第五百九十九条第一項及び第二項並びに第六百条の規定は、賃貸借について準用する。

第三編第二章第七節に次の一款を加える。

第四款 敷金

第六百二十二条の二 賃貸人は、敷金(いかなる名目によるかを問わず、賃料債務その他の賃貸借に基づいて生ずる賃借人の賃貸人に對する金銭の給付を目的とする債務を担保する目的で、賃借人が賃貸人に交付する金銭をいう。以下この条において同じ。)を受け取っている場合において、次に掲げるときは、賃借人に對し、その受け取った敷金の額から賃貸借に基づいて生じた賃借人の賃貸人に對する金銭の給付を目的とする債務の額を控除した残額を返還しなければならない。

一 賃貸借が終了し、かつ、賃貸物の返還を受けたとき。

二 賃借人が適法に賃借権を譲り渡したとき。
2 賃貸人は、賃借人が賃貸借に基づいて生じた金銭の給付を目的とする債務を履行しないときは、敷金をその債務の弁済に充てることができる。この場合において、賃借人は、賃貸人に對し、敷金をその債務の弁済に充ててことを請求することができる。

第六百二十四条の次に次の一条を加える。

(履行の割合に応じた報酬)

第六百二十四条の二 労働者は、次に掲げる場合には、既にした履行の割合に応じて報酬を請求することができる。

一 使用者の責めに帰することができない事由によつて労働に従事することができなくなつたとき。

二 雇用が履行の途中で終了したとき。

第六百二十六条第一項中「雇用が当事者の一方若しくは第三者の終身の間継続すべき」を「その終期が不確定である」に改め、ただし書を削り、同条第二項中「ときは、三箇月前に」を「者は、それが使用者であるときは三箇月前、労働者であるときは二週間前に、」に改める。

第六百二十七条第二項中「には、」の下に「使用者からの」を加える。

第六百三十四条の前の見出しを削り、同条から第六百三十六条までを次のように改める。

(注文者が受ける利益の割合に応じた報酬)

第六百三十四条 次に掲げる場合において、請負人が既にした仕事の結果のうち可分な部分の給付によつて注文者が利益を受けるときは、その部分を仕事の完成とみなす。この場合において、請負人は、注文者が受ける利益の割合に応じて報酬を請求することができる。

一 注文者の責めに帰することができない事由によつて仕事を完成することができなくなつたとき。

二 請負が仕事の完成前に解除されたとき。

第六百三十五条 削除

(請負人の担保責任の制限)

第六百三十六条 請負人が種類又は品質に関して契約の内容に適合しない仕事の目的物を注文者に引き渡したとき(その引渡しを要しない場合にあつては、仕事が終了した時に仕事の目的物が種類又は品質に関して契約の内容に適合しないときは、注文者は、注文者の供した材料の性質又は注文者の与えた指図によつて生じた不適合を理由として、履行の追完の請求、報酬の

減額の請求、損害賠償の請求及び契約の解除をすることができない。ただし、請負人がその材料又は指図が不適当であることを知りながら告げなかつたときは、この限りでない。

第六百三十七条の前の見出しを削り、同条から第六百四十条までを次のように改める。

(目的物の種類又は品質に関する担保責任の期間の制限)

第六百三十七条 前条本文に規定する場合において、注文者がその不適合を知つた時から一年以内(その旨を請負人に通知しないときは、注文者は、その不適合を理由として、履行の追完の請求、報酬の減額の請求、損害賠償の請求及び契約の解除をすることができない。

2 前項の規定は、仕事の目的物を注文者に引き渡した時(その引渡しを要しない場合にあつては、仕事が終了した時)において、請負人が同項の不適合を知り、又は重大な過失によつて知らなかつたときは、適用しない。

第六百三十八条から第六百四十条まで 削除
第六百四十二条第一項後段を削り、同項に次のただし書を加える。

ただし、請負人による契約の解除については、仕事を完成した後は、この限りでない。

第六百四十二条第二項中「前項」を「第一項」に改め、同項を同条第三項とし、同条第一項の次に次の一項を加える。

2 前項に規定する場合において、請負人は、既にした仕事の報酬及びその中に含まれていない費用について、破産財団の配当に加入することができる。

第六百四十四条の次に次の一条を加える。

(復受任者の選任等)

第六百四十四条の二 受任者は、委任者の許諾を得たとき、又はやむを得ない事由があるときでなければ、復受任者を選任することができない。

2 代理権を付与する委任において、受任者が代理権を有する復受任者を選任したときは、復受

任者は、委任者に対して、その権限の範囲内において、受任者と同じ権利を有し、義務を負う。

第六百四十八条第三項を次のように改める。

3 受任者は、次に掲げる場合には、既にした履行の割合に応じて報酬を請求することができる。

一 委任者の責めに帰することができない事由によつて委任事務の履行をすることができなくなつたとき。

二 委任が履行の途中で終了したとき。

(成果等に対する報酬)

第六百四十八条の二 委任事務の履行により得られる成果に対して報酬を支払うことを約した場合において、その成果が引渡しを要するときは、報酬は、その成果の引渡しと同時に、支払わなければならない。

2 第六百三十四条の規定は、委任事務の履行により得られる成果に対して報酬を支払うことを約した場合について準用する。

第六百五十一条第二項を次のように改める。

2 前項の規定により委任の解除をした者は、次に掲げる場合には、相手方の損害を賠償しなければならない。ただし、やむを得ない事由があつたときは、この限りでない。

一 相手方に不利な時期に委任を解除したとき。

二 委任者が受任者の利益(専ら報酬を得ることによるものを除く。)をも目的とする委任を解除したとき。

第六百五十七条中「相手方のために保管をすることを約してある物を受け取る」を「ある物を保管することを相手方に委託し、相手方がこれを承諾する」に改め、同条の次に次の一条を加える。

(寄託物受取り前の寄託者による寄託の解除等)
第六百五十七条の二 寄託者は、受寄者が寄託物を受け取るまで、契約の解除をすることができない。この場合において、受寄者は、その契約の

解除によつて損害を受けたときは、寄託者に対し、その賠償を請求することができる。

2 無報酬の受寄者は、寄託物を受け取るまで、契約の解除をすることができない。ただし、書面による寄託については、この限りでない。

3 受寄者（無報酬で寄託を受けた場合にあつては、書面による寄託の受寄者に限る。）は、寄託物を受け取るべき時期を経過したにもかかわらず、寄託者が寄託物を引き渡さない場合において、相当の期間を定めてその引渡しを催告をし、その期間内に引渡しがないときは、契約の解除をすることができる。

第六百五十八条第一項中「使用し、又は第三者にこれを保管させる」を「使用する」に改め、同条第二項を次のように改める。

2 受寄者は、寄託者の承諾を得たとき、又はやむを得ない事由があるときでなければ、寄託物を第三者に保管させることができない。

第六百五十八条に次の一項を加える。

3 再受寄者は、寄託者に対して、その権限の範囲内において、受寄者と同一の権利を有し、義務を負う。

第六百五十九条の見出しを「無報酬の受寄者の注意義務」に改め、同条中「寄託を受けた者」を「受寄者」に改める。

第六百六十条の見出しを「受寄者の通知義務等」に改め、同条に次のただし書を加える。

ただし、寄託者が既にこれを知っているときは、この限りでない。

第六百六十条に次の二項を加える。

2 第三者が寄託物について権利を主張する場合であつても、受寄者は、寄託者の指図がない限り、寄託者に対しその寄託物を返還しなければならない。ただし、受寄者が前項の通知をした場合又は同項ただし書の規定によりその通知を要しない場合において、その寄託物をその第三者に引き渡すべき旨を命ずる確定判決（確定判決と同一の効力を有するものを含む）があつたときであつて、その第三者にその寄託物を引き

渡したときは、この限りでない。

3 受寄者は、前項の規定により寄託者に対して寄託物を返還しなければならない場合には、寄託者にその寄託物を引き渡したことによつて第三者に損害が生じたときであつても、その賠償の責任を負わない。

第六百六十二条の見出しを「寄託者による返還請求等」に改め、同条に次の一項を加える。

2 前項に規定する場合において、受寄者は、寄託者がその時期の前に返還を請求したことによつて損害を受けたときは、寄託者に対し、その賠償を請求することができる。

第六百六十四条の次に次の一項を加える。

（損害賠償及び費用の償還の請求権についての期間の制限）

第六百六十四条の二 寄託物の一部滅失又は損傷によつて生じた損害の賠償及び受寄者が支出した費用の償還は、寄託者が返還を受けた時から一年以内に請求しなければならない。

2 前項の損害賠償の請求権については、寄託者が返還を受けた時から一年を経過するまでの間は、時効は、完成しない。

第六百六十五条中「第六百五十条まで（同条第三項を除く）」を「第六百四十八条まで、第六百四十九条並びに第六百五十条第一項及び第二項」に改め、同条の次に次の一項を加える。

（混合寄託）

第六百六十五条の二 複数の者が寄託した物の種類及び品質が同一である場合には、受寄者は、各寄託者の承諾を得たときに限り、これらを混合して保管することができる。

2 前項の規定に基づき受寄者が複数の寄託者からの寄託物を混合して保管したときは、寄託者は、その寄託した物と同じ数量の物の返還を請求することができる。

3 前項に規定する場合において、寄託物の一部が滅失したときは、寄託者は、混合して保管されている総寄託物に対するその寄託した物の割合に応じた数量の物の返還を請求することができ

きる。この場合においては、損害賠償の請求を妨げない。

第六百六十六条を次のように改める。

（消費寄託）

第六百六十六条 受寄者が契約により寄託物を消費することができる場合には、受寄者は、寄託された物と種類、品質及び数量の同じ物をもつて返還しなければならない。

2 第五百九十条及び第五百九十二条の規定は、前項に規定する場合について準用する。

3 第五百九十一条第二項及び第三項の規定は、預金又は貯金に係る契約により金銭を寄託した場合について準用する。

第六百六十七条の次に次の二条を加える。

（他の組合員の債務不履行）

第六百六十七条の二 第五百三十三条及び第五百三十六条の規定は、組合契約については、適用しない。

2 組合員は、他の組合員が組合契約に基づく債務の履行をしないことを理由として、組合契約を解除することができる。

（組合員の一人についての意思表示の無効等）

第六百六十七条の三 組合員の一人について意思表示の無効又は取消しの原因があつても、他の組合員の間においては、組合契約は、その効力を妨げられない。

第六百七十条の見出し中「業務の」の下に「決定及び」を加え、同条第一項中「の執行を削り、」で決する」を「をもつて決定し、各組合員がこれを執行する」に改め、同条第二項を次のように改める。

2 組合の業務の決定及び執行は、組合契約の定めるところにより、一人又は数人の組合員又は第三者に委任することができる。

第六百七十条第三項中「前二項」を「前各項」に改め、同項を同条第五項とし、同条第二項の次に次の二項を加える。

3 前項の委任を受けた者（以下「業務執行者」という。）は、組合の業務を決定し、これを執行する。

この場合において、業務執行者が数人あるときは、組合の業務は、業務執行者の過半数をもつて決定し、各業務執行者がこれを執行する。

4 前項の規定にかかわらず、組合の業務については、総組合員の同意によつて決定し、又は総組合員が執行することを妨げない。

第六百七十条の次に次の一項を加える。

（組合の代理）

第六百七十条の二 各組合員は、組合の業務を執行する場合において、組合員の過半数の同意を得たときは、他の組合員を代理することができる。

2 前項の規定にかかわらず、業務執行者があるときは、業務執行者のみが組合員を代理することができる。この場合において、業務執行者が数人あるときは、各業務執行者は、業務執行者の過半数の同意を得たときに限り、組合員を代理することができる。

3 前二項の規定にかかわらず、各組合員又は各業務執行者は、組合の常務を行うときは、単独で組合員を代理することができる。

第六百七十一条中「業務を」の下に「決定し、又は」を加える。

第六百七十二条第一項中「組合契約で」を「組合契約の定めるところにより」に改め、「業務の」の下に「決定及び」を加える。

第六百七十三条中「を執行する」を「の決定及び執行をする」に改める。

第六百七十五条の見出しを「組合の債権者の権利の行使」に改め、同条中「その債権の発生の際に組合員の損失分担の割合を知らなかつたときは、各組合員に対して等しい割合で」を「組合財産について」に改め、同条に次の一項を加える。

2 組合の債権者は、その選択に従い、各組合員に対して損失分担の割合又は等しい割合でその権利を行使することができる。ただし、組合の債権者がその債権の発生の際に各組合員の損失分担の割合を知つていたときは、その割合によ

る。
第六百七十六条中第二項を第三項とし、第一項の次に次の一項を加える。

2 組合員は、組合財産である債権について、その持分についての権利を単独で行使することができない。

第六百七十七条を次のように改める。

(組合財産に対する組合員の債権者の権利の行使の禁止)

第六百七十七条 組合員の債権者は、組合財産についてその権利を行使することができない。
第六百七十七条の次に次の一条を加える。

(組合員の加入)

第六百七十七条の二 組合員は、その全員の同意によつて、又は組合契約の定めるところにより、新たに組合員を加入させることができる。

2 前項の規定により組合の成立後に加入した組合員は、その加入前に生じた組合の債務については、これを弁済する責任を負わない。

第六百八十条の次に次の一条を加える。

(脱退した組合員の責任等)

第六百八十条の二 脱退した組合員は、その脱退前に生じた組合の債務について、従前の責任の範囲内でこれを弁済する責任を負う。この場合において、債権者が全部の弁済を受けない間は、脱退した組合員は、組合に担保を供させ、又は組合に対して自己に免責を得させることを請求することができる。

2 脱退した組合員は、前項に規定する組合の債務を弁済したときは、組合に対して求償権を有する。

第六百八十二条中「その目的である事業の成功又はその成功の不能」を「次に掲げる事由」に改め、同条に次の各号を加える。

一 組合の目的である事業の成功又はその成功の不能

二 組合契約で定めた存続期間の満了

三 組合契約で定めた解散の事由の発生

四 総組合員の同意

第六百八十五条第二項中「総組合員」を「組合員」に改める。

第六百八十六条を次のように改める。

(清算人の業務の決定及び執行の方法)

第六百八十六条 第六百七十条第三項から第五項まで並びに第六百七十条の二第二項及び第三項の規定は、清算人について準用する。

第六百八十七条中「組合契約で」を「組合契約の定めるところにより」に改める。

第七百二十二条の見出し中「方法」の下に「中間利息の控除」を加え、同条第一項中「第四百七条の下に」及び第四百七条の二を加える。

第七百二十四条を次のように改める。

(不法行為による損害賠償請求権の消滅時効)

第七百二十四条 不法行為による損害賠償の請求権は、次に掲げる場合には、時効によつて消滅する。

一 被害者又はその法定代理人が損害及び加害者を知つた時から三年間行使しないとき。

二 不法行為の時から二十年間行使しないとき。

第三編第五章中第七百二十四条の次に次の一条を加える。

(人の生命又は身体を害する不法行為による損害賠償請求権の消滅時効)

第七百二十四条の二 人の生命又は身体を害する不法行為による損害賠償請求権の消滅時効については、前条第一号の規定の適用については、同条中「三年間」とあるのは、「五年間」とする。

第七百二十四条第二項中「第六百四十四条」の下に「第六百四十五条」を加える。

第六百四十六条第二項を削る。

第六百四十八条第二項中「第三項」の下に「並びに第六百四十八条の二」を加える。

附則

(施行期日)

第一条 この法律は、公布の日から起算して三年を超えない範囲内において政令で定める日から施行する。ただし、次の各号に掲げる規定は、

当該各号に定める日から施行する。

一 附則第三十七条の規定 公布の日

二 附則第三十三条第三項の規定 公布の日から起算して一年を超えない範囲内において政令で定める日

三 附則第二十一条第二項及び第三項の規定 公布の日から起算して二年九月を超えない範囲内において政令で定める日

(意思能力に関する経過措置)

第二条 この法律による改正後の民法(以下「新法」という。)第三條の二の規定は、この法律の施行の日(以下「施行日」という。)前にされた意思表示については、適用しない。

(行為能力に関する経過措置)

第三条 施行日前に制限行為能力者(新法第十三条第一項第十号に規定する制限行為能力者をいう。以下この条において同じ。)が他の制限行為能力者の法定代理人としてした行為については、同項及び新法第二百二条の規定にかかわらず、なお従前の例による。

(無記名債権に関する経過措置)

第四条 施行日前に生じたこの法律による改正前の民法(以下「旧法」という。)第八十六条第三項に規定する無記名債権(その原因である法律行為が施行日前にされたものを含む。)については、なお従前の例による。

(公序良俗に関する経過措置)

第五条 施行日前にされた法律行為については、新法第九十条の規定にかかわらず、なお従前の例による。

(意思表示に関する経過措置)

第六条 施行日前にされた意思表示については、新法第九十三条、第九十五条、第九十六条第二項及び第三項並びに第九十八条の二の規定にかかわらず、なお従前の例による。

2 施行日前に通知が寄せられた意思表示については、新法第九十七条の規定にかかわらず、なお従前の例による。

(代理に関する経過措置)

第七条 施行日前に代理権の発生原因が生じた場合(代理権授与の表示がされた場合を含む。)におけるその代理については、附則第三条に規定するもののほか、なお従前の例による。

2 施行日前に無権代理人が代理人として行為をした場合におけるその無権代理人の責任については、新法第一百七条(新法第一百八条において準用する場合を含む。)の規定にかかわらず、なお従前の例による。

(無効及び取消しに関する経過措置)

第八条 施行日前に無効な行為に基づく債務の履行として給付がされた場合におけるその給付を受けた者の原状回復の義務については、新法第二百一十一条の二(新法第八百七十二條第二項において準用する場合を含む。)の規定にかかわらず、なお従前の例による。

2 施行日前に取り消すことができる行為がされた場合におけるその行為の追認(法定追認を含む。)については、新法第二百二十二条、第二百二十四条及び第二百二十五条(これらの規定を新法第八百七十二條第二項において準用する場合を含む。)の規定にかかわらず、なお従前の例による。

(条件に関する経過措置)

第九条 新法第三百十條第二項の規定は、施行日前にされた法律行為については、適用しない。

(時効に関する経過措置)

第十条 施行日前に債権が生じた場合(施行日以後に債権が生じた場合であつて、その原因である法律行為が施行日前にされたときを含む。以下同じ。)におけるその債権の消滅時効の援用については、新法第四百五十五条の規定にかかわらず、なお従前の例による。

2 施行日前に旧法第四百七条に規定する時効の中断の事由又は旧法第五百五十八條から第六百一一条までに規定する時効の停止の事由が生じた場合におけるこれらの事由の効力については、なお従前の例による。

3 新法第五百一十一條の規定は、施行日前に権利

についての協議を行う旨の合意が書面でされた場合(その合意の内容を記録した電磁的記録(新法第五百十一条第四項に規定する電磁的記録をいう。附則第三十三条第二項において同じ。))によつてされた場合を含む。))におけるその合意については、適用しない。

4 施行日前に債権が生じた場合におけるその債権の消滅時効の期間については、なお従前の例による。

(債権を目的とする質権の對抗要件に関する経過措置)
第十一条 施行日前に設定契約が締結された債権を目的とする質権の對抗要件については、新法第三百六十四条の規定にかかわらず、なお従前の例による。

(指図債権に関する経過措置)

第十二条 施行日前に生じた旧法第三百六十五条に規定する指図債権(その原因である法律行為が施行日前にされたものを含む。))については、なお従前の例による。

(根抵当権に関する経過措置)

第十三条 施行日前に設定契約が締結された根抵当権の被担保債権の範囲については、新法第三百九十八条の二第三項及び第三百九十八条の三第二項の規定にかかわらず、なお従前の例による。

2 新法第三百九十八条の七第三項の規定は、施行日前に締結された債務の引受けに関する契約については、適用しない。

3 施行日前に締結された更改の契約に係る根抵当権の移転については、新法第三百九十八条の七第四項の規定にかかわらず、なお従前の例による。

(債権の目的に関する経過措置)

第十四条 施行日前に債権が生じた場合におけるその債務者の注意義務については、新法第四百条の規定にかかわらず、なお従前の例による。

ては、新法第四百四条の規定にかかわらず、なお従前の例による。

2 新法第四百四条第四項の規定により法定利率に初めて変動があるまでの各期における同項の規定の適用については、同項中「この項の規定により法定利率に変動があつた期のうち直近のもの(以下この項において「直近変動期」という。))とあるのは「民法の一部を改正する法律(平成二十七年法律第 号)の施行後最初の期」と、「直近変動期における法定利率」とあるのは「年三パーセント」とする。

第十六条 施行日前に債権が生じた場合における選択債権の不能による特定については、新法第四百十條の規定にかかわらず、なお従前の例による。

(債務不履行の責任等に関する経過措置)

第十七条 施行日前に債務が生じた場合(施行日以後に債務が生じた場合であつて、その原因である法律行為が施行日前にされたときを含む。附則第二十五条第一項において同じ。))におけるその債務不履行の責任等については、新法第四百十二条第二項、第四百十二条の二から第四百十三條の二まで、第四百十五條、第四百十六條第二項、第四百十八條及び第四百二十二條の二の規定にかかわらず、なお従前の例による。

2 新法第四百十七條の二(新法第七百二十二條第一項において準用する場合を含む。))の規定は、施行日前に生じた将来において取得すべき利益又は負担すべき費用についての損害賠償請求権については、適用しない。

3 施行日前に債務者が遅滞の責任を負つた場合における遅延損害金を生ずべき債権に係る法定利率については、新法第四百十九條第一項の規定にかかわらず、なお従前の例による。

4 施行日前にされた旧法第四百二十條第一項に規定する損害賠償の額の予定に係る合意及び旧法第四百二十一条に規定する金銭でないものを損害の賠償に充ててべき旨の予定に係る合意に

ついては、なお従前の例による。

(債権者代位権に関する経過措置)
第十八条 施行日前に旧法第四百二十三條第一項に規定する債務者に属する権利が生じた場合におけるその権利に係る債権者代位権については、なお従前の例による。

2 新法第四百二十三條の七の規定は、施行日前に生じた同条に規定する譲渡人が第三者に対して有する権利については、適用しない。

(詐害行為取消権に関する経過措置)
第十九条 施行日前に旧法第四百二十四條第一項に規定する債務者が債権者を害することを知つてした法律行為がされた場合におけるその行為に係る詐害行為取消権については、なお従前の例による。

(不可分債権、不可分債務、連帯債権及び連帯債務に関する経過措置)
第二十条 施行日前に生じた旧法第四百二十八條に規定する不可分債権(その原因である法律行為が施行日前にされたものを含む。))については、なお従前の例による。

2 施行日前に生じた旧法第四百三十條に規定する不可分債務及び旧法第四百三十二條に規定する連帯債務(これらの原因である法律行為が施行日前にされたものを含む。))については、なお従前の例による。

3 新法第四百三十二條から第四百三十五條の二までの規定は、施行日前に生じた新法第四百三十二條に規定する債権(その原因である法律行為が施行日前にされたものを含む。))については、適用しない。

(保証債務に関する経過措置)
第二十一条 施行日前に締結された保証契約に係る保証債務については、なお従前の例による。

2 保証人にならうとする者は、施行日前においても、新法第四百六十五條の六第一項(新法第四百六十五條の八第一項において準用する場合を含む。))の公正証書の作成を囑託することができる。

3 公証人は、前項の規定による公正証書の作成の囑託があつた場合には、施行日前においても、新法第四百六十五條の六第二項及び第四百六十五條の七(これらの規定を新法第四百六十五條の八第一項において準用する場合を含む。))の規定の例により、その作成をすることができ

(債権の譲渡に関する経過措置)
第二十二条 施行日前に債権の譲渡の原因である法律行為がされた場合におけるその債権の譲渡については、新法第四百六十六條から第四百六十九條までの規定にかかわらず、なお従前の例による。

(債務の引受けに関する経過措置)
第二十三条 新法第四百七十條から第四百七十二條の四までの規定は、施行日前に締結された債務の引受けに関する契約については、適用しない。

(記名式所持人払債権に関する経過措置)
第二十四条 施行日前に生じた旧法第四百七十一條に規定する記名式所持人払債権(その原因である法律行為が施行日前にされたものを含む。))については、なお従前の例による。

(弁済に関する経過措置)
第二十五条 施行日前に債務が生じた場合におけるその債務の弁済については、次項に規定するもののほか、なお従前の例による。

2 施行日前に弁済がされた場合におけるその弁済の充当については、新法第四百八十八條から第四百九十一條までの規定にかかわらず、なお従前の例による。

(相殺に関する経過措置)
第二十六条 施行日前にされた旧法第五百五條第二項に規定する意思表示については、なお従前の例による。

2 施行日前に債権が生じた場合におけるその債権を受働債権とする相殺については、新法第五百九條の規定にかかわらず、なお従前の例による。

3 施行日前の原因に基づいて債権が生じた場合におけるその債権を自働債権とする相殺差押えを受けた債権を受働債権とするものに限り、新法第五百十一條の規定にかかわらず、なお従前の例による。	第三十二條 施行日前に契約が締結された場合におけるその契約の解除については、新法第五百四十一條から第五百四十三條まで、第五百四十五條第三項及び第五百四十八條の規定にかかわらず、なお従前の例による。	第三節 金融庁関係(第七十條―第九十三條) 第四節 消費者庁関係(第九十四條―第百三〇三條) 第四章 復興庁関係(第百四條・第百五條) 第五章 総務省関係(第百六條―第百十八條) 第六章 財務省関係(第百十九條―第百四十二條) 第七章 文部科学省関係(第百四十三條―第百五十九條) 第八章 厚生労働省関係(第百六十條―第百三十八條) 第九章 農林水産省関係(第百三十九條―第百六十七條) 第十章 経済産業省関係(第百六十八條―第百三十二條) 第十一章 国土交通省関係(第百三十三條―第百四十九條) 第十二章 環境省関係(第百五十條―第百五十八條) 第十三章 防衛省関係(第百五十九條・第百六十條) 第十四章 罰則に関する経過措置及び政令への委任(第百六十一條・第百六十二條)
4 施行日前に相殺の意思表示がされた場合におけるその相殺の充当については、新法第五百十二條及び第五百十二條の二の規定にかかわらず、なお従前の例による。	第三十三條 新法第五百四十八條の二から第五百四十八條の四までの規定は、施行日前に締結された定型取引(新法第五百四十八條の二第一項に規定する定型取引をいう。)に係る契約についても、適用する。ただし、旧法の規定によつて生じた効力を妨げない。	2 新法第七百二十四條の二の規定は、不法行為による損害賠償請求権の旧法第七百二十四條前段に規定する時効がこの法律の施行の際既に完成していた場合については、適用しない。
(更改に関する経過措置) 第二十七條 施行日前に旧法第五百十三條に規定する更改の契約が締結された更改については、なお従前の例による。	2 前項の規定は、同項に規定する契約の当事者の一方(契約又は法律の規定により解除権を現に行使用することができる者を除く。)により反対の意思表示が書面であつた場合(その内容を記録した電磁的記録によつてされた場合を含む。)には、適用しない。	第三十六條 施行日前に遺言執行者となつた者の旧法第七百二十六條第二項において準用する旧法第七百五條に規定する責任については、なお従前の例による。
(有価証券に関する経過措置) 第二十八條 新法第五百二十條の二から第五百二十條の二十までの規定は、施行日前に発行された証券については、適用しない。	3 前項に規定する反対の意思表示は、施行日前にしなくてはならない。	2 施行日前に遺言執行者となつた者の報酬については、新法第七百二十八條第二項において準用する新法第六百四十八條第三項及び第六百四十八條の二の規定にかかわらず、なお従前の例による。
(契約の成立に関する経過措置) 第二十九條 施行日前に契約の申込みがされた場合におけるその申込み及びこれに対する承諾については、なお従前の例による。	(贈与等に関する経過措置) 第三十四條 施行日前に贈与、売買、消費貸借(旧法第五百八十九條に規定する消費貸借の予約を含む。)、使用貸借、賃貸借、雇用、請負、委任、寄託又は組合の各契約が締結された場合におけるこれらの契約及びこれらの契約に付随する買戻しその他の特約については、なお従前の例による。	附則 第一章 法務省関係 (民法施行法の一部改正) 第一條 民法施行法(明治三十一年法律第十一號)の一部を次のように改正する。 第四條を次のように改める。 第四條 削除 第五十七條を次のように改める。 第五十七條 削除 (民法施行法の一部改正に伴う経過措置) 第二條 この法律の施行の日(以下「施行日」という。)前に作成された前条の規定による改正前の民法施行法第四條に規定する証書の証拠力については、なお従前の例による。
2 施行日前に通知が寄せられた契約の申込みにかかわらず、なお従前の例による。	2 前項の規定にかかわらず、新法第六百四條第二項の規定は、施行日前に貸借借契約が締結された場合において施行日以後にその契約の更新に係る合意がされるときにも適用する。	目次 第一章 法務省関係(第一條―第五十九條) 第二章 内閣官房関係(第六十條・第六十一條) 第三章 内閣府関係 第一節 本府関係(第六十二條―第六十五條) 第二節 国家公安委員会関係(第六十六條―第六十九條)
3 第一項の規定にかかわらず、新法第六百五條の四の規定は、施行日前に不動産の賃貸借契約が締結された場合において施行日以後にその不動産の占有を第三者が妨害し、又はその不動産を第三者が占有しているときにも適用する。	3 第一項の規定にかかわらず、新法第六百五條の四の規定は、施行日前に不動産の賃貸借契約が締結された場合において施行日以後にその不動産の占有を第三者が妨害し、又はその不動産を第三者が占有しているときにも適用する。	第三十五條 旧法第七百二十四條後段(旧法第九百三十四條第三項(旧法第九百三十六條第三項、第九百四十七條第三項、第九百五十條第二項及び第九百五十七條第二項において準用する場合を含む。))において準用する場合を含む。)に規定する期間がこの法律の施行の際既に経過していた場合におけるその期間の制限については、なお従前の例による。
(契約の解除に関する経過措置) 第三十一條 新法第五百三十九條の二の規定は、施行日前にされた契約上の地位を譲渡する旨の合意については、適用しない。	(不法行為等に関する経過措置) 第三十五條 旧法第七百二十四條後段(旧法第九百三十四條第三項(旧法第九百三十六條第三項、第九百四十七條第三項、第九百五十條第二項及び第九百五十七條第二項において準用する場合を含む。))において準用する場合を含む。)に規定する期間がこの法律の施行の際既に経過していた場合におけるその期間の制限については、なお従前の例による。	第三節 金融庁関係(第七十條―第九十三條) 第四節 消費者庁関係(第九十四條―第百三〇三條) 第四章 復興庁関係(第百四條・第百五條) 第五章 総務省関係(第百六條―第百十八條) 第六章 財務省関係(第百十九條―第百四十二條) 第七章 文部科学省関係(第百四十三條―第百五十九條) 第八章 厚生労働省関係(第百六十條―第百三十八條) 第九章 農林水産省関係(第百三十九條―第百六十七條) 第十章 経済産業省関係(第百六十八條―第百三十二條) 第十一章 国土交通省関係(第百三十三條―第百四十九條) 第十二章 環境省関係(第百五十條―第百五十八條) 第十三章 防衛省関係(第百五十九條・第百六十條) 第十四章 罰則に関する経過措置及び政令への委任(第百六十一條・第百六十二條)

2 施行日前に発行された指図証券、無記名証券及び民法の一部を改正する法律(平成二十七年法律第 号。以下「民法改正法」という。)による改正前の民法(明治二十九年法律第八十九号。以下「旧民法」という。)第四百七十一条に規定する証券に係る権利の失権については、なお従前の例による。

(商法の一部改正)

第三条 商法(明治三十二年法律第四十八号)の一部を次のように改正する。

目次中「第五百九十二条」を「第五百九十二条ノ二」に改める。

第十八条の二第一項ただし書中「害すべき事実を害すること」に改め、同条第二項中「二十年」を「十年」に改める。

第五百七条を次のように改める。

第五百七条 削除

第五百八条第二項中「第五百二十三条」を「第五百二十四条」に改める。

第五百十三條第一項中「次条の法定利率による利息をいう。以下同じ。」を削る。

第五百十四條を次のように改める。

第五百十四條 削除

第五百十六條第二項を削る。

第五百十七條から第五百二十條までを次のように改める。

第五百十七條から第五百二十條まで 削除

第五百二十二條及び第五百二十三條を次のように改める。

第五百二十二條第二項を次のように改める。

2 前項に規定する場合において、買主は、同項の規定による検査により売買の目的物が種類、品質又は数量に関して契約の内容に適合しないことを発見したときは、直ちに売主に

対してその旨の通知を発しなれば、その不適合を理由とする履行の追完の請求、代金の減額の請求、損害賠償の請求及び契約の解除

をすることができない。売買の目的物が種類又は品質に関して契約の内容に適合しないことを直ちに発見することができない場合において、買主が六箇月以内にその不適合を発見したときも、同様とする。

第五百二十六條第三項中「売主がその瑕疵又は数量の不足につきを」を「売買の目的物が種類、品質又は数量に関して契約の内容に適合しないことにつき売主が」に改める。

第五百六十七條中「債権ハ」の下に「之ヲ行使スルコトヲ得ル時ヨリ」を加える。

第五百七十六條を次のように改める。

第五百七十六條 運送品ノ全部又ハ一部分ガ其性質又ハ瑕疵ニ因リテ滅失シタルトキハ荷送人ハ運送賃ノ支払ヲ拒ムコトヲ得ズ

第二編第八章第三節中第五百九十二条の次に次の一条を加える。

第五百九十二条ノ二 第五百六十七條ノ規定ハ旅客ノ運送人ニ之ヲ準用ス

第六百十三條第二項中「手形法」の下に「昭和七年法律第二十号」を加える。

第七百六十五條中「債権ハ」の下に「之ヲ行使スルコトヲ得ル時ヨリ」を加える。

第七百九十八條第二項中「ヨリ」の下に「船舶ノ衝突ニ付テハ損害及び加害者ヲ知りタル時ヨリ」を加える。

(商法の一部改正に伴う経過措置)

第四条 施行日前に商人の他の商人に対する営業の譲渡に係る契約が締結された場合におけるその営業譲渡については、前条の規定による改正後の商法(以下この条において「新商法」という。)第十八条の二の規定にかかわらず、なお従前の例による。

2 施行日前にされた前条の規定による改正前の商法(以下この条において「旧商法」という。)第五百七条に規定する契約の申込みについては、なお従前の例による。

3 施行日前に旧商法第五百十四條に規定する商事法定利率による利息が生じた場合におけるそ

の利息を生ずべき債権(商行為によつて生じたものに限る。)に係る法定利率については、なお従前の例による。施行日前に債務者が遅滞の責任を負つた場合における遅延損害金を生ずべき債権(商行為によつて生じたものに限る。)に係る法定利率についても、同様とする。

4 施行日前に生じた指図債権及び無記名債権(その原因である法律行為が施行日前にされたものを含む。)に係る弁済の場所及びその証券の提示については、なお従前の例による。

5 施行日前に発行された旧商法第五百十八條に規定する有価証券に係るその喪失の場合の権利行使方法並びにその譲渡方法及び善意取得については、なお従前の例による。

6 施行日前にされた商行為によつて生じた債務に係る取引時間については、なお従前の例による。

7 施行日前にされた商行為によつて生じた債権に係る消滅時効の期間については、なお従前の例による。

8 施行日前に締結された売買契約に係る買主に目的物の検査及び通知については、新商法第五百二十六條第二項及び第三項の規定にかかわらず、なお従前の例による。

9 施行日前に締結された運送契約に係る運送賃については、新商法第五百七十六條(新商法第七百六十六條(新商法第七百八十七條において準用する場合を含む。))において準用する場合を含む。)の規定にかかわらず、なお従前の例による。

10 新商法第五百九十二条ノ二の規定は、施行日前に締結された運送契約に係る旅客の運送人の債権については、適用しない。

11 施行日前に船舶の衝突による債権が生じた場合におけるその債権の消滅時効の期間については、新商法第七百九十八條第二項の規定にかかわらず、なお従前の例による。

(工場抵当法の一部改正)

第五条 工場抵当法(明治三十八年法律第五十四

号)の一部を次のように改正する。

第二条第一項ただし書中「民法第四百二十四

條ノ規定ニ依リ債権者ガ債務者ノ行為ヲ取消ス」を「債務者ノ行為ニ付キ民法(明治二十九年

法律第八十九号)第四百二十四條第三項ニ規定スル詐害行為取消請求ヲスル」に改める。

(漁業財団抵当法の一部改正)

第六条 漁業財団抵当法(大正十四年法律第九号)の一部を次のように改正する。

第三条第三項中「民法第四百二十四條ノ規定

ニ依リ債権者ガ債務者ノ行為ヲ取消ス」を「債務者ノ行為ニ付キ民法(明治二十九年法律第八十九号)第四百二十四條第三項ニ規定スル詐害行為取消請求ヲスル」に改める。

第三条ノ二第二項中「前条第四項」を「第二条第四項」に改める。

(抵当証券法の一部改正)

第七条 抵当証券法(昭和六年法律第十五号)の一部を次のように改正する。

第七条第一項第四号中「シテ其ノ弁済期ガ抵当権者ノ債権ノ弁済期以前ニ到来スルモノ」を削る。

第四十條中「民法第四百七十條、第四百七十二條、商法第五百十六條第二項、第五百十七條、第五百十八條」を削り、「第六十九條及民法施行法第五十七條」を「第六十九條」に改める。

(抵当証券法の一部改正に伴う経過措置)

第八条 施行日前の原因に基づいて債権が生じた場合におけるその債権を理由とする抵当証券の交付又は再交付に関する異議については、前条の規定による改正後の抵当証券法(以下この条において「新抵当証券法」という。)第七条第一項第四号(新抵当証券法第二十二條において準用する場合を含む。)の規定にかかわらず、なお従前の例による。

2 施行日前に発行された抵当証券については、新抵当証券法第四十條の規定にかかわらず、なお従前の例による。

（手形法の一部改正）

第九条 手形法（昭和七年法律第二十号）の一部を次のように改正する。

第十一条第二項中「指名債権」を「民法（明治二十九年法律第八十九号）第三編第一章第四節ノ規定ニ依ル債権」に改める。

第二十条第一項ただし書中「指名債権」を「民法第三編第一章第四節ノ規定ニ依ル債権」に改める。

第四十八条第一項第二号中「年六分ノ率」を「法定利率（国内ニ於テ振出し且支払フベキ為替手形以外ノ為替手形ニ在リテ八年六分ノ率次条第二号ニ於テ同ジ）」に改める。

第四十九条第二号中「年六分ノ率」を「法定利率」に改める。

第七十一条一条中「中断ハ」を「完成猶予又ハ更新ハ」に改め、「中断ノ」を削る。

第八十六条を次のように改める。

第八十六条 裏書人ノ他ノ裏書人及振出人ニ対スル為替手形上及約束手形上ノ請求権ノ消滅時効ハ其ノ者ガ訴ヲ受ケタル場合ニ於テ前者ニ対シ訴訟告知ヲ為シタルトキハ訴訟ガ終了スル（確定判決又ハ確定判決ト同一ノ効力ヲ有スルモノ）ニ依リテ其ノ訴ニ係ル権利ガ確定セズシテ訴訟ガ終了シタル場合ニ在リテハ其ノ終了ノ時ヨリ六月ヲ経過スル）迄ノ間ハ完成セズ

前項ノ場合ニ於テ確定判決又ハ確定判決ト同一ノ効力ヲ有スルモノニ依リテ其ノ訴ニ係ル権利ガ確定シタルトキハ時効ハ訴訟ノ終了ノ時ヨリ更ニ其ノ進行ヲ始ム

（手形法の一部改正に伴う経過措置）

第十条 施行日前に満期が到来した為替手形又は約束手形の所持人の請求権については、前条の規定による改正後の手形法（以下この条において「新手法」という。）第四十八条第一項（新手法第七十七条第一項において準用する場合を含む。）の規定にかかわらず、なお従前の例による。

2 施行日前に支払をした為替手形又は約束手形を受け戻した者のその前者に対する請求権については、新手法第四十九条（新手法第七十七条第一項において準用する場合を含む。）の規定にかかわらず、なお従前の例による。

3 施行日前に前条の規定による改正前の手形法（以下この項において「旧手法」という。）第七十一条（旧手法第七十七条第一項において準用する場合を含む。）又は第八十六条に規定する時効の中断の事由が生じた場合におけるその事由の効力については、なお従前の例による。

（小切手法の一部改正）

第十一条 小切手法（昭和八年法律第五十七号）の一部を次のように改正する。

第十四条第二項中「指名債権」を「民法（明治二十九年法律第八十九号）第三編第一章第四節ノ規定ニ依ル債権」に改める。

第二十四条第一項中「指名債権」を「民法第三編第一章第四節ノ規定ニ依ル債権」に改める。

第三十三条中「又ハ行為能力ヲ失フモノ」を「意思能力ヲ喪失シ又ハ行為能力ノ制限ヲ受クルモノ」に改める。

第四十四条第二号中「年六分ノ率」を「法定利率（国内ニ於テ振出し且支払フベキ小切手以外ノ小切手ニ在リテ八年六分ノ率次条第二号ニ於テ同ジ）」に改める。

第四十五条第二号中「年六分ノ率」を「法定利率」に改める。

第五十二条一条中「中断ハ」を「完成猶予又ハ更新ハ」に改め、「中断ノ」を削る。

第七十三条を次のように改める。

第七十三条 裏書人ノ他ノ裏書人及振出人ニ対スル小切手ノ請求権ノ消滅時効ハ其ノ者ガ訴ヲ受ケタル場合ニ於テ前者ニ対シ訴訟告知ヲ為シタルトキハ訴訟ガ終了スル（確定判決又ハ確定判決ト同一ノ効力ヲ有スルモノ）ニ依リテ其ノ訴ニ係ル権利ガ確定セズシテ訴訟ガ終了シタル場合ニ在リテハ其ノ終了ノ時ヨリ六月ヲ経過スル）迄ノ間ハ完成セズ

前項ノ場合ニ於テ確定判決又ハ確定判決ト同一ノ効力ヲ有スルモノニ依リテ其ノ訴ニ係ル権利ガ確定シタルトキハ時効ハ訴訟ノ終了ノ時ヨリ更ニ其ノ進行ヲ始ム

（小切手法の一部改正に伴う経過措置）

第十二条 施行日前に振り出された小切手の効力については、前条の規定による改正後の小切手法（以下この条において「新小切手法」という。）第三十三条の規定にかかわらず、なお従前の例による。

2 施行日前に小切手を提示したその所持人の請求権については、新小切手法第四十四条（新小切手法第五十五条第三項において準用する場合を含む。）の規定にかかわらず、なお従前の例による。

3 施行日前に支払をした小切手を受け戻した者のその前者に対する請求権については、新小切手法第四十五条（新小切手法第五十五条第三項において準用する場合を含む。）の規定にかかわらず、なお従前の例による。

4 施行日前に前条の規定による改正前の小切手法第五十二条又は第七十三条に規定する時効の中断の事由が生じた場合におけるその事由の効力については、なお従前の例による。

（刑事補償法の一部改正）

第十三条 刑事補償法（昭和二十五年法律第一号）の一部を次のように改正する。

第四条第五項中「すでに」を「既に」に、「年五分の割合」を「徴収の日の翌日の法定利率」に改め、同条第六項中「すでに」を「既に」に、「又」を「また」に、「年五分の割合」を「徴収の日の翌日の法定利率」に改める。

（刑事補償法の一部改正に伴う経過措置）

第十四条 施行日前にされた罰金、科料又は追徴の執行による補償については、前条の規定による改正後の刑事補償法第四条第五項及び第六項の規定にかかわらず、なお従前の例による。

（自動車抵当法の一部改正）

第十五条 自動車抵当法（昭和二十六年法律第一百

八十七号）の一部を次のように改正する。

第六条中「附加して」を「付加して」に改め、同条ただし書中「但し」を「ただし」に、「定が」を「定めが」に、「民法（明治二十九年法律第八十九号）第四百二十四条の規定により他の債権者が債務者の行為を取り消す」を「債務者の行為について民法（明治二十九年法律第八十九号）第四百二十四条第三項に規定する詐害行為取消請求をする」に改める。

（航空機抵当法の一部改正）

第十六条 航空機抵当法（昭和二十八年法律第六十六号）の一部を次のように改正する。

第六条中「附加して」を「付加して」に改め、同条ただし書中「但し」を「ただし」に、「定が」を「定めが」に、「民法（明治二十九年法律第八十九号）第四百二十四条の規定により他の債権者が債務者の行為を取り消す」を「債務者の行為について民法（明治二十九年法律第八十九号）第四百二十四条第三項に規定する詐害行為取消請求をする」に改める。

（建設機械抵当法の一部改正）

第十七条 建設機械抵当法（昭和二十九年法律第九十七号）の一部を次のように改正する。

第十条中「附加して」を「付加して」に改め、同条ただし書中「但し」を「ただし」に、「定が」を「定めが」に、「民法（明治二十九年法律第八十九号）第四百二十四条の規定により他の債権者が債務者の行為を取り消す」を「債務者の行為について民法（明治二十九年法律第八十九号）第四百二十四条第三項に規定する詐害行為取消請求をする」に改める。

（企業担保法の一部改正）

第十八条 企業担保法（昭和三十三年法律第六十六号）の一部を次のように改正する。

第四十九条の見出しを「（債権の譲渡の通知）」に改め、同条第一項中「指名債権」を「債権（民法第三編第一章第四節の規定により譲渡されるものに限る）」に改め、同条第二項中「指名債権」を「その債権」に改める。

(企業担保法の一部改正に伴う経過措置)

第十九条 施行日前に売却された指名債権の譲渡の通知については、前条の規定による改正後の企業担保法第四十九条の規定にかかわらず、なお従前の例による。

(執行官法の一部改正)

第二十条 執行官法(昭和四十一年法律第百十一号)の一部を次のように改正する。

第十四条中「五年間行なわないを」これらを行使することができる時から五年間行しないうに改める。

(船舶の所有者等の責任の制限に関する法律の一部改正)

第二十一条 船舶の所有者等の責任の制限に関する法律(昭和五十年法律第九十四号)の一部を次のように改正する。

第十九条第一項中「年六パーセントの割合」を「事故発生の日における法定利率」に改める。

第二十二條第一項中「年六パーセントの割合」を「指定日の翌日における法定利率」に改める。

第三十条第一項中「まで年六パーセントの割合」を「規定する年六パーセントの割合」を「規定する法定利率」に改める。

第五十四条を次のように改める。

(時効の完成猶予)

第五十四条 責任制限手続への参加がある場合には、責任制限手続への参加が終了する(責任制限手続終結の決定によらないで責任制限手続への参加が終了した場合にあつては、その終了の時から六月を経過する)までの間は、時効は、完成しない。

(船舶の所有者等の責任の制限に関する法律の一部改正に伴う経過措置)

第二十二條 施行日前に発生した事故に係る責任制限事件における供託命令及び受託者が供託しなかつた場合の義務については、前条の規定による改正後の船舶の所有者等の責任の制限に関する法律(以下この項において「新責任制限法」

という。)第十九条第一項(新責任制限法第三十七條第二項において準用する場合を含む。)、第二十二條第一項(新責任制限法第三十條第二項及び第三十七條第二項において準用する場合を含む。)、及び第三十條第一項(新責任制限法第三十八條第二項において準用する場合を含む。))の規定にかかわらず、なお従前の例による。

2 施行日前に前条の規定による改正前の船舶の所有者等の責任の制限に関する法律第五十四条に規定する時効の中断の事由が生じた場合におけるその事由の効力については、なお従前の例による。

(民事執行法の一部改正)

第二十三条 民事執行法(昭和五十四年法律第四号)の一部を次のように改正する。

第二十二條第四号の二中「若しくは家事事件」を「家事事件若しくは国際的な子の奪取の民事上の側面に関する条約の実施に関する法律(平成二十五年法律第四十八号)第二十九條に規定する子の返還に関する事件」に改める。

第八十八條第二項中「までの」の下に「配当等の日における」を加える。

第七十一條第一項を次のように改める。

次の各号に掲げる強制執行は、執行裁判所がそれぞれ当該各号に定める旨を命ずる方法により行う。

一 作為を目的とする債務についての強制執行 債務者の費用で第三者に当該作為をさせること。

二 不作為を目的とする債務についての強制執行 債務者の費用で、債務者がした行為の結果を除去し、又は将来のため適当な処分をすべきこと。

第七十一條第三項、第四項及び第六項中「第一項の」の下に「規定による」を加える。

(民事執行法の一部改正に伴う経過措置)

第二十四條 施行日前に配当等(前条の規定による改正前の民事執行法第八十四條第三項に規定する配当等をいう。以下この条において同じ。)

の日がある場合におけるその配当等の額については、前条の規定による改正後の民事執行法(以下この条において「新民事執行法」という。))第八十八條第二項(新民事執行法第百十一條(新民事執行法第百八十八條において準用する場合を含む。))、第百三十九條第四項及び第百四十二條第二項(これらの規定を新民事執行法第百九十二條において準用する場合を含む。))、第百六十一條第六項及び第百六十六條第二項(これらの規定を新民事執行法第百九十三條第二項において準用する場合を含む。))、第百六十七條の十一第七項並びに第百八十八條において準用する場合を含む。))の規定にかかわらず、なお従前の例による。

(借地借家法の一部改正)

第二十五条 借地借家法(平成三年法律第九十号)の一部を次のように改正する。

第十条の見出しを「(借地権の対抗力)」に改め、同条第三項及び第四項を削る。

第二十九條第二項中「民法」の下に「(明治二十九年法律第八十九号)」を加える。

第三十一條の見出しを「(建物賃貸借の対抗力)」に改め、同条第二項及び第三項を削る。

(借地借家法の一部改正に伴う経過措置)

第二十六条 施行日前に前条の規定による改正前の借地借家法(次項において「旧借地借家法」という。))第十條第一項又は第二項の規定により第三者に対抗することができ得る借地権の目的である土地の売買契約が締結された場合におけるその契約に係る契約の解除及び損害賠償の請求については、なお従前の例による。

2 施行日前に旧借地借家法第三十一條第一項の規定により効力を有する賃貸借の目的である建物の売買契約が締結された場合におけるその契約に係る契約の解除及び損害賠償の請求については、なお従前の例による。

(民事訴訟法の一部改正)

第二十七條 民事訴訟法(平成八年法律第百九号)の一部を次のように改正する。

第四十九條の見出し中「中断等」を「完成猶予等」に改め、同条中「主張して、」を「主張する者が」に、「その参加は、」を「時効の完成猶予に関する」に、「当該に、」を「さかのぼって時効の中断又は法律上の期間の遵守の効力を生ずる」を、「裁判上の請求があつたものとみなす」に改め、同条に次の一項を加える。

2 前項に規定する場合には、その参加は、訴訟の係属の初めに遡って法律上の期間の遵守の効力を生ずる。

第百四十七條を次のように改める。

(裁判上の請求による時効の完成猶予等)

第百四十七條 訴えが提起されたとき、又は第百四十三條第二項(第百四十四條第三項及び第百四十五條第四項において準用する場合を含む。))の書面が裁判所に提出されたときは、その時に時効の完成猶予又は法律上の期間の遵守のために必要な裁判上の請求があつたものとする。

(民事訴訟法の一部改正に伴う経過措置)

第二十八條 施行日前に前条の規定による改正前の民事訴訟法(以下この条において「旧民事訴訟法」という。))第四十九條(旧民事訴訟法第五十條第三項(旧民事訴訟法第五十一條において準用する場合を含む。))及び第五十一條において準用する場合を含む。))又は第百四十七條(旧民事訴訟法第百九十七條(旧民事訴訟法第百三十三條(旧民事訴訟法第百三十二條第二項(旧民事訴訟法第百四十一條及び第百三十八條第二項において準用する場合を含む。))及び第百三十四條第一項において準用する場合を含む。))及び第百三十四條第一項及び第百三十八條第四項において準用する場合を含む。))に規定する時効の中断の事由が生じた場合におけるその事由の効力については、なお従前の例による。

(動産及び債権の譲渡の対抗要件に関する民法の特例等に関する法律の一部改正)

第二十九條 動産及び債権の譲渡の対抗要件に関する

する民法の特例等に関する法律(平成十年法律第四百四号)の一部を次のように改正する。

第四條第一項中「指名債権であつて」を削り、「とするもの」の下に「であつて、民法第三編第一章第四節の規定により譲渡されるもの」を加え、「民法」を「同法」に改め、同条第三項及び第四項を次のように改める。

3 債権譲渡登記がされた場合においては、民法第四百六十六條の六第三項、第四百六十八條第一項並びに第四百六十九條第一項及び第二項の規定は、前項に規定する場合に限り適用する。この場合において、同法第四百六十六條の六第三項中「譲渡人が次条とあるのは「譲渡人若しくは譲受人が動産及び債権の譲渡の対抗要件に関する民法の特例等に関する法律(平成十年法律第四百四号)第四條第二項」と、「同条」とあるのは「同項」とする。

4 第一項及び第二項の規定は当該債権の譲渡に係る第十條第一項第二号に掲げる事由に基づいてされた債権譲渡登記の抹消登記について、民法第四百六十八條第一項並びに第四百六十九條第一項及び第二項の規定はこの項において準用する第二項に規定する場合について、それぞれ準用する。この場合において、同法第四百六十八條第一項中「対抗要件具備時」とあるのは「動産及び債権の譲渡の対抗要件に関する民法の特例等に関する法律第四條第四項において準用する同条第二項に規定する通知又は承諾がされた時(以下「対抗要件具備時」という。))と、同項並びに同法第四百六十九條第一項及び第二項中「譲渡人」とあるのは「譲受人」と、「譲受人」とあるのは「譲渡人」と読み替へるものとする。

第十四條第一項中「第四條及び」を「第四條(第三項を除く。))及び」に、「法人」を「法人」に、「当該債権」を「当該債権」に改め、「について」の下に「民法第四百六十八條第一項の規定はこの項において準用する第四條第二項に規定する場合について、それぞれ」を加え、「から同条

第三項まで」を「及び同条第二項」に、「民法第四百六十七條」を「同法第四百六十七條」に、「民法第三百六十四條」を「同法第三百六十四條」に、「から同条第四項まで」を「及び同条第四項」に改め、「第十二條第三項」の下に「並びに民法第四百六十八條第一項」を加え、「第四條第二項から第四項まで」を「第四條第二項及び第四項」に改め、「第十條第一項並びに第十一條第二項第一号」の下に「並びに民法第四百六十八條第一項」を、「質権者」との下に「第四條第四項中「民法第四百六十八條第一項並びに第四百六十九條第一項及び第二項」とあるのは「民法第四百六十八條第一項」とを加え、「同法第四百六十七條」を「民法第四百六十七條」に、「同法第三百六十四條」を「民法第三百六十四條」に改め、「設定」との下に「民法第四百六十八條第一項中「対抗要件具備時」とあるのは「動産及び債権の譲渡の対抗要件に関する民法の特例等に関する法律第十四條第一項において準用する同法第四條第二項に規定する通知又は承諾がされた時」とを加え、同条第二項中「規定は」を「規定は」に、「設定し」を「設定し」に、「について準用する」を「について、それぞれ準用する」に改める。

(動産及び債権の譲渡の対抗要件に関する民法の特例等に関する法律の一部改正に伴う経過措置) 第三十條 施行日前に債権の譲渡の原因である法律行為がされた場合におけるその債権の譲渡については、前条の規定による改正後の動産及び債権の譲渡の対抗要件に関する民法の特例等に関する法律第四條第一項、第三項及び第四項並びに第十四條第一項の規定にかかわらず、なお従前の例による。

(特定破産法人の破産財団に属すべき財産の回復に関する特別措置法の一部改正) 第三十一條 特定破産法人の破産財団に属すべき財産の回復に関する特別措置法(平成十一年法律第四百十八号)の一部を次のように改正する。

第四條第二項中「それぞれその前者に対する否認の原因のある」を「特定破産法人がした行為が破産債権者を害する」に改める。

第五條の見出しを「(否認権行使の期間の特例)」に改める。

(特定破産法人の破産財団に属すべき財産の回復に関する特別措置法の一部改正に伴う経過措置) 第三十二條 施行日前にされた破産手続開始の申立て又は施行日前に職権でされた破産手続開始の決定に係る破産事件における否認及び施行日前に特定破産法人(前条の規定による改正前の特定破産法人の破産財団に属すべき財産の回復に関する特別措置法第二條第二項に規定する特定破産法人をいう。))によりされた行為の破産事件における否認については、なお従前の例による。

(民事再生法の一部改正) 第三十三條 民事再生法(平成十一年法律第二百二十五号)の一部を次のように改正する。

第十二條第一項第二号、第十六條第四項第一号及び第三十二條中「第四百三十四條の二第二項」を「第四百三十四條の四第一項」に改める。

第四十條の二第一項中「第四百二十三條若しくは第四百二十四條」を「第四百二十三條若しくは第四百二十四條」に改め、同条第二項中「第四百二十三條」を「第四百二十三條第一項又は第四百二十三條の七」に改める。

第八十七條第一項第一号中「法定利息」を「再生手続開始の時における法定利率による利息」に改め、同項第二号中「額」の下に「再生手続開始の時における」を加える。

第二百二十七條第一項第一号ただし書及び第二号ただし書中「害する事実を」を「害すること」に改める。

第二百二十七條の二第二項第一号中「害する」の下に「こととなる」を加え、「この条並びに第百

三十二條の二第二項及び第三項において」を削る。

第二百二十七條の三第一項第二号ただし書及び第百三十二條第二項中「害する事実を」を「害すること」に改める。

第百三十四條第一項中「次に掲げる場合には」を「次の各号に掲げる場合において、否認しようとする行為の相手方に対して否認の原因があるときは」に改め、「否認権は」の下に「当該各号に規定する」を加え、同項に次のただし書を加える。

ただし、当該転得者が他の転得者から転得した者である場合においては、当該転得者の前に転得した全ての転得者に対しても否認の原因があるときに限る。

第百三十四條第一項第一号及び第二号ただし書中「それぞれその前者に対する否認の原因のある」を「再生債務者がした行為が再生債権者を害する」に改め、同項第三号中「場合において、それぞれその前者に対して否認の原因が」を「者で」に改める。

第百三十四條の三を第百三十四條の五とし、第百三十四條の二を第百三十四條の四とし、第百三十四條の次に次の二條を加える。

(再生債務者の受けた反対給付に関する転得者の権利等)

第百三十四條の二 再生債務者がした第百二十七條第一項若しくは第三項又は第百二十七條の二第一項に規定する行為が転得者に対する否認権の行使によつて否認されたときは、転得者は、第百三十二條の二第一項各号に掲げる区分に応じ、それぞれ当該各号に定める権利を行使することができる。ただし、同項第一号に掲げる場合において、再生債務者の受けた反対給付の価額が、第四項に規定する転得者がした反対給付又は消滅した転得者の債権の価額を超えるときは、転得者は、共益債権者として再生債務者の受けた反対給付の価額の償還を請求する権利を行使することがで

きる。

2 前項の規定にかかわらず、第三百三十二条の二第一項第二号に掲げる場合において、当該行為の当時、再生債務者が対価として取得した財産について隠匿等の処分をする意思を有し、かつ、当該行為の相手方が再生債務者がある意思を有していたことを知っていたときは、転得者は、同条第二項各号に掲げる区分に応じ、それぞれ当該各号に定める権利を行使することができる。

3 前項の規定の適用については、当該行為の相手方が第三百二十七条の二第二項各号に掲げる者のいずれかであるときは、その相手方は、当該行為の当時、再生債務者が前項の隠匿等の処分をする意思を有していたことを知っていたものと推定する。

4 第一項及び第二項の規定による権利の行使は、転得者がその前から財産を取得するためにした反対給付又はその前から財産を取得することによって消滅した債権の価額を限度とする。

5 否認権限を有する監督委員又は管財人は、第一項に規定する行為を転得者に対する否認権の行使によつて否認しようとするときは、第三百三十二条第一項の規定により再生債務者財産に復すべき財産の返還に代えて、転得者に対し、当該財産の価額から前各項の規定により共益債権となる額(第三百三十二条の二第一項第一号に掲げる場合(第一項ただし書に該当するときを除く。))にあつては、再生債務者の受けた反対給付の価額を控除した額の償還を請求することができる。

(相手方の債権に関する転得者の権利)

第三百三十四条の三 再生債務者がした第二百七条の三第一項に規定する行為が転得者に対する否認権の行使によつて否認された場合において、転得者がその受けた給付を返還し、又はその価額を償還したときは、転得者は、当該行為がその相手方に対する否認権の行使

によつて否認されたとすれば第三百三十三条の規定により原状に復すべき当該行為の相手方の債権を行使することができる。この場合には、前条第四項の規定を準用する。

第三百三十九条中「二十年」を「十年」に改める。
第四百零一条第一項中「第四百二十四条」を「第四百二十四条第一項」に改める。
第四百四十三条第五項中「中斷」を「完成猶予及び更新」に改める。

第二百三十八条中「第四百二十三条」を「第四百二十三条第一項又は第四百二十三条の七」に改める。

(民事再生法の一部改正に伴う経過措置)

第三十四条 施行日前に再生手続開始の決定があつた再生事件における再生債権者の議決権については、前条の規定による改正後の民事再生法(第三項において「新民事再生法」という。)第八十七条第一項の規定にかかわらず、なお従前の例による。

2 施行日前にされた再生手続開始の申立てに係る再生事件における否認及び施行日前にされた行為の再生事件における否認については、なお従前の例による。

3 施行日前にされた再生手続開始の申立てに係る再生事件における再生債務者(前条の規定による改正前の民事再生法(次項において「旧民事再生法」という。))第二十一条に規定する再生債務者をいう。)について施行日以後に新民事再生法第二百五十二条第一項各号又は第三項に規定する破産手続開始の決定がされた場合における当該決定に係る破産事件における否認については、なお従前の例による。

4 施行日前に旧民事再生法第四百三十三条第五項に規定する時効の中断の事由が生じた場合におけるその事由の効力については、なお従前の例による。

(犯罪被害者等の権利利益の保護を図るための刑事手続に付随する措置に関する法律の一部改正)

第三十五条 犯罪被害者等の権利利益の保護を図るための刑事手続に付随する措置に関する法律(平成十二年法律第七十五号)の一部を次のように改正する。

第二十八条を次のように改める。

(時効の完成猶予)

第二十八条 損害賠償命令の申立てについて、前条第一項の決定(同項第一号に該当することを理由とするものを除く。)の告知があつたときは、当該告知を受けた時から六月を経過するまでの間は、時効は、完成しない。

(犯罪被害者等の権利利益の保護を図るための刑事手続に付随する措置に関する法律の一部改正に伴う経過措置)

第三十六条 施行日前に前条の規定による改正前の犯罪被害者等の権利利益の保護を図るための刑事手続に付随する措置に関する法律第二十三条第一項に規定する損害賠償命令の申立てがされた場合におけるその申立てに係る時効の特例については、前条の規定による改正後の犯罪被害者等の権利利益の保護を図るための刑事手続に付随する措置に関する法律第二十八条の規定にかかわらず、なお従前の例による。

(会社更生法の一部改正)

第三十七条 会社更生法(平成十四年法律第一百五十四号)の一部を次のように改正する。

第五十二条の二第二項中「第四百二十三条若しくは第四百二十四条」を「第四百二十三条第一項、第四百二十三条の七若しくは第四百二十四条第一項」に改める。

第八十六条第一項第一号ただし書及び第二号ただし書中「害する事実」を「害すること」に改める。

第八十六条の二第二項第一号中「害する」の下に「こととなる」を加え、「この条並びに第九十一条の二第二項及び第三項においてを削る。」

第八十六条の三第三項第二号ただし書及び第九十一条第二項中「害する事実」を「害すること」に改める。

第九十三条第一項中「次に掲げる場合には」を「次の各号に掲げる場合において、否認しようとする行為の相手方に対して否認の原因があるときは」に改め、「否認権は、」の下に「当該各号に規定する」を加え、同項に次のただし書を加える。

ただし、当該転得者が他の転得者から転得した者である場合においては、当該転得者の前に転得した全ての転得者に対して否認の原因があるときに限る。

第九十三条第一項第一号及び第二号ただし書中「それぞれその前者に對する否認の原因のある」を「更生会社がした行為が更生債権者等を害する」に改め、同項第三号中「場合において、それぞれその前者に對して否認の原因が」を「者で」に改め、同条の次に次の二条を加える。

(更生会社の受けた反対給付に関する転得者の権利等)

第九十三条の二 更生会社がした第八十六条第一項若しくは第三項又は第八十六条の二第一項に規定する行為が転得者に対する否認権の行使によつて否認されたときは、転得者は、第九十一条の二第二項各号に掲げる区分に応じ、それぞれ当該各号に定める権利を行使することができる。ただし、同項第一号に掲げる場合において、更生会社の受けた反対給付の価額が、第四項に規定する転得者がした反対給付又は消滅した転得者の債権の価額を超えるときは、転得者は、共益債権者として更生会社の受けた反対給付の価額の償還を請求する権利を行使することができる。

2 前項の規定にかかわらず、第九十一条の二第一項第二号に掲げる場合において、当該行為の当時、更生会社が対価として取得した財産について隠匿等の処分をする意思を有し、かつ、当該行為の相手方が更生会社がその意思を有していたことを知っていたときは、転得者は、同条第二項各号に掲げる区分に応じ、それぞれ当該各号に定める権利を行使す

ることができる。

3 前項の規定の適用については、当該行為の相手方が第八十六条の二第二項各号に掲げる者のいずれかであるときは、その相手方は、当該行為の当時、更生会社が前項の隠匿等の処分をする意思を有していたことを知っていたものと推定する。

4 第一項及び第二項の規定による権利の行使は、転得者がその前者から財産を取得するためにした反対給付又はその前者から財産を取得することによって消滅した債権の価額を限度とする。

5 管財人は、第一項に規定する行為を転得者に対する否認権の行使によって否認しようとするときは、第九十一条第一項の規定により更生会社財産に復すべき財産の返還に代えて、転得者に対し、当該財産の価額から前各項の規定により公益債権となる額第九十一条の二第二項第一号に掲げる場合（第一項ただし書に該当するときはを除く。）にあつては、更生会社の受けた反対給付の価額を控除した額の償還を請求することができる。

（相手方の債権に関する転得者の権利）

第九十三条の三 更生会社がした第八十六条の三第一項に規定する行為が転得者に対する否認権の行使によって否認された場合において、転得者がその受けた給付を返還し、又はその価額を償還したときは、転得者は、当該行為がその相手方に対する否認権の行使によつて否認されたとすれば第九十二条の規定により原状に復すべき相手方の債権を行使することができる。この場合には、前条第四項の規定を準用する。

第九十八条中「二十年」を「十年」に改める。
第一百条第四項中「中断」を「完成猶予及び更新」に改める。

第三百三十六条第一項第一号中「法定利息」を「更生手続開始の時点における法定利率による利息」に改め、同項第二号中「額が」の下に「更生手

続開始の時点における」を加える。

（会社更生法の一部改正に伴う経過措置）

第三十八条 施行日前にされた更生手続開始の申立てに係る更生事件（前条の規定による改正前の会社更生法以下この条において「旧会社更生法」という。）第二十三条第三項に規定する更生事件をいう。以下この条において同じ。）における否認及び施行日前にされた行為の更生事件における否認については、なお従前の例による。

2 施行日前にされた更生手続開始の申立てに係る更生事件における更生会社（旧会社更生法第二十七条第七項に規定する更生会社をいう。）又は開始前会社（同条第六項に規定する開始前会社をいう。）について施行日以後に前条の規定による改正後の会社更生法第四項において「新会社更生法」という。）第二百五十四条第一項各号又は第三項に規定する破産手続開始の決定がされた場合における当該決定に係る破産事件における否認については、なお従前の例による。

3 施行日前に旧会社更生法第百条第四項に規定する時効の中断の事由が生じた場合におけるその事由の効力については、なお従前の例による。

4 施行日前に更生手続開始の決定があつた更生事件における更生債権者等（旧会社更生法第二十三条第三項に規定する更生債権者等をいう。）の議決権については、新会社更生法第百三十六条第一項の規定にかかわらず、なお従前の例による。

（仲裁法の一部改正）

第三十九条 仲裁法（平成十五年法律第百三十八号の一部を次のように改正する。

第二十九条の見出しを「（仲裁手続の開始並びに時効の完成猶予及び更新）」に改め、同条第二項中「時効中断」を「時効の完成猶予及び更新」に改める。

（仲裁法の一部改正に伴う経過措置）

第四十条 施行日前に前条の規定による改正前の仲裁法第二十九条第二項に規定する時効の中断

の事由が生じた場合におけるその事由の効力については、なお従前の例による。

（破産法の一部改正）

第四十一条 破産法（平成十六年法律第七十五号）の一部を次のように改正する。

第四十五条第一項中「第四百二十三条又は第四百二十四条」を「第四百二十三条第一項、第四百二十三條の七又は第四百二十四条第一項」に改める。

第九十九条第一項第二号中「法定利息」を「破産手続開始の時点における法定利率による利息」に改め、同項第四号中「額が」の下に「破産手続開始の時点における」を加える。

第一百六十条第一項第一号ただし書及び第二号ただし書中「害する事実」を「害すること」に改め、

第一百六十一条第一項第一号中「害する」の下に「こととなる」を加え、「この条並びに第百六十八条第二項及び第三項において」を削る。

第一百六十二条第一項第二号ただし書及び第百六十七條第二項中「害する事実」を「害すること」に改める。

第百七十条第一項中「次に掲げる場合には」を「次の各号に掲げる場合において、否認しようとする行為の相手方に対して否認の原因があるときは」に改め、「否認権は、」の下に「当該各号に規定する」を加え、同項に次のただし書を加える。

ただし、当該転得者が他の転得者から転得した者である場合においては、当該転得者の前に転得した全ての転得者に対しても否認の原因があるときに限る。

第百七十条第一項第一号及び第二号ただし書中「それぞれその前者に対する否認の原因のある」を「破産者がした行為が破産債権者を害する」に改め、同項第三号中「場合において、それぞれその前者に対して否認の原因が」を「者で」に改め、同条の次に次の二条を加える。

（破産者の受けた反対給付に関する転得者の

権利等）

第百七十条の二 破産者がした第百六十条第一項若しくは第三項又は第百六十一条第一項に規定する行為が転得者に対する否認権の行使によつて否認されたときは、転得者は、第百六十八条第一項各号に掲げる区分に応じ、それぞれ当該各号に定める権利を行使することができる。ただし、同項第一号に掲げる場合において、破産者の受けた反対給付の価額が、第四項に規定する転得者がした反対給付又は消滅した転得者の債権の価額を超えるときは、転得者は、財団債権者として破産者の受けた反対給付の価額の償還を請求する権利を行使することができる。

2 前項の規定にかかわらず、第百六十八条第一項第二号に掲げる場合において、当該行為の当時、破産者が対価として取得した財産について隠匿等の処分をする意思を有し、かつ、当該行為の相手方が破産者がその意思を有していたことを知っていたときは、転得者は、同条第二項各号に掲げる区分に応じ、それぞれ当該各号に定める権利を行使することができる。

3 前項の規定の適用については、当該行為の相手方が第百六十一条第二項各号に掲げる者のいずれかであるときは、その相手方は、当該行為の当時、破産者が前項の隠匿等の処分をする意思を有していたことを知っていたものと推定する。

4 第一項及び第二項の規定による権利の行使は、転得者がその前者から財産を取得するためにした反対給付又はその前者から財産を取得することによって消滅した債権の価額を限度とする。

5 破産管財人は、第一項に規定する行為を転得者に対する否認権の行使によつて否認しようとするときは、第百六十七条第一項の規定により破産財団に復すべき財産の返還に代えて、転得者に対し、当該財産の価額から前各

項の規定により財団債権となる額 第六百六十八條第一項第一号に掲げる場合(第一項ただし書に該当するときを除く。)にあつては、破産者の受けた反対給付の価額を控除した額の償還を請求することができる。

(相手方の債権に関する転得者の権利)

第七百七十条の三 破産者がした第六百六十二條第一項に規定する行為が転得者に対する否認権の行使によつて否認された場合において、転得者がその受けた給付を返還し、又はその価額を償還したときは、転得者は、当該行為がその相手方に対する否認権の行使によつて否認されたとすれば第六百六十九條の規定により原状に復すべき相手方の債権を行使することができる。この場合には、前条第四項の規定を準用する。

第七百七十六條中「二十年」を「十年」に改める。
第七百七十八條第四項中「中断」を「完成猶予及び更新」に改める。

第二百三十五條第二項中「害する事実」を「害すること」に改める。

第二百四十四條の十第四項中「第六百六十八條第二項」の下に「及び第七百七十条の二第二項」を加え、「同項」を「これらの規定に規定する」に改める。

(破産法の一部改正に伴う経過措置)

第四十二條 施行日前に破産手続開始の決定があつた破産事件における劣後的破産債権 前条の規定による改正前の破産法(第三項において「旧破産法」という。)第九十九條第一項に規定する劣後的破産債権をいう。については、なお従前の例による。

2 施行日前にされた破産手続開始の申立て又は施行日前に職権でされた破産手続開始の決定に係る破産事件における否認及び施行日前にされた行為の破産事件における否認については、なお従前の例による。

3 施行日前に旧破産法第七百七十八條第四項(旧破産法第二百四十四條の十一第三項において準

用する場合を含む。)に規定する時効の中断の事由が生じた場合におけるその事由の効力については、なお従前の例による。

(不動産登記法の一部改正)

第四十三條 不動産登記法(平成十六年法律第二十号)の一部を次のように改正する。

第九十六條中「代金」の下に「民法第五百七十九條の別段の合意をした場合にあつては、その合意により定めた金額」を加える。

(裁判外紛争解決手続の利用の促進に関する法律の一部改正)

第四十四條 裁判外紛争解決手続の利用の促進に関する法律(平成十六年法律第五十一号)の一部を次のように改正する。

第一條中「かんがみ」を「鑑み」に、「中断等」を「完成猶予等」に改める。

第二十五條の見出し及び同條第一項中「中断」を「完成猶予」に改める。

(裁判外紛争解決手続の利用の促進に関する法律の一部改正に伴う経過措置)

第四十五條 施行日前に認証紛争解決手続(前条の規定による改正前の裁判外紛争解決手続の利用の促進に関する法律第二條第三号に規定する認証紛争解決手続をいう。)においてその目的となつた請求がされた場合におけるその請求に係る時効の特例については、前条の規定による改正後の裁判外紛争解決手続の利用の促進に関する法律第二十五條の規定にかかわらず、なお従前の例による。

(会社法の一部改正)

第四十六條 会社法(平成十七年法律第八十六号)の一部を次のように改正する。

第二十三條の二第一項ただし書中「害すべき事実」を「害すること」に改め、同條第二項中「二十年」を「十年」に改める。

第五十一條第一項中「第九十三條ただし書」を「第九十三條第一項ただし書」に改め、同條第二項中「を理由として設立時発行株式の引受けの無効を主張し、又は詐欺若しくはを、詐欺又

は」に改める。

第二百二條第五項中「第九十三條ただし書」を「第九十三條第一項ただし書」に改め、同條第六項中「を理由として設立時発行株式の引受けの無効を主張し、又は詐欺若しくはを、詐欺又はは」に改める。

第七百七十七條第四項、第七百七十九條第四項、第七百七十九條第五項、第七百七十九條の八第二項及び第七百八十二條の五第四項中「年六分の利率により算定した」を「法定利率による」に改める。

第二百一十一條第一項中「第九十三條ただし書」を「第九十三條第一項ただし書」に改め、同條第二項中「を理由として募集株式の引受けの無効を主張し、又は詐欺若しくはを、詐欺又はは」に改める。

第三百五十六條第二項中「同項第二号」の下に「又は第三号」を加える。

第四百七十七條第四項中「年六分の利率により算定した」を「法定利率による」に改める。

第五百四十五條第三項中「中断」を「完成猶予及び更新」に改める。

第五百八十一條第二項中「ときは」の下に「これらの権利の行使によつて持分会社がその債務を免れるべき限度において」を加える。

第五百九十三條第四項中「第六百四十八條第二項」の下に「第六百四十八條の二」を加え、

「第六百四十八條第三項」を「第六百四十八條第三項第一号中「委任事務」とあり、及び同項第二号」に改める。

第五百九十五條第二項中「同項第一号」を「同項各号」に改める。

第六百一十一條第六項中「年六分の利率により算定した」を「法定利率による」に改める。

第七百一十一條第一項中「償還請求権は、」の下に「これを行使することができる時から」を加え、

同條第二項中「請求権は、」の下に「これらを行することができる時から」を加える。
第七百五十五條第三項中「請求権は、」の下に「これを行することができる時から」を加える。

第七百五十九條第四項ただし書中「害すべき事実」を「害すること」に改め、同條第六項中「二十年」を「十年」に改める。

第七百六十一條第四項ただし書中「害すべき事実」を「害すること」に改め、同條第六項中「二十年」を「十年」に改める。

第七百六十四條第六項及び第七百六十六條第六項中「二十年」を「十年」に改める。

第七百七十八條第四項、第七百八十六條第四項、第七百八十八條第四項、第七百九十八條第四項、第八百七十七條第四項及び第八百九十九條第四項中「年六分の利率により算定した」を「法定利率による」に改める。

第八百六十三條第二項中「第四百二十五條及び第四百二十六條」を「第四百二十四條の五、第四百二十四條の七第二項及び第四百二十五條から第四百二十六條まで」に、「会社法」を「会社法」に改め、「掲げる行為によつて」との下に「同法第四百二十四條の五第一号中「債務者」とあるのは「清算持分会社(会社法第六百四十五條に規定する清算持分会社をいい、合名会社及び合資会社に限る。以下同じ。)」と、同條第二号並びに同法第四百二十四條の七第二項及び第四百二十五條から第四百二十六條までの規定中「債務者」とあるのは「清算持分会社」とを加える。

第八百六十五條第四項中「及び第四百二十五條」を「第四百二十四條の五、第四百二十四條の七第二項及び第四百二十五條から第四百二十五條の四まで」に、「害すべき事実」を「害すること」に改め、「であること」との下に「同法第四百二十四條の五各号中「債権者を害すること」とあるのは「著しく不正であること」とを加える。

(会社法の一部改正に伴う経過措置)

第四十七條 施行日前に会社の他の会社に対する事業の譲渡に係る契約が締結された場合におけるその事業の譲渡については、前条の規定による改正後の会社法(以下この条において「新会社

四十八条の二の規定にかかわらず、なお従前の例による。

規定する無記名証券に係る債権並びに電子記録債権法(平成十九年法律第二百二号)第二條第一項に規定する電子記録債権を除く。)

(一般社団法人及び一般財団法人に関する法律の一部改正)

第四十九条 一般社団法人及び一般財団法人に関する法律(平成十八年法律第四十八号)の一部を

次のように改正する。

第八十四条第二項中「同項第二号」の下に「又は第三号」を加える。

「第九十三條第一項中『第九十三條ただし書』を、
「第九十三條第一項ただし書」に改め、同條第二
項中を理由として基金の引受けの無効を主張
し、又は詐欺若しくは」を、「詐欺又は」に改め
る。

第百六十五條の見出し中「無効又は」を削り、
同條中「を理由として財産の拠出の無効を主張
し、又は詐欺若しくは」を、「詐欺又は」に改め
る。

(二) 一般社団法人及び一般財団法人に関する法律の一部改正に伴う経過措置

第五十条 施行日前に理事又は清算人となつた者の利益相反取引については、前条の規定による改正後の一般社団法人及び一般財団法人に関する法律(以下この条において「新一般社団・財団

2 法人法」という。第八十四条第二項(新一般社団・財団法人法第九十七条及び第二百三十三条第四項において準用する場合を含む。)の規定にかかわらず、なお従前の例による。

2 施行日前にされた意思表示に係る基金(前条

の規定による改正前の一般社団法人及び一般財団法人に関する法律第百三十一条に規定する基金をいう。の引受けについては、新一般社団法人法第百四十条の規定にかかわらず、な

3 施行日前にされた意思表示に係る財産の抛出については、新一般社団・財団法人法第六十

五条の規定にかかわらず、なお従前の例による。

(信託法の一部改正)

第五十一条 信託法(平成十八年法律第百八号)の一部を次のように改正する。

第十一条第一項中「害すべき事実を知つて」を「害することを知つて」に、「第四百二十四条第一項の規定による取消しを裁判所に請求する」を「第四百二十四条第三項に規定する詐害行為取消請求をする」に改め、ただし書を次のように改める。

ただし、受益者が現に存する場合においては、当該受益者(当該受益者の中に受益権を譲り受けた者がある場合にあっては、当該受益者及びその前に受益権を譲り渡した全ての者の全部が、受益者としての指定(信託行為の定めにより又は第八十九条第一項に規定する受益者指定権等の行使により受益者又は変更後の受益者として指定されることをいう。以下同じ。))を受けたことを知つた時(受益権を譲り受けた者にあつては、受益権を譲り受けた時)において債権者を害することを知つていたときに限る。

第十一条第二項中「請求」を「詐害行為取消請求」に、「害すべき事実」を「害すること」に改め、同項ただし書中「取消し」を「詐害行為取消請求」に改め、同条第四項中「第四百二十四条第一項の規定による取消しを裁判所に請求する」を「第四百二十四条第三項に規定する詐害行為取消請求をする」に改め、ただし書を次のように改める。

ただし、当該受益者(当該受益者が受益権を譲り受けた者である場合にあっては、当該受益者及びその前に受益権を譲り渡した全ての者)が、受益者としての指定を受けたことを知つた時(受益権を譲り受けた者にあつては、受益権を譲り受けた時)において債権者を害することを知つていたときに限る。

第十一条第七項中「害すべき事実」を「害する

こと」に改める。

第十二条第一項中「受けた者」の下に「が、その行為の当時」を加え、「これによつて利益を受けた受益者の全部又は一部」を「受益者が現に存する場合においては、当該受益者(当該受益者の中に受益権を譲り受けた者がある場合にあっては、当該受益者及びその前に受益権を譲り渡した全ての者)の全部が信託法第十一条第一項に規定する受益者としての指定を受けたことを知つた時(受益権を譲り受けた者にあつては、受益権を譲り受けた時)において」と、「知らなかつたときは、この限りでない」とあるのは「知つていたときに限る」に改め、同条第三項中「受けた者」の下に「が、その行為の当時」を加え、「これによつて利益を受けた受益者の全部又は一部」を「受益者が現に存する場合においては、当該受益者(当該受益者の中に受益権を譲り受けた者がある場合にあっては、当該受益者及びその前に受益権を譲り渡した全ての者)の全部が信託法第十一条第一項に規定する受益者としての指定を受けたことを知つた時(受益権を譲り受けた者にあつては、受益権を譲り受けた時)において」と、「知らなかつたときは、この限りでない」とあるのは「知つていたときに限る」に改める。

第二十三条第二項ただし書を削り、同条第三項中「第十一条第七項を」を「第十一条第一項ただし書、第七項」に改める。

第四十三条の見出し中「損失てん補責任等」を「損失填補責任等」に改め、同条第二項を次のように改める。

2 第四十一条の規定による責任に係る債権は、次に掲げる場合には、時効によつて消滅する。

一 受益者が当該債権を行使することができることを知つた時から五年間行使しないとき。

二 当該債権を行使することができる時から

十年間行使しないとき。

第五十四条第四項中「第三項」の下に「並びに第六百四十八条の二」を加える。

第九十三条第二項を次のように改める。

2 前項の規定にかかわらず、受益権の譲渡を禁止し、又は制限する旨の信託行為の定め(以下この項において「譲渡制限の定め」という。は、その譲渡制限の定めがされたことを知り、又は重大な過失によつて知らなかつた譲受人その他の第三者に対抗することができる。

第九十六条第二項を次のように改める。

2 前項の規定にかかわらず、受益権の質入れを禁止し、又は制限する旨の信託行為の定め(以下この項において「質入制限の定め」という。は、その質入制限の定めがされたことを知り、又は重大な過失によつて知らなかつた質権者その他の第三者に対抗することができる。

(信託法の一部改正に伴う経過措置)

第五十二条 施行日前にされた信託の詐害行為取消請求、否認並びに受益権の譲渡及び返還の請求については、なお従前の例による。

2 施行日前にされた信託に係る信託財産に属する財産に対する強制執行等の制限等については、前条の規定による改正後の信託法(第四項において「新信託法」という。)(第二十三条第二項及び第三項の規定にかかわらず、なお従前の例による。

3 施行日前に前条の規定による改正前の信託法(以下この条において「旧信託法」という。)(第四十一条又は第二百五十四条第一項の規定による責任に係る債権が生じた場合におけるその債権の消滅時効の期間については、なお従前の例による。

4 施行日前にされた信託に係る受託者の信託報酬については、新信託法第五十四条第四項において準用する新民法第六百四十八条第三項及び第六百四十八条の二の規定にかかわらず、なお

従前の例による。

5 施行日前に旧信託法第九十三条第二項に規定する別段の定めがされた場合における受益権の譲渡については、なお従前の例による。

6 施行日前に旧信託法第九十六条第二項に規定する別段の定めがされた場合における受益権の質入れについては、なお従前の例による。

(電子記録債権法の一部改正)

第五十三条 電子記録債権法(平成十九年法律第百二号)の一部を次のように改正する。

第十二条の見出し中「無効又は」を削り、同条第一項中「第九十三条ただし書若しくは第九十五条の規定による無効又は同法」を「第九十五条第一項又は」に改め、「及び第二項」を削り、「取消しに」を「強迫による意思表示の取消しに」に改め、同条第二項第二号中「無効又は」を削る。

第十三条中「第一百七十二条第二項」を「第一百七十二条第二号」に、「同項」を「同号」に改める。

第十六条第一項第四号中「不可分債権」の下に「又は連帯債権」を加える。

第二十三条中「電子記録債権は、」の下に「これを行使することができる時から」を加える。

第三十四条第二項中「の債権による相殺」を「が主張することができる抗弁」に改め、同条に次の一項を加える。

3 第一項の規定にかかわらず、前項に規定する場合において、主たる債務者が債権者に対して相殺権、取消権又は解除権を有するときは、これらの権利の行使によつて主たる債務者がその債務を免れるべき限度において、当該電子記録保証人は、債権者に対して債務の履行を拒むことができる。

第三十五条第一項中「第四百五十九条の下に」を「第四百五十九条の二」を加える。

第七十七条第二項及び第三項中「指名債権」を「債権」に改める。

(電子記録債権法の一部改正に伴う経過措置)

第五十四条 施行日前に電子記録(前条の規定に

よる改正前の電子記録債権法(第三項において「旧電子記録債権法」という。第二項第一項に規定する電子記録をいう。)の請求における相手方にされた意思表示については、前条の規定による改正後の電子記録債権法(以下この条において「新電子記録債権法」という。第十二条の規定にかかわらず、なお従前の例による。 2 施行日前に無権代理人が代理人として行為をした場合におけるその無権代理人の責任については、新電子記録債権法第十三条の規定にかかわらず、なお従前の例による。 3 施行日前にされた電子記録保証(旧電子記録債権法第二条第九項に規定する電子記録保証をいう。)については、新電子記録債権法第三十四条第二項及び第三項並びに第三十五条第一項の規定にかかわらず、なお従前の例による。 (保険法の一部改正) 第五十五条 保険法(平成二十年法律第五十六号)の一部を次のように改正する。 第九十五条第一項中「三年間行わない」を「これらを行使用することができるときから三年間行わない」に改め、同条第二項中「一年間行わない」を「これを行使用することができるときから一年間行わない」に改める。 (非訟事件手続法の一部改正) 第五十六条 非訟事件手続法(平成二十三年法律第五十一号)の一部を次のように改正する。 目次中「裁判上の地位に関する事件(第八十五条第九十一条)」を「削除」に改める。 第三編第一章を次のように改める。 第一章 削除 第八十五条から第九十一条まで 削除 第九十二条第一項中「民法」の下に「(明治二十九年法律第八十九号)」を加える。 第九十四条第五項中「第六百五十八條第一項」の下に「及び第二項」を加え、「及び」を並びに「に改める。 (非訟事件手続法の一部改正に伴う経過措置) 第五十七条 民法改正法附則第十八条第一項の規定にかかわらず、なお従前の例による。	定によりなお従前の例によることとされる債権者代位権に関する非訟事件の手続については、なお従前の例による。 2 施行日前に前条の規定による改正前の非訟事件手続法第九十四条第二項の規定により選任し、又は同条第三項の規定により改任された保管者の寄託物の保管については、なお従前の例による。 (大規模な災害の被災地における借地借家に関する特別措置法の一部改正) 第五十八条 大規模な災害の被災地における借地借家に関する特別措置法(平成二十五年法律第六十一号)の一部を次のように改正する。 第四十三条第三項及び第四項を削る。 (大規模な災害の被災地における借地借家に関する特別措置法の一部改正に伴う経過措置) 第五十九条 施行日前に前条の規定による改正前の大規模な災害の被災地における借地借家に関する特別措置法第四十一条又は第二項の規定により第三者に対抗することができるときから第三項に規定する土地の売買契約が締結された場合におけるその契約に係る契約の解除及び損害賠償の請求については、なお従前の例による。 第二章 内閣官房関係 (国家公務員災害補償法の一部改正) 第六十条 国家公務員災害補償法(昭和二十六年法律第九十一号)の一部を次のように改正する。 第二十四条第三項中「中断」を「完成猶予及び更新」に改める。 第二十八条中「権利は、」の下に「これを行使用することができる時から」を加え、「行わない」を「行使用しない」に改める。 (国家公務員災害補償法の一部改正に伴う経過措置) 第六十一条 施行日前に前条の規定による改正前の国家公務員災害補償法第二十四条第三項に規定する時効の中断の事由が生じた場合におけるその事由の効力については、なお従前の例による。	る。 第三章 内閣府関係 第一節 本府関係 (子ども・子育て支援法の一部改正) 第六十二条 子ども・子育て支援法(平成二十四年法律第六十五号)の一部を次のように改正する。 第七十八條第一項中「権利は、」の下に「これらを行使用することができる時から」を加え、同条第二項中「中断」を「完成猶予及び更新」に改め、同条第三項中「民法第五十三條の規定にかかわらず、時効中断」を「時効の更新」に改める。 (子ども・子育て支援法の一部改正に伴う経過措置) 第六十三条 施行日前に前条の規定による改正前の子ども・子育て支援法第七十八條第二項又は第三項に規定する時効の中断の事由が生じた場合におけるその事由の効力については、なお従前の例による。 (大規模災害からの復興に関する法律の一部改正) 第六十四条 大規模災害からの復興に関する法律(平成二十五年法律第五十五号)の一部を次のように改正する。 第三十六条の五中「第四百九十四條後段」を「第四百九十四條第二項ただし書」に、「同条後段中「過失なく」を「同項ただし書中「過失」に、「重大な過失なく」を「重大な過失」に改める。 (大規模災害からの復興に関する法律の一部改正に伴う経過措置) 第六十五条 施行日前に前条の規定による改正前の大規模災害からの復興に関する法律第三十六条の五に規定する損失補償額の払渡しの義務が生じた場合におけるその損失補償額の供託については、なお従前の例による。 第二節 国家公安委員会関係 (古物営業法の一部改正) 第六十六条 古物営業法(昭和二十四年法律第八号)の一部を次のように改正する。	第二十條中「(商法(明治三十二年法律第四十八号)第五百十九條に規定する有価証券)を指図証券、記名式所持人証証券(民法(明治二十九年法律第八十九号)第五百二十條の十三に規定する記名式所持人証証券をいう。及び無記名証券)に改める。 (古物営業法の一部改正に伴う経過措置) 第六十七条 施行日前に発行された有価証券に係る回復の求めについては、前条の規定による改正後の古物営業法第二十條の規定にかかわらず、なお従前の例による。 (警察官の職務に協力援助した者の災害給付に関する法律等の一部改正) 第六十八条 次に掲げる法律の規定中「二年間行わない」を「これを行使用することができるときから二年間行使用しない」に改める。 一 警察官の職務に協力援助した者の災害給付に関する法律(昭和二十七年法律第二百四十五号)第九条 二 犯罪被害者等給付金の支給等による犯罪被害者等の支援に関する法律(昭和五十五年法律第三十六号)第十六條 三 オウム真理教犯罪被害者等を救済するための給付金の支給に関する法律(平成二十年法律第八十号)第十三條 (暴力団員による不当な行為の防止等に関する法律の一部改正) 第六十九条 暴力団員による不当な行為の防止等に関する法律(平成三年法律第七十七号)の一部を次のように改正する。 第九条第二十号中「に瑕疵がない」を「が契約の内容に適合している」に、「瑕疵」を「不適合」に改める。 第三節 金融庁関係 (金融商品取引法の一部改正) 第七十条 金融商品取引法(昭和二十三年法律第二十五号)の一部を次のように改正する。 第二十条を次のように改める。 (虚偽記載のある届出書の届出者等に対する
--	--	--	---

賠償請求権の時刻

第二十條 第十八條の規定による賠償の請求権は、次に掲げる場合には、時刻によつて消滅する。

一 請求権者が有価証券届出書又は目論見書のうちに重要な事項について虚偽の記載があり、又は記載すべき重要な事項若しくは誤解を生じさせないために必要な重要な事実の記載が欠けていたことを知つた時又は相當な注意をもつて知ることができる時から三年間行使しないとき。

二 当該有価証券の募集又は売出しに係る第四條第一項から第三項までの規定による届出がその効力を生じた時又は当該目論見書の交付があつた時から七年間(第十條第一項又は第十一條第一項の規定による停止命令があつた場合には、当該停止命令があつた日からその解除があつた日までの期間は、算入しない。)行使しないとき。

第二十一條の三中「有価証券届出書若しくは」を「同条第一号中「有価証券届出書又は」に、「当該有価証券の募集若しくは」を「同条第二号中「当該有価証券の募集又は」に改める。

第二十三條の二中「第二十條前段」を「第二十條第一号」に改める。

第二十三條の十二第五項中「第二十條を」第二十條第一号に、「第四條第一項」を「同条第二号中「第四條第一項」に改める。

第二十七條の十二第一項中「第二十七條の二十一第一項及び第二項」を「第二十七條の二十一第一項第二号及び第二項第二号」に改める。

第二十七條の二十一を次のように改める。
(公開買付けに係る違反行為による賠償請求権の時刻)

第二十七條の二十一 第二十七條の十七第一項の規定による請求権及び第二十七條の十八第二項の規定の適用がある場合における同条第一項の規定による請求権は、次に掲げる場合には、時刻によつて消滅する。

一 請求権者が当該違反を知つた時又は相當な注意をもつて知ることができる時から一年間行使しないとき。

二 当該公開買付けに係る公開買付期間の末日の翌日から起算して五年間行使しないとき。

2 前条第二項の規定の適用がある場合における同条第一項の規定による請求権は、次に掲げる場合には、時刻によつて消滅する。

一 請求権者が公開買付開始公告等、公開買付届出書、公開買付説明書又は対質問回答報告書のうちに重要な事項について虚偽の記載若しくは表示があり、又は記載若しくは表示すべき重要な事項若しくは誤解を生じさせないために必要な重要な事実の記載が欠けていることを知つた時又は相當な注意をもつて知ることができる時から一年間行使しないとき。

二 当該公開買付けに係る公開買付期間の末日の翌日から起算して五年間行使しないとき。

第二十七條の三十三中「第十八條」と、「有価証券届出書若しくは」を「第十八條第一項」と、同条第一号中「有価証券届出書又は」に、「有価証券の募集若しくは」を「同条第二号中「有価証券の募集又は」に改める。

第九十一條の十五第一項中「第九十三條ただし書」を「第九十三條第一項ただし書」に改め、同条第二項中「を理由として組織変更時発行株式の引受けの無効を主張し、又は詐欺若しくは」を「詐欺又は」に改める。

第九十六條の五十一の見出し及び同条第一項中「中斷」を「完成猶予」に改める。

第七十一條 前条の規定による改正前の金融商品取引法(以下この条において「旧金融商品取引法」という。)(第二十條後段(旧金融商品取引法第二十一條の三(旧金融商品取引法第二十七條及び第二十七條の三十四)において準用する場合を

含む。)、第二十三條の十二第五項(旧金融商品取引法第二十七條において準用する場合を含む。)、第二十七條及び第二十七條の三十三において準用する場合を含む。)、第二十七條の二十一第一項後段(旧金融商品取引法第二十七條の二十二の二第二項において準用する場合を含む。))又は第二十七條の二十一第二項後段に規定する期間がこの法律の施行の際既に経過していた場合におけるその期間の制限については、なお従前の例による。

2 施行日前にされた意思表示に係る組織変更時発行株式(旧金融商品取引法第九十一條の九第一号に規定する組織変更時発行株式をいう。の引受けについては、前条の規定による改正後の金融商品取引法(次項において「新金融商品取引法」という。)(第九十一條の十五の規定にかかわらず、なお従前の例による。)

3 施行日前に紛争解決手続(旧金融商品取引法第九十六條の三十八第十項に規定する紛争解決手続をいう。))においてその目的となつた請求がされた場合におけるその請求に係る時刻の特例については、新金融商品取引法第九十六條の五十一の規定にかかわらず、なお従前の例による。

(船主相互保険組合法の一部改正)
第七十二條 船主相互保険組合法(昭和二十五年法律第九十七號)の一部を次のように改正する。

第三十七條第一項中「双方代理」を「双方代理等」に改める。
(投資信託及び投資法人に関する法律の一部改正)
第七十三條 投資信託及び投資法人に関する法律(昭和二十六年法律第九十八號)の一部を次のように改正する。

第三十九條の九第三項中「請求権は、」の下に「これを行使することができる時から」を加える。
(信用金庫法の一部改正)

第七十四條 信用金庫法(昭和二十六年法律第二百三十八號)の一部を次のように改正する。
第三十五條の五第二項中「双方代理」を「双方代理等」に、「同項第一号」を「同項各号」に改める。

第五十三條第三項第五号の二中「指名金銭債権又は指名金銭債権」を「金銭債権(民法第三編第一章第七節第一款(指図証券)に規定する指図証券、同節第二款(記名式所持人払証券)に規定する記名式所持人払証券、同節第三款(その他の記名証券)に規定するその他の記名証券及び同節第四款(無記名証券)に規定する無記名証券に係る債権並びに電子記録債権法(平成十九年法律第九十二號)第二條第一項(定義)に規定する電子記録債権を除く。以下この号において同じ。))又は金銭債権」に改め、「限る」の下に「以下この号において同じ」を加え、「これ」を「特定社債」に改める。

第五十四條の十七中「消滅時刻は」の下に「その権利を行使することができる時から」を加える。

(信用金庫法の一部改正に伴う経過措置)
第七十五條 施行日前に理事又は清算人となつた者の利益相反取引については、前条の規定による改正後の信用金庫法(以下この条において「新信用金庫法」という。)(第三十五條の五第二項(新信用金庫法第六十四條において準用する場合を含む。))の規定にかかわらず、なお従前の例による。

(長期信用銀行法の一部改正)
第七十六條 長期信用銀行法(昭和二十七年法律第九十七號)の一部を次のように改正する。
第十二條中「消滅時刻は」の下に「その権利を行使することができる時から」を加える。

(労働金庫法の一部改正)
第七十七條 労働金庫法(昭和二十八年法律第二百二十七號)の一部を次のように改正する。
第三十七條の三第二項中「双方代理」を「双方代理等」に、「同項第一号」を「同項各号」に改め

る。

第五十八條第二項第十一号の二(中)指名金銭債権又は指名金銭債権を「金銭債権(民法第三編第一章第七節第一款(指図証券)に規定する指図証券、同節第二款(記名式所持人払証券)に規定する記名式所持人払証券、同節第三款(その他の記名証券)に規定するその他の記名証券及び同節第四款(無記名証券)に規定する無記名証券に係る債権並びに電子記録債権法(平成十九年法律第百二号)第二条第一項(定義)に規定する電子記録債権を除く。以下この号において同じ。又は金銭債権に改め、「限る」の下に。以下この号において同じ)を加え、「これ」を「特定社債」に改める。

(労働金庫法の一部改正に伴う経過措置)

第七十八條 施行日前に理事又は清算人となつた者の利益相反取引については、前条の規定による改正後の労働金庫法(以下この条において「新労働金庫法」という。)第三十七條の三第二項(新労働金庫法第六十八條において準用する場合を含む。)の規定にかかわらず、なお従前の例による。

(預金保険法の一部改正)

第七十九條 預金保険法(昭和四十六年法律第三十四号)の一部を次のように改正する。

第三百三十一條第一項中「譲渡禁止の特約のある債権の譲渡(第六項において「債務の引受け等」という。)」を「契約上の地位の移転に、譲渡禁止の特約のある債権に係る債務者(第六項において「移転債権者等」という。)」を「契約上の地位に係る契約の相手方」に改め、同条第八項中「第三項」を「第四項」に改め、同条第九項とし、同条第七項中「第三項」を「第四項」に改め、同項を同条第八項とし、同条第六項中「移転債権者等が第三項」を「第一項の決定があつた場合における当該決定に係る特定事業譲渡等により救済金融機関又は特定救済金融機関等が引き受ける債務に係る債権者、救済金融機関又は特定救済金融機関等が譲り受ける譲渡制限の意

思表示がされた債権に係る債務者及び救済金融機関又は特定救済金融機関等が譲り受ける契約上の地位に係る契約の相手方(以下この項において「移転債権者等」という。が第四項に、「債務の引受け等」を「当該特定事業譲渡等に係る債権の譲渡及び契約上の地位の移転(以下この項において「債務の引受け等」という。))は、「に改め、同項を同条第七項とし、同条第五項中「第三項」を「第四項」に改め、同項を同条第六項とし、同条第四項を同条第五項とし、同条第三項中「及び譲渡禁止の特約のある」を「譲渡制限の意思表示がされた」に改め、「債務者」の下に「及び契約上の地位に係る契約の相手方」を加え、同項を同条第四項とし、同条第二項中「前項」を「第一項」に改め、同項を同条第三項とし、同条第一項の次に次の一項を加える。

2 民法第四百六十六條第三項及び第四百六十六條の五第一項の規定は、前項の決定があつた場合における当該決定に係る特定事業譲渡等に係る譲渡制限の意思表示(同法第四百六十六條第二項に規定する譲渡制限の意思表示をいう。第四項及び第七項において同じ)がされた債権の譲渡については、適用しない。

第八十條 施行日前に債権の譲渡の原因である法律行為がされた場合におけるその債権の譲渡については、前条の規定による改正後の預金保険法(以下この条において「新預金保険法」という。))第三十一條第二項、第四項及び第七項の規定にかかわらず、なお従前の例による。

(銀行法の一部改正)

第八十一條 銀行法(昭和五十六年法律第五十九号)の一部を次のように改正する。

第十條第二項第五号の二(中)「指名金銭債権又は指名金銭債権を「金銭債権(民法明治二十九年法律第八十九号)第三編第一章第七節第一款(指図証券)に規定する指図証券、同節第二款

(記名式所持人払証券)に規定する記名式所持人払証券、同節第三款(その他の記名証券)に規定するその他の記名証券及び同節第四款(無記名証券)に規定する無記名証券に係る債権並びに電子記録債権法(平成十九年法律第百二号)第二条第一項(定義)に規定する電子記録債権を除く。以下この号において同じ。又は金銭債権に改め、「限る」の下に。以下この号において同じ)を加え、「これ」を「特定社債」に改める。

第三十六條第二項中「明治二十九年法律第八十九号」を削り、「指名債権」を「債権」に改める。

第五十二條の五十九第五項中「期間の制限」を「消滅時効」及び第七百二十四條の二(人の生命又は身体を害する不法行為による損害賠償請求権の消滅時効)に改める。

第五十二條の七十四の見出し及び同条第一項中「中断」を「完成猶予」に改める。

(銀行法の一部改正に伴う経過措置)

第八十二條 前条の規定による改正前の銀行法(以下この条において「旧銀行法」という。))第五十二條の五十九第五項において準用する旧民法第七百二十四條後段に規定する期間がこの法律の施行の際に経過していた場合におけるその期間の制限については、なお従前の例による。

2 前条の規定による改正後の銀行法(次項において「新銀行法」という。))第五十二條の五十九第五項において準用する新民法第七百二十四條の二の規定は、旧銀行法第五十二條の五十九第一項及び第三項の請求権の同条第五項において準用する旧民法第七百二十四條前段に規定する時効がこの法律の施行の際に完成していた場合については、適用しない。

3 施行日前に紛争解決手続(旧銀行法第二条第二十項に規定する紛争解決手続をいう。))においてその目的となつた請求がされた場合におけるその請求に係る時効の特例については、新銀行法第五十二條の七十四の規定にかかわらず、なお従前の例による。

(貸金業法の一部改正)

第八十三條 貸金業法(昭和五十八年法律第三十二号)の一部を次のように改正する。

第四十一條の五十一の見出し及び同条第一項中「中断」を「完成猶予」に改める。

(貸金業法の一部改正に伴う経過措置)

第八十四條 施行日前に紛争解決手続(前条の規定による改正前の貸金業法第二条第二十一項に規定する紛争解決手続をいう。))においてその目的となつた請求がされた場合におけるその請求に係る時効の特例については、前条の規定による改正後の貸金業法第四十一條の五十一の規定にかかわらず、なお従前の例による。

(保険業法の一部改正)

第八十五條 保険業法(平成七年法律第百五号)の一部を次のように改正する。

第二十一條の見出しを「(会社法等の準用)」に改め、同条第二項中「及び第五百二十三條」を削る。

第三十條の五第二項中「第九十三條ただし書」を「第九十三條第一項ただし書」に改め、同条第三項中「を理由として設立時に募集をする基金の拠出の無効を主張し、又は詐欺若しくは」を「詐欺又は」に改める。

第三十六條中「三年間行わない」を「これを行使することができるときから三年間行使しない」に改める。

第六十一條の七第三項中「請求権は、」の下に「これを行使することができるときから」を加える。

第九十六條の三第一項中「第九十三條ただし書」を「第九十三條第一項ただし書」に改め、同条第二項中「を理由として組織変更時発行株式の引受けの無効を主張し、又は詐欺若しくは」を「詐欺又は」に改める。

第九十八條第一項第四号の二(中)「指名金銭債権又は指名金銭債権を「金銭債権(民法第三編第一章第七節第一款(指図証券)に規定する指図証券、同節第二款(記名式所持人払証券)に規定

する記名式所持人払証券、同節第三款(その他の記名証券に規定するその他の記名証券及び同節第四款無記名証券)に規定する無記名証券に係る債権並びに電子記録債権法平成十九年法律第百二号(第二条第一項(定義)に規定する電子記録債権を除く。以下この号において同じ。)又は金銭債権に改め、「限る」の下に、「以下この号において同じ」を加え、「これ」を「特定社債」に改める。

第百四十条第三項及び第百七十三条の七第三項中「指名債権」を「債権」に改める。

第百九十八条第二項中「及び第百二十三条」を削り、「並びに」を「及び」に改める。

第百四十七条の五第一項中「双方代理」を「双方代理等」に改める。

第百八十三条第五項中「期間の制限」を「消滅時効及び第七百二十四条の二(人の生命又は身体を害する不法行為による損害賠償請求権の消滅時効)」に改める。

第百八条の十四の見出し及び同条第一項中「中断」を「完成猶予」に改める。

(保険業法の一部改正に伴う経過措置)
第八十六条 施行日前にされた意思表示に係る相互会社(前条の規定による改正前の保険業法(以下この条において「旧保険業法」という。))第二条第五項に規定する相互会社をいう。)の設立時若しくは成立後に募集をする基金の拠出又は旧保険業法第七十八条第一項の募集に係る基金の拠出については、前条の規定による改正後の保険業法(以下この条において「新保険業法」という。))第三十条の五第二項及び第三項(これらの規定を新保険業法第六十条の二第四項及び第七十八条第三項において準用する場合を含む。)の規定にかかわらず、なお従前の例による。

2 施行日前にされた意思表示に係る組織変更時発行株式(旧保険業法第九十二条第一号に規定する組織変更時発行株式をいう。)(の引受けについては、新保険業法第九十六条の三の規定にかかわらず、なお従前の例による。

3 旧保険業法第二百八十三条第五項において準用する旧民法第七百二十四条後段に規定する期間がこの法律の施行の際既に経過していた場合におけるその期間の制限については、なお従前の例による。

4 新保険業法第二百八十三条第五項において準用する新民法第七百二十四条の二の規定は、旧保険業法第二百八十三条第一項及び第三項の請求権の同条第五項において準用する旧民法第七百二十四条前段に規定する時効がこの法律の施行の際既に経過していた場合については、適用しない。

5 施行日前に紛争解決手続(旧保険業法第二条第三十九項に規定する紛争解決手続をいう。))においてその目的となつた請求がされた場合におけるその請求に係る時効の特例については、新保険業法第二百八十八条の十四の規定にかかわらず、なお従前の例による。

(金融機関等の更生手続の特例等に関する法律の一部改正)
第八十七条 金融機関等の更生手続の特例等に関する法律(平成八年法律第九十五号)の一部を次のように改正する。

第三十七条の二第一項中「第四百二十三条若しくは第四百二十四条」を「第四百二十三条第一項、第四百二十三条の七若しくは第四百二十四条第一項」に改める。

第五十七条第一項第一号ただし書及び第二号ただし書中「害する事実」を「害すること」に改める。

第五十七條の二第一項第一号中「害する」の下に「こととなる」を加える。

第五十七條の三第一項第二号ただし書中「害する事実」を「害すること」に改める。

第六十条中「第二項及び第四項」の下に、「第九十三条の二第五項」を、「第九十一条の二第一項及び第四項」の下に「並びに第九十三条の二第一項」を加え、「同条第三項及び同法第九十三条第一項第二号」を「同法第九十一条の二第三項、

第九十三条第一項第二号及び第九十三条の二第三項」に改め、「第九十二条」の下に「及び第九十三条の三」を加える。

第二百二条の二第一項中「第四百二十三条若しくは第四百二十四条」を「第四百二十三条第一項、第四百二十三条の七若しくは第四百二十四条第一項」に改める。

第二百二十三条第一項第一号ただし書及び第二号ただし書中「害する事実」を「害すること」に改める。

第二百二十三条の二第一項第一号中「害する」の下に「こととなる」を加える。

第二百二十三条の三第一項第二号ただし書中「害する事実」を「害すること」に改める。

第二百二十六条中「及び第四項」の下に「並びに第九十三条の二第一項」を加え、「同条第三項及び同法第九十三条第一項第二号」を「同法第九十一条の二第三項、第九十三条第一項第二号及び第九十三条の二第三項」に改め、「第九十二条の下に」及び「第九十三条の三」を加える。

(金融機関等の更生手続の特例等に関する法律の一部改正に伴う経過措置)
第八十八条 施行日前にされた更生手続開始の申立てに係る更生事件(前条の規定による改正前の金融機関等の更生手続の特例等に関する法律(以下この条において「旧更生特例法」という。))第四条第三項に規定する更生事件をいう。以下この項及び次項において同じ。))における否認及び施行日前にされた行為の更生事件における否認については、なお従前の例による。

2 施行日前にされた更生手続開始の申立てに係る更生事件における更生協同組織金融機関(旧更生特例法第四条第七項に規定する更生協同組織金融機関をいう。))又は開始前協同組織金融機関(同条第六項に規定する開始前協同組織金融機関をいう。))について施行日以後に前条の規定による改正後の金融機関等の更生手続の特例等に関する法律(第四項において「新更生特例法」という。))第百五十八條の十第一項各号又は第三

項に規定する破産手続開始の決定がされた場合における当該決定に係る破産事件における否認については、なお従前の例による。

3 施行日前にされた更生手続開始の申立てに係る更生事件(旧更生特例法第六十九條第三項に規定する更生事件をいう。以下この項及び次項において同じ。))における否認及び施行日前にされた行為の更生事件における否認については、なお従前の例による。

4 施行日前にされた更生手続開始の申立てに係る更生事件における更生会社(旧更生特例法第六十九條第七項に規定する更生会社をいう。))又は開始前会社(同条第六項に規定する開始前会社をいう。))について施行日以後に新更生特例法第三百三十一條の十第一項各号又は第三項に規定する破産手続開始の決定がされた場合における当該決定に係る破産事件における否認については、なお従前の例による。

(資産の流動化に関する法律の一部改正)
第八十九条 資産の流動化に関する法律(平成十九年法律第百五号)の一部を次のように改正する。

第八十条第二項中「双方代理」を「双方代理等」に改め、「同項第二号」の下に「又は第三号」を加える。

第二百二十七条第三項中「請求権は、」の下に「これを行使することができる時から」を加える。

第二百条第二項第二号を次のように改める。

二 債権(民法第三編第一章第七節第一款に規定する指図証券、同節第二款に規定する記名式所持人払証券、同節第三款に規定するその他の記名証券及び同節第四款に規定する無記名証券に係る債権を除く。第二百二条において同じ。)

第二百条第二項中第三号を削り、第四号を第三号とし、同項第五号中「前各号」を「前三号」に改め、同号を同項第四号とする。

第二百二条中「指名債権」を「債権」に改め、「又は電子記録債権」を削り、「総称する」を「い

う」に改める。

（資産の流動化に関する法律の一部改正に伴う経過措置）

第九十条 施行日前に取締役又は清算人となつた者の利益相反取引については、前条の規定による改正後の資産の流動化に関する法律（以下この条において「新資産流動化法」という。）第八十条第二項（新資産流動化法第七十条第三項において準用する場合を含む。）の規定にかかわらず、なお従前の例による。

（金融機能の再生のための緊急措置に関する法律の一部改正）

第九十一条 金融機能の再生のための緊急措置に関する法律（平成十年法律第百三十二号）の一部を次のように改正する。

第七十五条の見出し中「停止」を「完成猶予」に改める。

（信託業法の一部改正）

第九十二条 信託業法（平成十六年法律第百五十四号）の一部を次のように改正する。

第八十五条の十四の見出し及び同条第一項中「中断」を「完成猶予」に改める。

（信託業法の一部改正に伴う経過措置）

第九十三条 施行日前に紛争解決手続（前条の規定による改正前の信託業法第二十三条第三項に規定する紛争解決手続をいう。）においてその目的となつた請求がされた場合におけるその請求に係る時効の特例については、前条の規定による改正後の信託業法第八十五条の十四の規定にかかわらず、なお従前の例による。

第四節 消費者庁関係

（特定商取引に関する法律の一部改正）

第九十四条 特定商取引に関する法律（昭和五十一年法律第五十七号）の一部を次のように改正する。

第九条の三第二項中「善意の」を「善意でかつ過失がない」に改める。

第十五条の二第一項ただし書中「電子消費者契約及び電子承諾通知に関する民法の特例に関する法律」を「電子消費者契約に関する民法の特例に関する法律」に改める。

する法律」を「電子消費者契約に関する民法の特例に関する法律」に改める。

（特定商取引に関する法律の一部改正に伴う経過措置）

第九十五条 施行日前にされた意思表示については、前条の規定による改正後の特定商取引に関する法律（以下この条において「新特定商取引法」という。）第九条の三第二項（新特定商取引法第二十四条の二第二項、第四十条の三第二項、第四十九条の二第二項及び第五十八条の二第二項において準用する場合を含む。）の規定にかかわらず、なお従前の例による。

（製造物責任法の一部改正）

第九十六条 製造物責任法（平成六年法律第八十五号）の一部を次のように改正する。

第五条を次のように改める。

第五條 第三條に規定する損害賠償の請求権は、次に掲げる場合には、時効によつて消滅する。

一 被害者又はその法定代理人が損害及び賠償義務者を知つた時から三年間行使しないとき。

二 その製造業者等が当該製造物を引き渡した時から十年を経過したとき。

2 人の生命又は身体を侵害した場合における損害賠償の請求権の消滅時効についての前項第一号の規定の適用については、同号中「三年間」とあるのは、「五年間」とする。

3 第一項第二号の期間は、身体に蓄積した場合に人の健康を害することとなる物質による損害又は一定の潜伏期間が経過した後に症状が現れる損害については、その損害が生じた時から起算する。

（製造物責任法の一部改正に伴う経過措置）

第九十七条 前条の規定による改正前の製造物責任法（次項において「旧製造物責任法」という。）第五条第一項後段に規定する期間がこの法律の施行の際既に経過していた場合におけるその期間の制限については、なお従前の例による。

2 前条の規定による改正後の製造物責任法第五条第二項の規定は、旧製造物責任法第三条に規定する損害賠償の請求権の旧製造物責任法第五条第一項前段に規定する時効がこの法律の施行の際既に完成していた場合については、適用しない。

（消費者契約法の一部改正）

第九十八条 消費者契約法（平成十二年法律第六十一号）の一部を次のように改正する。

第四条第五項中「善意の」を「善意でかつ過失がない」に改める。

第八条第一項第五号を削り、同条第二項中「前項第五号」を「前項第一号又は第二号」に改め、「条項」の下に「のうち、消費者契約が有償契約である場合において、引き渡された目的物が種類又は品質に関して契約の内容及に適合しないとき（当該消費者契約が請負契約である場合には、請負人が種類又は品質に関して契約の内容及に適合しない仕事の目的物を注文者に引き渡したとき）その引渡しを要しない場合には、仕事終了した時に仕事の目的物が種類又は品質に関して契約の内容及に適合しないとき。」を以下この項において同じ。）に、これにより消費者が生じた損害を賠償する事業者の責任を免除するもの」を加え、同項第一号中「当該消費者契約の目的物が隠れた瑕疵がある」を「引き渡された目的物が種類又は品質に関して契約の内容及に適合しない」に、「瑕疵のない物をもつてこれに代える責任又は当該瑕疵を修補する」を「履行の追完をする責任又は不適合の程度に応じた代金若しくは報酬の減額をする」に改め、同項第二号中「当該消費者契約の目的物が隠れた瑕疵がある」を「当該消費者契約の目的物が種類又は品質に関して契約の内容及に適合しない」に、「当該瑕疵」を「その目的物が種類又は品質に関して契約の内容及に適合しないこと」に、「瑕疵のない物をもつてこれに代える責任を負い、又は当該瑕疵を修補する」を「又は履行の追完をする」に改める。

第十二条第三項中「第八条第一項第五号」を「第八条第一項第一号又は第二号」に、「同条第二項各号に掲げる場合」を「同条第二項の場合」に改める。

（消費者契約法の一部改正に伴う経過措置）

第九十九条 施行日前にされた意思表示については、前条の規定による改正後の消費者契約法（以下この条において「新消費者契約法」という。）第四条第五項（新消費者契約法第五条第一項において準用する場合を含む。）の規定にかかわらず、なお従前の例による。

2 施行日前に締結された消費者契約（前条の規定による改正前の消費者契約法第二条第三項に規定する消費者契約をいう。）の条項については、新消費者契約法第八条及び第十二条第三項の規定にかかわらず、なお従前の例による。

（独立行政法人国民生活センター法の一部改正）

第一百条 独立行政法人国民生活センター法（平成十四年法律第百二十三号）の一部を次のように改正する。

第二十七条（見出しを含む。）中「中断」を「完成猶予」に改める。

（独立行政法人国民生活センター法の一部改正に伴う経過措置）

第一百条 施行日前に前条の規定による改正前の独立行政法人国民生活センター法第十九条第一項の規定により和解の仲介の申請がされた場合におけるその申請に係る時効の特例については、前条の規定による改正後の独立行政法人国民生活センター法第二十七条の規定にかかわらず、なお従前の例による。

（消費者の財産的被害の集団的な回復のための民事の裁判手続の特例に関する法律の一部改正）

第二百二条 消費者の財産的被害の集団的な回復のための民事の裁判手続の特例に関する法律（平成二十五年法律第九十六号）の一部を次のように改正する。

五〇

第十条中「の連帯納付義務又は連帯納入義務」を「を連帯して納付し、又は納入する義務」に、「第四百三十二条から第四百三十四条まで」を

「第四百三十六条」に、「第四百三十九条から第四百四十四条まで」を「第四百四十一条から第四百四十五条まで」に改める。

第十八条第三項中「定が」を「定めが」に改める。

て更新」に改め、同条第一項中「つき」を「その外」の効力が生じた時に中断し、当該各号に定める」とについては、当該各号に定める期間は完成せず、その二で、「更に進行する」を「新たにその

進行を始める」に改め、同条第二項中「の規定により時効が中断された場合には、その」を「に掲げる」に、「とき」を「場合」に、「なお時効中断の

効力は、失われぬ」を「同項の規定による時効の完成猶予及び更新は、その効力を妨げられない」に改め、同条第三項中「本項」を「この項」に

改め、同条第五項中「中断し、又は当該地方税
が納付され、若しくは納入されたときは、その
中断し、又は納付され、若しくは納入された」

時効は、完成せず、又は新たにその進行を始めるに、「につき、その時効が中断する」を「の」きは、その完成せず、又は新たにその進行を始めるに、「につき、その時効が中断する」を「の」を完成せず、又は新たにその進行を始めるに、「につき、その時効が中断する」を「の」

る」に改め、同条に次の一項を加える。

6 地方税が納付されたときは、その納付された部分の地方税に係る延滞金についての地方

税の徴収権の時効は、その納付の時から新たに進行を始める。

第二十條の七の見出し中「取消」を「取消し」に

改め、同条中第四百二十三条及び第四百二十四条」を「第三編第一章第二節第二款及び第三款」に改める。

（地方税法の一部改正に伴う経過措置）
第百十一条 施行日前に生じた前条の規定による改正前の地方税法（以下この条において「旧地方税法」という。）第十条に規定する地方団体の徴

収金の連帯納付義務又は連帯納入義務については、なお従前の例による。

2 施行日前に旧地方税法第十八条の二第一項又は第五項に規定する時効の中断の事由が生じた場合におけるその事由の効力については、なお従前の例による。

3 施行日前に納税者又は特別徴収義務者(旧地方税法第一条第十号に規定する特別徴収義務者をいう。次項において同じ。)に属する権利が生じた場合におけるその権利に係る旧地方税法第二十条の七において準用する旧民法第四百二十三条の規定による債権者代位権については、なお従前の例による。

4 施行日前に納税者又は特別徴収義務者が地方団体を害することを知つてした法律行為がされた場合におけるその行為に係る旧地方税法第二十条の七において準用する旧民法第四百二十四条の規定による詐害行為取消権については、なお従前の例による。

(地方公務員等共済組合法の一部改正)

第百二十二条 地方公務員等共済組合法(昭和三十七年法律第百五十二号)の一部を次のように改正する。

第百十七條第三項中「中断」を「完成猶予及び更新」に改める。

第百四十四條の二十三第一項中「行わない」を「行使しない」に改め、同条第二項中「二年間行わない」を「これらを行使することができるときから二年間行使しない」に改める。

(地方公務員等共済組合法の一部改正に伴う経過措置)

第百十三條 施行日前に前条の規定による改正前の地方公務員等共済組合法第百十七條第三項に規定する時効の中断の事由が生じた場合におけるその事由の効力については、なお従前の例による。

(地方公務員災害補償法の一部改正)

第百十四條 地方公務員災害補償法(昭和四十二年法律第百二十一号)の一部を次のように改正

する。

第五十一条第四項中「中断」を「完成猶予及び更新」に改める。

第六十三條中「権利は、」の下に「これを行使することができる時から」を加え、「行わない」を「行使しない」に改める。

第七十條第二項中「中断」を「完成猶予及び更新」に改める。

(地方公務員災害補償法の一部改正に伴う経過措置)

第百十五條 施行日前に前条の規定による改正前の地方公務員災害補償法第五十一条第四項又は第七十條第二項に規定する時効の中断の事由が生じた場合におけるその事由の効力については、なお従前の例による。

(公害紛争処理法の一部改正)

第百十六條 公害紛争処理法(昭和四十五年法律第百八号)の一部を次のように改正する。

第三十六條の二の見出しを「時効の完成猶予等」に改め、同条中「中断」を「完成猶予」に改める。

第四十二條の二の見出しを「時効の完成猶予等」に改め、同条第一項中「中断及び」を「完成猶予及び更新並びに」に改め、同条第二項中「中断」を「完成猶予」に改める。

(公害紛争処理法の一部改正に伴う経過措置)

第百十七條 施行日前に前条の規定による改正前の公害紛争処理法(以下この条において「旧公害紛争処理法」という。)第二十六條第一項に規定する調停の申請がされた場合におけるその申請に係る時効の特例については、前条の規定による改正後の公害紛争処理法(第三項において「新公害紛争処理法」という。)第三十六條の二の規定にかかわらず、なお従前の例による。

2 施行日前に旧公害紛争処理法第四十二條の二十五第一項に規定する時効の中断の事由が生じた場合におけるその事由の効力については、なお従前の例による。

3 施行日前に責任裁定(旧公害紛争処理法第四

十二條の十二第二項に規定する責任裁定をいう。)の申請がされた場合におけるその申請に係る時効の特例については、新公害紛争処理法第四十二條の二十五第二項の規定にかかわらず、なお従前の例による。

(電気通信事業法の一部改正)

第百十八條 電気通信事業法(昭和五十九年法律第百八十六号)の一部を次のように改正する。

第百六十七條の次に次の一条を加える。

(民法の特例)

第百六十七條の二 電気通信事業による電気通信役務の提供に係る取引に関して民法(明治二十九年法律第百八十九号)第五百四十八條の二第一項の規定を適用する場合においては、同項第二号中「表示していた」とあるのは、「表示し、又は公表していた」とする。

第六章 財務省関係

(国債に関する法律の一部改正)

第百十九條 国債に関する法律(明治三十九年法律第三十四号)の一部を次のように改正する。

第八條中「民法施行法第五十七條を」「民法(明治二十九年法律第百八十九号)第五百二十條の十一(同法第五百二十條の十八(同法第五百二十條の二十二)於テ準用スル場合ヲ含ム)及第五百二十條の十九第二項ニ於テ準用スル場合ヲ含ム)」に改める。

第九條第一項中「消滅時効ハ」の下に「其ノ權利ヲ行使スルコトヲ得ル時ヨリ」を加え、同条第二項中「消滅時効ハ」の下に「其ノ權利ヲ行使スルコトヲ得ル時ヨリ」を加える。

(企業再建整備法の一部改正)

第百二十條 企業再建整備法(昭和二十一年法律第四十号)の一部を次のように改正する。

第三十三條中「第四百二十四條」を「第三編第一章第二節第三款」に改める。

(会計法の一部改正)

第百二十一條 会計法(昭和二十二年法律第三十五号)の一部を次のように改正する。

を行使することができる時から五年間行使しない」に、「因り」を「よつて」に改める。

第三十一条第二項中「中断、停止」を「完成猶予、更新」に改める。

第三十二條中「民法第百五十三條(前条において準用する場合を含む。)」の規定にかかわらず、時効中断」を「時効の更新」に改める。

(会計法の一部改正に伴う経過措置)

第百二十二條 施行日前に前条の規定による改正前の会計法第三十二條に規定する時効の中断の事由が生じた場合におけるその事由の効力については、なお従前の例による。

(開鎖機関令の一部改正)

第百二十三條 開鎖機関令(昭和二十二年勅令第七十四号)の一部を次のように改正する。

第二十一条中「第四百二十四條の規定による取消し」を「第四百二十四條第三項に規定する詐害行為取消請求」に改める。

(旧日本占領地域に本店を有する会社の本邦内にある財産の整理に関する政令の一部改正)

第百二十四條 旧日本占領地域に本店を有する会社の本邦内にある財産の整理に関する政令(昭和二十四年政令第二百九十一号)の一部を次のように改正する。

第二十六條中「第四百二十四條」を「第三編第一章第二節第三款」に改める。

(相続税法の一部改正)

第百二十五條 相続税法(昭和二十五年法律第七十三号)の一部を次のように改正する。

第三十六條第四項中「中断及び停止」を「完成猶予及び更新」に改める。

(国外居住外国人等に対する債務の弁済のためにする供託の特例に関する政令の一部改正)

第百二十六條 国外居住外国人等に対する債務の弁済のためにする供託の特例に関する政令(昭和二十五年政令第二百二十二号)の一部を次のように改正する。

第七條中「第百六十七條第一項」を「第百六十六條第一項」に改める。

（和利多利等の多利に付て所得利法 法人利法

及び地方税法の特例等に関する法律の一部改正
正)

第四百四十条 租税条約等の実施に伴う所得税法、法人税法及び地方税法の特例等に関する法律(昭和四十四年法律第四十六号)の一部を次のように改正する。

第十一条の二第二項中「中断し」を「完成せず、若しくは新たにその進行を始め」に改める。

(租税条約等の実施に伴う所得税法、法人税法及び地方税法の特例等に関する法律の一部改正に伴う経過措置)

第四百四十一条 施行日前に前条の規定による改正前の租税条約等の実施に伴う所得税法、法人税法及び地方税法の特例等に関する法律第十一条の二第二項に規定する時効の中断の事由が生じた場合におけるその事由の効力については、なお従前の例による。

(株式会社日本政策投資銀行法の一部改正)

第四百四十二条 株式会社日本政策投資銀行法(平成十九年法律第八十五号)の一部を次のように改正する。

第三条第一項第八号中「指名金銭債権又は指名金銭債権を金銭債権(民法(明治二十九年法律第八十九号)第三編第一章第七節第一款に規定する指図証券、同節第二款に規定する記名式所持人払証券、同節第三款に規定するその他の記名証券及び同節第四款に規定する無記名証券に係る債権並びに電子記録債権法(平成十九年法律第二百二号)第二条第一項に規定する電子記録債権を除く。以下この号において同じ。)又は金銭債権に改め、「特定短期社債を除く」の下に「以下この号において同じ」を加え、「これら」を「特定社債又は優先出資証券」に改める。

第七條中「消滅時効は」の下に「その権利を行使することができる時から」を加える。

第七章 文部科学省関係

(私立学校教職員共済法の一部改正)

第四百四十三条 私立学校教職員共済法(昭和二十

八年法律第二百四十五号)の一部を次のように改正する。

第三十四条第一項中「権利は、」の下に「これらを行使用することができる時から」を加え、同条第二項中「のなす」を「が行う」に、「民法(明治二十九年法律第八十九号)第五百三十三号の規定にかかわらず、時効中断」を「時効の更新」に改める。

(私立学校教職員共済法の一部改正に伴う経過措置)

第四百四十四条 施行日前に前条の規定による改正前の私立学校教職員共済法第三十四条第二項に規定する時効の中断の事由が生じた場合におけるその事由の効力については、なお従前の例による。

(公立学校の学校医、学校歯科医及び学校薬剤師の公務災害補償に関する法律の一部改正)

第四百四十五条 公立学校の学校医、学校歯科医及び学校薬剤師の公務災害補償に関する法律(昭和三十二年法律第四百十三号)の一部を次のように改正する。

第五條第三項中「中断」を「完成猶予及び更新」に改める。

第九條中「権利は、」の下に「これを行使用することができる時から」を加え、「行わない」を「行使しない」に改める。

(公立学校の学校医、学校歯科医及び学校薬剤師の公務災害補償に関する法律の一部改正に伴う経過措置)

第四百四十六条 施行日前に前条の規定による改正前の公立学校の学校医、学校歯科医及び学校薬剤師の公務災害補償に関する法律第五條第三項に規定する時効の中断の事由が生じた場合におけるその事由の効力については、なお従前の例による。

(原子力損害の賠償に関する法律の一部改正)

第四百四十七条 原子力損害の賠償に関する法律(昭和三十六年法律第四百十七号)の一部を次のように改正する。

附則第四条第一項中「てん補」を「填補」に改め、同項各号中「時までの」の下に「その損害の発生時における」を加える。

(原子力損害の賠償に関する法律の一部改正に伴う経過措置)

第四百四十八条 施行日前に原子力損害(前条の規定による改正前の原子力損害の賠償に関する法律第二条第二項に規定する原子力損害をいう。)の発生の原因となった事実が生じた場合における他の法律による給付との調整については、前条の規定による改正後の原子力損害の賠償に関する法律附則第四条第一項の規定にかかわらず、なお従前の例による。

(原子力損害賠償補償契約に関する法律の一部改正)

第四百四十九条 原子力損害賠償補償契約に関する法律(昭和三十六年法律第四百十八号)の一部を次のように改正する。

第十一条中「権利は、」の下に「これを行使用することができる時から」を加える。

(著作権法の一部改正)

第五百五十條 著作権法(昭和四十五年法律第四十八号)の一部を次のように改正する。

第七十四條第一項第一号を次のように改める。

一 補償金の提供をした場合において、著作権者がその受領を拒んだとき。

第七十四條第一項第四号中「場合」を「とき」に、「除く。」を「除く。」に改め、同号を同項第五号とし、同項第三号中「場合」を「とき」に改め、同号を同項第四号とし、同項第二号中「過失がなく」を削り、「場合」を「とき」(その者に過失があるときを除く。)に改め、同号を同項第三号とし、同項第一号の次に次の一号を加える。

二 著作権者が補償金を受領することができないとき。

第七十四條第二項中「前項第三号」を「前項第四号」に改める。

(著作権法の一部改正に伴う経過措置)

第五百五十一条 施行日前に前条の規定による改正前の著作権法(以下この条において「旧著作権法」という。)第三十三條第二項(同条第四項において準用する場合を含む。)、第三十三條の二第二項、第六十八條第一項若しくは第六十九條の補償金、旧著作権法第九十五條第一項若しくは第九十七條第一項の二次使用料、旧著作権法第九十五條の三第三項若しくは第九十七條の三第六項に規定する使用料の支払義務が生じた場合におけるこれらの補償金、二次使用料、報酬又は使用料の供託については、なお従前の例による。

(スポーツ振興投票の実施等に関する法律の一部改正)

第五百五十二条 スポーツ振興投票の実施等に関する法律(平成十年法律第六十三号)の一部を次のように改正する。

第二十条中「一年間行わない」を「これを行使用することができる時から一年間行使しない」に改める。

(PTA・青少年教育団体共済法の一部改正)

第五百五十三条 PTA・青少年教育団体共済法(平成二十二年法律第四十二号)の一部を次のように改正する。

第九條第四項中「第七百二十四條」の下に「及び第七百二十四條の二」を加える。

(PTA・青少年教育団体共済法の一部改正に伴う経過措置)

第五百五十四條 前条の規定による改正前のPTA・青少年教育団体共済法(次項において「旧PTA・青少年教育団体共済法」という。)第九條第四項において準用する旧民法第七百二十四條後段に規定する期間がこの法律の施行の際既に経過していた場合におけるその期間の制限については、なお従前の例による。

2 前条の規定による改正後のPTA・青少年教育団体共済法第九條第四項において準用する新

民法第七百二十四条の二の規定は、旧PTA・青少年教育団体共済法第九條第一項の規定による損害賠償の請求権の同条第四項において準用する旧民法第七百二十四条前段に規定する時効がこの法律の施行の際に完成していた場合については、適用しない。

（展覧会における美術品損害の補償に関する法律の一部改正）

第百五十五条 展覧会における美術品損害の補償に関する法律（平成二十三年法律第十七号）の一部を次のように改正する。

第八条中「三年間行わない」を「これを行使用することができるときから三年間行使用しない」に改める。

（東日本大震災に係る原子力損害賠償紛争についての原子力損害賠償紛争審査会による和解仲介手続の利用に係る時効の中断の特例に関する法律の一部改正）

第百五十六条 東日本大震災に係る原子力損害賠償紛争についての原子力損害賠償紛争審査会による和解仲介手続の利用に係る時効の中断の特例に関する法律（平成二十五年法律第三十二号）の一部を次のように改正する。

題名を次のように改める。

東日本大震災に係る原子力損害賠償紛争についての原子力損害賠償紛争審査会による和解仲介手続の利用に係る時効の完全成猶予の特例に関する法律

第一条及び第二条（見出しを含む）中「中断」を「完成猶予」に改める。

（東日本大震災に係る原子力損害賠償紛争についての原子力損害賠償紛争審査会による和解仲介手続の利用に係る時効の中断の特例に関する法律の一部改正に伴う経過措置）

第百五十七条 施行日前に和解の仲介（前条の規定による改正前の東日本大震災に係る原子力損害賠償紛争についての原子力損害賠償紛争審査会による和解仲介手続の利用に係る時効の中断の特例に関する法律第一条に規定する和解の仲

介をいう。）の申立てがされた場合におけるその申立てに係る時効の特例については、前条の規定による改正後の東日本大震災に係る原子力損害賠償紛争についての原子力損害賠償紛争審査会による和解仲介手続の利用に係る時効の完成猶予の特例に関する法律第二条の規定にかかわらず、なお従前の例による。

（東日本大震災における原子力発電所の事故により生じた原子力損害に係る早期かつ確実な賠償を実現するための措置及び当該原子力損害に係る賠償請求権の消滅時効等の特例に関する法律の一部改正）

第百五十八条 東日本大震災における原子力発電所の事故により生じた原子力損害に係る早期かつ確実な賠償を実現するための措置及び当該原子力損害に係る賠償請求権の消滅時効等の特例に関する法律（平成二十五年法律第九十七号）の一部を次のように改正する。

題名を次のように改める。

東日本大震災における原子力発電所の事故により生じた原子力損害に係る早期かつ確実な賠償を実現するための措置及び当該原子力損害に係る賠償請求権の消滅時効の特例に関する法律

第一条中「消滅時効等」を「消滅時効」に改める。

第三条の見出しを「（消滅時効の特例）」に改め、同条中「同条前段を」同条第一号に、「同条後段を」同条第二号に改め、同条に後段として次のように加える。

この場合においては、同法第七百二十四条の二の規定は、適用しない。

（東日本大震災における原子力発電所の事故により生じた原子力損害に係る早期かつ確実な賠償を実現するための措置及び当該原子力損害に係る賠償請求権の消滅時効等の特例に関する法律の一部改正に伴う経過措置）

第百五十九条 前条の規定による改正後の東日本大震災における原子力発電所の事故により生じ

た原子力損害に係る早期かつ確実な賠償を実現するための措置及び当該原子力損害に係る賠償請求権の消滅時効の特例に関する法律第三条の規定は、施行日前に生じた特定原子力損害（前条の規定による改正前の東日本大震災における原子力発電所の事故により生じた原子力損害に係る早期かつ確実な賠償を実現するための措置及び当該原子力損害に係る賠償請求権の消滅時効等の特例に関する法律第一条に規定する特定原子力損害をいう。）に係る賠償請求権についても適用する。

第八章 厚生労働省関係

（健康保険法の一部改正）

第百六十条 健康保険法（大正十一年法律第七十号）の一部を次のように改正する。

第百八十九条第三項中「中断」を「完成猶予及び更新」に改める。

第百九十三条第一項中「権利は、」の下に「これらを行使用することができる時から」を加え、同条第二項中「民法（明治二十九年法律第八十九号）第百五十三条の規定にかかわらず、時効中断を時効の更新」に改める。

第百九十四条中「民法」の下に「明治二十九年法律第八十九号」を加える。

（健康保険法の一部改正に伴う経過措置）

第百六十一条 施行日前に前条の規定による改正前の健康保険法第百八十九条第三項又は第百九十三条第二項に規定する時効の中断の事由が生じた場合におけるその事由の効力については、なお従前の例による。

（船員保険法の一部改正）

第百六十二条 船員保険法（昭和十四年法律第七十三号）の一部を次のように改正する。

第百三十八条第三項中「中断」を「完成猶予及び更新」に改める。

第百四十二条第一項中「権利は」の下に「これらを行使用することができる時から」を加え、同条第二項中「民法（明治二十九年法律第八十九号）第百五十三条の規定にかかわらず、時効中

断」を「時効の更新」に改める。

第百四十三条中「民法」の下に「（明治二十九年法律第八十九号）」を加える。

第百五十二条第一項中「中断」を「完成猶予及び更新」に改める。

附則第五項中「権利は、」の下に「これらを行使用することができる時から」を加える。

附則第六条第一項中「てん補される」を「填補される」に、「てん補する」を「填補する」に改め、同項各号中「時までの」の下に「その損害の発生時における」を加える。

（船員保険法の一部改正に伴う経過措置）

第百六十三条 施行日前に前条の規定による改正前の船員保険法（次項において「旧船員保険法」という。）第百三十八条第三項、第百四十二条第二項又は第百五十二条第一項に規定する時効の中断の事由が生じた場合におけるその事由の効力については、なお従前の例による。

2 施行日前に旧船員保険法附則第六条第一項に規定する損害賠償の請求権が生じた場合におけるその損害賠償については、なお従前の例による。

（労働基準法の一部改正）

第百六十四条 労働基準法（昭和二十二年法律第四十九号）の一部を次のように改正する。

第八十五条第五項中「中断」を「完成猶予及び更新」に改める。

（労働基準法の一部改正に伴う経過措置）

第百六十五条 施行日前に前条の規定による改正前の労働基準法第八十五条第五項に規定する時効の中断の事由が生じた場合におけるその事由の効力については、なお従前の例による。

（労働者災害補償保険法の一部改正）

第百六十六条 労働者災害補償保険法（昭和二十二年法律第五十号）の一部を次のように改正する。

第三十八条第三項中「中断」を「完成猶予及び更新」に改める。

第四十二条中「権利は、」の下に「これらを行使

することができるときからを加える。
第五十八條第三項、第五十九條第四項及び第六十條第五項中「権利は、」の下に「これを行使することができるときから」を加える。

第六十四條第一項中「てん補される」を「填補される」に、「てん補する」を「填補する」に改め、同項各号中「時までの」の下に「その損害の発生時における」を加える。
(労働者災害補償保険法の一部改正に伴う経過措置)

第六十七條 施行日前に前条の規定による改正前の労働者災害補償保険法(次項において「旧労働者災害補償保険法」という。)第三十八條第三項に規定する時効の中断の事由が生じた場合におけるその事由の効力については、なお従前の例による。

2 施行日前に旧労働者災害補償保険法第六十四條第一項に規定する損害賠償の請求権が生じた場合におけるその損害賠償については、なお従前の例による。
(消費生活協同組合法の一部改正)

第六十八條 消費生活協同組合法(昭和二十三年法律第二百号)の一部を次のように改正する。
第三十一條の二第二項中「同項第一号」を「同項各号」に改める。
(消費生活協同組合法の一部改正に伴う経過措置)

第六十九條 施行日前に理事となつた者の利益相反取引については、前条の規定による改正後の消費生活協同組合法第三十一條の二第二項の規定にかかわらず、なお従前の例による。
(生活保護法の一部改正)

第七十條 生活保護法(昭和二十五年法律第四十四号)の一部を次のように改正する。
第七十六條の三中「権利は、」の下に「これを行

うことができる時から」を加える。
(戦傷病者戦没者遺族等援護法の一部改正)

第七十一條 戦傷病者戦没者遺族等援護法(昭和二十七年法律第二百七十七号)の一部を次のように改正する。
第四十二條(見出しを含む。)中「中断」を「完成猶予及び更新」に改める。
第四十五條中「七年間行わない」を「これらを行使することができる時から七年間行しない」に改める。
(戦傷病者戦没者遺族等援護法の一部改正に伴う経過措置)

第六十二條 施行日前に前条の規定による改正前の戦傷病者戦没者遺族等援護法第四十二條に規定する時効の中断の事由が生じた場合におけるその事由の効力については、なお従前の例による。
(厚生年金保険法の一部改正)

第七十三條 厚生年金保険法(昭和二十九年法律第十五号)の一部を次のように改正する。
第九十條第四項中「中断」を「完成猶予及び更新」に改める。
第九十二條第一項中「権利は、」の下に「これらを行使することができる時から」を加え、「当該権利に基づき支払期月ごとに又は一時金として支払うものとされる保険給付の支給を受ける権利を含む。第四項において同じ。」を削り、「五年を経過したとき」を「その支給すべき事由が生じた日から五年を経過したとき、当該権利に基づき支払期月ごとに支払うものとされる保険給付の支給を受ける権利は、当該日の属する月の翌月以後に到来する当該保険給付の支給に係る第三十六條第三項本文に規定する支払期月の翌月の初日から五年を経過したとき」に改め、同条第三項中「民法明治二十九年法律第八十九号」第百五十三條の規定にかかわらず、時効中断を「時効の更新」に改め、同条第四項中「保険給付を受ける権利」を「第一項に規定する保険給付を受ける権利又は当該権利に基づき支払期月ごとに支払うものとされる保険給付の支給を受ける権利」に改める。
第九十三條中「基く」を「基づく」に改め、「民

法の下に(明治二十九年法律第八十九号)」を加える。
(厚生年金保険法の一部改正に伴う経過措置)

第七十四條 施行日前に前条の規定による改正前の厚生年金保険法(以下この項において「旧厚生年金保険法」という。)第九十條第四項(旧厚生年金保険法附則第七條の二第三項及び第二十九條第八項において準用する場合を含む。)又は第九十二條第三項に規定する時効の中断の事由が生じた場合におけるその事由の効力については、なお従前の例による。
2 施行日前に保険給付を受ける権利(当該権利に基づき支払期月ごとに又は一時金として支払うものとされる保険給付の支給を受ける権利を含む。)が生じた場合におけるこれらの権利の消滅時効の期間については、前条の規定による改正後の厚生年金保険法第九十二條第一項の規定にかかわらず、なお従前の例による。
(引揚者給付金等支給法の一部改正)

第七十五條 引揚者給付金等支給法(昭和三十三年法律第九十九号)の一部を次のように改正する。
第十六條(見出しを含む。)中「中断」を「完成猶予及び更新」に改める。
第十八條中「六年間行わない」を「これらを行使することができる時から六年間行しない」に改める。
(引揚者給付金等支給法の一部改正に伴う経過措置)

第七十六條 施行日前に前条の規定による改正前の引揚者給付金等支給法第十六條に規定する時効の中断の事由が生じた場合におけるその事由の効力については、なお従前の例による。
(生活衛生関係営業の運営の適正化及び振興に関する法律の一部改正)

第七十七條 生活衛生関係営業の運営の適正化及び振興に関する法律(昭和三十三年法律第六十四号)の一部を次のように改正する。
第三十三條の見出しを「(理事の自己契約等)」に改め、同条中「契約する」を「契約をし、又は当該理事と組合との利益が相反する行為をする」に、「双方代理」を「双方代理等」に改める。
(生活衛生関係営業の運営の適正化及び振興に関する法律の一部改正に伴う経過措置)

第七十八條 施行日前に行われた理事と組合(前条の規定による改正前の生活衛生関係営業の運営の適正化及び振興に関する法律第三條に規定する組合をいう。)との利益相反行為については、前条の規定による改正後の生活衛生関係営業の運営の適正化及び振興に関する法律(以下この条において「新生活衛生法」という。)第三十三條(新生活衛生法第五十二條の十第一項及び第五十六條において準用する場合を含む。)の規定にかかわらず、なお従前の例による。
(国民健康保険法の一部改正)

第七十九條 国民健康保険法(昭和三十三年法律第九十二号)の一部を次のように改正する。
第九十一條第二項中「中断」を「完成猶予及び更新」に改める。
第一百十條第一項中「権利は、」の下に「これらを行使することができる時から」を加え、同条第二項中「民法明治二十九年法律第八十九号」第百五十三條の規定にかかわらず、時効中断を「時効の更新」に改める。
第一百十一條中「基く」を「基づく」に改め、「民法」の下に「(明治二十九年法律第八十九号)」を加える。
(国民健康保険法の一部改正に伴う経過措置)

第八十條 施行日前に前条の規定による改正前の国民健康保険法第九十一條第二項又は第一百十條第二項に規定する時効の中断の事由が生じた場合におけるその事由の効力については、なお従前の例による。
(未帰還者に関する特別措置法の一部改正)

第八十一條 未帰還者に関する特別措置法(昭和三十三年法律第七号)の一部を次のように改正する。
第三十三條の見出しを「(理事の自己契約等)」に改め、同条中「契約する」を「契約をし、又は当該理事と組合との利益が相反する行為をする」に、「双方代理」を「双方代理等」に改める。
(生活衛生関係営業の運営の適正化及び振興に関する法律の一部改正に伴う経過措置)

第七十八條 施行日前に行われた理事と組合(前条の規定による改正前の生活衛生関係営業の運営の適正化及び振興に関する法律第三條に規定する組合をいう。)との利益相反行為については、前条の規定による改正後の生活衛生関係営業の運営の適正化及び振興に関する法律(以下この条において「新生活衛生法」という。)第三十三條(新生活衛生法第五十二條の十第一項及び第五十六條において準用する場合を含む。)の規定にかかわらず、なお従前の例による。
(国民健康保険法の一部改正)

第七十九條 国民健康保険法(昭和三十三年法律第九十二号)の一部を次のように改正する。
第九十一條第二項中「中断」を「完成猶予及び更新」に改める。
第一百十條第一項中「権利は、」の下に「これらを行使することができる時から」を加え、同条第二項中「民法明治二十九年法律第八十九号」第百五十三條の規定にかかわらず、時効中断を「時効の更新」に改める。
第一百十一條中「基く」を「基づく」に改め、「民法」の下に「(明治二十九年法律第八十九号)」を加える。
(国民健康保険法の一部改正に伴う経過措置)

第八十條 施行日前に前条の規定による改正前の国民健康保険法第九十一條第二項又は第一百十條第二項に規定する時効の中断の事由が生じた場合におけるその事由の効力については、なお従前の例による。
(未帰還者に関する特別措置法の一部改正)

第八十一條 未帰還者に関する特別措置法(昭和三十三年法律第七号)の一部を次のように改正する。
第三十三條の見出しを「(理事の自己契約等)」に改め、同条中「契約する」を「契約をし、又は当該理事と組合との利益が相反する行為をする」に、「双方代理」を「双方代理等」に改める。
(生活衛生関係営業の運営の適正化及び振興に関する法律の一部改正に伴う経過措置)

第十条中「三年間行わない」を「これを行使用することができるときから三年間行使しない」に改める。

(国民年金法の一部改正)

第百八十二条 国民年金法(昭和三十四年法律第百四十一号)の一部を次のように改正する。

第百一条第三項中「中断」を「完成猶予及び更新」に改める。

第百二条第一項中「当該権利に基づき支払期月ごとに又は一時金として支払うものとされる給付の支給を受ける権利を含む。第三項において同じ。」を削り、「支給事由」を「支給すべき事由」に改め、「経過したとき」の下に「当該権利に基づき支払期月ごとに支払うものとされる年金給付の支給を受ける権利は、当該日の属する月の翌月以後に到来する当該年金給付の支給に係る第十八条第三項本文に規定する支払期月の翌月の初日から五年を経過したとき」を加え、同条第三項中「給付を受ける権利」を「第一項に規定する年金給付を受ける権利又は当該権利に基づき支払期月ごとに支払うものとされる年金給付の支給を受ける権利」に改め、同条第四項中「権利は」の下に「これらを行使用することができる時から」を加え、同条第五項中「民法第百五十三条の規定にかかわらず、時効中断」を「時効の更新」に改める。

第百三条中「基く」を「基づく」に改め、「民法」の下に「明治二十九年法律第八十九号」を加える。

(国民年金法の一部改正に伴う経過措置)

第百八十三条 施行日前に前条の規定による改正前の国民年金法(以下この項において「旧国民年金法」という。)第百一条第三項(旧国民年金法第百三十八条及び附則第九条の三の二第六項において準用する場合を含む。)又は第百二条第五項(旧国民年金法第百三十八条において準用する場合を含む。)に規定する時効の中断の事由が生じた場合におけるその事由の効力については、なお従前の例による。

2 施行日前に年金給付を受ける権利(当該権利に基づき支払期月ごとに又は一時金として支払うものとされる給付の支給を受ける権利を含む。)が生じた場合におけるこれらの権利の消滅の時効の期間については、前条の規定による改正後の国民年金法(以下この項において「新国民年金法」という。)第百二条第一項(新国民年金法第百三十八条において準用する場合を含む。)の規定にかかわらず、なお従前の例による。

(中小企業退職金共済法の一部改正)
第百八十四条 中小企業退職金共済法(昭和三十四年法律第百六十号)の一部を次のように改正する。

第三十三条第一項中「支給を受ける権利は」の下に「これらを行使用することができる時から」を加え、「二年間行わない」を「これらを行使用することができるときから二年間行使しない」に改める。

第百八十四条第三項中「中断」を「完成猶予及び更新」に改める。

(中小企業退職金共済法の一部改正に伴う経過措置)

第百八十五条 施行日前に前条の規定による改正前の中小企業退職金共済法第八十四条第三項に規定する時効の中断の事由が生じた場合におけるその事由の効力については、なお従前の例による。

(じん肺法及び特定障害者に対する特別障害給付金の支給に関する法律の一部改正)

第百八十六条 次に掲げる法律の規定中「権利は」の下に「これを行使用することができる時から」を加える。

一 じん肺法(昭和三十五年法律第三十号)第三十八條

二 特定障害者に対する特別障害給付金の支給に関する法律(平成十六年法律第百六十六号)第二十一条

(障害者の雇用の促進等に関する法律の一部改正)

第百八十七条 障害者の雇用の促進等に関する法律(昭和三十五年法律第百二十三号)の一部を次のように改正する。

第六十三条第一項中「権利は」の下に「これらを行使用することができるときから」を加え、同条第二項中「民法(明治二十九年法律第八十九号)第百五十三条の規定にかかわらず、時効中断」を「時効の更新」に改める。

(障害者の雇用の促進等に関する法律の一部改正に伴う経過措置)

第百八十八条 施行日前に前条の規定による改正前の障害者の雇用の促進等に関する法律第六十三条第二項に規定する時効の中断の事由が生じた場合におけるその事由の効力については、なお従前の例による。

(社会福祉施設職員等退職手当共済法等の一部改正)

第百八十九条 次に掲げる法律の規定中「権利は」の下に「これらを行使用することができる時から」を加える。

一 社会福祉施設職員等退職手当共済法(昭和三十六年法律第百五十五号)第二十條

二 職業訓練の実施等による特定求職者の就職の支援に関する法律(平成二十三年法律第四十七号)第十四條

三 年金生活者支援給付金の支給に関する法律(平成二十四年法律第百二二号)第三十條

(児童扶養手当法の一部改正)

第百九十条 児童扶養手当法(昭和三十六年法律第百三十八号)の一部を次のように改正する。

第十九條(見出しを含む。)中「中断」を「完成猶予及び更新」に改める。

第二十二條中「権利は」の下に「これを行使用することができるときから」を加える。

(児童扶養手当法の一部改正に伴う経過措置)

第百九十一条 施行日前に前条の規定による改正前の児童扶養手当法第十九條に規定する時効の中断の事由が生じた場合におけるその事由の効

力については、なお従前の例による。

(戦没者等の妻に対する特別給付金支給法の一部改正)

第百九十二条 戦没者等の妻に対する特別給付金支給法(昭和三十八年法律第六十一号)の一部を次のように改正する。

第六条中「三年間行わない」を「これを行使用することができるときから三年間行使しない」に改める。

第七条見出しを含む。中「中断」を「完成猶予及び更新」に改める。

(戦没者等の妻に対する特別給付金支給法の一部改正に伴う経過措置)

第百九十三条 施行日前に前条の規定による改正前の戦没者等の妻に対する特別給付金支給法第七条に規定する時効の中断の事由が生じた場合におけるその事由の効力については、なお従前の例による。

(戦傷病者特別援護法の一部改正)

第百九十四条 戦傷病者特別援護法(昭和三十八年法律第百六十八号)の一部を次のように改正する。

第二十五条中「二年間行わない」を「これらを行使用することができるときから二年間行使しない」に改める。

(特別児童扶養手当等の支給に関する法律の一部改正)

第百九十五条 特別児童扶養手当等の支給に関する法律(昭和三十九年法律第百三十四号)の一部を次のように改正する。

第三十一条(見出しを含む。)中「中断」を「完成猶予及び更新」に改める。

(特別児童扶養手当等の支給に関する法律の一部改正に伴う経過措置)

第百九十六条 施行日前に前条の規定による改正前の特別児童扶養手当等の支給に関する法律第三十一条に規定する時効の中断の事由が生じた場合におけるその事由の効力については、なお従前の例による。

(戦没者等の遺族に対する特別弔慰金支給法の一部改正)

第九十七條 戦没者等の遺族に対する特別弔慰金支給法(昭和四十年法律第百号)の一部を次のように改正する。

第八條中「三年間行なわない」を「これを行することができる時から三年間行使しない」に改める。

第九條(見出しを含む)中「中断」を「完成猶予及び更新」に改める。

(戦没者等の遺族に対する特別弔慰金支給法の一部改正に伴う経過措置)

第九十八條 施行日前に前条の規定による改正前の戦没者等の遺族に対する特別弔慰金支給法第九條に規定する時効の中断の事由が生じた場合におけるその事由の効力については、なお従前の例による。

(戦傷病者等の妻に対する特別給付金支給法の一部改正)

第九十九條 戦傷病者等の妻に対する特別給付金支給法(昭和四十一年法律第百九号)の一部を次のように改正する。

第六條中「三年間行なわない」を「これを行することができる時から三年間行使しない」に改める。

第七條(見出しを含む)中「中断」を「完成猶予及び更新」に改める。

(戦傷病者等の妻に対する特別給付金支給法の一部改正に伴う経過措置)

第一百條 施行日前に前条の規定による改正前の戦傷病者等の妻に対する特別給付金支給法第七條に規定する時効の中断の事由が生じた場合におけるその事由の効力については、なお従前の例による。

(戦没者の父母等に対する特別給付金支給法の一部改正)

第一百一條 戦没者の父母等に対する特別給付金支給法(昭和四十二年法律第五十七号)の一部を次のように改正する。

第八條中「三年間行なわない」を「これを行することができる時から三年間行使しない」に改める。

第九條(見出しを含む)中「中断」を「完成猶予及び更新」に改める。

(戦没者の父母等に対する特別給付金支給法の一部改正に伴う経過措置)

第一百二條 施行日前に前条の規定による改正前の戦没者の父母等に対する特別給付金支給法第九條に規定する時効の中断の事由が生じた場合におけるその事由の効力については、なお従前の例による。

(石炭鉱業年金基金法の一部改正)

第一百三條 石炭鉱業年金基金法(昭和四十二年法律第百三十五号)の一部を次のように改正する。

第三十四條第一項中「権利は、」の下に「これらを行使用することができる時から」を加え、同条第二項中「民法明治二十九年法律第八十九号」

第百五十三條の規定にかかわらず、時効中断」を「時効の更新」に改める。

(石炭鉱業年金基金法の一部改正に伴う経過措置)

第一百四條 施行日前に前条の規定による改正前の石炭鉱業年金基金法第三十四條第二項に規定する時効の中断の事由が生じた場合におけるその事由の効力については、なお従前の例による。

(労働保険の保険料の徴収等に関する法律の一部改正)

第一百五條 労働保険の保険料の徴収等に関する法律(昭和四十四年法律第八十四号)の一部を次のように改正する。

第四十一條第一項中「権利は、」の下に「これらを行使用することができる時から」を加え、同条第二項中「行なう」を「行う」に、「民法明治二十九年法律第八十九号」第百五十三條の規定にかかわらず、時効中断」を「時効の更新」に改める。

(労働保険の保険料の徴収等に関する法律の一部改正に伴う経過措置)

第二百六條 施行日前に前条の規定による改正前の労働保険の保険料の徴収等に関する法律第四十一條第二項に規定する時効の中断の事由が生じた場合におけるその事由の効力については、なお従前の例による。

(児童手当法の一部改正)

第二百七條 児童手当法(昭和四十六年法律第七十三号)の一部を次のように改正する。

第二十三條第一項中「権利は、」の下に「これらを行使用することができる時から」を加え、同条第二項中「中断」を「完成猶予及び更新」に改め、同条第三項中「民法明治二十九年法律第八十九号」第百五十三條の規定にかかわらず、時効中断」を「時効の更新」に改める。

第二十四條中「民法」の下に「明治二十九年法律第八十九号」を加える。

(児童手当法の一部改正に伴う経過措置)

第二百八條 施行日前に前条の規定による改正前の児童手当法(以下この条において「旧児童手当法」という)第二十三條第二項又は第三項(これらの規定を旧児童手当法附則第二条第三項において準用する場合を含む)に規定する時効の中断の事由が生じた場合におけるその事由の効力については、なお従前の例による。

(雇用の分野における男女の均等な機会及び待遇の確保等に関する法律の一部改正)

第二百九條 雇用の分野における男女の均等な機会及び待遇の確保等に関する法律(昭和四十七年法律第百十三号)の一部を次のように改正する。

第二十四條(見出しを含む)中「中断」を「完成猶予」に改める。

(雇用の分野における男女の均等な機会及び待遇の確保等に関する法律の一部改正に伴う経過措置)

第二百十條 施行日前に前条の規定による改正前の雇用の分野における男女の均等な機会及び待遇の確保等に関する法律第十八條第一項に規定する調停の申請がされた場合におけるその申請に係る時効の特例については、前条の規定による改正後の雇用の分野における男女の均等な機会及び待遇の確保等に関する法律(以下この条において「新男女雇用機会均等法」という)第二十四條(新男女雇用機会均等法第三十一條第五項において準用する場合を含む)の規定にかかわらず、なお従前の例による。

(雇用保険法の一部改正)

第二百十一條 雇用保険法(昭和四十九年法律第百十六号)の一部を次のように改正する。

第六十九條第三項中「中断」を「完成猶予及び更新」に改める。

第七十四條中「権利は、」の下に「これらを行使用することができる時から」を加える。

(雇用保険法の一部改正に伴う経過措置)

第二百十二條 施行日前に前条の規定による改正前の雇用保険法第六十九條第三項に規定する時効の中断の事由が生じた場合におけるその事由の効力については、なお従前の例による。

(賃金の支払の確保等に関する法律の一部改正)

第二百十三條 賃金の支払の確保等に関する法律(昭和五十一年法律第三十四号)の一部を次のように改正する。

第七條中「第四百七十四條第一項ただし書及び第二項」を「第四百七十四條第二項から第四項まで」に改める。

(高齢者の医療の確保に関する法律の一部改正)

第二百十四條 高齢者の医療の確保に関する法律(昭和五十七年法律第八十号)の一部を次のように改正する。

第二百十八條第二項中「中断」を「完成猶予及び更新」に改める。

第六十條第一項中「権利は、」の下に「これらを行使用することができる時から」を加え、同条第二項中「民法第百五十三條の規定にかかわらず、時効中断」を「時効の更新」に改める。

(高齢者の医療の確保に関する法律の一部改正)

に伴う経過措置

第二百十五條 施行日前に前条の規定による改正前の高齢者の医療の確保に関する法律第二百二十八條第二項又は第六十條第二項に規定する時効の中断の事由が生じた場合におけるその事由の効力については、なお従前の例による。
(水道原水水質保全事業の実施の促進に関する法律の一部改正)

第二百十六條 水道原水水質保全事業の実施の促進に関する法律(平成六年法律第八号)の一部を次のように改正する。
第十六條第五項中「五年間行わない」を「これらを行つてから五年間行わない」を「これらを行つてから五年間行わない」に改める。

(介護保険法の一部改正)

第二百十七條 介護保険法(平成九年法律第二百十三号)の一部を次のように改正する。
第二百十三條第二項中「中断」を「完成猶予及び更新」に改める。

第二百十八條 施行日前に前条の規定による改正前の介護保険法第二百十三條第二項又は第二百十八條第二項に規定する時効の中断の事由が生じた場合におけるその事由の効力については、なお従前の例による。
(介護保険法の一部改正に伴う経過措置)

第二百十八條 施行日前に前条の規定による改正前の介護保険法第二百十三條第二項又は第二百十八條第二項に規定する時効の中断の事由が生じた場合におけるその事由の効力については、なお従前の例による。
(平成十八年改正前介護保険法の一部改正)

第二百十九條 健康保険法等の一部を改正する法律(平成十八年法律第八十三号)附則第三百三十條の二第一項の規定によりなおその効力を有するものとされた同法第二百六條の規定による改正前の介護保険法の一部を次のように改正する。
第二百八十三條第二項中「中断」を「完成猶予及び更新」に改める。

第二百二十條 施行日前に前条の規定による改正前の健康保険法等の一部を改正する法律附則第三百三十條の二第一項の規定によりなおその効力を有するものとされた同法第二百六條の規定による改正前の介護保険法の一部を次のように改正する。
第二百八十三條第二項中「中断」を「完成猶予及び更新」に改める。

二項中「民法第五百十三條の規定にかかわらず、時効中断を時効の更新」に改める。
(平成十八年改正前介護保険法の一部改正に伴う経過措置)

第二百二十條 施行日前に前条の規定による改正前の健康保険法等の一部を改正する法律附則第三百三十條の二第一項の規定によりなおその効力を有するものとされた同法第二百六條の規定による改正前の介護保険法第二百八十三條第二項又は第二百八十三條第二項に規定する時効の中断の事由が生じた場合におけるその事由の効力については、なお従前の例による。
(個別労働関係紛争の解決の促進に関する法律の一部改正)

第二百二十一條 個別労働関係紛争の解決の促進に関する法律(平成十三年法律第二百十二号)の一部を次のように改正する。
第十六條(見出しを含む)中「中断」を「完成猶予」に改める。

(個別労働関係紛争の解決の促進に関する法律の一部改正に伴う経過措置)

第二百二十二條 施行日前に前条の規定による改正前の個別労働関係紛争の解決の促進に関する法律第五條第一項に規定するあつせん申請がされた場合におけるその申請に係る時効の特例については、前条の規定による改正後の個別労働関係紛争の解決の促進に関する法律(以下この条において「新個別労働関係紛争解決法」という。)第十六條(新個別労働関係紛争解決法第二十一條第四項において準用する場合を含む。)の規定にかかわらず、なお従前の例による。
(障害者の日常生活及び社会生活を総合的に支援するための法律の一部改正)

第二百二十三條 障害者の日常生活及び社会生活を総合的に支援するための法律(平成十七年法律第二百二十三号)の一部を次のように改正する。
第九十七條第二項中「中断」を「完成猶予及び更新」に改める。

(障害者の日常生活及び社会生活を総合的に支援するための法律の一部改正に伴う経過措置)

第二百二十四條 施行日前に前条の規定による改正前の障害者の日常生活及び社会生活を総合的に支援するための法律第九十七條第二項に規定する時効の中断の事由が生じた場合におけるその事由の効力については、なお従前の例による。
(厚生年金保険の保険給付及び保険料の納付の特例等に関する法律の一部改正)

第二百二十五條 厚生年金保険の保険給付及び保険料の納付の特例等に関する法律(平成十九年法律第三十一号)の一部を次のように改正する。
第十二條第一項中「権利は」の下に「これらを行つてから五年間行わない」を加え、同条第二項中「民法(明治二十九年法律第八十九号)第五百十三條の規定にかかわらず、時効中断」を「時効の更新」に改める。

第十三條中「民法」の下に「(明治二十九年法律第八十九号)」を加える。
(厚生年金保険の保険給付及び保険料の納付の特例等に関する法律の一部改正に伴う経過措置)

第二百二十六條 施行日前に前条の規定による改正前の厚生年金保険の保険給付及び保険料の納付の特例等に関する法律第十二條第二項に規定する時効の中断の事由が生じた場合におけるその事由の効力については、なお従前の例による。
(特定フィブリノゲン製剤及び特定血液凝固因子因子製剤によるC型肝炎感染被害者を救済するための給付金の支給に関する特別措置法の一部改正)

第二百二十七條 特定フィブリノゲン製剤及び特定血液凝固因子因子製剤によるC型肝炎感染被害者を救済するための給付金の支給に関する特別措置法(平成二十年法律第二号)の一部を次のように改正する。

第九條中「三年」を「五年」に改める。

(特定フィブリノゲン製剤及び特定血液凝固因子因子製剤によるC型肝炎感染被害者を救済するための給付金の支給に関する特別措置法の一部改正に伴う経過措置)

第二百二十八條 前条の規定による改正前の特定フィブリノゲン製剤及び特定血液凝固因子因子製剤によるC型肝炎感染被害者を救済するための給付金の支給に関する特別措置法第九條に規定する請求期限がこの法律の施行の際既に経過していた場合におけるその請求期限については、なお従前の例による。
(厚生年金保険の保険給付及び国民年金の給付の支払の遅延に係る加算金の支給に関する法律の一部改正)

第二百二十九條 厚生年金保険の保険給付及び国民年金の給付の支払の遅延に係る加算金の支給に関する法律(平成二十一年法律第三十七号)の一部を次のように改正する。

第十二條第一項中「権利は」の下に「これを行つてから五年間行わない」を加え、同条第二項中「民法(明治二十九年法律第八十九号)第五百十三條の規定にかかわらず、時効中断」を「時効の更新」に改める。

第十三條第一項第二号中「民法」の下に「(明治二十九年法律第八十九号)」を加える。
(厚生年金保険の保険給付及び国民年金の給付の支払の遅延に係る加算金の支給に関する法律の一部改正に伴う経過措置)

第二百三十條 施行日前に前条の規定による改正前の厚生年金保険の保険給付及び国民年金の給付の支払の遅延に係る加算金の支給に関する法律(以下この条において「旧年金給付遅延加算金支給法」という。)第十二條第二項「旧年金給付遅延加算金支給法附則第二條第一項において準用する場合を含む。」に規定する時効の中断の事由が生じた場合におけるその事由の効力については、なお従前の例による。

(平成二十二年法律第二号)の一部を次のように改正する。

に関する法律の一部改正

第二百三十一条 平成二十二年等における子ども手当の支給に関する法律(平成二十二年法律第十九号)の一部を次のように改正する。

第二十四条第一項中「権利は、」の下に「これらを行使することができる時から」を加え、同条第二項中「中断を「完成猶予及び更新」に改め、同条第三項中「民法(明治二十九年法律第八十九号)第百五十三条の規定にかかわらず、時効中断を「時効の更新」に改める。

第二十五条中「民法」の下に「(明治二十九年法律第八十九号)」を加える。

(平成二十二年等における子ども手当の支給に関する法律の一部改正に伴う経過措置)

第二百三十二条 施行日前に前条の規定による改正前の平成二十二年等における子ども手当の支給に関する法律第二十四条第二項又は第三項に規定する時効の中断の事由が生じた場合におけるその事由の効力については、なお従前の例による。

(平成二十三年等における子ども手当の支給等に関する特別措置法の一部改正)

第二百三十三条 平成二十三年等における子ども手当の支給等に関する特別措置法(平成二十三年法律第七号)の一部を次のように改正する。

第二十八条第一項中「権利は、」の下に「これらを行使することができる時から」を加え、同条第二項中「中断を「完成猶予及び更新」に改め、同条第三項中「民法(明治二十九年法律第八十九号)第百五十三条の規定にかかわらず、時効中断を「時効の更新」に改める。

第二十九条中「民法」の下に「(明治二十九年法律第八十九号)」を加える。

(平成二十三年等における子ども手当の支給等に関する特別措置法の一部改正に伴う経過措置)

第二百三十四条 施行日前に前条の規定による改正前の平成二十三年等における子ども手当の支給等に関する特別措置法第二十八条第二項又は第三項に規定する時効の中断の事由が生じた場合におけるその事由の効力については、なお従前の例による。

(特定B型肝炎ウイルス感染者給付金等の支給に関する特別措置法の一部改正)

第二百三十五条 特定B型肝炎ウイルス感染者給付金等の支給に関する特別措置法(平成二十三年法律第二百六号)の一部を次のように改正する。

第十條中「三年」を「五年」に改める。

(特定B型肝炎ウイルス感染者給付金等の支給に関する特別措置法の一部改正に伴う経過措置)

第二百三十六条 前条の規定による改正前の特定B型肝炎ウイルス感染者給付金等の支給に関する特別措置法第十條に規定する請求期限がこの法律の施行の際に経過していた場合におけるその請求期限については、なお従前の例による。

(公的年金制度の健全性及び信頼性の確保のための厚生年金保険法等の一部を改正する法律の一部改正)

第二百三十七条 公的年金制度の健全性及び信頼性の確保のための厚生年金保険法等の一部を改正する法律(平成二十五年法律第六十三号)の一部を次のように改正する。

附則第五條第二項の表改正前厚生年金保険法第百四十六條の二、第百四十七條の五第二項並びに第百四十八條第一項、第三項及び第四項の項の次に次のように加える。

改正前厚生年金保険法第百七
十條第一項

これらを行使することがで
きる時から二年

五年を経過したとき

その支給すべき事由が生じた日から五年を経過したとき、当該年金たる給付を受ける権利に基づき支払期月ごとに支払うものとされる年金たる給付の支給を受ける権利は、当該日の属する月の翌月以降に到来する当該年金たる給付の支給に係る支払期月の翌月の初日から五年を経過したとき

改正前厚生年金保険法第百七
十條第三項

民法第百五十三條の規定にか
かわらず、時効中断

時効の更新

(公的年金制度の健全性及び信頼性の確保のための厚生年金保険法等の一部を改正する法律の一部改正に伴う経過措置)

第二百三十八條 施行日前に年金たる給付及び一時金たる給付を受ける権利又は当該年金たる給付を受ける権利に基づき支払期月ごとに支払うものとされる年金たる給付を受ける権利が生じた場合におけるこれらの権利の消滅時効の期間については、前条の規定による改正後の公的年金制度の健全性及び信頼性の確保のための厚生年金保険法等の一部を改正する法律附則第五條第一項の規定によりなおその効力を有するものとされた同法第一條の規定による改正前の厚生年金保険法(次項において「平成二十五年改正前厚生年金保険法」という。)第百七十七條第一項の規定にかかわらず、なお従前の例による。

2 施行日前に前条の規定による改正前の公的年金制度の健全性及び信頼性の確保のための厚生年金保険法等の一部を改正する法律附則第五條第一項の規定によりなおその効力を有するものとされた平成二十五年改正前厚生年金保険法第百七十七條第三項に規定する時効の中断の事由が生じた場合におけるその事由の効力については、なお従前の例による。

第九章 農林水産省関係

(農業協同組合法の一部改正)

第二百三十九條 農業協同組合法(昭和二十二年法律第百三十二号)の一部を次のように改正する。

第十條第六項第六号の二中「指名金銭債権又は指名金銭債権」を「金銭債権(民法(明治二十九年法律第八十九号)第三編第一章第七節第一款に規定する指図証券、同節第二款に規定する記名式所持人払証券、同節第三款に規定するその他の記名証券及び同節第四款に規定する無記名証券に係る債権並びに電子記録債権法(平成十九年法律第百二二号)第二条第一項に規定する電子記録債権を除く。以下この号において同じ。以下この号において同じ)」を加え、「これ」を「特定社債」に改める。

第十一條の十一第四項中「(明治二十九年法律第八十九号)第七百二十四條」を「第七百二十四條及び第七百二十四條の二」に改める。

第三十五條の二第二項中「契約する」を「契約をし、又は当該理事と組合との利益が相反する行為をする」に改める。

(農業協同組合法の一部改正に伴う経過措置)

第二百四十条 前条の規定による改正前の農業協同組合法次項において「旧農業協同組合法」という。第十一條の十一第四項において準用する旧民法第七百二十四条後段に規定する期間がこの法律の施行の際既に経過していた場合におけるその期間の制限については、なお従前の例による。

2 前条の規定による改正後の農業協同組合法（次項において「新農業協同組合法」という。）第十一條の十一第四項において準用する新民法第七百二十四条の二の規定は、旧農業協同組合法第十一條の十一第一項の規定による損害賠償の請求権の同条第四項において準用する旧民法第七百二十四条前段に規定する時効がこの法律の施行の際既に完成していた場合については、適用しない。

3 施行日前に行われた理事、経営管理委員又は清算人と農業協同組合又は農業協同組合連合会との利益相反行為については、新農業協同組合法第三十五條の二第二項（新農業協同組合法第七十二條の二の二において準用する場合を含む。）の規定にかかわらず、なお従前の例による。

（農業災害補償法の一部改正）
第二百四十一条 農業災害補償法（昭和二十二年法律第八十五号）の一部を次のように改正する。

第八十七條の二第六項中「民法（明治二十九年法律第八十九号）第五百十三條の規定にかかわらず、時効中断を「時効の更新」に改める。

第八十八條中「払戻」を「払戻し」に、「三年間これを行わない」を「これらを行使用することができる時から三年間行使しない」に、「因つて」を「よつて」に改める。

第三百三十一條第二項中「中断」を「完成猶予及び更新」に改める。

（農業災害補償法の一部改正に伴う経過措置）
第二百四十二條 施行日前に前条の規定による改正前の農業災害補償法（以下この条において「旧

農業災害補償法」という。）第八十七條の二第六項（旧農業災害補償法第三百三十二條第一項及び第三百四十一條の二において準用する場合を含む。）又は第三百三十一條第二項（旧農業災害補償法第四百四十一條第二項において準用する場合を含む。）に規定する時効の中断の事由が生じた場合におけるその事由の効力については、なお従前の例による。

（競馬法の一部改正）
第二百四十三條 競馬法（昭和二十三年法律第五十八号）の一部を次のように改正する。

第十一條中「六十日間行わない」を「これらを行使用することができるときから六十日間行使しない」に改める。

第二十三條の六第五項中「第二項の規定による」を「当該に、「年五分の割合で」を当該同意を得た日における法定利率により」に改める。

附則第五條第四項中「六十日間行わない」を「これらを行使用することができるときから六十日間行使しない」に改める。

（競馬法の一部改正に伴う経過措置）
第二百四十四條 施行日前に都道府県又は指定市町村（前条の規定による改正前の競馬法（以下この条において「旧競馬法」という。）第一條の二第二項に規定する指定市町村をいう。）が旧競馬法第二十三條の六第二項の規定による同意を得ていた場合における前条の規定による改正後の競馬法第二十三條の六第五項の規定により交付しなければならぬ金額については、なお従前の例による。

（水産業協同組合法の一部改正）
第二百四十五條 水産業協同組合法（昭和二十三年法律第二百四十二号）の一部を次のように改正する。

第十五條の八第四項中「第七百二十四條の下に及び第七百二十四條の二」を加える。

第三十九條の二第二項中「契約する」を「契約をし、又は当該理事と組合との利益が相反する

行為をする」に改める。

（水産業協同組合法の一部改正に伴う経過措置）
第二百四十六條 前条の規定による改正前の水産業協同組合法（以下この条において「旧水産業協同組合法」という。）第十五條の八第四項（旧水産業協同組合法第九十六條第一項及び第九百條の八第一項において準用する場合を含む。）次項において同じ。）において準用する旧民法第七百二十四条後段に規定する期間がこの法律の施行の際既に経過していた場合におけるその期間の制限については、なお従前の例による。

2 前条の規定による改正後の水産業協同組合法（以下この条において「新水産業協同組合法」という。）第十五條の八第四項（新水産業協同組合法第九十六條第一項及び第九百條の八第一項において準用する場合を含む。）において準用する新民法第七百二十四條の二の規定は、旧水産業協同組合法第九十六條の八第一項（旧水産業協同組合法第九十六條第一項及び第九百條の八第一項において準用する場合を含む。）の規定による損害賠償の請求権の旧水産業協同組合法第十五條の八第四項において準用する旧民法第七百二十四條前段に規定する時効がこの法律の施行の際既に完成していた場合については、適用しない。

3 施行日前に行われた理事、経営管理委員又は清算人と水産業協同組合（漁業生産組合を除く。）との利益相反行為については、新水産業協同組合法第三十九條の二第二項（新水産業協同組合法第七十七條、新水産業協同組合法第九十二條第五項、第九十六條第五項、第九百條の八第五項において準用する場合を含む。）第九十二條第三項、第九十六條第三項、第九百條第三項及び第九百條の八第三項において準用する場合を含む。）の規定にかかわらず、なお従前の例による。

（土地改良法の一部改正）
第二百四十七條 土地改良法（昭和二十四年法律第九十五号）の一部を次のように改正する。

第三十九條第八項中「民法（明治二十九年法律

第八十九号）第五百十三條の規定にかかわらず、時効中断を「時効の更新」に改める。

（森林法の一部改正）
第二百四十八條 施行日前に前条の規定による改正前の土地改良法（以下この条において「旧土地改良法」という。）第三十九條第八項又は第八十九條の三第四項（旧土地改良法第九十條の二第九項において準用する場合を含む。）に規定する時効の中断の事由が生じた場合におけるその事由の効力については、なお従前の例による。

（森林法の一部改正）
第二百四十九條 森林法（昭和二十六年法律第二百四十九号）の一部を次のように改正する。

第六十一條中「左の各号の二」を「左の各号のいずれかに改め、同条第一号中「を受ける」を「の提供をした場合において、補償金を受けるべき」に改め、同条第二号中「過失がなく」を削り、「受ける」を受けるべきに改め、「とき」の下に「土地を使用し、又は収用する者に過失があるときを除く。」を加え、同条第三号中「補償金払渡の差押又は仮差押を受けた」を「差押又は仮差押えにより補償金の払渡しを禁じられた」に改める。

（森林法の一部改正に伴う経過措置）
第二百五十條 施行日前に前条の規定による改正前の森林法（以下この条において「旧森林法」という。）第五十八條第一項から第四項まで（これらの規定を旧森林法第六十五條及び第六十六條において準用する場合を含む。）の規定により補償金の支払義務が生じた場合におけるその補償金の供託については、なお従前の例による。

（漁船損害等補償法の一部改正）
第二百五十一條 漁船損害等補償法（昭和二十七年法律第二十八号）の一部を次のように改正す

る。

る。

第百十三條の十七中「支払義務は」を「支払義務に係る請求権はこれらを行使することができる時から」に改める。

第百三十八條の二十二第二項中「中断」を「完成猶予及び更新」に改める。

(漁船損害等補償法の一部改正に伴う経過措置)
第二百五十二條 施行日前に前條の規定による改正前の漁船損害等補償法第百三十八條の二十二第二項に規定する時効の中断の事由が生じた場合におけるその事由の効力については、なお従前の例による。

(農地法の一部改正)
第二百五十三條 農地法(昭和二十七年法律第二百二十九號)の一部を次のように改正する。

第七條第八項中「使用貸借の解除をし、」の下に「若しくは」を加え、「若しくは返還の請求をし」を削る。

第十條第三項第一号中「対価」を「対価の支払の提供をした場合において、対価に、受領を拒み、又は受領することができない場合」を「その受領を拒んだとき」に改め、同項第三号を第四号とし、第二号を第三号とし、第一号の次に次の一号を加える。

二 対価の支払を受けるべき者が対価を受領することができない場合

第十六條第二項及び第三項を削る。

第十九條を次のように改める。

第四十三條第七項中「同條第一項」を「同條に改める。

(農地法の一部改正に伴う経過措置)
第二百五十四條 施行日前に締結された農地又は採草放牧地の使用貸借契約に係る返還の請求については、前條の規定による改正後の農地法第七條第八項の規定にかかわらず、なお従前の例による。

2 施行日前に登記をしてない貸借の目的である農地又は採草放牧地の売買契約が締結された

第三部 法務委員会會議録第八号 平成二十九年四月二十日 【参議院】

場合におけるその契約に係る契約の解除及び損害賠償の請求については、なお従前の例による。

3 施行日前に締結された農地又は採草放牧地の賃貸借契約に係る前條の規定による改正前の農地法第十九條の規定により読み替えて適用される旧民法第六百四條第一項に規定する賃貸借の存続期間については、なお従前の例による。

(旧農林漁業団体職員共済組合法の一部改正)
第二百五十五條 厚生年金保険制度及び農林漁業団体職員共済組合法の統合を図るための農林漁業団体職員共済組合法等を廃止する等の法律(平成十三年法律第百一號)附則第二十五條第一項の規定によりなおその効力を有するものとされる同法第一條の規定による廃止前の農林漁業団体職員共済組合法(昭和三十三年法律第九十九號)の一部を次のように改正する。

第六十六條第六項中「中断」を「完成猶予及び更新」に改める。

(旧農林漁業団体職員共済組合法の一部改正に伴う経過措置)
第二百五十六條 施行日前に前條の規定による改正前の厚生年金保険制度及び農林漁業団体職員共済組合法の統合を図るための農林漁業団体職員共済組合法等を廃止する等の法律附則第二十五條第一項の規定によりなおその効力を有するものとされる同法第一條の規定による廃止前の農林漁業団体職員共済組合法第六十六條第六項に規定する時効の中断の事由が生じた場合におけるその事由の効力については、なお従前の例による。

(漁業災害補償法の一部改正)
第二百五十七條 漁業災害補償法(昭和三十三年法律第百五十八號)の一部を次のように改正する。

第九十六條中「払いもどし」を「払戻し」に、

「三年間これを行なわない」を「これらを行使することができる時から三年間行使しない」に改める。

第百四十七條の十三第三項中「中断」を「完成猶予及び更新」に改める。

(漁業災害補償法の一部改正に伴う経過措置)
第二百五十八條 施行日前に前條の規定による改正前の漁業災害補償法第百四十七條の十三第三項に規定する時効の中断の事由が生じた場合におけるその事由の効力については、なお従前の例による。

(農水産業協同組合貯金保険法の一部改正)
第二百五十九條 農水産業協同組合貯金保険法(昭和四十八年法律第五十三號)の一部を次のように改正する。

第百十四條第一項中「引受け」の下に「及び契約上の地位の移転(第六項において「債務の引受け等」という。)」を、「係る債権者」の下に「及び救済農水産業協同組合が譲り受ける契約上の地位に係る契約の相手方」を加え、「移転債権者」を「移転債権者等」に改め、同條第三項中「要旨及び」を「要旨並びに」に改め、「ある債権者」及び「知れている債権者」の下に「及び契約上の地位に係る契約の相手方」を加え、同條第六項中「移転債権者」を「移転債権者等」に、「債務の引受け」を「債務の引受け等」に、「さかのぼつて」を「遡つて」に改める。

(森林組合法の一部改正)
第二百六十條 森林組合法(昭和五十三年法律第三十六號)の一部を次のように改正する。

第四十七條第二項中「契約する」を「契約をし、又は当該理事と組合との利益が相反する行為をする」に改める。

(森林組合法の一部改正に伴う経過措置)
第二百六十一條 施行日前に行われた理事又は清算人と森林組合又は森林組合連合会との利益相反行為については、前條の規定による改正後の森林組合法(以下この条において「新森林組合法」という。第四十七條第二項(新森林組合法第九十二條(新森林組合法第百九條第五項)において準用する場合を含む。))及び第百九條第三項において準用する場合を含む。の規定にかかわらず、なお従前の例による。

ず、なお従前の例による。

(種苗法の一部改正)
第二百六十二條 種苗法(平成十年法律第八十三號)の一部を次のように改正する。

第十四條第五項中「同條」を「同條第一号」に改める。

(種苗法の一部改正に伴う経過措置)
第二百六十三條 前條の規定による改正前の種苗法第十四條第五項において準用する旧民法第七百二十四條後段に規定する期間がこの法律の施行の際に経過していた場合におけるその期間の制限については、なお従前の例による。

(農林中央金庫法の一部改正)
第二百六十四條 農林中央金庫法(平成十三年法律第九十三號)の一部を次のように改正する。

第七條中「第五百二十二條まで」を「第五百六條まで、第五百八條から第五百十三條まで、第五百十五條、第五百十六條及び第五百二十一條」に改める。

第三十條第三項中「同項第一号」を「同項各号」に改める。

第五十四條第四項第六号中「指名金銭債権又は指名金銭債権を」を「金銭債権(民法第三編第一章第七節第一款に規定する指図証券、同節第二款に規定する記名式所持人払証券、同節第三款に規定するその他の記名証券及び同節第四款に規定する無記名証券に係る債権並びに電子記録債権法(平成十九年法律第百二號)第二條第一項に規定する電子記録債権を除く。以下この号において同じ。又は金銭債権」に改め、「限る」の下に「。以下この号において同じ」を加え、「これ」を「特定社債」に改める。

第六十九條中「消滅時効は」の下に「その権利を行使することができる時から」を加える。

(農林中央金庫法の一部改正に伴う経過措置)
第二百六十五條 第四條第二項から第八項までの規定は、前條の規定による改正前の農林中央金庫法第七條に規定する農林中央金庫の行う行為について準用する。

2 施行日前に理事、経営管理委員又は清算人となつた者の利益相反取引については、前条の規定による改正後の農林中央金庫法(以下この項において「新農林中央金庫法」という。)第三十条第三項(新農林中央金庫法第九十五条において準用する場合を含む。)の規定にかかわらず、なお従前の例による。

(独立行政法人農業者年金基金法の一部改正)
第二百六十六条 独立行政法人農業者年金基金法(平成十四年法律第二百七号)の一部を次のように改正する。

第五十二条第五項中「中断を」を「完成猶予及び更新」に改める。

第五十八条第二項中「還付を受ける権利は、」の下に「これらを行使することができるときから」を、「給付を受ける権利は、」の下に「これを行使することができるときから」を加え、同条第二項中「民法明治二十九年法律第八十九号」第百五十三条の規定にかかわらず、時効中断を時効の更新に改める。

(独立行政法人農業者年金基金法の一部改正に伴う経過措置)
第二百六十七条 施行日前に前条の規定による改正前の独立行政法人農業者年金基金法第五十二条第五項又は第五十八条第二項に規定する時効の中断の事由が生じた場合におけるその事由の効力については、なお従前の例による。

(農業協同組合法等の一部を改正する等の法律の一部改正)
第二百六十七号の二 農業協同組合法等の一部を改正する等の法律(平成二十七年法律第六十二号)の一部を次のように改正する。

附則第一条第二号中「平成二十七年法律第二十九号法律第 号」に改める。
(漁業経営に関する補償制度の改善のための漁船損害等補償法及び漁業災害補償法の一部を改正する等の法律及び森林法等の一部を改正する法律の一部改正)
第二百六十七号の三 次に掲げる法律の規定中「平成二十八年法律第 号」を「平成二十九年法律第 号」に改める。

一 漁業経営に関する補償制度の改善のための漁船損害等補償法及び漁業災害補償法の一部を改正する等の法律(平成二十八年法律第三十九号)附則第一条第三号

二 森林法等の一部を改正する法律(平成二十八年法律第四十四号)附則第一条第二号

第十章 経済産業省関係
(自転車競技法の一部改正)

第二百六十八条 自転車競技法(昭和二十三年法律第二百九号)の一部を次のように改正する。
第十五条中「六十日間行わない」を「これらを行使することができるときから六十日間行使しない」に改める。

(中小企業等協同組合法の一部改正)
第二百六十九号 中小企業等協同組合法(昭和十四年法律第八十一号)の一部を次のように改正する。

第九条の八第二項第十号の二中「指名金銭債権又は指名金銭債権を」を「金銭債権(民法(明治二十九年法律第八十九号)第三編第一章第七節第一款(指図証券)に規定する指図証券、同節第二款(記名式所持人払証券)に規定する記名式所持人払証券、同節第三款(その他の記名証券)に規定するその他の記名証券及び同節第四款(無記名証券)に規定する無記名証券に係る債権並びに電子記録債権法(平成十九年法律第二百二号)第二条第一項(定義)に規定する電子記録債権を除く。以下この号において同じ。)又は金銭債権」に改め、「限る」の下に「。以下この号において同じ。」を加え、「これを」を「特定社債」に改める。

第三十八条第二項中「明治二十九年法律第八十九号」を削り、「同項第一号を同項各号」に改める。
(中小企業等協同組合法の一部改正に伴う経過措置)
第二百七十条 施行日前に理事、清算人又は会長となつた者の利益相反取引については、前条の規定による改正後の中小企業等協同組合法(以下この条において「新中小企業等協同組合法」という。)第三十八条第二項(新中小企業等協同組合法第六十九条、第八十二条の八及び第八十二条の十八において準用する場合を含む。)の規定にかかわらず、なお従前の例による。

(小型自動車競走法の一部改正)
第二百七十一条 小型自動車競走法(昭和二十五年法律第二百八号)の一部を次のように改正する。

第十九条中「六十日間行わない」を「これらを行使することができるときから六十日間行使しない」に改める。
(商品先物取引法の一部改正)
第二百七十二号 商品先物取引法(昭和二十五年法律第二百三十九号)の一部を次のように改正する。

第二百三十一条の五第一項中「第九十三条ただし書」を「第九十三条第一項ただし書」に改め、同条第二項中「を理由として組織変更時発行株式の引受けの無効を主張し、又は詐欺若しくは」を「詐欺又は」に改める。

(商品先物取引法の一部改正に伴う経過措置)
第二百七十三号 施行日前にされた意思表示に係る組織変更時発行株式(前条の規定による改正前の商品先物取引法第二百二十九条第一号に規定する組織変更時発行株式をいう。)の引受けについては、前条の規定による改正後の商品先物取引法第二百三十一条の五の規定にかかわらず、なお従前の例による。

(鉱業法の一部改正)
第二百七十四号 鉱業法(昭和二十五年法律第二百八十九号)の一部を次のように改正する。

第九十八条第一項第一号中「対価」の下に「を」を挿入し、同項第一号の下に「対価を加え、又はこれを受領することができないとき」を削り、同項第三号を同項第四号とし、同項第二号中「訴を」を「訴えが」に改め、同号を同項第三号とし、同項第一号の次に次の一号を加える。

二 対価を受けるべき者が対価を受領することができないとき。
第九十八条第二項中「前項第三号」を「前項第四号」に改める。

第九十三条の見出し中「しんしやく」を「しんしん」に改め、同条中「発生」の下に「又は拡大」を

加え、「しんしやく」を「しんしん」に改める。

第二百七十五条第一項を次のように改める。
損害賠償請求権は、次に掲げる場合には、時効によつて消滅する。

一 被害者が損害及び賠償義務者を知つた時から三年間行使しないとき。
二 損害の発生時から二十年間行使しないとき。

第二百七十五条第二項中「前項」を「前二項」に改め、同項を同条第三項とし、同条第一項の次に次の一項を加える。

2 人の生命又は身体を害した場合における損害賠償請求権の消滅時効については、前項第一号の規定の適用については、同号中「三年間」とあるのは、「五年間」とする。

(鉱業法の一部改正に伴う経過措置)
第二百七十五号 施行日前に前条の規定による改正前の鉱業法(以下この条において「旧鉱業法」という。)第九十三条の規定により対価の支払義務が生じた場合におけるその対価の供託については、なお従前の例による。

2 施行日前に損害を賠償する義務が生じた場合におけるその損害賠償の責任及び範囲については、前条の規定による改正後の鉱業法(第四項において「新鉱業法」という。)第百十三条の規定にかかわらず、なお従前の例による。

3 旧鉱業法第百十五条第一項後段に規定する期間がこの法律の施行の際既に経過していた場合におけるその期間の制限については、なお従前の例による。

4 新鉱業法第百十五条第二項及び第三項の規定は、損害賠償請求権の旧鉱業法第百十五条第一項前段に規定する時効がこの法律の施行の際既に完成していた場合については、適用しない。
(信用保証協会法の一部改正)
第二百七十六号 信用保証協会法(昭和二十八年法律第九十六号)の一部を次のように改正する。

第十三条の見出し中「取引」を「取引等」に改

め、同条第一項中「取引」の下に「をし、又は当該理事と協会との利益が相反する行為」を加え、「双方代理を」「双方代理等」に改める。

(信用保証協会法の一部改正に伴う経過措置)

第二百七十七條 施行日前に行われた理事と協会(前条の規定による改正前の信用保証協会法第二条に規定する協会のいう。)との利益相反行為については、前条の規定による改正後の信用保証協会法第十三条第一項の規定にかかわらず、なお従前の例による。

(水洗炭業に関する法律の一部改正)

第二百七十八條 水洗炭業に関する法律(昭和三十三年法律第百三十四号)の一部を次のように改正する。

第十九條の見出し中「しんしゃく」を「しん酌」に改め、同条中「発生」の下に「又は拡大」を加え、「しんしゃく」を「しん酌」に改める。

第二十條を次のように改める。

(消滅時効)

第二十條 第十六條第一項に規定する損害の賠償請求権は、次に掲げる場合には、時効によつて消滅する。

一 被害者が損害及び賠償義務者を知つた時から三年間行使しないとき。

二 損害の発生時から二十年間行使しないとき。

2 人の生命又は身体を害した場合における損害賠償請求権の消滅時効については、前項第一号の規定の適用については、同号中「三年間」とあるのは、「五年間」とする。

(水洗炭業に関する法律の一部改正に伴う経過措置)

第二百七十九條 施行日前に損害を賠償する義務が生じた場合におけるその損害賠償の責任及び範囲については、前条の規定による改正後の水洗炭業に関する法律(第三項において「新水洗炭業法」という。)第十九條の規定にかかわらず、なお従前の例による。

2 前条の規定による改正前の水洗炭業に関する

法律(次項において「旧水洗炭業法」という。)第二十条後段に規定する期間がこの法律の施行の際既に経過していた場合におけるその期間の制限については、なお従前の例による。

3 新水洗炭業法第二十條第二項の規定は、旧水洗炭業法第十六條第一項に規定する損害の賠償請求権の旧水洗炭業法第二十條前段に規定する時効がこの法律の施行の際既に完成していた場合については、適用しない。

(特許法の一部改正)

第二百八十條 特許法(昭和三十四年法律第百二十一号)の一部を次のように改正する。

第六十五條第六項中「同条」を「同条第一号」に改める。

第八十八條第一号中「その対価」を「対価の弁済の提供をした場合において、その対価」に改め、「又はこれを受領することができないとき」を削り、同条第三号を同条第四号とし、同条第二号中「訴えの」を「訴えの」に改め、同条第三号とし、同条第一号の次に次の一号を加える。

二 その対価を受けるべき者がこれを受領することができないとき。

(特許法の一部改正に伴う経過措置)

第二百八十一條 前条の規定による改正前の特許法(以下この条において「旧特許法」という。)第六十五條第六項(旧特許法第百八十四條の十第二項において準用する場合を含む。)において準用する旧民法第七百二十四條後段に規定する期間がこの法律の施行の際既に経過していた場合におけるその期間の制限については、なお従前の例による。

2 施行日前に旧特許法第八十六條第二項第二号(旧特許法第九十二条第七項及び第九十三条第三項において準用する場合を含む。)の規定により対価を支払う義務が生じた場合におけるその対価の供託については、なお従前の例による。

(商標法の一部改正)

第二百八十二條 商標法(昭和三十四年法律第百

二十七号)の一部を次のように改正する。

第十三條の二第五項中「同条」を「同条第一号」に改める。

(商標法の一部改正に伴う経過措置)

第二百八十三條 前条の規定による改正前の商標法(以下この条において「旧商標法」という。)第十三條の二第五項(旧商標法第六十八條第一項において準用する場合を含む。)において準用する旧民法第七百二十四條後段に規定する期間がこの法律の施行の際既に経過していた場合におけるその期間の制限については、なお従前の例による。

(技術研究組合法の一部改正)

第二百八十四條 技術研究組合法(昭和三十六年法律第八十一号)の一部を次のように改正する。

第三十三條第二項中「同項第一号」を「同項各号」に改める。

第七十四條第一項中「第九十三條ただし書」を「第九十三條第一項ただし書」に改め、同条第二項中「を理由として組織変更時発行株式の引受けの無効を主張し、又は詐欺若しくは」を「詐欺又は」に改める。

第二百二十九條第一項中「第九十三條ただし書」を「第九十三條第一項ただし書」に改め、同条第二項中「を理由として新設分割時発行株式の引受けの無効を主張し、又は詐欺若しくは」を「詐欺又は」に改める。

(技術研究組合法の一部改正に伴う経過措置)

第二百八十五條 施行日前に理事又は清算人となつた者の利益相反取引については、前条の規定による改正後の技術研究組合法(以下この条において「新技術研究組合法」という。)第三十三條第二項(新技術研究組合法第六十條において準用する場合を含む。)の規定にかかわらず、なお従前の例による。

2 施行日前にされた意思表示に係る組織変更時発行株式(前条の規定による改正前の技術研究組合法(次項において「旧技術研究組合法」とい

う。)第六十七條第一号に規定する組織変更時発行株式をいう。)の引受けについては、新技術研究組合法第七十四條の規定にかかわらず、なお従前の例による。

3 施行日前にされた意思表示に係る新設分割時発行株式(旧技術研究組合法第百二十二條第一号に規定する新設分割時発行株式をいう。)の引受けについては、新技術研究組合法第百二十九條の規定にかかわらず、なお従前の例による。

(割賦販売法の一部改正)

第二百八十六條 割賦販売法(昭和三十六年法律第百五十九号)の一部を次のように改正する。

第三十五條の三の十三第五項中「善意の」を「善意でかつ過失がない」に改める。

(割賦販売法の一部改正に伴う経過措置)

第二百八十七條 施行日前にされた意思表示については、前条の規定による改正後の割賦販売法(以下この条において「新割賦販売法」という。)第三十五條の三の十三第五項(新割賦販売法第三十五條の三の十四第三項、第三十五條の三の十五第三項及び第三十五條の三の十六第二項において準用する場合を含む。)の規定にかかわらず、なお従前の例による。

(商店街振興組合法の一部改正)

第二百八十八條 商店街振興組合法(昭和三十七年法律第百四十一号)の一部を次のように改正する。

第五十條第二項中「同項第一号」を「同項各号」に改める。

(商店街振興組合法の一部改正に伴う経過措置)

第二百八十九條 施行日前に理事又は清算人となつた者の利益相反取引については、前条の規定による改正後の商店街振興組合法(以下この条において「新商店街振興組合法」という。)第五十條第二項(新商店街振興組合法第七十八條において準用する場合を含む。)の規定にかかわらず、なお従前の例による。

(小規模企業共済法の一部改正)

第二百九十條 小規模企業共済法(昭和四十年法

律第二百二条)の一部を次のように改正する。

第二十三条第一項中「支給を受ける権利は」の下に「これを行使することができるときから」を加え、「二年間行わない」を「これを行使することができるときから二年間行わない」に改める。

(中小企業倒産防止共済法の一部改正)

第二百九十一条 中小企業倒産防止共済法(昭和五十二年法律第八十四号)の一部を次のように改正する。

第十九条中「支給を受ける権利は」の下に「これを行使することができるときから」を加え、「二年間行わない」を「これを行使することができるときから二年間行わない」に改める。

(半導体集積回路の回路配置に関する法律の一部改正)

第二百九十二条 半導体集積回路の回路配置に関する法律(昭和六十年法律第四十三号)の一部を次のように改正する。

第二十七条第四項中「民法第七百二十四条」を「民法第七百二十四条第一号」に改める。

(半導体集積回路の回路配置に関する法律の一部改正に伴う経過措置)

第二百九十三条 前条の規定による改正前の半導体集積回路の回路配置に関する法律第二十七条第四項において準用する旧民法第七百二十四条後段に規定する期間がこの法律の施行の際既に経過していた場合におけるその期間の制限については、なお従前の例による。

(不正競争防止法の一部改正)

第二百九十四条 不正競争防止法(平成五年法律第四十七号)の一部を次のように改正する。

第十五条を次のように改める。

(消滅時効)

第十五条 第二条第一項第四号から第九号までに掲げる不正競争のうち、営業秘密を使用する行為に対する第三条第一項の規定による侵害の停止又は予防を請求する権利は、次に掲げる場合には、時効によって消滅する。

一 その行為を行う者がその行為を継続する場合において、その行為により営業上の利益を侵害され、又は侵害されるおそれがある保有者がその事実及びその行為を行う者を知った時から三年間行わないとき。
二 その行為の開始の時から二十年を経過したとき。

(不正競争防止法の一部改正に伴う経過措置)

第二百九十五条 前条の規定による改正前の不正競争防止法第十五条後段に規定する期間がこの法律の施行の際既に経過していた場合におけるその期間の制限については、なお従前の例による。

(投資事業有限責任組合契約に関する法律の一部改正)

第二百九十六条 投資事業有限責任組合契約に関する法律(平成十年法律第九十号)の一部を次のように改正する。

第七条の見出し中「業務執行」を「業務の決定及び執行」に改め、同条第一項中「無限責任組合員」の下に「決定し、」を加える。

第七条の次に次の一条を加える。

(組合の代理)

第七条の二 無限責任組合員は、組合の業務を執行する場合において、他の組合員を代理することができる。

2 無限責任組合員が数人あるときは、各無限責任組合員は、無限責任組合員の過半数の同意を得たときに限り、組合員を代理することができる。

3 前項の規定にかかわらず、各無限責任組合員は、組合の常務を行うときは、単独で組合員を代理することができる。

第十六条中「第六百六十八条(組合財産の共有)、第六百六十九条(を「第六百六十七条の二から第六百六十九条まで(他の組合員の債務不履行、組合員の一人についての意思表示の無効等、組合財産の共有及び」に改め、「割合」の下に「第六百七十五条第一項(組合の債権者の権

利の行使)」を、「第六百七十六条」の下に「から第六百七十七条の二まで」を、「組合財産の分割の下に「組合財産に対する組合員の債権者の権利の行使の禁止並びに組合員の加入」を加え、「第六百七十七条(組合の債務者による相殺の禁止)」を削り、「第六百八十条の下に「から第六百八十一条まで」を加え、「第六百八十一条(を「脱退した組合員の責任等及び」に改める。

(投資事業有限責任組合契約に関する法律の一部改正に伴う経過措置)

第二百九十七条 施行日前に締結された前条の規定による改正前の投資事業有限責任組合契約に関する法律第三条第一項に規定する投資事業有限責任組合契約については、なお従前の例による。

(電子消費者契約及び電子承諾通知に関する民法の特例に関する法律の一部改正)

第二百九十八条 電子消費者契約及び電子承諾通知に関する民法の特例に関する法律(平成十三年法律第九十五号)の一部を次のように改正する。

題名を次のように改める。

電子消費者契約に関する民法の特例に関する法律

第一条中「要素に」を「申込み又はその承諾の意思表示について」に改め、「及び隔地者間の契約において電子承諾通知を発する場合」を削る。

第二条第四項を削る。

第三条中「第九十五条ただし書」を「第九十五条第三項」に、「電子消費者契約の要素に錯誤があつた場合であつて、当該錯誤が」を「意思表示が同条第一項第一号に掲げる錯誤に基づくものであつて、その錯誤が法律行為の目的及び取引上の社会通念に照らして重要なものであり、かつ、」に改める。

第四条を削る。

法の特例に関する法律の一部改正に伴う経過措置

第二百九十九条 施行日前にされた電子消費者契約(前条の規定による改正前の電子消費者契約及び電子承諾通知に関する民法の特例に関する法律(次項において「旧電子契約法」という。))の申込み又はその承諾の意思表示については、前条の規定による改正後の電子消費者契約に関する民法の特例に関する法律第三条の規定にかかわらず、なお従前の例による。

2 施行日前に契約の申込みがされた場合におけるその申込みに係る旧電子契約法第四条に規定する電子承諾通知に関する民法の特例については、なお従前の例による。

(有限責任事業組合契約に関する法律の一部改正)

第三百条 有限責任事業組合契約に関する法律(平成十七年法律第四十号)の一部を次のように改正する。

第十三条第二項中「一部のみを」の下に「一人又は数人の他の組合員又は第三者に」を加える。

第十四条の次に次の一条を加える。

(組合の代理)

第十四条の二 各組合員及び第十三条第二項の規定による委任を受けた第三者は、第十二条第一項の規定による決定に基づき組合の業務を執行する場合において、他の組合員を代理することができる。

2 前項の規定にかかわらず、各組合員は、組合の常務を行うときは、単独で組合員を代理することができる。

第二十四条に次の一項を加える。

3 第一項の規定により組合の成立後に加入した組合員は、その加入前に生じた組合の債務については、これを弁済する責任を負わなければならない。

第五十六条中「第六百六十八条、第六百六十

九条を「第六百六十七條の二から第六百六十九條まで」に改め、「第六百七十四條第二項」の下に「第六百七十五條第一項」を、「第六百七十七條の下に「第六百八十條の二」を加える。
(有限責任事業組合契約に関する法律の一部改正に伴う経過措置)

第三百一条 施行日前に締結された前条の規定による改正前の有限責任事業組合契約に関する法律第三條第一項に規定する有限責任事業組合契約については、なお従前の例による。

(株式会社商工組合中央金庫法の一部改正)

第三百二条 株式会社商工組合中央金庫法(平成十九年法律第七十四号)の一部を次のように改正する。

第二十一条第四項第六号中「指名金銭債権又は指名金銭債権」を「金銭債権(民法明治二十九年法律第八十九号第三編第一章第七節第一款に規定する指図証券、同節第二款に規定する記名式所持人払証券、同節第三款に規定するその他の記名証券及び同節第四款に規定する無記名証券に係る債権並びに電子記録債権法(平成十九年法律第二百二号)第二条第一項に規定する電子記録債権を除く。以下この号において同じ。以下は金銭債権に改め、「限る」の下に「。以下この号において同じ」を加え、「これ」を「特定社債」に改める。

第三十七條中「消滅時効は」の下に「その権利を行使することができる時から」を加える。

第十一章 国土交通省関係
(鉄道営業法の一部改正)

第三百三条 鉄道営業法(明治三十三年法律第六十五号)の一部を次のように改正する。

第十四條中「二年間のヲ行ハザル」を「ヲ行使スルコトヲ得ベキ時ヨリ一年間行使セザル」に改める。

第一章中第十八條ノ四を第十八條ノ五とし、第十八條ノ三を第十八條ノ四とする。

第十八條ノ二中「第十八條」を「前二條」に改め、同條を第十八條ノ三とし、第十八條の次に

次の一條を加える。

第十八條ノ二 鉄道ニ依ル旅客ノ運送ニ係ル取引ニ關スル民法明治二十九年法律第八十九号(第五百四十八條の二第二項ノ規定ノ適用ニ付テハ同項第二号中「表示していた」トアルハ「表示し、又は公表していた」トス
(軌道法の一部改正)

第三百四條 軌道法(大正十年法律第七十六号)の一部を次のように改正する。

第二十七條ノ二第九号中「前條第一項」を「第二十七條第一項」に改め、同條を第二十七條ノ三とし、第二十七條の次に次の一條を加える。
第二十七條ノ二 軌道ニ依ル旅客ノ運送ニ係ル取引ニ關スル民法(明治二十九年法律第八十九号)第五百四十八條の二第二項ノ規定ノ適用ニ付テハ同項第二号中表示していたトアルハ表示し、又は公表していたトス
(船員法の一部改正)

第三百五條 船員法(昭和二十二年法律第百号)の一部を次のように改正する。

第九十六條第五項中「中断を」完成猶予及び更新」に改める。

第百十七條中「債権は」の下に「これを行使することができる時から」を加え、「これを行わない」を「行使しない」に改める。

(船員法の一部改正に伴う経過措置)

第三百六條 施行日前に前條の規定による改正前の船員法第九十六條第五項に規定する時効の中断の事由が生じた場合におけるその事由の効力については、なお従前の例による。

(建設業法の一部改正)

第三百七條 建設業法(昭和二十四年法律第百号)の一部を次のように改正する。

第十九條第一項第十二号中「の瑕疵」を「が種類又は品質に關して契約の内容に適合しない場合におけるその不適合」に改める。

第二十五條の十六(見出しを含む)中「中断」を「完成猶予」に改める。
(建設業法の一部改正に伴う経過措置)

第三百八條 施行日前に建設工事(前條の規定による改正前の建設業法(次項において「旧建設業法」という。))第二條第一項に規定する建設工事(をいう。))の請負契約が締結された場合におけるその契約の内容については、前條の規定による改正後の建設業法(次項において「新建設業法」という。))第十九條第一項の規定にかかわらず、なお従前の例による。

2 施行日前に旧建設業法第二十五條の十一第一号に規定するあつせん又は調停の申請がされた場合におけるその申請に係る時効の特例については、新建設業法第二十五條の十六の規定にかかわらず、なお従前の例による。

(海上運送法の一部改正)

第三百九條 海上運送法(昭和二十四年法律第百八十七号)の一部を次のように改正する。

目次中第三十二條を「第三十二條の二」に改める。
第十九條の六の二中「次條第二項」の下に「及び第三十二條の二」を加える。
第二章中第三十二條の次に次の一條を加える。

(民法の特例)

第三十二條の二 一般旅客定期航路事業、人の運送をする貨物定期航路事業又は人の運送をする不定期航路事業(特定の者の需要に応じ、特定の範囲の人の運送をする不定期航路事業を除く。)による旅客の運送に係る取引に關して民法(明治二十九年法律第八十九号)第五百四十八條の二第二項の規定を適用する場合においては、同項第二号中「表示していた」とあるのは、「表示し、又は公表していた」とする。

第四十二條第一項中「及び第三十條を、第三十條」に改め、「除く。」の下に「及び第三十二條の二」を加える。

(道路運送法の一部改正)

第三百十條 道路運送法(昭和二十六年法律第百八十三号)の一部を次のように改正する。

第八十七條を次のように改める。

(民法の特例)

第八十七條 次に掲げる取引に關して民法(明治二十九年法律第八十九号)第五百四十八條の二第一項の規定を適用する場合においては、同項第二号中「表示していた」とあるのは、「表示し、又は公表していた」とする。

一 一般乗合旅客自動車運送事業若しくは一般乗用旅客自動車運送事業による旅客の運送又は自家用有償旅客運送に係る取引
二 一般自動車道の通行に係る取引
(公営住宅法の一部改正)

第三百十一條 公営住宅法(昭和二十六年法律第百九十三号)の一部を次のように改正する。

第三十二條第三項中「年五分の割合」を「法定利率」に改める。

(公営住宅法の一部改正に伴う経過措置)

第三百十二條 施行日前に到来した支払期に係る前條の規定による改正前の公営住宅法第三十二條第三項に規定する利息については、なお従前の例による。

(土地収用法の一部改正)

第三百十三條 土地収用法(昭和二十六年法律第二百十九号)の一部を次のように改正する。

第四十六條の四第二項中「第三号」を「第四号」に改める。

第九十五條の見出し中「払渡」を「払渡し」に改め、同條第二項中「左の各号に」を「次に」に改め、同條第一号中「補償金等を受けるべき」を「補償金等の提供をした場合において、補償金等を受けるべき」に改め、「又は補償金等を受領することができないとき」を削り、同條第四号中「差押又は仮差押を」差押又は仮差押をに、「払渡」を「払渡し」に改め、同号を同條第五号とし、同條第三号を同條第四号とし、同條第二号中「過失がなく」を削り、同号に次のただし書を加える。

ただし、起業者に過失があるときは、この限りでない。

第九十五条第二項中第二号を第三号とし、第一号の次に次の一号を加える。

二 補償金等を受けるべき者が補償金等を受領することができないとき。

第九十五条第三項中「前項第三号」を「前項第四号」に改め、同条第五項中「左の各号」を「次に」に改め、同項第一号中「替地を」を「替地の提供をした場合において、替地を」に改め、「又は替地の譲渡若しくは引渡を受けることができないとき」を削り、同項第二号中「差押又は仮差押」を「差押又は仮差押え」に、「引渡を」を「引渡し」に改め、同号を同項第三号とし、同項第一号の次に次の一号を加える。

二 替地を受けるべき者が替地の譲渡又は引渡しを受けることができないとき。

(土地収用法の一部改正に伴う経過措置)

第三百十四条 施行日前に前条の規定による改正前の土地収用法(以下この条において「旧土地収用法」という。)第四十六条の四第一項(旧土地収用法第三百三十八条第一項において準用する場合を含む。)に規定する補償金の支払義務、旧土地収用法第九十五条第一項(旧土地収用法第三百三十八条第一項において準用する場合を含む。)に規定する補償金等の払渡し若しくは替地の譲渡及び引渡しの義務又は旧土地収用法第九十七条第一項(旧土地収用法第三百三十八条第一項において準用する場合を含む。)に規定する補償金の払渡しの義務が生じた場合におけるこれらの補償金、補償金等又は替地の供託については、なお従前の例による。

(モーターボート競走法の一部改正)

第三百十五条 モーターボート競走法(昭和二十六年法律第二百四十二号)の一部を次のように改正する。

第二十条中「六十日間行わないを」これらを行使することができる時から六十日間行使しない」に改める。

(宅地建物取引業法の一部改正)

第三百十六条 宅地建物取引業法(昭和二十七年

法律第七十六号)の一部を次のように改正する。

第三十五条第一項第十三号中「の瑕疵」を「が種類又は品質に関して契約の内容及に適合しない場合におけるその不適合」に改める。

第三十七条第一項第十一号中「の瑕疵」を「が種類若しくは品質に関して契約の内容及に適合しない場合におけるその不適合」に改める。

第三十九条の見出し中「手付」を「手付」に改め、同条第一項中「みずから」を「自ら」に、「こえる」を「超える」に、「手付」を「手付」に改め、同条第二項中「みずから」を「自ら」に、「手付」を「手付」に改め、「当事者の一方が契約の履行に着手するまでは」を削り、「償還して」を「現実に提供して」に改め、同項に次のただし書を加える。

ただし、その相手方が契約の履行に着手した後は、この限りでない。

第四十条の見出し中「瑕疵担保責任」を「担保責任」に改め、同条第一項中「の瑕疵」を「種類又は品質に関して契約の内容及に適合しない場合におけるその不適合」に、「第五百七十条において準用する同法第五百六十六条第三項」を「第五百六十六条」に改める。

(宅地建物取引業法の一部改正に伴う経過措置)

第三百十七條 施行日前に宅地(前条の規定による改正前の宅地建物取引業法(次項において「旧宅地建物取引業法」という。))第二号第一号に規定する宅地をいう。以下この条において同じ。)又は建物の売買又は交換の契約が締結され又は成立した場合におけるその契約に係る書面の交付については、前条の規定による改正後の宅地建物取引業法(以下この条において「新宅地建物取引業法」という。))第三十七條第一項の規定にかかわらず、なお従前の例による。

2 施行日前に宅地建物取引業者(旧宅地建物取引業法第二条第三号に規定する宅地建物取引業者をいう。次項において同じ。)が自ら売主となる宅地又は建物の売買契約が締結された場合に

おけるその契約の解除については、新宅地建物取引業法第三十九条第二項の規定にかかわらず、なお従前の例による。

3 施行日前に宅地建物取引業者が自ら売主となる宅地又は建物の売買契約が締結された場合におけるその契約に係る担保責任についての特約の制限については、新宅地建物取引業法第四十条第一項の規定にかかわらず、なお従前の例による。

(道路法の一部改正)

第三百十八条 道路法(昭和二十七年法律第八十号)の一部を次のように改正する。

第七十三条第五項中「五年間行わない」を「これらを行使することができる時から五年間行わない」に、「因り」を「より」に改める。

第九十四条第三項中「過失がなくて」を削り、同項に次のただし書を加える。

ただし、当該管理者に過失があるときは、この限りでない。

(道路法の一部改正に伴う経過措置)

第三百十九条 施行日前に前条の規定による改正前の道路法(以下この条において「旧道路法」という。))第九十四条第一項(旧道路法第九十一条第二項において準用する場合を含む。))の規定により不用物件の返還義務が生じた場合におけるその不用物件の供託については、なお従前の例による。

(航空法の一部改正)

第三百二十条 航空法(昭和二十七年法律第二百三十一号)の一部を次のように改正する。

第三百二十四条の二の次に次の一条を加える。

(民法の特例)

第三百二十四条の三 航空運送事業による旅客の運送に係る取引に関して民法(明治二十九年法律第八十九号)第五百四十八条の二第二項の規定を適用する場合においては、同項第二号中「表示していた」とあるのは、「表示し、又は公表していた」とする。

(土地区画整理法の一部改正)

第三百二十一条 土地区画整理法(昭和二十九年法律第九十九号)の一部を次のように改正する。

第四十二条第一項中「五年間行わない」を「これらを行使することができる時から五年間行使しない」に改め、同条第二項中「民法(明治二十九年法律第八十九号)第五百三十三條の規定にかかわらず、時効中断」を「時効の更新」に改める。

(土地区画整理法の一部改正に伴う経過措置)

第三百二十二条 施行日前に前条の規定による改正前の土地区画整理法(以下この条において「旧土地区画整理法」という。))第四十二条第二項(旧土地区画整理法第一百十條第八項において準用する場合を含む。))に規定する時効の中断の事由が生じた場合におけるその事由の効力については、なお従前の例による。

(自動車損害賠償保障法の一部改正)

第三百二十三條 自動車損害賠償保障法(昭和三十年法律第九十七号)の一部を次のように改正する。

第十九条中「請求権は、」の下に「被害者又はその法定代理人が損害及び保有者を知つた時から」を加える。

第七十五条中「請求権は、」の下に「これらを行使することができる時から」を加える。

第八十条第三項中「民法第五百三十三條の規定にかかわらず、時効中断」を「時効の更新」に改める。

(自動車損害賠償保障法の一部改正に伴う経過措置)

第三百二十四条 施行日前に前条の規定による改正前の自動車損害賠償保障法(以下この条において「旧自動車損害賠償保障法」という。))第十六条第一項又は第十七条第一項(これらの規定を旧自動車損害賠償保障法第二十三條の三第三項において準用する場合を含む。))の規定による請求権が生じた場合におけるこれらの請求権の消滅時効の期間については、なお従前の例によ

る。

2 施行日前に旧自動車損害賠償保障法第八十条第三項に規定する時効の中断の事由が生じた場合におけるその事由の効力については、なお従前の例による。

(道路整備特別措置法の一部改正)

第三百二十五条 道路整備特別措置法(昭和三十一年法律第七号)の一部を次のように改正する。

第五十五条の次に次の一条を加える。

(民法の特例)

第五十五条の二 道路の通行又は利用に係る取引に關して民法(明治二十九年法律第八十九号)第五百四十八条の二第一項の規定を適用する場合においては、同項第二号中「表示していた」とあるのは、「表示し、又は公表していた」とする。

(海岸法等の一部改正)

第三百二十六条 次に掲げる法律の規定中「五年間行わないをこれらを行使することができるときから五年間行使しない」に改める。

一 海岸法(昭和三十一年法律第一号)第三十五条第五項

二 特定多目的ダム法(昭和三十三年法律第三十五号)第三十六条第五項

三 地すべり等防止法(昭和三十三年法律第三十号)第三十八条第五項

四 津波防災地域づくりに關する法律(平成二十三年法律第二百二十三号)第四十七条第五項

(内航海運組合法の一部改正)

第三百二十七条 内航海運組合法(昭和三十三年法律第六十二号)の一部を次のように改正する。

第三十四条の三第二項中「同項第一号」を「同項各号」に改める。

(内航海運組合法の一部改正に伴う経過措置)

第三百二十八条 施行日前に理事又は清算人となつた者の利益相反取引については、前条の規定による改正後の内航海運組合法(以下この条

において「新内航海運組合法」という)第三十四条の三第二項(新内航海運組合法第五十五条(新内航海運組合法第五十八条において準用する場合を含む)及び第五十八条において準用する場合を含む)の規定にかかわらず、なお従前の例による。

(公共用地の取得に關する特別措置法の一部改正)

第三百二十九条 公共用地の取得に關する特別措置法(昭和三十六年法律第五十号)の一部を次のように改正する。

第二十七条中「第三号」を「第四号」に改める。

第三十三条第二項中「年六分の利率により算定したを」法定利率によるに改める。

(公共用地の取得に關する特別措置法の一部改正に伴う経過措置)

第三百三十条 施行日前に緊急裁決で定められた権利取得の時期又は明渡し期限が到来した場合における前条の規定による改正前の公共用地の取得に關する特別措置法(以下この条において「旧公共用地取得特別措置法」という)第三十三條第二項(旧公共用地取得特別措置法第四十五條において準用する場合を含む)に規定する利息については、なお従前の例による。

(河川法の一部改正)

第三百三十一条 河川法(昭和三十九年法律第六十七号)の一部を次のように改正する。

第四十三条第二項中「一」を「いずれかに」に改め、同項第一号中「補償金を受けるべき」を「補償金の提供をした場合において、補償金を受けるべき」に改め、「又は補償金を受領することができないとき」を削り、同項第四号を同項第五号とし、同項第三号を同項第四号とし、同項第二号中「過失がなくて」を削り、同号に次のただし書を加える。

ただし、水利使用の許可を受けた者に過失があるときは、この限りでない。

第四十三条第二項中第二号を第三号とし、第一号の次に次の一号を加える。

二 補償金を受けるべき者が補償金を受領することができないとき。

第四十三条第三項中「前項第三号」を「前項第四号」に改める。

(河川法の一部改正に伴う経過措置)

第三百三十二条 施行日前に前条の規定による改正前の河川法(以下この条において「旧河川法」という)第四十一条(旧河川法第一百零一条において準用する場合を含む)の規定により補償金の支払義務が生じた場合におけるその補償金の供託については、なお従前の例による。

(都市計画法の一部改正)

第三百三十三条 都市計画法(昭和四十三年法律第百号)の一部を次のように改正する。

第七十五条第七項中「五年間行なわない」を「これらを行使することができるときから五年間行使しない」に改める。

(都市再開発法の一部改正)

第三百三十四条 都市再開発法(昭和四十四年法律第三十八号)の一部を次のように改正する。

第四十二条第一項中「五年間行なわない」を「これらを行使することができるときから五年間行使しない」に改め、同条第二項中「民法(明治二十九年法律第八十九号)第五百三十三條の規定にかかわらず、時効中断」を「時効の更新」に改める。

第九十一条第一項中「年六パーセントの割合により算定した」を「法定利率による」に改める。

第九十二条第一項中「一」を「いずれかに」に改め、同項第一号中「補償金等を受けるべき」を「補償金等の提供をした場合において、補償金等を受けるべき」に改め、「又は補償金等を受領することができないとき」を削り、同項第四号を同項第五号とし、同項第三号を同項第四号とし、同項第二号中「過失がなくて」を削り、同号に次のただし書を加える。

ただし、施行者に過失があるときは、この限りでない。

第九十二条第一項中第二号を第三号とし、第一号の次に次の一号を加える。

二 補償金等を受けるべき者が補償金等を受領することができないとき。

第九十二条第二項中「前項第三号」を「前項第四号」に改める。

第七百七条第三項中「民法」の下に「明治二十九年法律第八十九号」を加える。

第百十八條の十五第一項中「年六パーセントの割合により算出した」を「法定利率による」に改める。

(都市再開発法の一部改正に伴う経過措置)

第三百三十五条 施行日前に前条の規定による改正前の都市再開発法(以下この条において「旧都市再開発法」という)第四十二条第二項(旧都市再開発法第五十条の十一第三項、第五十六條の三第五項(旧都市再開発法第五十八條の二第二項において準用する場合を含む)及び第六十六條第八項(旧都市再開発法第百十八條の二十四第二項において準用する場合を含む)に於いて準用する場合を含む)に規定する時効の中断の事由が生じた場合におけるその事由の効力については、なお従前の例による。

2 施行日前に権利交換計画の認可の公告がされた場合におけるその権利交換計画に係る旧都市再開発法第九十一条第一項に規定する補償金については、なお従前の例による。

3 施行日前に旧都市再開発法第九十一条(旧都市再開発法第九十七條第五項において準用する場合を含む)の規定により補償金等又は損失の補償額の支払義務が生じた場合におけるその補償金等又は損失の補償額の供託については、なお従前の例による。

4 施行日前に譲受け希望の申出の撤回がされた場合におけるその申出の撤回に伴う対償の支払については、前条の規定による改正後の都市再開発法第百十八條の十五第一項の規定にかかわらず、なお従前の例による。

(海洋汚染等及び海上災害の防止に關する法律

の一部改正

第三百三十六条 海洋汚染等及び海上災害の防止に関する法律(昭和四十五年法律第百三十六号)の一部を次のように改正する。

第四十二条の十六第十項中「五年間行わない」を「これを行使することができるときから五年間行使しない」に改め、同条第十一項中「民法(明治二十九年法律第八十九号)第百五十三条の規定にかかわらず、時効中断」を「時効の更新」に改める。

(海洋汚染等及び海上災害の防止に関する法律の一部改正に伴う経過措置)
第三百三十七条 施行日前に前条の規定による改正前の海洋汚染等及び海上災害の防止に関する法律第四十二条の十六第十一項に規定する時効の中断の事由が生じた場合におけるその事由の効力については、なお従前の例による。

(積立式宅地建物販売業法の一部改正)
第三百三十八条 積立式宅地建物販売業法(昭和四十六年法律第百一十一号)の一部を次のように改正する。

第四十条第二項中「行なう」を「行う」に、「瑕疵を」が種類又は品質に関して契約の内容及に適合しないときにおけるその不適合に、「第六百三十八条第一項に規定する期間につき」を「第六百三十七条第一項に規定する期間についてその目的物の引渡しの日から」に改める。

(積立式宅地建物販売業法の一部改正に伴う経過措置)
第三百三十九条 施行日前に建設業者である積立式宅地建物販売業者(前条の規定による改正前の積立式宅地建物販売業法第二条第四号に規定する積立式宅地建物販売業者をいう。)が行う積立式宅地建物販売(同条第二号に規定する積立式宅地建物販売をいう。)の契約であつて旧民法の請負に関する規定が適用されるものが締結された場合におけるその契約に係る特約については、前条の規定による改正後の積立式宅地建物販売業法第四十条第二項の規定にかかわらず、

なお従前の例による。

船舶油濁損害賠償保障法の一部改正

第三百四十条 船舶油濁損害賠償保障法(昭和五十年法律第九十五号)の一部を次のように改正する。

第三十八条の表第十九条第一項の項中欄中「年六パーセントの割合」を「事故発生の日における法定利率」に改め、同表第三十条第一項の項中欄中「年六パーセントの割合」を「事故発生の日における法定利率」に、「規定する年六パーセントの割合」を「規定する法定利率」に改める。

(住宅の品質確保の促進等に関する法律の一部改正)
第三百四十一条 住宅の品質確保の促進等に関する法律(平成十一年法律第八十一号)の一部を次のように改正する。

目次中「の特例」を削る。
第二条に次の一項を加える。
5 この法律において「瑕疵」とは、種類又は品質に関して契約の内容及に適合しない状態をいう。

第七章の章名を次のように改める。
第七章 瑕疵担保責任
第九十四条の見出し中「の特例」を削り、同条第一項中「第六百三十四条第一項及び第二項前段」を「第四百十五条、第五百四十一条及び第五百四十二条並びに同法第五百五十九条において準用する同法第五百六十二条及び第五百六十三条」に改め、同条第三項を次のように改める。

3 第一項の場合における民法第六百三十七条の規定の適用については、同条第一項中「前条本文に規定する」とあるのは「請負人が住宅の品質確保の促進等に関する法律(平成十一年法律第八十一号)第九十四条第一項に規定する瑕疵がある目的物を注文者に引き渡した」と、同項及び同条第二項中「不適合」とあるのは「瑕疵」とする。

第九十五条の見出し中「の特例」を削り、同条

第一項中「隠れた」を削り、「第五百七十条において準用する同法第五百六十六条第一項並びに同法第六百三十四条第一項及び第二項前段」を「第四百十五条、第五百四十一条、第五百四十二条、第五百六十二条及び第五百六十三条」に改め、後段を削り、同条第三項を次のように改める。

3 第一項の場合における民法第五百六十六条の規定の適用については、同条中「種類又は品質に関して契約の内容及に適合しない」とあるのは「住宅の品質確保の促進等に関する法律(平成十一年法律第八十一号)第九十五条第一項に規定する瑕疵がある」と、「不適合」とあるのは「瑕疵」とする。

第九十七条の見出し中「の特例」を削り、同条中「隠れた」を削る。
(住宅の品質確保の促進等に関する法律の一部改正に伴う経過措置)
第三百四十二条 施行日前に住宅新築請負契約(前条の規定による改正前の住宅の品質確保の促進等に関する法律(次項において「旧住宅品質確保法」という。))第九十四条第一項に規定する住宅新築請負契約をいう。)が締結された場合におけるその契約に係る同項に規定する担保の責任については、なお従前の例による。

2 施行日前に新築住宅(旧住宅品質確保法第二条第二項に規定する新築住宅をいう。)の売買契約が締結された場合におけるその契約に係る旧住宅品質確保法第九十五条第一項に規定する担保の責任については、なお従前の例による。

(大深度地下の公共的使用に関する特別措置法の一部改正)
第三百四十三条 大深度地下の公共的使用に関する特別措置法(平成十二年法律第八十七号)の一部を次のように改正する。

第三十三条第一項第一号中「補償金を受けるべき」を「補償金の提供をした場合において、補償金を受けるべき」に改め、「又は補償金を受領することができないとき」を削り、同項第四

号を同項第五号とし、同項第三号を同項第四号とし、同項第二号中「過失がなく」を削り、同号に次のただし書を加える。
ただし、認可事業者に過失があるときは、この限りでない。

第三十三条第一項第二号を第三号とし、第一号の次に次の一号を加える。
二 補償金を受けるべき者が補償金を受領することができないとき。

第三十三条第二項中「前項第三号」を「前項第四号」に改める。
(大深度地下の公共的使用に関する特別措置法の一部改正に伴う経過措置)
第三百四十四条 施行日前に前条の規定による改正前の大深度地下の公共的使用に関する特別措置法第三十二条第一項の規定により補償金の支払義務が生じた場合におけるその補償金の供託については、なお従前の例による。

(マンションの建替え等の円滑化に関する法律の一部改正)
第三百四十五条 マンションの建替え等の円滑化に関する法律(平成十四年法律第七十八号)の一部を次のように改正する。

第七十六条第一項第一号中「補償金を受けるべき」を「補償金の提供をした場合において、補償金を受けるべき」に改め、「又は補償金を受領することができないとき」を削り、同項第三号を同項第四号とし、同項第二号中「過失がなく」を削り、同号に次のただし書を加える。

ただし、施行者に過失があるときは、この限りでない。
第七十六条第一項第二号を第三号とし、第一号の次に次の一号を加える。
二 補償金を受けるべき者が補償金を受領することができないとき。

第一百五十二条及び第百五十四条中「同項第二号及び第三号」を「同項第三号及び第四号」に改める。

(マンションの建替え等の円滑化に関する法律

の一部改正に伴う経過措置)

第三百四十六條 施行日前に前条の規定による改正前のマンションの建替え等の円滑化に関する法律(以下この条において「旧円滑化法」という。)第七十五條若しくは第五十三條の規定により補償金の支払義務が生じた場合又は旧円滑化法第五十一條の規定により分配金の支払義務が生じた場合におけるこれらの補償金又は分配金の供託については、なお従前の例による。(特定住宅瑕疵担保責任の履行の確保等に関する法律の一部改正)

第三百四十七條 特定住宅瑕疵担保責任の履行の確保等に関する法律(平成十九年法律第六十六号)の一部を次のように改正する。

第二条第六項第二号イ及びロ中「隠れたを削り、「てん補する」を「填補する」に改め、同項第三号中「てん補する」を「填補する」に改め、同項を同条第七項とし、同条第五項第二号イ及びロ並びに第三号中「てん補する」を「填補する」に改め、同項を同条第六項とし、同条第二項から第四項までを一項ずつ繰り下げ、同条第一項の次に次の一項を加える。

2 この法律において「瑕疵」とは、住宅品質確保法第二条第五項に規定する瑕疵をいう。

第六条第一項中「損害賠償請求権」を「瑕疵を理由とする報酬の返還請求権又は損害賠償請求権(次項において「報酬返還請求権等」という。)」に改め、同条第二項第一号及び第二号中「損害賠償請求権」を「報酬返還請求権等」に改め、同項第三号中「損害」を「報酬返還請求権等に係る報酬の返還の義務又は損害」に改める。

第十一条第二項中「隠れたを削る」。

第十四条第一項中「隠れた」を削り、「損害賠償請求権」を「瑕疵を理由とする代金の返還請求権又は損害賠償請求権(次項において「代金返還請求権等」という。)」に改め、同条第二項第一号及び第二号中「損害賠償請求権」を「代金返還請求権等」と改め、同項第三号中「損害」を「代金返還請求権等に係る代金の返還の義務又は損害」

に改める。

第十六条中「第二条第三項」を「第二条第四項」に改める。

第十七条第一項中「第六百三十四條第一項若しくは第二項前段又は同法第五百七十条において準用する同法第五百六十六條第一項」を「第四百十五條、第五百四十一條、第五百四十二條又は第五百六十二條若しくは第五百六十三條(これらの規定を同法第五百五十九條において準用する場合を含む。)」に改める。

第十九条第二号中「第六百三十四條第一項若しくは第二項前段又は同法第五百七十条において準用する同法第五百六十六條第一項」を「第四百十五條、第五百四十一條、第五百四十二條又は第五百六十二條若しくは第五百六十三條(これらの規定を同法第五百五十九條において準用する場合を含む。)」に改め、「これらの規定に規定する瑕疵若しくは隠れたを削り、「てん補する」を「填補する」に改め、同条第四号中「又は隠れた瑕疵」を削る。

(特定住宅瑕疵担保責任の履行の確保等に関する法律の一部改正に伴う経過措置)

第三百四十八條 施行日前に住宅(前条の規定による改正前の特定住宅瑕疵担保責任の履行の確保等に関する法律(以下この条において「旧履行確保法」という。))第二条第一項に規定する住宅をいう。)を新築する建設工事の請負契約が締結された場合におけるその契約に係る旧履行確保法第六條第一項に規定する弁済を受ける権利については、なお従前の例による。

2 施行日前に新築住宅(旧履行確保法第二条第一項に規定する新築住宅をいう。)の売買契約が締結された場合におけるその契約に係る旧履行確保法第十四條第一項に規定する弁済を受ける権利については、なお従前の例による。

(特定タンカーに係る特定賠償義務履行担保契約等に関する特別措置法の一部改正)

第三百四十九條 特定タンカーに係る特定賠償義務履行担保契約等に関する特別措置法(平成二

十四年法律第五十二号)の一部を次のように改正する。

第十条中「三年間行わない」を「これを行使用することができる時から三年間行使用しない」に改める。

第十二章 環境省関係

(大気汚染防止法の一部改正)

第三百五十條 大気汚染防止法(昭和四十三年法律第九十七号)の一部を次のように改正する。

第二十五條の四を次のように改める。

(消滅時効)
第二十五條の四 第二十五條第一項に規定する損害賠償の請求権は、次に掲げる場合には、時効によつて消滅する。

一 被害者又はその法定代理人が損害及び賠償義務者を知つた時から五年間行使しないとき。

二 損害の発生時から二十年を経過したとき。

(大気汚染防止法の一部改正に伴う経過措置)

第三百五十一條 前条の規定による改正前の大気汚染防止法(以下この条において「旧大気汚染防止法」という。))第二十五條第一項に規定する損害賠償の請求権の旧大気汚染防止法第二十五條の四前段に規定する時効がこの法律の施行の際既に完成していた場合におけるその時効の期間については、なお従前の例による。

2 旧大気汚染防止法第二十五條の四後段に規定する期間がこの法律の施行の際既に経過していた場合におけるその期間の制限については、なお従前の例による。

(水質汚濁防止法の一部改正)

第三百五十二條 水質汚濁防止法(昭和四十五年法律第三十八号)の一部を次のように改正する。

第二十条の三を次のように改める。

(消滅時効)

第二十条の三 第十九條第一項に規定する損害賠償の請求権は、次に掲げる場合には、時効

によつて消滅する。

一 被害者又はその法定代理人が損害及び賠償義務者を知つた時から五年間行使しないとき。

二 損害の発生時から二十年を経過したとき。

(水質汚濁防止法の一部改正に伴う経過措置)

第三百五十三條 前条の規定による改正前の水質汚濁防止法(以下この条において「旧水質汚濁防止法」という。))第十九條第一項に規定する損害賠償の請求権の旧水質汚濁防止法第二十条の三前段に規定する時効がこの法律の施行の際既に完成していた場合におけるその時効の期間については、なお従前の例による。

2 旧水質汚濁防止法第二十条の三後段に規定する期間がこの法律の施行の際既に経過していた場合におけるその期間の制限については、なお従前の例による。

(公害健康被害の補償等に関する法律の一部改正)

第三百五十四條 公害健康被害の補償等に関する法律(昭和四十八年法律第十一号)の一部を次のように改正する。

第六條第三項中「中断」を「完成猶予及び更新」に改める。

(公害健康被害の補償等に関する法律の一部改正に伴う経過措置)

第三百五十五條 施行日前に前条の規定による改正前の公害健康被害の補償等に関する法律第六條第三項に規定する時効の中断の事由が生じた場合におけるその事由の効力については、なお従前の例による。

(土壌汚染対策法の一部改正)

第三百五十六條 土壌汚染対策法(平成十四年法律第五十三号)の一部を次のように改正する。

第八條第二項を次のように改める。

2 前項に規定する請求権は、次に掲げる場合には、時効によつて消滅する。

一 当該指示措置等を講じ、かつ、その行為

をした者を知つた時から三年間行使しないとき。

二 当該指示措置等を講じた時から二十年を経過したとき。

(土壤汚染対策法の一部改正に伴う経過措置)

第三百五十七条 前条の規定による改正前の土壌汚染対策法第八条第二項後段に規定する期間がこの法律の施行の際既に経過していた場合におけるその期間の制限については、なお従前の例による。

（水俣病被害者の救済及び水俣病問題の解決に関する特別措置法の一部改正）

第三百五十八條 水俣病被害者の救済及び水俣病問題の解決に関する特別措置法(平成二十一年法律第八十一号)の一部を次のように改正する。

第十四条中「第四百二十四条」を「第三編第一章第二節第三款第一目」に改める。

第十三章 防衛省關係

(連合国占領軍等の行為等による被害者等に対する給付金の支給に関する法律の一部改正)

第三百五十九條 連合國占領軍等の行為等による被害者等に対する給付金の支給に関する法律（昭和三十六年法律第二百十五号）の一部を次のように改正する。

第十六条の見出しを「審査請求による時効の完成猶予及び更新」に改め、同条中「中斷」を「完成猶予及び更新」に改める。

第二十二条中「三年間行なわない」を「これを行使することができる時から三年間行使しない」に改める。

（連合国占領軍等の行為等による被害者等に対する給付金の支給に関する法律の一部改正に伴う経過措置）

第三百六十条 施行日前に前条の規定による改正前の連合国占領軍等の行為等による被害者等に対する給付金の支給に関する法律第十六条に規定する時効の中断の事由が生じた場合におけるその事由の効力については、なお従前の例によ

る。

第十四章 罰則に関する経過措置及び政令への委任

(罰則に関する経過措置)

第三百六十一条 施行日前にした行為及びこの法律の規定によりなお従前の例によることとされる場合における施行日以後にした行為に対する罰則の適用については、なお従前の例による。

(政令への委任)

第三百六十二条 この法律に定めるもののほか、この法律の施行に伴い必要な経過措置は、政令で定める。

附則

この法律は、民法改正法の施行の日から施行する。ただし、○第三百三条の二、第三百三条の三、第二百六十七條の二、第二百六十七條の三及び日から施行する。

平成二十九年五月九日印刷

平成二十九年五月十日発行

参議院事務局

印刷者 国立印刷局

K